

★ 目 次 ★

■佐久の遺跡と遺物 一馬場平の石槍（いしやり）	堀 隆	1
■福野の考古学 一馬場平遺跡から学んだこと	由井 茂也	2
■長崎論文「後期旧石器時代前半期の石斧—形態変化論を視点として—」を読んで	角 強淳一	4
■—BOOK REVIEW—戸沢充則著「先土器時代文化の構造」	堤 隆	9
■川上村立石遺跡の新資料	吉沢 靖	10
■中ヶ原遺跡群 I G 地点採集の網石器について	中島 芳榮	13
■第3回 佐久地方遺跡報告会開催する	事務局	16
■佐久市香坂採集の網文式土器について	竹之内敏之	17
■土偶のつぶやき 一会员の身近なたより	各会員	19
■インフォメーション		20

佐久の遺跡と遺物

パート1

馬場平の石槍

◆このコーナーでは、佐久を代表する遺跡や遺物を、時代をおって順に紹介していきたいとおもいます。◆

◆日本の旧石器時代がその長い歴史を閉じようとするころ、盛んに木の葉形をした石の槍さきが作られた。今からおよそ1万数千年前ごろのこと、尖頭器（ボイント）とよばれる石器がそれである。

昭和24年の岩宿発見以後、日本列島においてもつぎつぎと縄文時代以前の遺跡が発見されていった。そのなかで、尖頭器をもつ石器文化の存在を明らかにする先駆けとなったのが川上村馬場平遺跡の調査、そしてその石槍である。岩宿発見の僅か4年後、昭和28年のことであった。（その発見の詳しいきさつについては、次の由井茂也氏の文章を参照のこと）¹

馬場平遺跡は、川上村御所平、川上中学校に対面す

る段丘上に位置する遺跡である。

写真は、由井茂也氏所蔵の木葉形尖頭器（もくようけいせんとうき）で、3点とも眼下にみる千曲川の河床で採取が可能と考えられるチャート系の石材をもじいてつくられたものである。馬場平に限らず近隣の遺跡の石器にもこの石材は多用されている。写真的石器は大きさ的には5~10cmの中形で、いずれも両面加工がなされ、左の2点はやや肉厚なものである。

興味深いことに、この由井茂也氏の尖頭器は、実は岩宿発見の20年も前の、昭和初年に採集されたものだそうだ。また由井氏の所蔵品の中には、大正年間採集という記入のある尖頭器もみられる。

こうした地域の研究者たちの注意力そして地道な採集活動と保管が、列島の旧石器時代研究の礎となっていたのである。

(堀 隆)



写真1 馬場平遺跡の石槍（いしやり）

据野の考古学

—馬場平遺跡から学んだこと—

由井茂也

1

芹沢長介さんが初めて馬場平遺跡へ来た時の話です。いくら探しても石器らしいものが見つからないので、付近にいたひとに馬場平（ばばだいら）という場所を尋ねると、そんな場所は知らないという。ではここは何と言うところですかと聞いなおすと、バッパというところだと心えである。

土地の人たちは、馬場平のことをバッパとよぶ、あるいはバッパティラともいう。

馬場平は、御所平の東南隅に位置する麻栗という小山の裾のひらけた段丘である。東北に千曲川の流れを瞰下するが、そこまでは四・五の段丘面が存在している。きわだ坂・中平・佐吉神社のある西平、その下が川上中学のあるまいどである。この模式的段丘を地質学者たちは川上段丘と名付けている。馬場平はその段丘の最上段である。

ここは水利が遅いため古来より畑地で、麦やそばがつくられ、高木と呼ばれる桑の老木が畑のあちこちにみられた場所であった。

2

先土器時代の遺跡はこの馬場平段丘の一線に集中し、馬場平遺跡のほか、よしのしり・結城・脇の平などの地名をもつ遺跡が並んでいる。

馬場平遺跡の遺物がどんな頃から注意されるようになったか、それは分からぬ。が、随分古くから星雲石といわれて話題となっていた星雲石や、火打ち石と呼ばれたチャートが拾われていたことは確かである。

昭和初年に南佐久教育会が八幡一郎先生の指導で南佐久郡の考古学的調査を行った。その時にも、馬場平から多くの石器が採集されている。それは、当時既にその存在を知っていた村人たちの示唆によるものであった。とにかくそうした古い時期から、馬場平の遺物が採集され、保存してきたことは確かなようである。

昭和二十年八月、神国日本は有史以来はじめて敗戦・降伏という大きなダメージを受けた。不幸だった長い時代、土器や石器を集めてもこれが人類の本当の歴史だと口に出していくことができなかつた。しかしこんどはようやく周囲の人々に向かって、縄文とか

弥生とか、長い原始時代の後に、古墳時代という権力者の時代が生まれてきたのだと公然と説明することができた。そしてこんどは先土器時代である。

3

昭和二十八年八月南佐久教育会の主催で、考古学講座が臼田の小学校でもたれ、講師に八幡一郎先生が招かれていた。私は竹内恒さんにさそわれ出掛けていった。第一日目が縄文時代、そして弥生・古墳時代という講義の予定であった。そうした重要な講義に際し、資料の1枚も配られていないことは、戦後の貧しさを象徴していた。さて、当時すでに著名であった大学教授の講義を受けた楽しさに明日も出席する予定で家に帰ると、夕方学生が訪ねてきてまた明日早く訪ねてくるからといって帰ったところだという。

次の日朝、約束どおり早くに学生が訪ねてきた。名刺に明治大学文学院芹沢長介とあり、初対面であった。昨夜は近くの旅館に泊まり、宿で馬場平遺跡の話をすると、そんなことなら近所の私に聞けといわれて来たのだという。要件は馬場平遺跡の状況を聞き遺物を見たいということであった。話が長引き、今日の講義を諦めなければならなくなり、わたしは迷惑した。しかし、しだいに芹沢さんの話に引き込まれていった。そして、馬場平遺跡では石器だけが見つかって土器や石器はほとんど見つかっていないことなどを話した。

とにかく石器をということで、私が見て石器だと思えるようなものばかり選んでおいてみせた。芹沢さんは「すばらしい、すばらしい」の連発だった。もっと層でもよいからみんな見せてくれといでの、小屋の中に散らばっている石器と思っていたものを見せるところがほとんど立派な石器だという。そしてそのひとつひとつに名称を付け、初めて発見したもののように感激した。木の葉形の石槍以外は、石層か石器の作りかけかと思っていたものが、ほとんど完形で、ブレイド・スクレイパー、ドリルなどと呼ばれてそれぞれの用途があることを知った。それらは間違いなく縄文時代より以前の遺物だという。当時それをブレ縄文と呼んでいた。

私は初めてブレ縄文の存在を知り、すでに昭和24年群馬県岩宿遺跡が発見されて以来、研究が続けられていることを知った。また、岩宿遺跡の発見者相沢忠洋さんについても面白おかしく話を聞かされた。その日八幡先生の講義をのがしたことを悔やみつつも、最先端の考古学の話を聞くことができたとおもって感激した。

そして、馬場平遺跡の学術調査の話しがまとまった。

4

幾度となく打ち合わせが繰り返された。十月がきた。

川上村の秋は早く、木々の葉も落ちて、馬場平は荒涼たる風景に変わっていた。トレンチは、最初に遺物が最も多く採集された場所に入れてみた。ところが表層が多くできる場所ほど地層が擾乱されていた。何箇所かの試掘に失敗した後、表層は少なかったが高めの層にトレンチを入れたところ、実に美しいローム層が現れた。今まで「赤土」と呼んでどこでも普通にみられる疑問ももたらすことがなかったその土層が、「ローム層」と呼ばれ、今から一万年以上も前の火山の噴出により堆積したものであることを教えてくれた。あらためてこのローム層は、今一万年前の眠りから覚め太陽の光りにめぐり会ったのだと思った。そしてローム層は堆積したばかりのようなつやめきで輝いてみえた。

このローム層にはたして一万年以上も前の人類の生活面があり、遺物が含まれているのであろうか。ローム層中の調査は丹念におこなわれた。それは今日のように多くの参考論文や報告書がある時代ではなかった。むろん予備知識といつても今日のような豊富なものではなかった。むしろこの調査が出発点なのである。

ローム層はほとんど擾乱されておらず、原初の堆積状態をとどめており、掘り進むにつれて遺物の発見が相次いでいた。石器が出るとそれらは皆の手から手へと渡り、撫でられた。そしてついに目標としたポイントが発見された。そのとき、誰かが大声で「論文取り消せ」といったので、皆が大声で笑った。それからというもの、ポイントが出来る度に「論文取り消せ」の声が合鳴され、「電報打て」と続けられるのであった。当時は岩宿発見からすでに四年が経過しているので、プレ編文に対する見解もそう不安定ではなくてもよさそうなものだが、専門家たちの間にはまだ様々な見解があったのだという。「論文取り消せ」は、著名な教授の論文に対する反論であることは、聞かなくともわかった。それまではプレ編文の存在自体は認めて、石槍（ポイント）はプレ編文ではないという見解が強かった。そしてポイントがプレ編文の所産であるという動かし難い事実を突きつけたのがこの馬場平の調査の意義であると私はおもった。

発掘調査の、予定の5時間はあつという間に過ぎた。けれども成果は大きかった。ポイントを主体とする一連の石器群、さらにマサカリのような刃部を上にむけて据え置かれていた器類や深く埋められていた古石などは、当時の人々の生活を偲ばせるもので感激した。その調査を通じ、馬場平遺跡には小形のポイントとそれに付随する石器群も存在することが予測されたが、その確認は次期の調査にまつことにした。しかし残念なことに二次調査はおこなわれずに終わっている。そ

の後の表面採集調査で小形ポイントと小形切出形石器の伴出する遺跡が、馬場平の段丘に連続して存在していることが明らかになってきている。しかしそれらの石器群の時間的関係は不明である。

5

馬場平遺跡の発掘調査を通して私の理解したものは、まずプレ編文という遺跡と遺物であった。ことに石器は、編文のそれとは明らかに区別できるもので、用途は同じだとしても形態は異なっていた。また、土器や石器が発見されず、それによって無土器文化などと呼ばれるものもあった。決定的な相違は、遺物包含層がそれまで無遺物層といわれてきたローム層にあったことである。

そうした馬鹿の一つ覚えのようなもののなかから、無学な私なりの考古学に対するひとつの考え方が始まった。考古学というものは、非常に高い山のようなもので、その頂点をめざし大勢の研究者たちが競っている。そうした難しい学問家たちの研究の後を一生懸命追いかけたところで、それは到底及ぶものではない。考古学の頂点は高くてとても登れないが、その山の裾野はまた、はかり知れないほどひろい。そこにも頂点と同じように新しく鮮やかな研究分野がある。それは馬場平の調査を通しての立派な教訓でもあった。ことにプレ編文の研究はまだ端緒についたばかりで、裾野に住むものではなければできない調査が散多くなっているのではないかという期待でもあった。そしてこのたびの馬場平の調査のように、難しい構造を構成しているような苦しさではなく、身近な談笑の中から学んでいくのだと、ほのぼのした明るさを感じた。

6

終わりに、少々話を戻すが、当時の考古学会の動きを思われる大切な点だと思うので一寸書き加えておく。それは芹沢さんがどういう関係で馬場平遺跡を訪ねて来たかということである。話では、諭訪で茶臼山から出土した石器について、プレ編文ではないかという疑いをもった松沢雅生さんたちが、その石器を東京へもっていき、それをみた芹沢さんが出土状態を確かめに来たが、茶臼山の出土地点は宅地造成すでに荒らされ、どの地層から出土したかをみきわめることができず、決定的な見解を出すことが不可能であったという。その折、芹沢さんは藤森栄一先生のお宅で八幡一郎先生の『南佐久郡の考古学的調査』をみて、その中の馬場平の遺物であるポイントにプレ編文という確信をもった。その足で川上村に来たというのである。

「槍ひとすじに」は、プレ編文を追求していた当時の芹沢さんの得意の言葉であった。

「後期旧石器時代前半期の石斧—形態変化論を視点として—」を読んで

—後期旧石器初頭の局部磨製石斧についての研究ノート—

角張淳一

1はじめに

「後期旧石器時代前半期の石斧—形態変化論を視点として—」(長崎 1990)という論文がだされた。論文の内容は後期旧石器初頭の石斧を材料に技術論と形態論にリダクションセオリーという石器の形態変化論を取り入れ、石斧形態の変化のモデル、編年と石斧出現の過程を論じている。旧石器研究でリダクションセオリーを使って石斧の研究をしたのはこの論が最初であろう。またこの論文では多角的な視点がもりこまれており実際によく読み取るにはあといくつかの論文を熟読することが前提となっている。それらは安斎(安斎 1988, 1990)佐藤(佐藤 1988, 1989)田村(田村 1989)の一連の論文を十分に理解していないと読み切れない部分がある。箇箇を言い回しのなかに実に深い内容を含む文章が隨所にみられるのである。

そこでこの長崎論文を私なりに読み解き、さらに筆者の意見と長崎の意見との相違を明確にして後期旧石器初頭の石斧の機能論について論じてみよう。

2 石斧の機能論的解説について

本文「はじめに」の末文では「該期の石斧を刃部再生による『形態変化』という視点から照射し、単純な式論の成立しないことを示し、機能論的な形態の理解を試みる」(長崎 前掲文)と研究の視点が述べられている。そしてスクレイバーが刃部再生によってその形態を変化させてゆくことを具体的に図で示しながら(第1図)、さらに註2でフリソン効果(フリソン効果については(安斎 1990)を参照)についても紹介を

人することで実際に武藏台遺跡の石斧の接合資料について解説を行っており、そこから石斧の形態変化モデルを演繹しているのである。

石斧に形態論の視点を導入することの前提として「石斧の変形論は上述した器種レベルでの変形論に対し、石斧という一種器内での変形論となる」として武藏台遺跡の接合資料で刃部の再生過程を充実において形態変化的解説をしている。

ここで石斧の機能論では佐原論文(佐原 1977, 1982)も有効な示唆を与えてくれている。佐原論文のなかで注意すべきは「縦斧」と「横斧」の違いであり、さらに「両刃」と「片刃」の違いである。それぞれに組み合わせると4種類の斧ができる。さらに「縦斧・横斧をともに持つ文化の人々は、伐採・荒刈りに前者を、えぐり削る加工に後者を使いわける。伐採斧・加工斧である。しかし、横斧しか持っていない文化の人々は、それを万能の斧として使い、伐採から加工までやりあげる。伐採加工兼用斧である。」(佐原 1982)としている。また横斧の片刃石斧については「前正面片刃石斧」と「後正面片刃石斧」があり「磨製片刃石斧」のうち、後正面片刃石斧にぞくするものは民族例に希有である。……中略……「前正面片刃石斧」は削るに適し、後正面片刃石斧は深くくいこむことからむしろ伐採用に好適である。(佐原 1982)と述べている。この指摘は石斧の機能的解説を行う上で非常に有効である。

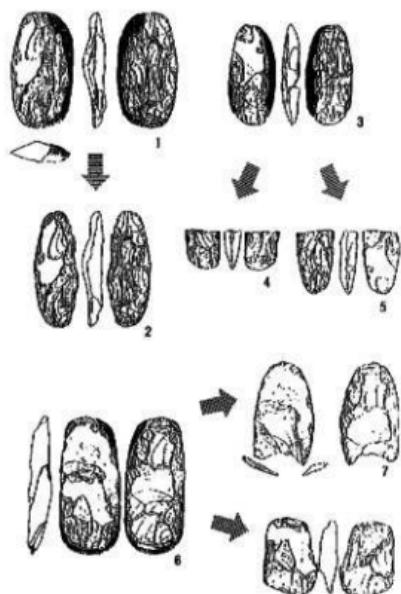
そこで、長崎・佐原論文を踏まえながら長崎自身が分析にもちいた武藏台遺跡の接合資料をつかって具体的に筆者が考える問題点を浮き彫りにしながら石斧のリダクションと機能的解説に迫ってみよう。

第2図は長崎論文からの引用である。石斧1は石斧の変形過程をもっとよく示す例である。長崎はここでの変形過程を刃部再生に伴う石斧自体の刃角の維持のために一側面を集中的に整形していると解説している。そして刃部再生の意味については「刃部再生の過程はきわめて合理的である。刃部が破損した時に刃部だけに再生加工をしたのでは刃角が大きくなってしまう。そこで刃角を維持するため器体の厚みを減じるように側面からも整形削除を施す。」と解説している。さらにこの刃部再生の方法は「刃部を研磨し器体長のみを減していく」通常の磨製石斧とは異なるとの指摘もしている。そこで単純な疑問だが刃角の維持のために



第2図 リダクションによるストレーバーの変形過程(参考文献: 長崎 1990 Fig.2 上野研究)

第1図 長崎論文の引用図している。この変形論を導



第2図 (長崎 1990) 第3図より

全体のプロポーションまで変えねばならないのだろうか。少なくとも研磨技術をもつならば刀部周辺の剥離と研磨で刀部の折損は補えるのではなかろうか。高井戸東遺跡(小山他 1979)出土の小型全面磨製石斧や古城遺跡(大工原 1989)出土の小型磨製石斧は刃部のみの磨ぎ直しの例ではなかろうか。さらには「一般に石器の寿命よりも柄の寿命のほうが長い」というエヌア・ケオロジーからの類推(Keeley 1982)もあり、石斧柄と石斧の刃部再生の関係は深い」と指摘して、プロポーションを変える刃部再生は「側縁や基部の形状が変わっても装着が可能で、再加工時の容易な石斧柄・装着法が工夫されていた」と解釈している。すなわち石斧柄の寿命の長さをみとめてはいるものの、柄部分の基部を変化させることについては形態変化に対応できる柄・装着法を解釈している。しかしこの武藏台遺跡の石斧の形態変化のように大型の長槽円形石斧が短槽形に変化する事実の解釈を、機能を同じくする石器の刃角維持のための整形加工とは筆者には思えない。再生刃部の角度を維持するために果たして全体のプロポーション、しかも平面形のみならず縦断面形まで変形させてしまっている事実がある。これは装着方法や柄の問題とも絡む、肅うならば石斧自身

の機能変化に関わるもっと別の意図が製作者にはあるのではないだろうか。著柄によって石斧の機能も大きく変化するのではないだろうか。ところで武藏台遺跡の接合資料の報告者横山は報告文のなかで興味深い指摘をしている(横山 1984)。それは接合した状態ではこの石斧は「刃部は平面形が円刃、縦断面形は両刃」であり、刃部再生後には「裏面が周辺の調整剝離によって大きく湾曲し、やや片刃に近い形状になっている。平面形は偏刃となっている」のである。どうやらこの事実が石斧のプロポーションを変形させるまでの重要なファクターにならっているのではないかろうか。

ここで佐原論文(前掲)にもどってみよう。佐原はそのなかで縦斧と横斧の区別を非常に重要であると指摘しているわけだが、これは石斧の機能差を示している。さらに横斧の場合に片刃と両刃の区別も機能に関連し、片刃の装着方法によっても伐採と削る機能に能率差ができると指摘しているのである。

そこでひとつの仮説として以下を問題提起しよう。武藏台遺跡の石斧の接合資料は平面形態の変化も重要だが、刃部形態や縦断面形態も大きく変化していることがより重要である。したがって、長崎のいう刃部再生過程は刃角の維持という目的もあるが、石斧機能の積極的解釈として石斧そのものの機能を両刃石斧から片刃石斧へ機能変換するための形態変化とは読みとれないだろうか。

3 石斧の刃部再生と形態変化—両刃から片刃へ—

そこで上記の仮説を説明するために長崎がだした形態変化モデルを用いて検討してみよう。石斧のリダクションモデルは長崎論文のなかで検討されており、そのリダクション・プロセス・モデルは次のように要約されよう。

- ・石斧の最初は長槽円形、断面レンズ状である。刃部は円刃か直刃である。

- ・次に再生を受けた石斧は短冊形になり刃部は偏刃になっている。

- ・石斧の最終形態は「菱形」や「レモン形」となり刃部は「偏刃」や「尖刃」となる。このような長崎が作成した形態変化モデルで刃部形態と縦断面形に留意しながら記述をすると以下のようないモデルの設定も可能であろう。

- ・石斧の最初は長槽円形、断面レンズ状の両刃石斧である。上から見た刃部形態は円刃もしくは直刃である。

- ・次に再生加工を受けた石斧の平面形態は短冊形になるが、縦断面形は片面に背をもつように整形されそれに伴って刃部は片刃もしくは薄い両刃となる。刃部の平面形態は偏刃が多くなる。

・最終形態の石斧はもはや石斧としての機能を失う。これについては佐原論文に興味深い指摘がある。すなわち「石斧には転用される実例もある。中略……長期の使用によって柄にはめで使えなくなった破損品、废品を転用して縦にすることもある。弥生時代の大型蛤刃石斧は、閃綠岩・輝岩など重い石を材料とするため、折損後も、槌として特に好適である。」(佐原 1977)。刃部は「偏刃」や「尖刃」となる。

このように石斧のリダクション・プロセスには「ルールが存在し、一定のプロセスとして据えられる」(長崎 前掲文P 8)ならば石斧が両刃の機能から片刃の機能へ変化することは石斧の機能論にとってきわめて重要な問題提起をするものではなかったろうか。

4 武藏台遺跡の石斧は縦斧か横斧か

前述したように筆者は武藏台遺跡の接合資料について両刃から片刃への形態変化、それはとりもなおさず石斧自身の機能変化に直結するという仮説を提示した。そこでもう一歩すこめて佐原が謂うように縦斧と横斧の問題に却って武藏台の石斧を観察することにする。

佐原論文(佐原 1977, 1982)では縦斧と横斧の区別について刃部の線状痕に着目することを説いている。「縦斧には、左右の両上面に刃縫斜めに交わる斜方向の傷がつき、この傾斜は両面で逆になる。横斧には上面に直交する縦方向の傷がつき、これは後上面に縦斧、前面では弱く、時には後上面のみにみる」(佐原 1982)。

このような視点からの武藏台遺跡の石斧の観察はすでに横山によってなされている。以下横山の記述(横山前掲文)を抜粋しながら検討することにする。

石斧24 打製石斧(長崎 前掲文 第7図24)

「刃部や側縁部は滑れて著しく、……中略……線状痕は刃部に直交するものが多い」という観察がなされている。この観察から判断されることは、石斧24は横斧の可能性が高いということにならうか。

横山の記述のなかでは刃部の線状痕という観察がなされている石斧は上記の1点のみである。あの石斧については磨痕という言い回しになっている。磨痕とは線状痕とでは意味が異なる。磨痕とは研かれた、もしも対象物によって着く光沢の痕跡であり、線状痕は対象物にあたる際に不可抗力でできる線傷である。したがって横山の観察では石斧24以外の刃部の観察ではすべて磨痕であり佐原のいうような線状痕は観察不可能である。しかしここで検討する余地はまったくないわけではない。つまり佐原は論文のなかで多くの縦文・弥生の磨製石斧の線状痕を観察してきており、その観察から判断できることは磨製石斧でも使用後にはかならず線状痕が観察されるということである。今武

藏台遺跡の報告者である横山の記述は「石斧6点と刃部破片1点のすべてに磨痕がみられ、……中略……研磨痕と判断されるものには刃部に直交するものと平行するものがあり……」(横山 前掲文)となっている。この記述は刃部に直交する磨痕と平行する磨痕があるとされているが具体的な記述のなかで刃部の磨痕は刃部に平行する磨痕をもつ石斧はみられない。その磨痕のほとんどが刃部に直交していると記述されている。そこで、縦文・弥生の石斧と後期旧石器時代初頭の石斧の対象物がまったく異なるならば、線状痕のつき方も解釈大きくことなるものであろうし、仮に対象物にそれほど差が両者になかったとするならばやはり武藏台遺跡の石斧にも線状痕は付くはずであろうと推測できる。仮に今縦文・弥生の石斧と武藏台遺跡の石斧の対象物が同じ程度の物質であると仮定するならば、横山の観察した磨痕の中に線状痕が含まれていたと解釈できないだろうか。するとほとんどが刃部に直交する傷のうち、研磨の方向と対象物にあたってできる傷の方向が一致していたと解釈できる。すると武藏台遺跡の石斧は横斧に属することになる。これの反証としては縦斧の場合は刃部に平行した線状痕が付くはずだから磨痕とは明らかに区別のつく線状痕が磨痕を切って残っているはずであろう。この刃部に平行な線状痕は武藏台遺跡の石斧にはない。いずれにしろ対象物が同じ程度という大前提のもとではあるが武藏台遺跡の石斧のはほとんどは横斧であったと推定できる。そして佐原は「日本においても、久しく横斧優勢の時代が続いたようである。最近、先土器時代の古い時期に属する「打製石斧」・「磨製石斧」が中部・関東地方で続々みいだされている。これらが柄を着けて使用したものとすれば、片刃のものがあり、形状からみても横斧らしいものが多い」(佐原 1977)という興味ある指摘をしているのである。

5 後期旧石器時代初頭における石斧の機能と形態組成

さて以上のことをもう一度まとめなおして、さらに今度は石斧の機能と形態組成に関する予察を述べることにする。

武藏台遺跡の石斧の観察から石斧は再加工されて使用され、そこには一定のプロセスがあることが取扱われる(長崎 前掲文)。そのプロセスの意味については、「刃角の補正・維持のための形態変化」(長崎 前掲文)と「両刃横斧から片刃横斧への形態変化」という2つの解釈ができるなどを示した。また、武藏台遺跡の線状痕と磨痕の解釈から武藏台遺跡の石斧のはほとんどが横斧であると推定できるとした。

これらのことを踏まえたうえで、今度は石斧の刃部を何故両刃から片刃にしなければならないか、その必

然性を解説してみよう。

再び佐原論文を引用することにしよう。本論の冒頭部分での引用を再度繰り返すと「横糸しか持っていない文化の人々は、それを万能の糸として使い、伐採から加工までやりあげる。伐採加工兼用糸である」(佐原 1982)。さらに「片刃石斧は……中略……オノとしてもちいる場合、前正面片刃斧は削るに適し、後正面片刃斧は深くくいこむからむしろ伐採用に好適である」(佐原 1977)。

ここで前正面片刃石斧と後正面片刃石斧という2種類の片刃石斧がでてきた(佐原 1972 図2参照)。この2種類は線状痕によって見分けられるという。「片刃のある方の正面により顕著な使用痕をとどめる……中略……後正面片刃横糸であったことの証」(佐原 前掲文)であるそうだ。これが前正面片刃横糸ならば、この通りにつくことになる。

武藏台遺跡の石斧磨痕を観察してみよう。石斧37(長崎 1990 9図、37)は片刃の方に磨痕が顕著である。これは通常ならば後正面片刃石斧の可能性を示している。しかし胸部の磨痕は横断面の湾曲部の背の無い方(刃部)に顕著についている。磨耗を用いるならばこれは前正面片刃横糸の可能性を示唆している。この石斧の形態は再生刃部の片刃と胸部の湾曲が互い違いについているのである。また右石斧36(長崎 1990 9図、36)は2つに折れる前と折れた後の胸部の磨痕のつき方が異なる。折れた後の石斧(長崎 前掲文 3図、4)は片刃の無い方に顕著に磨痕が着いている。おそらくこの石斧も前正面片刃横糸の可能性を示唆している。石斧の観察には胸部の磨痕の観察も不可欠であることは横山が詳細に述べている(横山 前掲文)。

以上のように佐原論文からの示唆と再生過程のわかる武藏台遺跡の石斧の観察から、およそ次のような石斧の機能推定が演绎できよう。

長柄円形の打製石斧、局部磨製石斧は両刃横糸の伐採用石斧であり、そこから再加工された一部の局部磨製石斧は木材加工用の前正面片刃横糸であるといえようか。それは長柄円形の打製石斧、局部磨製石斧を再加工した再生刃部が最初の刃部形態より執拗に磨耗されていることからも再生後の石斧の刃部機能と再生前の刃部機能に差がでているといえまいか。さらに高井戸東(小田他 1979)、古城遺跡(大工原 1989)にみられるような小型で全面磨製に近い石斧は最初から意図的に製作されており、刃部再生も石斧自体のプロポーションを変えるものではなく刃部のみの磨きなおしがなされていると思われる。そしてこの小型石斧は明らかに再生される前者の石斧と機能的に異なるとおもわれる。この小型石斧は前正面片刃横糸とセットをしてソケット着柄の木材加工用の工具となっていると

推定できようか。以上のように後期旧石器初頭の石斧の機能はすでに伐採用、削り用と機能分化しておりさらに後者も前正面片刃横糸が荒削り仕様、小型磨製石斧が仕上げ仕様という2つに機能分化していると推定できる。そしてこの段階ですでに高度な木材加工技術をもっていたと推定できるのである。「機能によって形を変え、重さも変えるなど、石斧の分化がこの段階でおこなわれていることは驚きである」(佐原 1982)と岡本の神子柴遺跡の分析(岡本 1979)に注意を払っているが、神子柴遺跡の段階よりもさらに古い段階で石斧はすでにいくつかの機能の分化をもっていることが推定できる。石斧の形態変化のリダクションとはひとつの石斧がその使用過程の段階で機能を変えることであり、それは石斧を持つ人々の経済事情に石斧の持つ意味から踏み込める有効な考古学的方法論となることを示唆している(註1)。

6 おわりに

以上をまとめて石斧の遺跡のなかでの残り方や若干の問題提起をしながら論をしめくくりたい。武藏台遺跡での石斧の接合資料とその残り方は武藏台遺跡の報告のなかで筆者がまとめている。その報告文をもとに分析をしてみよう。報告文を引用すると「(石斧の製作)剥片をその工程別に、製作初期工程、刃部再生・整形工程と大別したときに、本体が残されるのは刃部再生・整形の工程と一緒にである」(横山 前掲文)。この報告の観察からわかるように石斧の初期製作剥片だけは残ってそこから製作された初期形態の石斧は残っていない。つまり遺跡から搬出されているのである。おそらくその石斧は長柄円形の両刃横糸であったろう。また残された石斧はこの遺跡に人々がきたときに携帯してきた石斧で、携帯時の石斧の形態は長柄円形の両刃横糸であることは実際の接合資料からわかっている。

そしてこの持ってきた石斧を前正面片刃横糸に再加工して木材加工に使用した後にこれらの石斧を廃棄している。そして新たに伐採用の石斧を製作、携えて移動していくのである。遺跡に残る再加工を受けた石斧の大部分が片刃横糸となって残っていることからも木材加工用の石斧と伐採用の石斧が完全に機能分化していたことが窺われるのである。次に石斧の刃部についての問題提起を行う。再加工された石斧の大部分が偏刃である。これについては「再生された石斧の一方の側縁は旧器体の側縁をそのまま用い、他の側縁は再加工直で覆われている。この再生加工では側縁への仕上げの細かい調整剝離がないために、左右の側縁は全く異なる仕上がりとなっている」(長崎 前掲文)という指摘がなされている。この石斧両側面の加工のアンバランスと再生刃部が偏刃であることは密接に関係

していると長崎自身が述べているがその解釈は「右斧製作と刃部再生が別の人によって行われた可能性を指摘しておきたい」(長崎 前掲文)としている。筆者はこの再生刃部の偏りと左右の側縁の加工の差について以下のように解釈する。横斧の場合でも縱斧でさえもその使用者の癖を反映している。これは「刃縁と柄の主軸とが正しくは平行しない縱斧、刃縁と柄の主直交しない横斧が、使用者の利手、使い勝手との関わり意識的につくられるることは、松沢亜男氏の教示で承知したことである。」(佐原 1982)。この指摘のようにおそらく武藏台遺跡の横斧は斧身と柄の主軸がいくぶんふれており、主軸に対して使用者側からみて右上がりとなって着柄されていた可能性を指摘したい。したがって片側の刃部にかたよって執拗に研磨し偏刃になることと、片側の加工がそれほど顕著でない事実は使用者の使い勝手と着柄部分と主軸とのズレからくる加工のありかたであると推定したい(註2)。この分析を細かくすめれば、かつて砂川遺跡でおこなわれたナイフ形石器製作場から遺跡の人数を割り出すという分析(安藤 1977)よりは比較的楽に同じ分析も可能であろうという予察を加えておく。

最後に後期旧石器初頭の石斧と中期旧石器の石斧との関連について述べる。両面加工の技術はすでに中期旧石器から存在していることはたしかであるが、両面加工石器の機能が木材加工技術に利用され、さらに機能分化されたかたちで後期旧石器初頭に出現していることは後期と中期の決定的差につながる要素をもっているといえまい。座敷乱木遺跡等の中后期旧石器時代遺跡で出土している両面体の刃部は尖刃が多い。後期の円刃・直刃の石斧及びそれを再生して別形態の偏刃を持つ石斧にするという技術体系は中期旧石器の両面体製作技術とどのように関わるのであろうか。その進化のプロセスを木材利用のための機能的進化とするだけでもよいのだろうか。そこにはまだ大小の反復進化(安藤 1989)の過程が予測されよう。中期旧石器から後期旧石器の移行の部分を両面体石器の技術進化論で説明するには居住形態論からの石器組成に対する統合的アプローチのなかでとらえる方法が有効であると思われる。

本論は長崎論文に多くの啓発を受け、佐原論文の石斧論を基礎に後期旧石器初頭の石斧について問題提起をおこなった。諸先輩方の御批判をうけられれば幸甚です。

謝辞

本論のきっかけとなった論文の著者長崎潤一氏には常に新しい情報と方法を教授していただいている。本論も長崎氏の多くの示唆によって成り立っており今後

もますますのご活躍をされるであろう。横山裕平氏には武藏台遺跡の石斧について着柄についての教授をいただいた。また安藤正人、戸田正勝、織笠昭、織笠明子、佐藤宏之、須藤隆司各氏には常に暖かいご教授ご指導を賜っている。国学院大学小林達雄教授、同大学助教谷口康浩氏には公私ともどもの暖かいご指導を賜っている。この文をまとめるにあたってここに記して感謝の意を表したい。

さらに堀 隆氏は本論をまとめ、掲載するに際し多大な努力を割いていただいた。公私ともどもお付き合いをいただいている氏には感謝の念が堪えない。末筆ではあるが各氏に御礼申し上げるしだいです。

註

(1)

長崎は論文のなかでX層の石斧とIX層の石斧について形態変遷を指摘している。また太平洋側と日本海側との気候差による石斧の出現差も指摘をしている。これらの視点は石斧の機能を環境開発・資源利用の点から解釈する有効な視点である。おそらく武藏野台地X層とIX層の環境は寒冷化による大きな環境差が予想される。X b層は有機物がかなり多いとの指摘が「武藏台遺跡」で板上によってなされている。これはこの段階では気候が温暖であることが予想できる。つまりこの時期の武藏野台地はかなり入り組んだ湾の形状が予想され、当然のことながら船をつかった水路の開発もされたであろうし、船の製作には大型の伐採用横斧、前主面横斧が使われたことも想像できよう。これが次第に寒冷化して海面が後退すると陸路の開発もされよう。詳しい研究はこれからだが水路と陸路を念頭においてX層の大規模円形石斧の消長は注目する必要がある。

(2) 木材を削る技術について

後期旧石器初頭の石斧は使い勝手で片側を執拗に研磨することで偏刃になる。これは柄と刃部との角度のずれからくる現象で斧としては正しい横斧ではない。この意味はおそらく削るという技術について横斧を使う正しいフォーマットがないからであろう。横斧を用いる正しいフォーマットはいつごろから出現するのだろうか。木材加工技術の過程を石斧形態・使用痕で分析することは過去の社会と技術と経済の推移をたどれる有効な視点になると思われる。

引用・参考文献

- 安藤正人 1988 「斜軸尖頭器石器群からナイフ形石器石器群への移行—前・中期／後期旧石器時代過渡期の研究—」『先史考古学研究』1：1—48、阿佐ヶ谷先史学研究会

- 安斎正人 1990 「石器は人(individuals)を離れるか」『先史考古学研究』3:35-44、阿佐ヶ谷先史学研究会
- 安藤政雄 1977 「遺跡の中の遺物」『季刊ドルメン』15号
- 岡本東三 1979 「神子柴・長者久保文化について」『研究論集』V 奈良国立文化財研究所
- 小田静夫他 1979 「高井戸東遺跡」高井戸東遺跡調査会
- 佐藤宏之 1988 「台形縁石器研究序論」『考古学雑誌』73-3:1-37
- 佐藤宏之 1989 「後期Jō石器時代前半期の研究—現状・視点・展望—」『考古学ジャーナル』309:2-7
- 佐原 真 1977 「石斧論—横斧から縱斧へ—」『考古論集』45-86、松崎寿和先生退官記念事業会
- 佐原 真 1982 「石斧再論」『森貢次郎先生古稀記念文化論集』
- 大工原豊 1988 「古城遺跡」安中市教育委員会
- 田村 隆 1989 「二項的モードの推移と巡回—東北日本におけるナイフ形石器石器群成立期の様相—」『先史考古学研究』2:1-52、阿佐ヶ谷先史学研究会
- 長崎潤一 1990 「後期Jō石器時代前半期の石斧—形態変化論を視点として—」『先史考古学研究』3:1-33、阿佐ヶ谷先史学研究会
- 横山裕平、早川京他 『武藏台遺跡I』都立府中病院内遺跡調査会

BOOK REVIEW／新刊案内／

堤 隆

先土器時代文化の構造

戸沢充則 著

同朋舎 刊 定価14,000円

先土器時代の若手研究者・学生のあいだで密かに流布されていたコピーブックがあった。それが戸沢充則先生の学位論文「先土器時代文化の構造」である。

じつはかくいう私も、学生時代、明治大学のS氏がコピーしたという「裏本」をもつひとりである。

「裏本」を持つこと自体、著者に対しては大変失礼なことであるのだが、裏返せばそれはどの刊行が渴望され、また教導に富む論文であった。今回は、タイトルとなった学位論文を含め、いまでは原本を手に入れる事のできない幾つかの重要な論文、研究が掲載された。いや、ひしめきあっていいるといえる。

本書の構成は、

- 第I部 先土器時代文化の構造
- 第II部 先土器時代文化の発掘
- 第III部 先土器時代文化の研究
- 第IV部 先土器時代の日本

の4部からなっている。

第I部の「先土器時代文化の構造」は、さきに述べたとおり先生の学位論文で、その構造的理解のための方法論とその実践が説かれている。第II部「先土器時代文化の発掘」は、先生が手かけられた学史的にも著名な数々の遺跡の報告で、八島・茶臼山・矢出川・砂川等いまでは手に入れる事のできない報告ばかりで

ある。これからこの時代を学ぼうとする学生にとっても非常に有り難い掲載であるといえよう。

第III部「先土器時代文化の研究」では、いわゆる前期Jō石器の問題をはじめとして、尖頭器文化・網石刃文化、そして石器文化の地域性の問題に関する研究が載せられている。ところで、一時期収録あるいは過小評価されてきた尖頭器文化が、近年再び問題提起されてきた。尖頭器文化研究の前段階を集約した戸沢論文に触れることなしには、列島の尖頭器文化は語れないものである。

さて第IV部の「先土器時代の日本」は、入門書『日本考古学を学ぶ』に書かれた文章であることもあって、先土器時代社会や文化の特質が非常に分かりやすく書かれている。「市民のことばで考古学」という戸沢考古学のキャッチフレーズが思い起こされる。

歴史学における構造的理論が説かれて久しい。これまで引用がまんならなかった「先土器時代文化の構造」をこれで正規に引用できることを喜ばう。しかし私の部屋の書棚にある幾度となくひいた「裏本」も大切にとめておくつもりである。

われわれ佐久考古学会員に、幾度となく暖かいご指導を続けられている戸沢先生のご大著『先土器時代文化の構造』の刊行をよろこび、またぜひご覧いただくことをお薦めします。あわせて刊行された下記の図書についてもご覧ください。

『縄文時代史研究序説』 戸沢充則著

名著出版 刊

6,800円

川上村立石遺跡の新資料

吉沢 靖

1

佐久地方南部、とりわけ八ヶ岳の東南麓に広がる野辺山原には旧石器時代の遺跡が、その研究の頃より調査され、現在では約50ヶ所程の遺跡が発見されている。それは、さらに数ヶ所の遺跡群を形成している。この遺跡の多くは旧石器時代終末期に位置づけられる細石刃石器群と木葉形や葉形の尖頭器を主体とする石器群のものである。しかし、その直後にあたる縄文時代初期の遺物、とりわけ土器の発見例は現在までのところ立石遺跡が唯一例であるにとどまっている。

立石遺跡は、1981年に矢出川遺跡群総合調査（明治大学考古学研究室）の一環として、試掘調査が実施され、その結果と採集資料の一部が報告されている（宮下・吉沢 1982）。

その後、微隆起線文土器群に関連すると考えられる遺物が増加した。草創期土器群の発見例の少い本地方に於いての立石遺跡の重要性を鑑み、今回の資料を先の資料に補充するものである。

2

野辺山原の東端、平坦な高原が千曲川の谷に落ちる直前、台地崖端に立石遺跡は立地しているが、野辺山原の深めから流れ出す小河川の沢をはさんで、さらに南側のA地点、北側のB地点とにより成っている。

地籍は、川上村大字樋沢字立石である。

遺跡の位置と環境については、「報告・野辺山シンポジウム1981」（明治大学考古学研究室1982）を参照されたい。

3

本遺跡から今まで採集された遺物は第1表に示す通りである。以下遺物について説明を加えるが、明記以外はA地点採集品である。

微隆起線文土器（第1図1～6）

新たに採集された微隆起線文土器はA地点で5片（2～6）、B地点で1片（1）である。

第1図1は、口縁部片で、胎土には石英粒、長石と黒曜石碎片を僅かに含む茶褐色を呈す。

微隆起線文は口縁横位に3条認められる。この微隆

	遺物の種類	立石A	立石B	立石C
土器	微隆起線文土器	6	1	
	無文土器	69	—	
	斜縫文土器	146	2	
石器	表裏縫文土器	35	—	
	尖頭器	10	1	
	有茎尖頭器	2	—	1
	石鐵	72	6	
	石錐	2	—	
	スクレイバー各種	78	9	
	石斧	2	—	
	石器	8	1	
	磨石	10	1	
	四石	1	—	
ビエス・エスキュー	ビエス・エスキュー	8	—	
	砥石	11	—	

第1表 立石遺跡の遺物（宮下・吉沢 1982）に加筆

起線文は、滑かな粘土を器面に塗りつけて施文されたために剥落した部分がある。また口縁上には、粘土ヒモを貼りつけて指頭または工具による押圧をするが、半分は剥落している。

2も口縁部片、胎土に僅か白砂を含むが焼成は良好で灰褐色を呈す。施文は1と同様に口縁上に指頭または工具による「ねじり」か押圧が加えられている様だが剥落と風化で詳細は不明。口縁には条間のせまい微隆起線文が4条認められるし、剥落部分があって、粘土の塗布後の施文であったと考えられる。

3～6は口縁部にちかい胴部片である。3は胎土に白砂を僅かに含み焼成は良く、灰褐色を呈す。5条の微隆起線文が横位施文される。色調、胎土、施文が2に類似していて、同一個体と思われる。

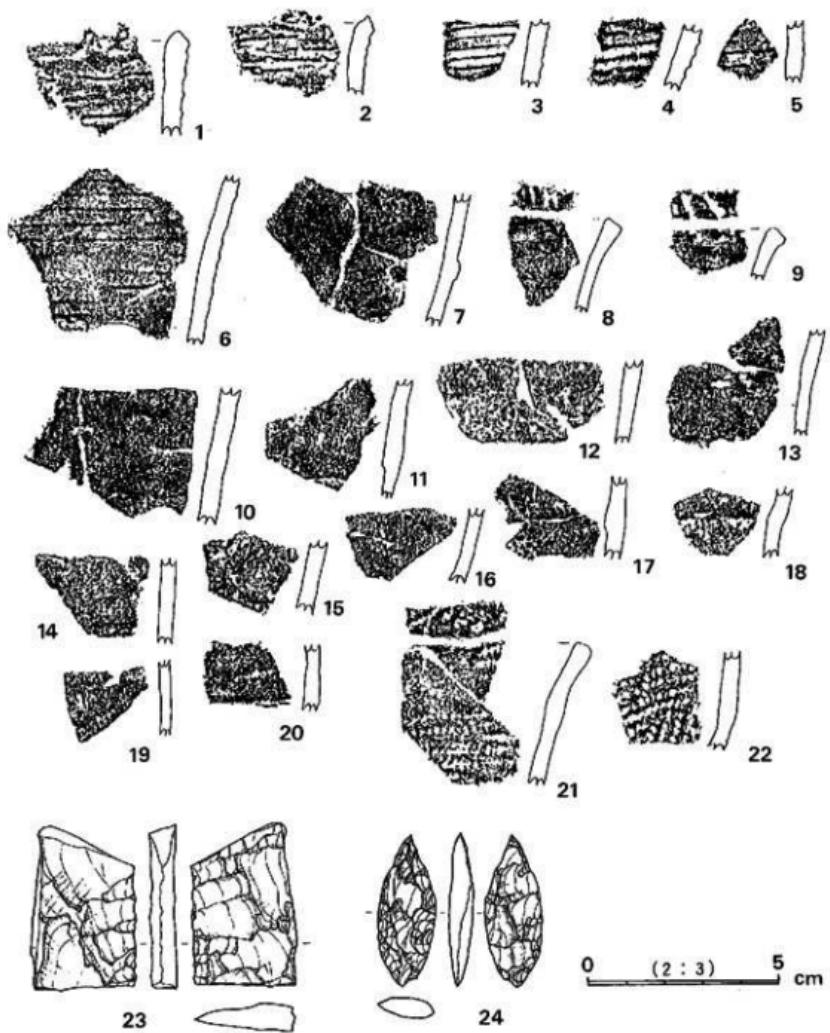
4は胎土に白砂を僅かに含み焼成も良好の茶褐色を呈して、4条の微隆起線文が横位に施文される。これは粘土上の上塗りをせずに器面に直接施文されていて、内面には炭化物の附着がみられる。

5も茶褐色で胎土、焼成とともに良好。3条の微隆起線文がみられる。粘土の上塗り後に施文されていると思われるが詳細は不明。

6は立石遺跡の微隆起線文土器片中最も大きい破片で胎土に白砂、長石、雲母を含む。風化は著しいものの10条の微隆起線文が数えられる。器形は口縁にむかって、ゆるやかに開くことが推定される。

以上が微隆起線文土器であり、いずれも胎土に白砂、長石、石英などを僅かに含むが焼成は良好である。

器形および紋様構成は、口縁がやや開く土器で、口縁上に押圧または交互押溝しを行い、口縁に平行の微隆起線文が多条に施文されていたと推定される。



第1図 立石遺跡の新資料

無文土器（第1図7-19）

すべてA地点採集の薄手無文土器の一群は、新たに53片採集された。

7は脚部片で胎土に砂粒を僅かに含み焼成は大変良好で茶褐色を呈す。3片の土器片が採集後に接合したもので、表面は平滑で内面は指頭による整形圧痕が残る。そして表面上部には粘土の貼りつけと思われる隆起がみられるので、あるいは隆起線文土器片なのかも知れない。器体の湾曲は、ほとんど認められない、器厚4mmの薄手土器。

8、9は口縁部位片で胎土に石英、白砂を僅かに含む、焼成は良好の茶褐色を呈す。口唇上には工具（施文具）または爪による刻み目が施されるが細片のため詳解不明。

10~20は無文土器の脚部片である。焼成は大変良く、胎土は僅かに白砂、石英などを含み、さらに植物の実（堅果類？）と思われる痕跡を残す例が2例みられる。器壁厚は2mm~5mmと非常に薄手造りである。そして、ほとんどの土器片とも湾曲がほとんどみられないことから、以前に指摘したように隅丸方形の器形が推定されるが、底部片がないことから全体形については不明。

また土器製作工程時の輪びき面の接合は、粘土とモモをのせて表面を若干修整するだけのものがあり、切った様な割口の上器が数例認められる。それと横ねた粘土を内面下方に引き延ばして接合しているものもあるらしく接合部が肥厚したものもみられる。またその反対の例もあり、一定した手法で製作されてはいないようである。

無文土器として一括したものの中には微隆起線文や他の有紋土器の無文部位片も含まれているのかも知れないが、表裏繩文や斜繩文を施紋する土器類とは胎土、焼成、器厚などと見た目にも明瞭に区別できる。この無文土器は、口唇に刻みをもつ構丸形を基本形とした土器であったと推定される。

多繩文系土器群（第1図20、21）

20は口縁部位片で胎土に白砂、基母を含み灰褐色を呈す。口唇に繩の圧痕と口縁に横位の繩文が施文されているが、口縁直下には無文部位が残る。

22は斜繩文土器の底部に近い部位片で灰褐色を呈す。やや細目の繩（原体）を異方向に施文し羽状繩文となっている。また底部は平面にちかいものと思われる。

他にも多数の破片を採集したが特徴的な2点を図示した。羽状繩文は表裏繩文土器に特徴的に施文されるようだが斜繩文にも多少みられるようである。

石器（第1図23、24）

23はA地点採集の44質頁岩製。尖端、基部と中間部の半分を欠損するが調整加工のあり方や断面形などか

ら尖頭器片と考えられる。現存長4.4cm、現存幅2.8cm、現存最大厚0.75cm。欠損面は、いずれも新しい折れ面。

24はB地点採集の黒曜石製尖頭器。やや細身の木葉形尖頭器で、長さ4cm、最大幅1.5cm、最大厚0.6cm。

B地点唯一の尖頭器は微隆起線文土器に共伴するものと考えられる。

以上が立石遺跡から採集された新しい遺物であるが、図示しえず紹介できない遺物は他に砥石、ビエス・エスキュー、局部磨製石錐などがある。

4

立石遺跡の草創期土器群は微隆起線文土器、無文土器、表裏繩文土器、斜繩文土器、押圧繩文土器などである。

微隆起線文土器は総計7点採集された。本遺跡の土器は、器面に滑かな粘土を上塗りし「はみ出し」の微隆起線文を施文する例が特徴的であるといえようか。微隆起線文は東北地方南部から関東地方を中心に発達したとされ、その終末時には爪形文と時間的に併行した可能性が強い（栗島1985）。

本遺跡の土器は、所謂「多条形」であり、大谷寺洞穴、栗木IV、小岩井渡場などの遺跡出土土器に類似すると考えられ、栗島氏が本遺跡の出土土器を隆線文系土器の最終末期である「V期」に位置づけたことの裏づけとなる資料といえよう。

無文土器は薄手で、口唇上に刻みを施された隅丸方形形態が推定されるもので、立石遺跡では斜繩文土器に次いで多い土器である。この土器の口唇上の刻み目は、工具（ヘラ状）または爪による押圧によるもので、爪形文土器や押圧繩文土器との類似が推定される。しかし粘土の貼りつけの見られる破片もあることからして、微隆起線文土器より古相の土器なのかも知れない。

表裏繩文、斜繩文の施文された土器群は胎土、焼成など全体の様相が無文、微隆起線文とは著しく相異していることは前述したとおりである。

單節繩文（LR・RL）を異方向施文した羽状繩文を特徴的に表した例が数例あり、口縁部には繩の側面圧痕を施す例や口縁直下に無文部が残る例など様々な様相がみられ、形態も直交、外反するものなどがあり疑似口縫も特徴的にみい出せる。表裏施文された例 表裏施文された土器片の数からして、表裏繩文土器の内面施文は部分的に行われていると思われる。

本遺跡の土器類と石器の組み合わせについても表揚であるがために不詳であると言わざるをえないが、教えて日本各地の草創期遺物組成から推してみると尖頭器類と石斧の一部は微隆起線文が無文土器のいずれか、あるいは双方の土器とともに共伴したものと考

えて大過ないものであろう。

そして立石遺跡では「神子紫・長者久保文化」→降起線文土器・無文土器→多繩文系土器群という大まかな段階の変遷が予想されよう。

最近各地で旧石器時代終末から草創期前半の遺跡調査例が増加し旧石器時代終末の細石刃文化と土器の共伴例や「神子紫・長者久保文化」と土器の共伴例などが報告され、日本列島の土器の起源問題に新たな知見が得られている。また新傾の土器型式も検出され草創期の土器変遷の複雑なことを示している。

ところでこれ等各地の資料と野辺山原の遺物を比較してみると、馬場平遺跡出土の在地系石材利用の大型、中型の木葉形尖頭器や細身尖頭器は立石遺跡の直前段階と考えられよう。他にも柏原遺跡や断片的に出土している有茎尖頭器などからしても野辺山原にはまだ本時期の遺跡の存在が予想される。リゾート開発や大型農機による遺跡の破壊が進行する前に十分な調査が行われることを望むものである。

本資料紹介にあたり、紹介の機会を与えていただき辛抱強く原稿待っていた堤豊氏に厚く謝意を

表わすものである。

参考・引用文献

宮下健司・吉沢靖 1982 「野辺山原における上器出現遺跡の発見」〔『報告・野辺山シンポジウム1981』〕

鈴木保彦 1982 「草創期の土器型式」〔縄文文化の研究3、縄文土器I〕 雄山閣

佐々木洋治 1982 「隆起線文土器」〔縄文文化の研究3、縄文土器I〕 雄山閣

大塚達郎 1982 「隆起線文土器管見一関東地方出土当該土器群の型式学的位置」〔東京大学考古学研究紀要第1号〕

栗島義明 1985 「草創期土器型式変遷における一考察——隆起線文から爪形文へ——」〔信濃37巻4号〕

川上村教育委員会 1981 「川上村遺跡詳細分布調査」

吉沢靖 1989 「川上村立石遺跡採集の有茎尖頭器」〔佐久考古通報〕

宮下健司 1988 「2 縄文土器 (1) 縄文時代と縄文土器」〔長野県史考古資料編全1巻(四) 遺構・遺物〕

中ッ原遺跡群1G地点の採集の細石器について

中島芳榮

1はじめに

かつてしし岩から眺めた雄大な八ヶ岳への感動は忘れることができない。

八ヶ岳があるフォッサマグナの中にあり、新生代第四紀（200万年前）に活発な火山活動によって形成され、その噴出物が堆積して広大な裾野が展開され、その中に野辺山原があるという事実。

そして私が立っている足元のしし岩がやはりフォッサマグナの南側を走る岩村田——若神子線の上にある飯盛山の火山活動によって噴出された溶岩であるとい

う事実。

飯盛山が八ヶ岳よりも古い火山であった事は、私の想像を限りなく楽しくさせてくれる。このすばらしい地形がまだ人を寄せつけなかった時代、どんな動植物が生きていたのか知り得ない。

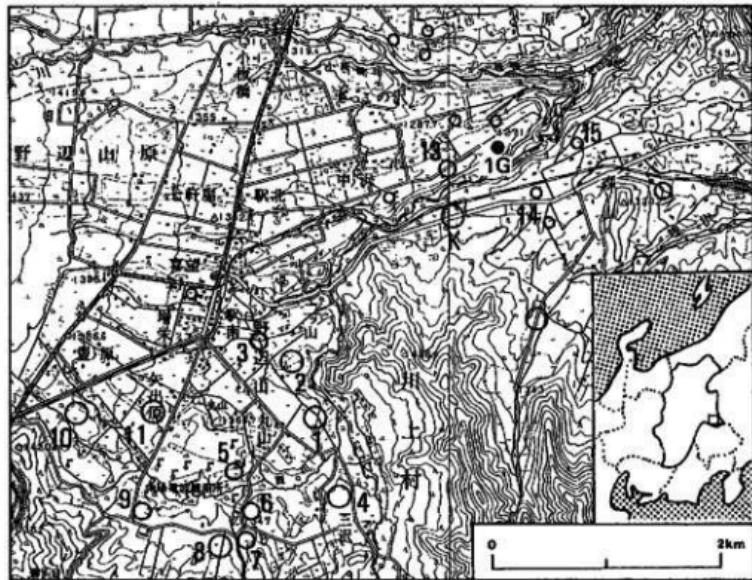
2遺跡の立地（第1図）

日本の細石器文化の発祥の地となった矢出川遺跡を筆頭に南牧村は全國に名だたる旧石器時代の遺跡の宝庫である。南牧村が西に八ヶ岳を配し南に飯盛山、東に男山を有しその自然環境は太古からそう変わらぬままに位置づけられている。既に総合的な調査の済んだ矢出川遺跡を始めゴルフ場開発に伴って緊急に調査された三沢遺跡、平沢バイロット遺跡、又二ツ山遺跡や矢出川上流下流の遺跡の他、西川（矢出川）と小板橋川にはさまれた地形に縄文時代のよしの頭遺跡があり、そして中ッ原遺跡群へと続いている。なお、西川・小板橋川は下流で一つとなりやがて千曲川に合流する。その遺跡群の一つを構成するのが1G地点である。

千曲川を境にして南牧村の地質は、新田はっきりと区別できる。男山のある東側は古生代二疊紀から中生代（2億8千万年前～6700万年前）の岩石からなり、



中ッ原1G地点より男山を望んで



第1図 中ッ原 I G 地点(●)と野辺山原の先土器時代遺跡(5万分の1「八ヶ岳」「金峰山」図鑑)
K 柏垂, 1 矢出川, 2-11 矢出川II~XI, 13 中ッ原, 14 西ノ瀬, 15 切草

一方八ヶ岳のある西側は新生代第四紀(200万年前~現在)の新しい岩石となっている。

秩父古生層を有する天狗山層群の地層は南牧村の中でも最も古い地層となっているが、この地層のチャートは石器の原石として利用され千曲川の河床で容易に採取することができる。

昭和47年、芹沢長介氏の指導の基に発掘調査された柏垂遺跡は中ッ原遺跡とは西川(矢出川)を挟んで相対している。従ってこの周辺にはII石器から縄文に至るまでの人類の痕跡が確かな手応えとして存在する。

3 採集の経緯

野辺山高原一帯が春から秋にかけ、都会の靴踏を運ぶ頃、私はその喧騒からのがれ、かつて地球が活発に活動しそして誕生した八ヶ岳や假面山に連なる一連の山々を中ッ原に立ってよく眺めるのだった。

この山々が悠久の時間を経てやがてどこからかやって来ただろう旧石器人の営みをどのように見ていたのか、私の頭の中ではなかなか消化できない。

ここは私の人好きな隠れた散歩道。表採でよく歩いた矢出川は時には車の音が伴ったが中ッ原では何時も歩いてもめったに人に会うことはなかった。

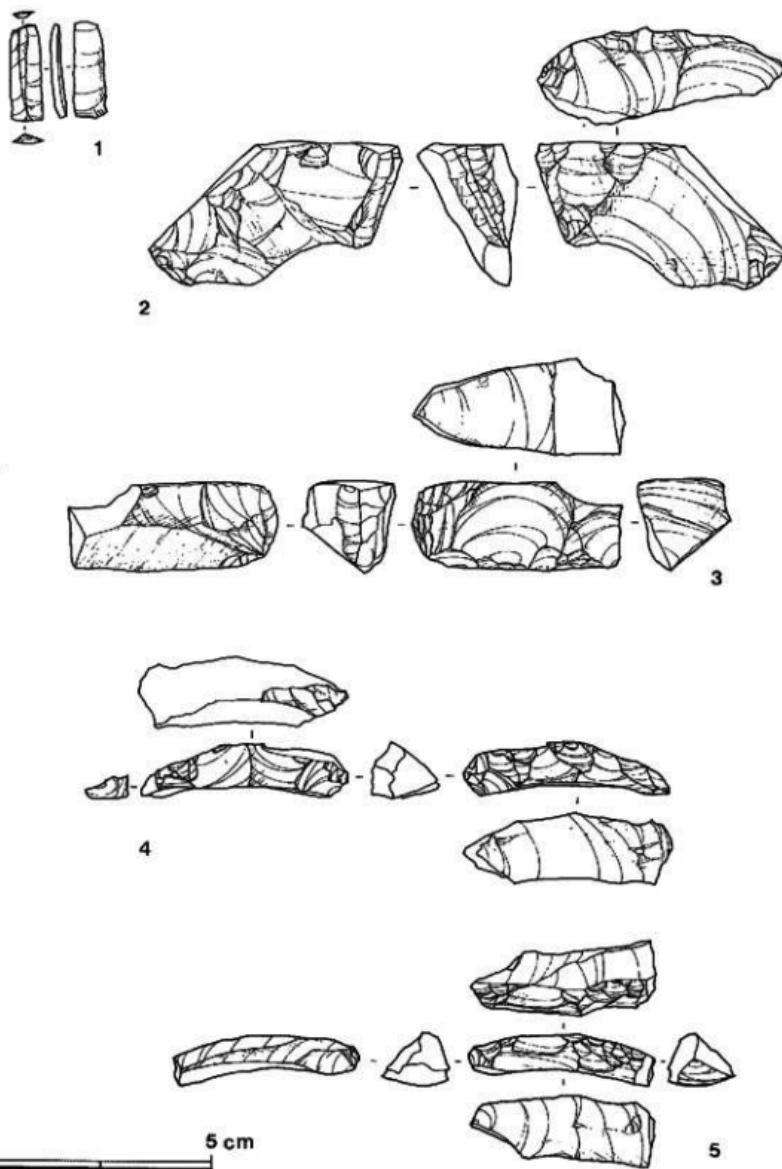
1988年の4月、私はめずらしく仲間3人と表採のために中ッ原を歩いていた。その日はめったに歩いたこと

のない畑にも出むき石器との出会いに胸をときめかせていた。すると葉を落とした落葉松林の防風林の間に小高い畠に自然と足がむいていた。たっぷり水分を含んだ土は重く、足がとられてうまく歩けない。ふと、足元に妙に不思議な灰色の石をみつけた。それを手にとろうとした時もう一つ、今度は茶色の石に気づいた(第1図・●が採集地点)私はすばやく拾うとあわてて同リ一帯を心往在歩きまわった。が、どれだけ歩いてもこの二つ以外の石器をみつけることはできなかった。あの頃の私の考古学の知識は、おはすかしい話だが黒曜石といえば黒いという程度で手にした石が妙にめずらしく大事に家に持ちかえった。その後2~3回その地点に出むいたが二度と石器を拾うことはなかった。私を探る考古学に誘ってくれた、不思議な出会いの石器だ。

4 採集資料(第2図)

ここで採集された資料についてみてみることにする。
1は黒曜石の細石刃で、上下の切断された中間部長さ21.6mm、幅7.4mm、厚さ2.8mm、重量0.4gを測る。

2は、灰色味がかり気泡を若干含む黒曜石の細石刃石核である。打面は細石刃剥離を切る再生打面である。両側面には下締調整が僅かに窺え、また細石刃剥離に先立つ統上調整痕も僅かに残っている。器長55mm、器



第2図 中ッ原ⅠG地点採集の縫石器 (4:5)

幅23mm・器高32mm・重量25.4gを測る。楔形細石刃石核の範囲で理解できよう。

3は、全体に茶色味があり、白い繊維を若干含み平滑な自然面を一部にみせる黒曜石の第一次削片で、そのボンティッシュな主要剝離面から一条のフルーティングが見られることから、細石刃石核としておきたい。器長46mm・器幅20mm・器高20mm・重量19.0gを測る。

4は、黒曜石の細石刃石核削片で、上の小さな剝離を除いて考えると、ほぼ第一次的な削片としてよいであろう。長さ46.7mm・幅14.5mm・厚さ10.0mm・重量6.7gを測る。由井一昭氏採集。

5は、黒曜石の細石刃石核削片で、上面には側面の調整を切る二枚の削片剝離痕が残るものである。長さ41.7mm・幅14.9mm・厚さ7.5mm・重量4.7gを測る。古沢靖氏採集。

以上にみた資料から、中ッ原1G地点の細石刃文化は、黒曜石を用いた削片系細石刃製作技術をもつ細石刃文化であることが理解されよう。

5 中ッ原5B遺跡との関連について

1990年4月に行われた中ッ原5B遺跡の発掘に参加した私は、上記の中ッ原5B遺跡から1G地点がたった400mしか離れていないことを知った。

中ッ原5B遺跡からの遺物は細石刃をはじめ、彫刻刀形石器、削器、細石刃石核、細石刃石核原形、削片、剝離片、碎片と数多く出土した。

5月9日長野県旧石器文化交流会での発表

(吉沢・吉井 1990)においても、中部高地の細石刃文化が話題となった。そのなかで、ここ野辺山原においてこれまで把握されてきたのは、矢出川遺跡に代表される西南日本の細石刃文化であるのに対し、新たに、楔形細石刃石核と端部型彫器を伴う北向の系譜を引く中ッ原5Bの細石刃文化が加わったことで、問題は大きくひろがってきた。

ここで紹介した中ッ原1G地点の細石刃文化についても、黒曜石の楔形細石刃石核・削片の存在から、明らかに5B地点との関連性が窺えよう。また、ここでは資料を紹介するスペースが無かつたが、折断削片が特徴的に存在することも5Bと同様な傾向のようである。そうした5B地点との関連性を明らかにするためにも、中ッ原1G地点の学術調査が望まれよう。

6 おわりに

最後に、この資料紹介を書き終えるにあたり、堤隆氏に助言と協力をいたいたことを、心より感謝申しあげます。なお、4・5の資料については、吉沢靖氏・由井一昭氏からご提供を受けました。紹介をご快諾いただいた両氏に厚く御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 友野邦彦 1987 「村の地質」(『南牧村誌』)
吉沢靖・吉井雅勇 1990 「中ッ原遺跡群5B地点の細石刃文化」(『長野県旧石器文化研究交流会—発表要旨』)

第三回 佐久地方遺跡報告会開催さる

さる4月30日、佐久市岩村田浅間会館において、第二回目の佐久地方遺跡報告会が開催された。

参会者は約60名と、前回よりやや低調であったが、いくつかの重要な報告に会場は熱気に満ちた。

当日の発表は、旧石器時代から平安時代にかけて、以下の六つなされた。

- 1 池の平遺跡群駒田山遺跡の調査(旧石器)
(八千穂村) 池の平遺跡発掘調査団 中村山克
- 2 大庭遺跡の調査(縄文)(立科町) 島田恵子
- 3 下至端遺跡の調査(弥生)
(佐久市) 佐久市教育委員会 羽毛田卓也
- 4 石附窓跡の調査(古墳)
(佐久市) 佐久市教育委員会 林幸彦
- 5 山の神3・4号古墳の調査(古墳)
(筑摩町) 筑摩町教育委員会 福島邦男

6 聖原遺跡Iの調査(古墳~平成)

(佐久市) 佐久埋蔵調査センター 三石宗一
また、小諸市門口遺跡(古墳~平安)の調査の紙ト発表が小諸市教育委員会花岡弘によってなされた。

当日は、前回と同様、50頁にも及ぶ詳細な発表資料が用意された。第三回を迎えた報告会は、詳細なレジュメの刊行も含め、県内の他の地域に先駆けた学会の重要な活動として定着しつづく。

ところでレジュメの巻末に付された平成元年度の発掘調査一覧表をみるとかぎり、佐久地方で34件の発掘調査がなされていることが窺える。しかしこれは単純に宮よべき数の多さではない。開発に伴い消滅していく遺跡数とほぼイコールであるからである。

こうした遺跡保護の問題をもふまえながら、あらゆる意味で次回の報告会も盛会になることを期待したい。

(報告会担当 堤 隆)

佐久市香坂採集の 縄文式土器について

竹之内敏幸

1 はじめに

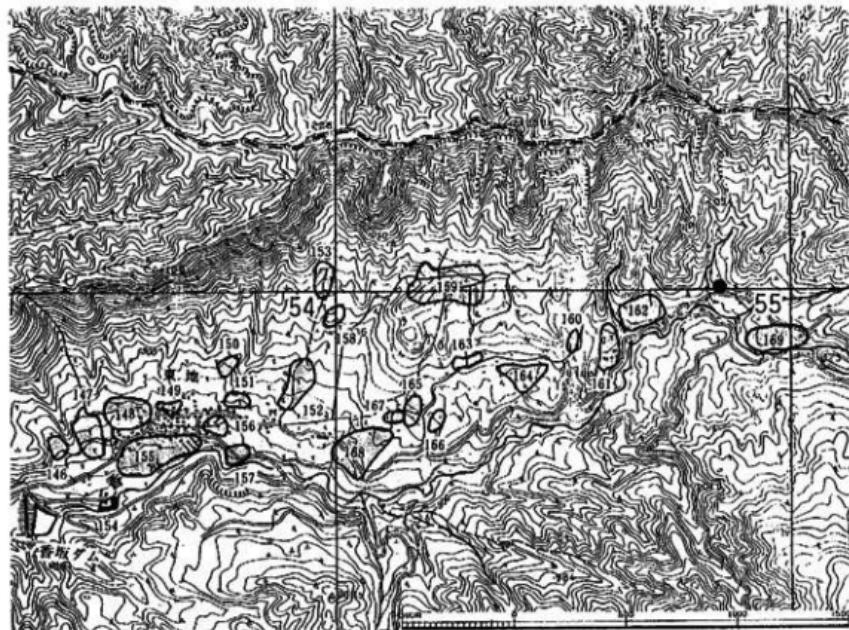
この資料の発見は、昭和63年に同じ香坂にある縄文時代草創期の下茂内遺跡が新聞・テレビ等で報道されたのを見て、遺跡地を実際に見てみようと出掛けた際に偶然発見したもののです。

遺跡地は佐久市大字東地地籍、下茂内遺跡の奥にあるキャンプ場の先1kmにあり、道路を作る為に削られた左右ガケの地層より遺物を探集したものです。後にこの付近の遺跡地図を見せて頂きわかったことですが、既に周知の遺跡となっている雨原A遺跡と雨原B遺跡の中間付近に位置しています。またこのガケはコンクリートブロックなどで補強されてないために風化が激

しく、春先や大雨のあとなどには、道路内にまで下茂内で石器の原石として使用されたような安山岩がゴロゴロとしていることもあります。

2 周辺の遺跡

遺跡のある香坂川上流部の北側部分には第1図に記載のように埋蔵文化財が多数発見されており、第1図に示した遺跡を下流部よりあげていくと、146西称ぶた遺跡（縄・奈）147東称ぶた遺跡（縄・平）148城の口遺跡（縄・平）155屋敷前遺跡（縄・弥・奈）149妻林遺跡（縄・平）150東林遺跡（縄・平）151東山神遺跡（縄・平）156小屋場遺跡（縄・平）157西片ヶ上遺跡（縄）152鶴ヶネ遺跡（縄）153鶴ヶネ北遺跡（縄・平）158仙太郎遺跡（縄・平）168曲尾遺跡（縄・平）167吹付遺跡（縄）165木戸平A遺跡（縄・平）166木戸平B遺跡（縄・弥・平）159五斗代遺跡群（縄）163東木戸平A遺跡（縄・平）164東木戸平B遺跡（縄・平）160五斗代B遺跡（縄）161岳士山遺跡（縄・平）162雨原B遺跡（縄・平）169雨原A遺跡（縄・平）と多数の遺跡の存在が知られている。



第1図 土器片採集地点 (●) と周辺の遺跡 (1 : 25000)

3 資料

今まで発見した資料は土器片5点、安山岩質の剥片数点、黒曜石の剥片2点、今回土器片5点について紹介します。

①第2図の1

粒の細かい横円押型文の口縁部で、内面は研磨され胎土はきめの細かい砂粒を用いて金雲母が混入されており堅く結った焼きとなっている。器壁は6mm～7mmで薄手に仕上げられていて、またこの土器の一番の特徴として、押型文を施文した後に口縁上部を渡して半にしてそこに文様が施してある、刺突文のように見えるがはっきりとは観察できない。色調は外面が暗褐色、内面は茶褐色となっている。

②第2図の2

無節のLとRの羽状縞文の口縁部で、胎土には纖維が混入され白っぽい砂粒が観察できる。器壁は9mm～10mmで口縁は丸みを帯びて、上部でやや外反している。色調は外面が暗褐色、内面は褐色となっている。

③第2図の3

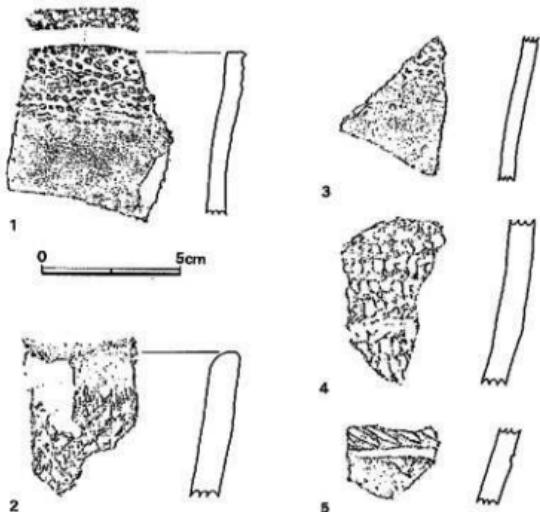
①と同種の土器片あるいは同一個体の土器片かもしれない、図版の上半分には小粒の横円押型文が観察され下半分は無文部となっている。胎土もやはり金雲母が混入されており砂粒も細かく焼成良好で色調は外面が暗褐色、内面は褐色となっている。

④第2図の4

地表にだいぶさらされていたらしく、風化がかなり進んでいる土器片である。やや大きめのLR縞文が施されていて、色調は外面、内面ともに褐色である。

⑤第2図の5

胎土に白っぽい筋物が多数確認できる土器で、文様は、横一本に沈線文がはしり、それに向かって左上方より斜めに沈線文が二本はしつつある。しかしそく観察してみると、この三本の沈線文の断面が斜めである



第2図 佐久市香坂採集の土器 (1:2)

ことと、一本一本が軽く弧を描いていることで貝殻腹縞文の可能性があると思われる。器壁の厚さは6mm～7mmで、色調は外面、内面ともに褐色である。

4 おわりに

日頃コツコツと拾い集めた土器片が、ここに発表できたことについて大変嬉しく思います。記述に関しては、自分の勉強不足の為誤った記述、表現のないように出来るだけ土器片を観察したそのままを記述しました。またこの小稿を作成するにあたり、御多忙中にもかかわらず図版作成、文章について御指導賜りました堤隆氏、那川泰弘氏には深く感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 「西称ふた」 佐久市教育委員会 1987
「縞文土器の知識」 麻生優・白石浩之
「佐久考古通信No.47・48」 佐久考古学会 1989

佐久考古学会 創立20周年を迎える。

昭和45年に発足した当学会も、本年で創立20周年を迎えます。

8月には記念式典を予定中です。いよいよ学会活動を充実させていきましょう。



■ 羽毛田伸博

人間の一生が80年に到達しそうな勢いで伸びている日本列島。地殻が太陽を1周するサイクルを3~4万回繰り返して、やっとたどりついた、その中で人間は何を望み、引き継ぎ、生き残してきたのかな……？

自然に祈りがあった時代から人間の手（知恵）で一つずつ自然に起因する問題を解決し、その手で人間に起因する問題を増やしてきた。考古学の進歩とともに忘れていた過去の社会が徐々に復元されつつあるが、人間の排泄物（文化）を塵に埋もれた標本箱にしまいこんではほしくない。

佐久考古学会 ホップ・ステップ・ジャンプ！

■ 阿部栄四郎

いつも通話を読ませて戴き、ありがとうございます。私はただ通話を読むだけの会員で申し訳ありませんが、私の住む地域（佐久市北部）では、高速道IC着工とともに、遺跡の発掘がさかんです。そこで働くおばさん達は暑くても寒くとも一生懸命やっています。無意識でやっていても何かおもしろいものが出来れば、やはり古代に対する想いが胸をよぎる人もいるでしょう。このおばさん達にもたまにはマイクを向けて、その声を「通信」に載せたらいかがでしょうか。

以上ちょっと気の付いた点を述べました。

■ 浦山徹

「考古学は昨日捨てられた空き箱もその対象にすべきなんです。」昨年4月の遺跡発掘調査報告会（勤労者福祉センター）で丸山先生がこう答えられたこのひとことが耳から離れません。このひとことで前が明るくなるのをおぼえました。と、いう訳で今回入会させていただきましたのでございますが、毎月例会のご案内をいただきながら参加したのは一度だけ。この不勉強さ誠に申し訳ございません。總てが勉強だと思いスタートしたのですが……。

今後よろしくお願い申し上げます。

■ 白田 明

これまで佐久地方の旧石器文化は標高1000m以上の高冷地のみに存するとしてきた。ところが佐久市下茂内からの大量的槍先形尖頭器の出土はこれを一新し、これに続く一万年以上前の祖先の足跡が佐久平にもある可能性が出てきた。

事実650~800mの蓼科山麓や浅間山麓にも木葉形尖頭器または有舌尖頭器（両者を）伴う場合があることがわかつきました。

私は木葉形・有舌尖頭器を伴う文化に大変に興味を持っています。よろしく御教示いただきたく、お願ひいたします次第です。

■ 思い出す人々

由井茂也

佐久考古学会創立以前、佐久地方の考古学的研究活動は、主に教育会や佐久史談会の人達で進められてきました。特筆猛の信濃考古学会会員である岩崎長思、小林尚二、小林好郎、小栗操治は後に佐久史談会顧問会長になる。市川雄一郎、鈴木覚治郎、岩井伝重は郷土史の草分け的指導者である。当時、史談会には、有名無名多岐な顔ぶれがいた。小諸の郷土、姫八の松井、田口の芦内遺跡、小学校の郷土見学などもした。近隣の遺跡から遺物採集で有名な高見沢敏策は変人と評されていた。

黒沢壽一、池田弥平も思い出す人である。

佐々木早苗

去る4月30日の佐久地方遺跡報告会の折に入会いたしました。野尻湖の発掘がしたくてはじめた石器の勉強でしたが、石器そのものよりも人と人とのつながりの広がるのが楽しくて考古学会に入れていただきました。佐久の人間でありながら、佐久のことは知らないでいます。自分ひとりでは何もできませんが、これで機会自分の生まれ育った地のことをいろいろと知ることができます。よろしくお願いします。

■

鳥居亮

こんにちは。今回入会させていただくことになった鳥居です。早いもので私がこの佐久の地に来てから5年余りになります。初めは一ヶ月ぐらいお手伝いさせてもらうということでしたが、まわりの自然のすばらしさと、人の情について長居をしてしまいました。そして今回は佐久考古学会というすばらしい会にも入会させてもらうことができ、大変うれしく思っています。なにぶん勉強不足でみなさまにご迷惑をかけすることと思いますが、ご指導のほどよろしくお願いします。

平松義治

このたび知り合いの方のご紹介で、佐久考古学会に入会させていただきました。考古学については全く門外漢ですが、新聞等で遺跡の発掘の記事があるたび興味を持って読んでいました。諸先輩の皆さんに御指導いただいて、少しでも考古学を理解したいと思いますのでよろしくお願ひします。

先日は中ッ原遺跡の発掘に立会えたことを有難く思っています。私が住んでいる野辺山高原で一万年以上も前に人類が住んでいたことは、驚き以外の何ものでもありません。冬は極寒の地となる当地で、今と全く文化レベルの異なる時代にどのような生活をしていたのかを考えると興味は尽きません。野辺山高原もご多分にもれず、開発が進み次第にその姿を変えようとし

ています。その中で遺跡を発掘し、保存していくことは難しい状況ですが、後世に語り継ぎたいものです。

星野光雄

学生の頃から、考古学には大変興味が有り、よく博物館や遺跡めぐりをしたものです。今回佐久考古学会に入会させて頂き、さっそく暇みては、発掘にも参加させて頂いて居ります。出土する数千年前の祖先が作った石器や土器等を目にするとたゞ、その技術の高さには、私の想像を越える素晴らしい物ばかりでした。これを機会に古代人のロマンスにひとりながら、皆さんから多くのことを、学びたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひ致します。

インフォメーション

INFORMATION

◆ 新入会員の紹介

次の11名の方が私たちの新しい仲間として加わりました。よろしくお願ひします。

碓井 文良	〒384-01 佐久市伴野 2334	☎0267 (63) 0396
小林 邦雄	〒384-02 佐久市小田井 716	☎0267 (68) 1043
佐藤純一郎	〒384-21 北佐久郡浅科村下原 1328-1	☎0267 (58) 2416
上野 知一	〒384-22 北佐久郡望月町協和 2697-2	☎0267 (53) 4193
白田 後保	〒384-22 北佐久郡望月町望月2-2	☎0267 (53) 2033
金井 章志	〒384-22 北佐久郡望月町望月233	☎0267 (53) 4853
佐々木早苗	〒384-04 南佐久郡白田町大奈良 4500	☎0267 (82) 3436
佐々木廣雄	〒384-04 南佐久郡八千穂村畠125	☎0267 (88) 2206
平松 義治	〒384-13 南佐久郡南牧村板橋 949-240	☎0267 (98) 3308
清水 隆寿	〒398 大町市大町8326 昭和電工白馬寮207号	☎0261 (22) 7530
星野 光雄	〒389-01 北佐久郡軽井沢町軽井沢2947-3	☎0267 (46) 1672

学会創立以来、初めて会員数が100名を突破し、103名となりました。

♪ 編集後記 ♪

佐久地方においても、リゾート法の適用などにもよる大型開発により、遺跡破壊も日立ってきました。

そうしたなかで、自治体の埋蔵文化財保護にはおおきな格差がみられます。小さな県などともいえる10人もの専門職員をかかえるS市、しかし一方、町村レヴェルではほとんど専門職員がおらず、埋蔵文化財保護に対応できないのが実情です。かといって高速道以外の埋文調査を、県埋文センターがおこなうことは、近い将来では期待できそうにありません。

市町村に埋文保護の行政対応をきちんと位置付けさせるのも当考古学会の重要な役割なのでは（つつみ）

佐久考古通信 No.51

発行所 佐久考古学会
〒384-11 南佐久郡小海町東島流5047
井出正義 方
郵便振替 長野 7-2842
☎0267 (92) 3171

発行者 由井茂也

編集者 堀 隆

印刷所 ほおづき書籍舎



佐久考古学会
シンボルマーク

★ 目 次 ★

■佐久の遺跡と遺物 ードクター・マンローと佐久の縄文遺跡	大井源寿	1
■『書評』『佐久考古5号 赤い土器を追う』	石川日出志	2
■古代家族と集落に関する・のとと	堤 隆	4
■佐久考古学会創立20周年記念式典報告	竹原 学	8
■先史時代の抜掘 一佐久市・立科F遺跡の発見	須藤隆司	9
■私の「古代」との出会い	森川宗治	10
■発掘史に例のない構造	由井茂也	11
■土偶のつぶやき 一会员の身近なたより	各会員	11
■1990年度佐久考古学会総会報告	事務局	12
■インフォメーション	事務局	12

佐久の遺跡と遺物 パート2

ードクター・マンローと佐久の縄文遺跡

一の目にとまつたらしい。筆者が幼い頃、我が家にある宮平の遺物を見学に来たマンローさんが、耳飾りを見て寄贈を懇願したという逸話を父から聞いている。



マンローは、1905年茂沢南石堂遺跡を調査、1912年には宮平・茂沢南石堂の両遺跡を調査を実施している。そうした佐久の遺跡との深い関わりもあってか、1923年（大正12年）には軽井沢サナトリウムの院長となつて赴任した。折しも南佐久教育会の主催の八幡一郎氏による南佐久郡の考古学的調査が実施された頃である。マンロー自身も北佐久教育会の求めに応じて1930年（昭和5年）再び宮平遺跡の調査を実施している。



著名なアイヌ研究家で、岩宿発見の44年も以前に日本旧石器時代の存在を説き、「ブレヒストリックジャパン」の著者でもあるマンローと佐久の縄文時代遺跡調査を概観してみた。



N.G.マンロー博士
(昭和15年 軽井沢にて)



NGマンロー（1863～1942）は、イギリスエジンバラ大学を卒業した頃、「原人発掘」という考古学・人類学上の鑑みをインドや東南アジアに向けて抱いていたらしい。そうしたこともあり、1893年に横浜のセナラルホスピタルに院長として招かれたことが、東洋への旅立ちのきっかけとなった。それよりおよそ30年間は京浜地帯において、主に外国人の治療に専念した。

1900年頃より、マンローは日本考古学に強い関心を示し始めるが、折しも1904年（明治37年）、佐々木朝次郎によって宮平縄文遺跡（現御代田町）の発掘調査がなされた頃であった。

●
縄文土器の中・後期の優品を多く出土する遺跡は北佐久では、湯川水系の標高900m地帯に集中している。軽井沢の茂沢南石堂遺跡や御代田の宮平遺跡である。こうした遺跡が、軽井沢に避暑に来たドクター・マンロー

〈書評〉

『佐久考古6号 赤い土器を追う』

—佐久地方の弥生時代遺跡総覧そして地域研究—

石川日出志

「弥生時代後期の赤く塗装された美しい土器を土の中から掘り出した瞬間の感動は、誰もが忘れ得ぬ発掘調査の思い出として残っているであろう。」

(三石延雄 p.194)

「佐久平を覆い尽くすように出土するこの不思議な美しさをもつ赤い土器は、佐久平に住む我々にとって、それが自分たちのものであり、あたかも佐久の歴史の原点であるかのような親しみをおぼえる。」

(井出正義 あとがき)

I. 赤い土器・熱い意欲

佐久考古学会の研究活動として「赤い土器を追う」の出版計画が決定されたのは12年前にさかのばるという。このテーマが選ばれた理由については、上に掲げたお二人の言葉に尽きるように思われる。自らの地域への優しく、かつ熱いまなざしが「赤い土器」ととおして伝わってくる。

本書は、箱清水式土器と呼ばれる千曲川流域に展開した弥生時代後期の土器型式一本書では佐久地方を取り上げる一冊、それを生み出した当時の人々の姿を探り出そうという試みである。全国各地に考古学の研究会があり、それぞれに地域に根ざした研究活動を進めよう努めているが、実のところなかなか難しい。遺跡の見学会、地元に保管されている資料の再検討、あるいは日頃の研究成果の発表などを行なうにしても、各々の関心は一様ではないために、日頃の活動の成果を発表する場として雑誌を発行してもモザイク的な内容になりがちである。「赤い土器」のように、一つの課題を設定して研究会が一致協力して共同研究を進め、着実な成果をあげている例は驚くほどに少ない。共同研究の必要性は認識されながらも現実にはむしろ困難の方がはるかに多い。本書も刊行までに若干の迂回曲折のあったことが度々述べられているが、何よりも共同研究の完成は賞賛されるべきことと思う。また、考古学的な調査研究を業とする人だけでなく、これをライフワークとする人々が多い共同研究という点でも意義深いものであろう。

こうして成了った本書は、佐久地方の弥生時代遺跡総覧及びその研究、そして地域研究の実践例として重要

と考える。

2. 自然環境と弥生時代遺跡

本書を手にして、はっとさせられるのはその副題「日本最高地点の弥生文化」である。これまで水稻耕作を中心とする生業とする弥生時代文化を考えるとき、稲の耐寒性的の観点から、弥生文化の東方ないし北方への広がりを問題とすることはあったが、その垂直分布を正面に据えたことはなかったように思う。佐久地方は、「おそらく日本列島に展開された弥生文化の中では最も標高の高い寒冷地に繁栄した稻作農耕文化的部類に属」(小山岳夫 p.9)し、弥生時代遺跡の分布は、現在の稻作限界である標高720m内外を境に明瞭な違いをみせるという。標高720mという数字 자체は、弥生時代遺跡が最も集中する佐久市付近の沖積低地の周間に広がる丘陵・台地地形の標高に相当するもので、絶対的な意味をもつものではないが、この緯度での稻作の垂直限界に近い数字であることには違いなかろう。しかし、稻作限界ぎりぎりの地域に展開した弥生時代社会であるなら、遺跡や稻作がどのような自然地形・土地条件の中で形成され、実施されたのかをもっと追求して欲しかったように思う。土地条件図・地籍図・土地改良に伴う図などの各種地図類やポーリング等の地質・土壤データ、土地改良以前の民俗記録・伝承及び現地調査をもとに旧地形やかつての土地条件を復元して、遺跡立地との対応を考えることなどは、その地域にあってのみ可能であるし、またきわめて貴重な成果が得られるように思われる。

また弥生時代遺跡と地形との関わりでは、千曲川沿いの低地部とその周辺に大きな遺跡が集中するのに対して、標高の高い南佐久郡内では磨製石器や土器片を少量出土するのみの小遺跡に限られ、後者は狩猟・採集に重きを置いた遺跡であろうという指摘(鳥田恵子 pp.192-4)が重要であろう。一昔前は弥生時代遺跡=稻作遺跡と考える傾向があったが、弥生時代遺跡といえどもその土地条件に則した活動がそこに繰広げられたのであって、多彩な生業活動が実施されていたはずである。巻末の弥生時代遺跡分布図をみると、実際に多様な地形のなかに遺跡が形成されてことにあらためて驚かされる。

3. 土器研究

本書では、「赤い土器を追う」という研究課題からして当然のことながら、土器それ自体の研究が大きなウェイトを占めている。なかでも土器の型式学的研究(小山岳夫 pp.111-144)が圧巻である。近年の佐久市による調査で出土した膨大な資料群をもとに、佐久地方の弥生時代中期後半から古墳時代初めに至る土器の特徴

その変化を明確に論述する。そして弥生時代後期について、從來清水式土器という土器型式で千曲川流域の土器を全て理解してきた考え方を廃し、代わって小地域ごとの特色を重視し、その結果佐久地方の弥生時代後期社会の動きをダイナミックに描いている。

まず、中期後半を3段階、後期を前半・後半に2分しさらにそれぞれ3・2段階に細分する。そしてこの編年をもとに、赤い土器について、「土器を赤く装飾する傾向は中期後半から始まる。赤い装飾は、当初は盛り付け用の器・鉢、少し遅れて小形の高杯を中心として行なわれたが、弥生社会の発展・成熟に伴い徐々に壺・深鉢など貯蔵用の器も飾られるようになり、後期前半新相・後半古相で赤い装飾の最盛期を迎える。日常の器を赤くすることにどんな意図を込めていたのか分からぬが、これらの土器が千曲川流域の弥生社会のまとまりを示す象徴的な存在であったことはたしかであろう」(p.139)と結論付ける。この点については異論をさし挟む余地はなく小山氏の独創場である。

ついで、特に後期後半古相に千曲川の右岸と左岸とで著しい地域差がみられることを重視している。左岸では同時期の善光寺平と共通の特色をもつ土器が展開するのに対して、右岸地域では、壺のいちじく形の形態と籠矢羽根状の文様、および壺の斜走文など在地の前代の土器の特徴をよく残存した土器が用いられているとし、この現象を、千曲川右岸地域では「独自性の強い、外にあまり影響を受けない封鎖的な文化圏が形成され」、一方左岸地域は「絶大な生産力を背景に優位性を誇った善光寺平」と連動した「右岸とは対照的な開放的で外に対しても影響力の強い文化圏」が存在したと理解する(p.146)。さらに左岸の後沢遺跡を善光寺平勢力の「植民地」とみる見解を支持している。しかし、はたして土器の分布図をこのように政治的動向に直結させるたることは適切であろうか。確かに土器のみならず炉の構造の違いなどから、個性的な文化内容をもつ地域が存在したとまでは言い得るであろう。しかしそれを政治的動向と結び付けて説明するにはなお少なからぬ手続きが必要なのではないか。小山氏の論考には、こうした手続きが不十分のために、考古資料を分析する以前の先駆的な見解に、考古学的現象を当てはめてしまっているくらいがある。しかも、その先駆的な見解が、古墳文化・農業文化=優位/弥生文化・在地性=停滞的という構図に運動しているかにみえるのはいかがなものであろうか。弥生/古墳移行期はダイナミックに日本列島の社会が躍動する段階である。それだけに考古資料の解釈には入念さが要求されるよう思う。

このほか土器研究として、赤い土器の製作技術とその製作実験を論じた論考が収録されている。特に竹原

学氏の土器製作技術の復元研究は興味深く見えた。赤い土器に特有の窓側部の崩曲一算盤玉形一が、粘土紐を積み上げて成形する過程で、この部分で一旦作業を中断して若干乾燥させて窓下部の強度を高めてから窓上部に粘土紐を積み上げるという「断続積み上げ」技法によっている。また、弥生時代中期後半にも千曲川流域に存在することを確認して、こうした成形技法の発達が赤い土器特有の形態を可能としたと指摘している。また赤色塗彩の方法について、土器の詳しい観察から「赤色塗彩一本部上半の箇磨き一本部下半の箇磨き」の手順で実施されていることを指摘している。土器研究を進めるとき、とかく文様・整形（器面調整）・形態の表面的な特徴の追及に流れがちであるが、このように土器の製作技術に着目することは、表面的な観察だけでは不十分な土器の型式や系統の理解に大きな威力を發揮すると期待される。

4. 炉と土器棺

土器のみならず、地域文化の理解に向かおうという企図のもとに、住居や墓地の研究も展開されている。助川朋広氏による炉の研究では、弥生時代にあっては地面を掘り窓めただけの特別の構造を持たぬ地床が一般的ななかにあって、千曲川流域では縁石を持つ炉・埋葬炉・土器敷炉などの構造をもつ实例が多く、しかも佐久地方では土器に在地の伝統が色濃いとされる千曲川右岸地域にその比率が高いとの重要な指摘をし、それが天竜川流域にも共通して認められる現象であることから、相互交流の活発さを看取っている。住居構造とどのように関係しているのか興味あるところであり、今後の研究を期待したいと思う。墓については佐久地方の弥生時代には多様な実例があって興味は尽きないが、本書では青木一氏が後期の土器棺を取り上げ、棺本体が壺のものと壺のものとでは墓地内での位置や相伴遺物に差異があるらしいという興味深い指摘がなされている。

5. 批評

ともかく、今まで判明している当地方の弥生時代文化の全容を知るには、本書をおいて他にないと思う。本書の主題は地域的特色の追及であろうが、その地域的特色とはその地域にのみ存在するものだけでなく、他地域・周辺地域と共通するものをも含んでいると思う。前者は概ね目的が達せられているが、後者についてはやや物足りなさを感じる。なお、各遺跡の記事ごとに逐次文献を掲示する、目次に各遺跡名を記す、解説的・解説的な図表を盛り込む、遺構図をもっと多く掲載するなどの便宜を我々読者に提供願えたらより有意義だったろうと思う。

古代家族と集落に関する のおと

— 文献史学の成果と課題に学ぶ —

堤 隆

(1) はじめに

古代家族の実態は、というとすぐに思い起こされるのは山上憶良の「貧窮問答歌」である。これは高校の教科書にも奈良時代の農民の貧しい暮らしぶりの典型として必ず紹介されている。「潰れたような、倒れかかったりおりの内に、地面にヒカニ藁を解き散らいて、父母は頭のほうに妻子は足のほうに自分を囲んでいて、悲しみに嘆息し、カマドには火の氣を立てることもなく、顔にはいつかクモの巣がかかる、飯を炊くことも忘れて、ぬえ鳥のように呻き声ばかり出していると、これまた特別に短い反物の一層端を切るというようにむちを持った里長の声が寂寥の戸口まで来ては叫んでいる」。ここからは、父母と妻子と暮らす夫という家族のあり方が想像できるが、そもそも親夫婦と子夫婦が暮らすことはありえなかったと吉田孝は指摘する(吉田 1988)。また、憶良のこの詩には唐の詩歌(陶淵明や王梵志の詩など)の模倣部分が多分に見いだせ、創作上の産物であるといふ。

では、古代家族や集落の実態とはどうだったのか、無論我々は考古学的なアプローチによってその構造の一侧面に迫ろうとするものであるが、やはり看過できないのが文献史学的アプローチによるその認識である。



伏盧・憶良が赴任したころの筑前国(福岡県)の竪穴住居は、10~20m²か、10m²以下のものが多かった。しかし、庶民生活の実態が歌のとおりであったとは断定できない。

第1図 貧窮問答歌での暮らしぶり (吉田 1988) より

第1表 郷・里制施行の推移

701年	里制施行期 ↓	国	郡	里	一	戸	一
715年							
739・740年	郷里制施行期 ↓	国	郡	郷	里	戸	戸戸
	郷制施行期 ↓	国	郡	郷	一	戸	一

しかし、もとより筆者は文献史学についての素養があるわけではないが、ここで文献史学の古代村落史観や家族論を眺め、そこから抽出されている問題点を整理しておきたいとおもう。ただ、ここで「おと」としたのは、果たして的を得た整理ができるのかということもあり、多少の気楽さをもって概観する意味を込めている。

(2) 行政的区分と村落

中国律令にならって導入された日本律令における行政的区分は、大宝律令(701)においてはそれまでの評(こおり)が郡に改められ、国-郡-里からなる里制がしかれ、五十戸=一里・二里以上二十里以下が一郡・数郡をもって一国とされた。郷里制(715)施行に伴い、前述の里は郷と改められ、そのまま2~3の里(以下郷里制下の里には停点を打つ)が置かれ、統いて戸、さらには戸を2~3に分割する戸戸が置かれた。しかし、郷里制における里および戸戸は四半世紀しか通用されず、740年頃からは郡-郷-戸という郷制のみが残されている(第1表)。

さて、こうした行政的区分と実在した村落との照合作業が幾つかなされているが、このうちの里が自然村落には対応するのではないかという説が清水三男によってだされている(清水 1941)。これについての反論は岸俊男によってなされており、里は郷を機械的に分割(多くは三分割)したもので自然村落には対応しないとされる。(岸 1951)。

また、このような行政的区分とは別に、明らかに「村」とよばれるまとまりが存在したことが風土記等にみえる。吉田孝はこの「村」が人々のひとつの有意な領域を示すものとし、また「村」は、特定の里(郷)に属さなかつたり、複数の里(郷)にまたがって存在していた可能性があることを示唆しており、里(郷)はあくまで人的単位

第2表 大鳴郷における戸の概要

大鳴郷	戸数	戸口数	戸口数
甲和里	17	44	454人
柳村里	16	44	367人
鳴保里	17	17	370人
計	50	130	1191人

第4表 大鳴郷・戸の戸口数とその例数

戸口数	例 数	66
15人以上	8	
13~14人	4	
12人	7	
11人	3	
10人	3	
12人	25	
9人	7	
8人	5	
7~5人	20	
4人以下	9	

(文献6より)

の行政区画で可視的な領域をもたないとする。そして「村」を包摂する郡こそがもっとも基礎的な領域であったとしている(吉田 1976)。

さて、こうした行政的把握のなかで、今日までも最も問題視されており、結論をみていいのは戸についての実態が擬制かである。これについては次にやや詳しくみてみることにする。

(3) 戸籍・計帳の検討による戸の認識

ことさら述べるまでもないが、戸籍は公民への班田受取の氏姓確定のための6年毎の台帳、計帳は調・庸賦課のための年毎の台帳である。正倉院に伝えられるこの古帳が、当時の公民のあり方をどのように伝えるかが文献史学上の大きな問題点となってきた。

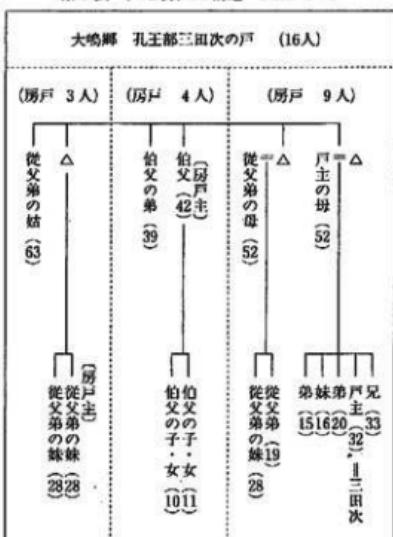
さて、ここでその古代籍帳における戸の戸口数の一部をみておくことにしよう。まず、第2表に示したのは下総国大鳴郷の戸籍(郷里制施行期、養老5年=721年)の戸の概要、第3表に示したのは下総国大鳴郷戸籍・美濃国半布里戸籍(里制施行期、大宝2年=702年)・筑前国川辺里戸籍(里制施行期、大宝2年=702年)の一部の戸の戸口数である。その範囲は、下総国大鳴郷で4~42名、美濃国半布里で12~44名、筑前国川辺里では5~124名にわたっている。戸は平均25人の戸口数からなる大家族と一般的に記載されるが、改めてそのばらつきが多いことがわかる。さらに大鳴郷の戸の戸口数分布をみてみると(第4表)、15名以上から4名以下までやはりばらついていることがわかる。

第3表 各里・郷の戸と戸口数

下総国	大鳴郷	美濃国	半布里	美濃国	半布里	筑前国	川辺里
戸主名	A	戸主名	A	戸主名	A	戸主名	A
孔王部長	42	県主族 郡野	18	秦人 身麻呂	15	肥君 猪手	124
# 猪	35	# 津見利	23	# 山	22	ト部 首半	5
# 鹿馬	30	# 比都自	30	# 小町	14	大家部 塚手	14
# 莊人	27	# 安麻呂	12	# 堅石	11	萬野部 匂	22
# 佐留	27	# 与津	28	# 安麻呂	36	# 色夫	11
# 比都良	26	# 安倍	27	# 和田	14	物部 麻呂	13
# 黒泰	25	# 長安	32	# 桑手	23	# 牧夫	27
# 猪	20	# 身津	26	人	人	建部 牧夫	19
# 弥等	20	# 稲寸	24				人
# 徳麻呂	16	県造 吉事	44				
# 三田次	16	# 紫	32				
# 三村	12	県主 万得	21				
# 国麻呂	11	人					
# 古富尼	4	人					

Aは戸口数を示す。

第5表 戸と戸戸の構造(文献6より)



△=死亡または戸内にみえない戸口(男)

ちなみに大鳴郷孔王部三田次の16戸の戸をみると(第5表)、3名・4名・9名の戸戸からなっていることがわかる。

しかしこの戸が、そのまま当時の家族の実態をあらわしているのか([戸実態説])、あるいは政府の法制的な人民掌握のための擬制的なものであるのか([戸擬制

説)の論争はいまなお繼續されている。なお、主に10人未満の構成員からなる戸戸こそが実生活の単位であるという見方もある(戸田 1962)。

1 「戸実態説」

実態説は、石母田正(石母田 1942)・藤田生大(藤間 1946)・門脇祐二(門脇 1960)、近年では吉田晶(吉田 1980)によって展開されている。実態説によるならば、籍帳にみる大家族はそのまま実態として存在しており、門脇・吉田らはこの大家族を家父長的世帯共同体として評価するのである。この説の背景には社会構成論があり、エンゲルスが「家族・私有財産および国家の起源」において提唱した、氏族→家父長的世帯共同体→単婚家族という、いわば未開から文明、原始共産社会→国家という歴史的発展の序列の中において、日本の古代集落の社会構成史的特質を正しく理解しようとする姿勢があった。

2 「戸擬制説」

一方、擬制説は、岸俊男らによって提出されている。すなわち律令制における50戸=一里制の施行にあたっては、様々な世帯数の集落を50戸に統合するために、その小単位である郷戸についてはおのずと機械的な人の区分を取らざるを得ず、よって籍帳にみる大家族は実態を反映せず、法的擬制的な側面が色濃いというものである(岸 1951)。

3 両説の止場的検討

この両説の止場をはかろうともしたいわば中間的な見解が安良城盛昭によってなされている(安良城 1969)。安良城は吉田晶が論評するように(吉田 1980)「精緻の史料的性質は、人民に対する國家の収奪台帳であるところにあり、律令的収奪が課丁を対象とするため、課丁數を一定化するという政策的意図による編戸が行われること、同時にその編戸が、行政上の単位として意味を持つうるためには、農民の家族的結合をそのなかに反映しなければならなかった」という見解を示した。

(4) 古代家族論

次にここで、実態説・擬制説の争点のひとつをも含んだ家族論における諸説をみておくことにしよう。

1 父系合同家族説

まず、実態説によるなら、戸における大家族は家父長的世帯共同体、すなわち父系合同家族の存在を示しているということとなろう。戸主を中心としてのその妻・子・いとこ・甥・姪・さらには寄子・奴隸を含む大家族が実際にあったということになろう。

2 父系家族説

一方、擬制説では、実態説による大家族制を背負しないものの、籍帳分析を基礎においている点において

は父系家族説、つまりは父系小家族説をとることになる。

3 母系家族説

籍帳分析を基礎において前者の父系家族説に対し、「記紀・万葉集からの家族復元を從、十世紀以降の文学作品・貴族の日記等から前代の家族を復元する方法を主」として(関口 1984)、母系家族説を展開したのは、女性史研究家でもある高群透枝で、その著作『招婿婚の研究』のなかにおいてであった(高群 1953)。その後、高群の研究についての評価あるいは批判そして無視があるなかで、高群の母系家族説の批判的継承を進めるのは関口裕子である(関口、前掲)。まず、関口が母系家族説の立場から述べる籍帳の指摘については、「母系的紐帯により結ばれ妻方居住婚を一属性とする当時の家族を、国家支配進行のための民衆把握の組織として父系的に再編成したもの」であるとする。そして、当時の家族の実態とは、母系的紐帯により結合するもので、「はじめからの夫婦家族と、母系合同ないし直系家族を経た夫婦家族の併存と結論され、さらにこの夫婦家族は娘たちが結婚すると母系合同ないし直系家族に成長するというサイクルをくり返す」ものとしている。

むろん、当説においては当該期の家父長的世帯共同体は未成立で、その成立は11世紀中葉以降であるといふ。

4 双系家族説

吉田孝らによって主張されている双系家族説は、夫婦と子供(末裔)からなる小家族で、父系母系のいずれにも規制されない双系的家族であるとするもので、その家族が重層的な集団を構成し、そのままでいとは流動的・可塑的なものであったとしている(吉田 1983)。また、双系家族説においては、古代一般において家父長的世帯共同体は未成立という認識となろう。

(5) 婚姻形態と居住制

婚姻形態と居住制については、先に述べた古代家族の諸学説毎によって当然認識が異なっている。婚姻形態は原理的には集団婚・対偶婚・一夫多妻婚・一妻多夫婚・単婚が想定され(実際には存在しない形態がある)、居住制は夫方別居・夫方居住・妻方居住・新居居住の三者が基本的にあることを述べておく。

まず、父系合同家族説・父系家族説の認識する婚姻形態は、単級もしくは一夫多妻婚(正妻と妾)であり、婚姻居住制は基本的には夫方居住ということになる。

母系家族説をとる関口裕子は、婚姻形態を対偶婚、婚姻居住制は基本的には主に妻方居住を経た新居居住と当初からの新居居住の併存という認識をとる。また、夫方居住は特定条件下でみられるもので、(今昔物語等にみる、同居同火の禁忌から)妻は夫の親との同居を

なさないものであったとしている(関口 前掲)。

双系家族説をとる吉田孝は、夫婦関係の固定しない対偶婚的な婚姻形態を想定し、また居住制は、男の訪問を経た新居居住という見解をみせ、夫方・妻方双方の居住制があったとする(吉田 前掲)。また、同居同火の禁忌から、親夫婦と息子夫婦が同居をなさないとする認識は前説と同様である。

(6) おわりに

さて、以上雑駁な概観をしたが、その限りにおいて、古代村落史論における行政的区分と実集落との対応関係、戸籍もみの郷戸の実態・擬制の問題、そして古代家族論、婚姻形態と居住制、そのいずれについても決着をみていないのが古代史学の研究の現状であることが理解されたかとおもう。

そうした意味においては、むしろ我々のまえに実態として顕現する考古学上の集落から、この論争解決への糸口を見いだすことができないかが切望されることになる。とはいっても、現段階においては、集落を構成したであろう遺構群のみをもって解釈する考古学的な認識においては、こうした家族実態や婚姻形態・婚姻居住制を読み取ることが極めて困難であることを改めて痛感させられるのである。したがって、考古学においてはこうした実態を読み取るための方法論的展望が強く求められようし、また古代史学と考古学とのアツフヘーベンが実態解明の鍵となり得よう。

引用参考文献

筆者お、()内には今後参考とされる方のために若干の紹介を入れた。★は入手可能な文献である。

- 1 明石一紀 1990 「日本古代の親族構造」 吉川弘文館 ★4900円
(昨年刊行されたもので、社会人類学的な成果をもとに家族論を展開している)
- 2 安良城盛昭 1969 「班田農民の存在形態と古代籍帳の分析方法」(『歴史学研究』345)
(戸実態説と戸擬制説の止境の検討論文)
- 3 石母田正 1942 「古代家族の形成過程」(『社会経済史学』12-6)
(戸実態説の代表的論文)
- 4 石母田正 1971 「日本の古代国家」 岩波書店 ★2500円
(日本の古代国家論の代表的著作)
- 5 エンゲルス(戸原四郎訳) 1965 「家族・私有財産および国家の起源」 岩波書店 ★岩波文庫版 500円
(モーガン「古代社会」の研究成果に照應した史

的唯物論・マルクス主義的家族國家論、いや多古を要さない古典的傑作)

- 6 門脇清二 1960 「日本古代共同体の研究」 東大出版会 ★2800円
(戸実態説に基づく籍帳分析による古代共同体の研究)
- 7 岸俊男 1951 「古代籍帳の研究」 塚書房 ★5500円
(古代籍帳の研究の基礎的論考)
- 8 鬼頭清明 1985 「古代の村」 岩波書店 ★2200円
(誰もを古代の村へと誘う親しみ易い書)
- 9 鬼頭清明 1980 「律令国家と農民」 塚書房 ★1700円
(律令国家による農民支配の特質を論考)
- 10 清水三男 1941 「日本中世の村落」 日本評論社 (里の自然村との対応説を含む)
- 11 杉本一樹 1987 「戸籍制度と家族」(『ウエイエ』日本の古代11) 中央公論社 ★2200円
(分かり易く戸籍制度と家族を説明)
- 12 関口裕子 1984 「古代家族と婚姻形態」(『講座日本歴史』古代2) 東大出版会 ★1500円
(高群説の批判的繼承の立場にある関口の古代家族と婚姻形態についての論説整理)
- 13 高群逸枝 1953 「招婚婚の研究」 講談社 (古代母系家族制を論じた代表的著作)
- 14 藤間生大 1946 「日本古代国家」 伊藤書店 (戸実態説の代表的論文)
- 15 戸田貞三 1962 「古代住居と家族の大きさ」(『社会科学評論』創刊号)
- 16 吉田晶 1980 「日本古代村落史序説」 塚書房 ★2000円
(古代村落の研究史を整理し問題の抽出、戸実態説の立場)
- 17 吉田孝 1983 「律令国家と古代の社会」 岩波書店 ★4500円
(古代の国家・社会の歴史を人類史的な視野でとらえる)
- 18 吉田孝 1976 「律令制と村落」(『岩波講座日本歴史3』古代3) 岩波書店
(双系的社会論の展開)
- 19 吉田孝 1988 「大系日本の歴史」3 小学館 ★1800円
(『律令国家と古代の社会』での研究成果を分かり易く書き下す)

筆者お、基礎的な文献のなかでも取り上げられなかつたものもあるがご容赦いただきたい。

佐久考古学会創立20周年記念式典報告

竹原 学

昨年8月11日、佐久考古学会創立20周年記念式典が佐久市岩村田の浅間会館にて開催された。当日は暑い日にもかかわらず会員、会員外多数の参加があり、遠方からの出席者も見られた。また側はお詫び書籍、奈良国立文化財研究所工楽普通、平泉町教育委員会本沢真輔、森嶋稔、佐久市教育長大井季夫氏ら日頃当学会がお世話になっている方々が来賓として招かれた。

プログラムは3部に分かれ、第1部では記念式典として林幸彦会員より学会20年のあゆみ、高村博文会員から待望の佐久考古6号『赤い土器を追う』の披露等

の発表があった。また来賓の森嶋稔氏、大井季夫氏よりは祝辞をいただいた。

第2部は記念講演として、工楽普通氏より「赤彩文の広がり」と題してお話をいただいた。氏の長年にわたる弥生土器赤彩文、赤色塗彩の研究成果についての解説は大変理解しやすく、興味の引かれるものであった。また佐久地方の赤い土器の赤色塗彩にも多く触れられ、出席者一同、興味深く聞き入っていた。

第3部は会場をかつて移し、盛大に祝宴が催され、式典の幕を閉じた。

▶式典参集者



▶由井会長あいさつ

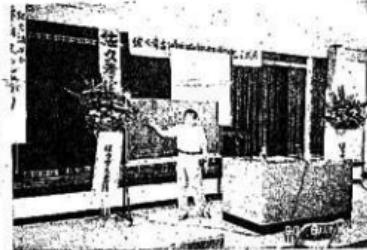


▶会場風景



▶思い出の写真の展示

▶工業先生の記念講演



先史時代の拡張

— 佐久市・立科F遺跡の発見 —

須藤 隆司

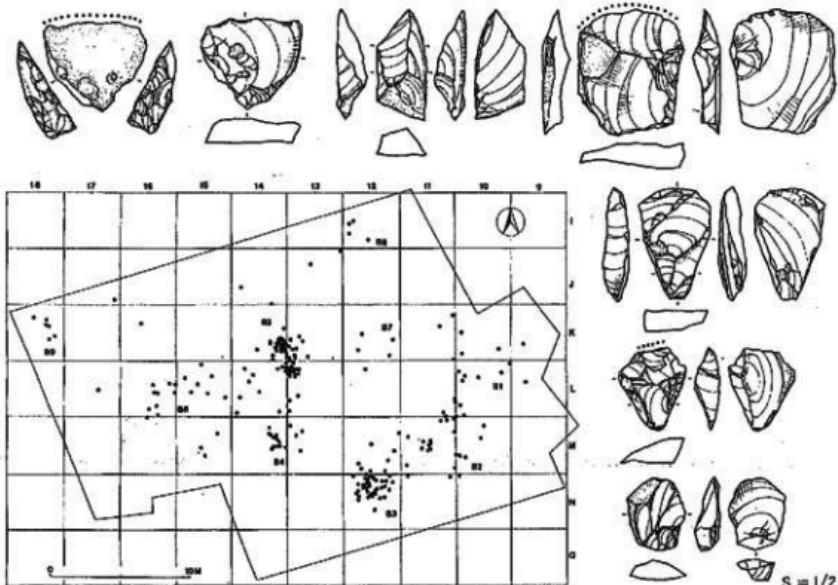
立科F遺跡は、佐久市大字前山字立科に所在する。蓼科山より佐久盆地に延びる標高970mの山麓平坦面に立地している遺跡である。

この遺跡は、山林部にあったため従来の分布調査では確認されていなかった。ところが昨年、この地に別荘開発が計画され、それを契機に調査を行ったところ、予想をはるかに超えた貴重な遺跡が発見された。その貴重な遺跡とは、旧石器時代の遺跡であり、今から約3万年前といった悠久の古さをもつ、佐久地方最古の遺跡であった。

約800m²の範囲を調査した結果、211点の黒曜石を主体とした石器群が発見された。石器群が発見された地層は、地表より約1.5mの深さで、火山灰が厚く降り積った地層であった。そして、その地層は、22000年前に降った始良・丹沢バムスより下の地層であった。さら

に、発見された黒曜石を理化学的な方法で分析したところ、和田崎にある星ヶ塔を産地とするもので、その黒曜石が人々によって打ち割られた年代は、推定 31200 ± 900 年前であるという結果が得られた。つまり、3万年前後時代に、和田崎で採取した黒曜石を携えた人々が、佐久の地に訪れ生活を営んでいた現実のすがたを、立科F遺跡として発見できたのである。

その生活の場は、石器を製作・使用した場と考えられる九つのブロック(石器が集中して発見された場所)からなり、それぞれのブロックでは、同じ原石が利用されていた。つまり、同じ原石を分け合って石器を作り、石器を分け合って使用した人々の活動が、九つのブロックとして残されていたのである。そこで、それらにイエを想定すると、ブロック7を広場の中心とする、環状にめぐらすイエが立ち並んでいたムラを復原することができる。ところで、立科F遺跡で発見された石器には、この遺跡で製作されたとは考えられない石器があった。また、それとは逆に、この遺跡で製作されたはずの石器が残されていなかった。つまり、このムラを残した人々は、石器を携えて別のムラからこの地に訪れ、再び別の地に立ち去ったと考えられるのである。こうした移動生活を営んでいた人々が使用していた狩猟の道具は、ナイフ形石器の歴史古い形態の一つである薪塙系ナイフ形石器であった。



第1図 立科F遺跡の環状のムラと薪塙系ナイフ形石器

私の「古代」との出会い

森川宗治

8月ごろ、テレビで、野性のチンパンジーが、石で木の実を割って食べているのを見て、その不器用でなんとなく、ユーモラスな姿に、いまに自分（？）の手（？）をたたきはしないかと、ハラハラして見ていきました。そして、私自身の子供の頃の、もう、すでにセピア色の記憶の中から鮮明に思い出したことがあります。

それは、6～7才のある日、家の中で見つけた、手頃な石でクルミを割って食べ、祖父にしかられたことがあります。

私が、手頃な石だと思ったのは、淡緑色でズッシリと重く、先のとがったものでしたが、それは、祖父が大切にしていたもので、そのとき、これは、「大昔の人を作った石の道具だ」ということを教えられ、子供心にもなぜか、その石が神秘的なものに見えました。

その後、その石のことは、忘れるともなく忘れていましたが、それが縄文時代の石斧だと分かったのは、ずっとあとのことでした。

そして、今、その石が私の「古代」との最初の出合であったことを懐かしく思っています。

その後、10数年が過ぎ、社会人となって間もないころ、群馬県で、縄文時代以前の石器が発見され、その発見が、日本歴史を書きかえるほどの、画期的なものであることを知り、「そんな、背から人が住んでいたのか」と感動したことがあります。

また、その3～4年後、諫訪市茶臼山の工事現場から、やはり、縄文時代以前の石器が発見されたとき、近くに住んでいたことや、持ち前の好奇心から現場を見にいき、「いったい、この日本列島には、いつ頃から人が住んでいたのだろうか」と思ったことがあります。

そんな思いが、未知なる古代へのあこがれとして、私の意識の中に潜伏したのでしょうか。

その後、そのあこがれも趣味といえるほど、熟さなかったものの、なんとなく、人類の誕生展や、考古学の会場へ足を運んで「古代」と出会い、また、旅行先のつづりに古本屋から「古代」を発見（？）し、地図の歴史45～6億年の中で、人類が、ほぼ400万年という、気の遠くなるような時間を経て、現代人が誕生したことなどを認識し、何か、言ひようのない、感動を覚えたことがあります。

そして、なん年かが過ぎ10年ほど前から、宮城県からも石器が発見され始め、その年代が4万年前、5万年前と、発見のたび古代へさかのぼり、ついに7～8年前、ほぼ20万年前の年代と推定される石器が発見され、この日本にも、ヨーロッパや中国の旧石器時代に相当する時代のあったことを知り、「ツイニヤッタカ」と感動し、「日本人」の発見も、そう遠くないのではと思っています。

子供の頃、祖父の石の「古代」と出会い以来、ほぼ半世紀が過ぎ、私自身にも退職という節目があり、再就職までの静養中（現役中左足の手術）、ひょんなことから遺跡の発掘に人夫として働くうち、いつの間にかその魅力にとりつかれ、4年目の秋を迎えてしました。

この間、奈良、平安、中世（城址）の歴史を掘り、住居址やカマド、また、土器の一片にまで感動の連続でした。

そして、今、縄文の遺跡（御代田町川原田）を掘りながら、50数軒にも及ぶ住居址群に、まさに縄文ムラを思い、幾何模様を思わずような住居址の切り合い（前期の方形、中期の四形）に長かった縄文時代の変遷を忍び、30数個もの焼町土器や、1万2～3千年前の有舌尖頭器の芸術的な美しさに感動し、また、直径約2cmの糸巻き型の耳飾り（耳たびに穴をあけ、さし込む、ピアス）に、「こんな大きな穴を、耳たぶにあけるとき、さぞ、痛かったんだろう」と、その忍耐と努力に妙な感心をするなど、古代の人々に思いを馳せ、想像を刺激され、ロマンをかきたてられている、きょう、この頃です。

第2回 公開セミナー「紀元三世紀佐久地方に何がおこったか」開催される。

去る10月28日、信州短期大学学園祭にあわせて、佐久考古学会古代史公開セミナー「紀元三世紀佐久地方に何がおこったか」が開催された。講師は小山岳夫氏である。信州短期大学校地内においてかつて発掘調査のなされた北西ノ久保遺跡のスライドや実際の遺物が提示されながら、興味深い講座の開催となった。

発掘史に例のない溝掘り

由井茂也

横尾遺跡は、信州岬に近い横尾山にあった。住居址は、横尾山に向かう尾根の斜面で、登り道に面していた。東面する尾根を背後に広大な斜面を見下す場所であった。

時は八月の真夏日、山上では急変する夕立の多い季節であった。

きれいに掘り上げられた住居址の手前に、道路に沿って周溝のような深い溝が一本掘られた。計画にもなく、意味もわからぬ深い溝である。もし私がやつたのになれば、若い発掘主任や研究者たちが黙っていなかつただろうと思った。

その日の午後、すごい雷鳴と強い夕立で、テントの中にみんなで休んでいると物凄い地響きと、怒濤の音。びっくりして、テントを飛び出してみると、かま首を立てた大蛇のような大木が遺跡めがけて急襲してきた。

大変だ。みんな雨の中を、スコップを持って立ち向かうのだが、洪水の勢いは人間も車も押し流すような勢いだった。

その一瞬、大蛇の鎌首を、さきに私の掘った溝の中に切り落とした。洪水は清いっぽい流れながら踊り下った。みんな一生懸命住居址の廻りに土堤を張って泥水の浸入を防いだ。

こういう山の急変を、鉄砲水、蛇押し、なぎ押などと言つて山の生活者は恐れていた。

あの日、幸か不幸かあの夕立と鉄砲水が出なかつたら、私がひとり勝手に掘った溝はなんと言つて批判されただろうか。

私の心に残る思い出を短文を記し、当時、調査にあつた高村博文、白田武正、林 幸彦の諸君に聞いてみたい。

土偶のつぶやき



会員の身近なより

中島 芳榮

考古学への憧憬から現場の発掘までは長い長い道のりでした。皆様のお仲間に入れていただきて、こんなに早くそのチャンスがくるとは思いもよらぬ事でした。

平成2年4月1日より8日まで八ヶ岳を背に、雪の舞う中ツ原遺跡の調査に参加させていただきまして、感動の毎日でした。大量の石器の中に大変貴重な出土品があったとか、勉強不足の私には毎日発行される中ツ原通信が教科書のようなものでした。

6年前、山の麓に住みたくて野辺山に引っ越ししてきましたところ、ここが旧石器の発祥の地であったことは、やはり何かの縁なのでしょうか。今は刻々と変貌する野辺山を苦々しく眺めながら、これ以上貴重な旧石器人の故郷を壊さないでと叫んで暮らしています。自然

保護を訴えても人間の欲望の前には小さな声は届かず寂がちです。そんないやへな気分を一掃してくれる考古学にロマンを求めて今一度青春と情熱を取り戻したいと思います。御指導をよろしくお願いします。

佐々木廣雄

今度佐久考古学会に加入させて戴いて、懐かしい、由井会長を中心に若い研究者が沢山、各地で大規模な発掘調査を年々継続されていることに、深い敬意と限りない喜びを感じました。私も、昔、昭和26年、27年と東大の八幡一郎先生や上田の五十嵐幹雄先生のご指導で、繩文早・前期（茅山式から花積下層に近い）中松井遺跡（八千穂村八郡）（尖底土器住居址）を発掘したり、昭和28年春に八千穂村池の平の駒出池、築堤土取り場から尖頭器（黑曜石）十数ヶを発見し、東大、佐藤達夫氏によって発表されたことがありました。これは佐久の川上の馬場平と共に無土器文化における日本で3~4番目の発見であったと思います。その後佐久考古学会の創立にも参加したが、職業がら、烟八開発講と云う中小土建業の工務担当常務として毎日が職場の様な忙しさの中でついご無沙汰を致しております。昨年退職しましたので、故竹内恒先生、興水利雄大先輩の遺業を慕って一兵卒として初めから勉強し直したいと思います。よろしくご指導の程お願いします。

甘利隆志

此度、佐久考古学会に入会させて頂きます甘利隆志と申します。宜しく御願い致します。

考古学、特に古代史などというと、私など門外漢は、ここ数年の阿武山、藤ノ木、そして吉野ヶ里などの相次ぐ大発見も手伝ってか、とかく畿内や、北部九州方面に目が奪われがちです。しかし私の住む長野県内及び佐久地域という個々身近な所にも、古代人の足跡を窺い知る貴重な遺跡、文化財が数多く存在しているということを認識するにつれ、23年間当地で生まれ育った者として、その余りの無関心さを恥じ入るばかりです。

世はなべて、考古学ブーム。このブームが良いか悪いかということは別にしても、自分のごく身近な所でひっそりと苔むし、埋もれていかんとする古人の生活世界に目を向け、関心を寄せることは大切なことだと思います。そのような意味も含め、私は、この地域の歴史というものを畢生の課題として、学んでいきたいと思います。

諸先輩方、御指導の程宜しく御願い致します。

1990年度佐久考古学会総会報告

1990年度総会が、6月23日午前10時より佐久市中込の洞元春を会場に開催された。

開会の後、由井茂也会長の挨拶があり、議長に掛川喜四郎氏が選出され議事に入った。議案は、第一号議案が89年度会務・決算・会計監査報告および承認の件、第二号議案が会則改正の件、第三号議案が役員改正の件、第四号議案が90年度事業計画・予算および承認の件で、四つの議案とも報告の後スムーズに承認を得ることができ、総会が閉じられた。

総会の後には、長年にわたり学会活動に寄与してきていただき、このたびめでたく喜寿を迎えた方々に感謝状の贈呈がなされた。由井茂也・白倉盛男・井上行雄・三石延雄・由井明・大井今朝太・渡辺義義の各氏である。各位にはこれからも暖かくさえて戴くとともに、ご健康で過ごされることをお祈りするばかりである。ひきつづき行われた喜寿を祝う会は、功労のあったさきの諸先輩を讃美、皆が旧交を暖めたほのぼのとした会であった。

(事務局)

INFORMATION

インフォメーション

◆ 新入会員

甘利隆志 〒384 小諸市大字平原2077 ☎0267 (22) 2789

◆ 会員慶事

田村祐子さんが、行田伸征さんと昨年ご結婚されました。末永くお幸せに。

◆

昨年晚秋、八ヶ岳ロッヂで中島芳栄さんの刻書の個展が開かれ、多くの人々が訪れ大盛況で幕を閉じました。

♪ 編集後記 ♪

私事で恐縮だが、勤めて7年目、給与額面が190,700円になった。大卒者の民間の初任給額が18万円というのだからなんとも情けなくなる。それでも好きな考古学でメシを食っているのだから文句はいはまい。しかし最近は考古学でメシを食うものは減少の一途である。給料が安いうえ3K(汚い・危険・キツイ)だからだ。

そうだよな、ニコルのスーツできめアスクワーグ、週末はスポーツジムと彼女、それに対し学徒は、どかシャンにプラン確認、金もないのに本を買う、週末は進まない原稿にレンタルビデオ・・・あ~あ不健康。「考古学オタク」に明日はあるのか? (つつみ)

佐久考古通信 №52

発行所 佐久考古学会

〒384-11 南佐久郡小海町東馬込5047

井山正義 方

郵便振替 長野 7-2842

☎0267 (92) 3171

発行者 由井茂也

編集者 堤隆

印刷所 はおづき書籍(株)



佐久考古学会
シンボルマーク

★ 目 次 ★

■ 佐久の遺跡と遺物 —社宮司の垂飾(弥生時代) —	小山岳夫	1
■ 一齊稿 — 浅間火山の生い立ち	早田勉	2
■ 上偶のつぶやき —会員の身近なたより—	各会員	7
■ 「佐久都市埋蔵文化財センター」設立に向けての提言	堤 隆	8
■ 1991年度役員紹介	事務局	10
■ 第四回佐久地方遺跡報告会について	竹原 学	11
■ 1991年度佐久考古学会総会報告	小山岳夫	11
■ 佐久考古学会会則・慶弔規定	事務局	12

佐久の遺跡と遺物
パート3

—社宮司の垂飾(弥生時代)—



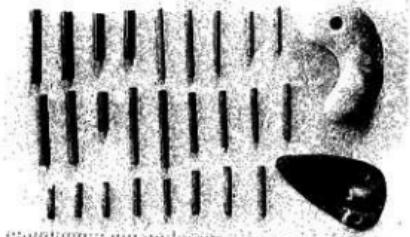
太平洋戦争の余韻が未だぬく昭和24年頃、当時佐久市野沢の白家の畠でごぼう掘りに勤しんでいた伴野清三氏は白く輝く金属板と緑、赤の玉、鎧びた鉄の塊、一片の土器を偶然掘り当てた。昭和27年伴野家の長男稀一郎氏は早速当時郷土の地質研究に意欲を示されていた野沢小学校の師白倉盛男(現在佐久考古学会副会長)に遺物の存在を知らせる。出土品を実見した白倉はその資料的価値の大きさを予感し、東京大学の八幡一郎に写真(右下)を添えて一報した。八幡は同年12月、考古学雑誌紙上に「長野県野沢発見の弥生式遺物」と題し、出土品中の金属片は銀板(報文中にはないが銅片の再加工品と考えたようだ)として紹介した。その後、しばらくこの資料は余り識者の关心を引くことなく伴野家に保管されることになる。

昭和41年に至り、かねてよりこの金属板は特殊な鏡片の再加工品ではないかと懸念を抱いていた水谷光一が再調査を実施し、詳細な分析により本資料が弥生時代前期末に朝鮮から日本に渡された白銅製の多縫細文鏡ではないかとの結論を導いた。しかし、當時この鏡

がほぼ完全な形で出土した例は、畿内(奈良・大阪)、九州(佐賀・山口)で4例のみと極めて希少であったため、長野県のような偏僻な弥生社会においての存在を疑問視する向きや、弥生中期以降廃された中國製の内行花文鏡ではないかとする意見も多かった。

これらの批判的意見を完璧無缺までにたたきのめしたのが、昭和58年県史編纂事業の一環として馬淵久夫が東京国立文化財研究所で行った成分分析であった。ほぼ確実に多縫細文鏡との結論が得られ、小さな金属板は発見からおよそ30年の歳月をかけて正当な位置付けがなされたのである。

現在この多縫細文鏡と玉類一式、鉄斧は伴野浩二氏の子息稀一郎氏に受け継がれ、同家の宝庫として大切にされている。資料に対する正直な評価は一時になされるものではない。学問・科学の進歩に連動してその評価さえ大きく変わることもある。たとえ、その時は取るにたらないと思える資料でも長く保管する必要性を教えてくれる一例である。(小山岳夫)



社宮寺遺跡の垂飾 (S27年白倉盛男氏撮影)

浅間火山の生い立ち

古環境研究所

早田 勉

I. はじめに

前橋の街からは、浅間山がよく見える。残雪をいただき、春先の陽光を浴びて輝くこの山の姿を、私は崇高な白いピラミッドに例える。県境の基盤岩からなる山々の背後にそびえる浅間山はひとつ高く、雄大である。その標高は、2,568mにも達する。火山の多い日本列島でも浅間山は、富士山、御岳、八ヶ岳などに次いで、火山として6番目の高さを誇る。しかも、浅間山は非常に活動的で、世界的に有名な活火山である。山頂には常に噴煙や水蒸気を望むことができ、数十年に一度は大噴火を起こす。

火口から恒常的に放出される火山ガスは、山体斜面の植物の成長を阻害する。そして噴火のたびに放出される火山碎屑物（テフラ）は、山麓一帯の弱りきった草木に壊滅的なダメージを与える。その結果、荒涼とした浅間山の景観（写真1）が生みだされ、それは雄々しく男性的な浅間山のイメージを造り上げている。このような浅間山の姿は、信州のみならず上州の人々の精神風土にまでも影響を与えていることが容易に推測できる。ここでは、最新の調査結果をもとに、この浅間山の生い立ちを探ってみることにしよう。

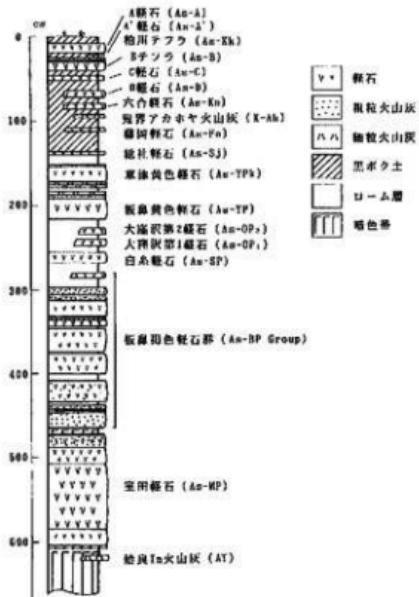
II. 大成層火山の形成と崩壊

—黒斑期—

地質学的な時間尺度で言えば、浅間山は非常に若い



写真1 浅間山の雄姿



第1図 浅間火山起源のテフラ層序

火山ということができる。佐久地方から北に望む山々は東西に連なり、あたかも屏風をたてたように見える。浅間山は、この山並のもっとも東に位置している。これらの山々はいずれも火山で、西から東に順に活動の中心を移動して形成された火山列と考えられている。

浅間山の活動の歴史については、荒牧重雄元東京大学教授（現北海道大学教授）により、詳しい研究が行われてきた。それによれば、浅間火山の活動史は、古い順に「黒斑（くろふ）期」、「仏岩期」、「軽石流期」、「前掛期」の4期に区分される。

浅間山に対して恒常風の風下側に位置する群馬県内のローム層（赤土）の中からは、浅間火山を起源とすると思われるスコリア（色の黒っぽい怪石）が数層検出される。それらは、いずれも約15万年以降で、約3万年前よりも古い層準にある。15万年前以降、たび重なる噴火によって放出された火山灰や火口から流れ出した溶岩により、約2,800m以上にも達する富士山型の成層火山が形成されたようである。この成層火山の一部が、現在でも浅間火山体の西にそびえる黒斑山として残っている。このことから、この古浅間火山ともいいうべき成層火山は、「黒斑火山」と呼ばれている。

約2.1-2.2万年前、南九州の姶良カルデラで発生した大噴火によって放出された姶良Tn火山灰（AT, 第

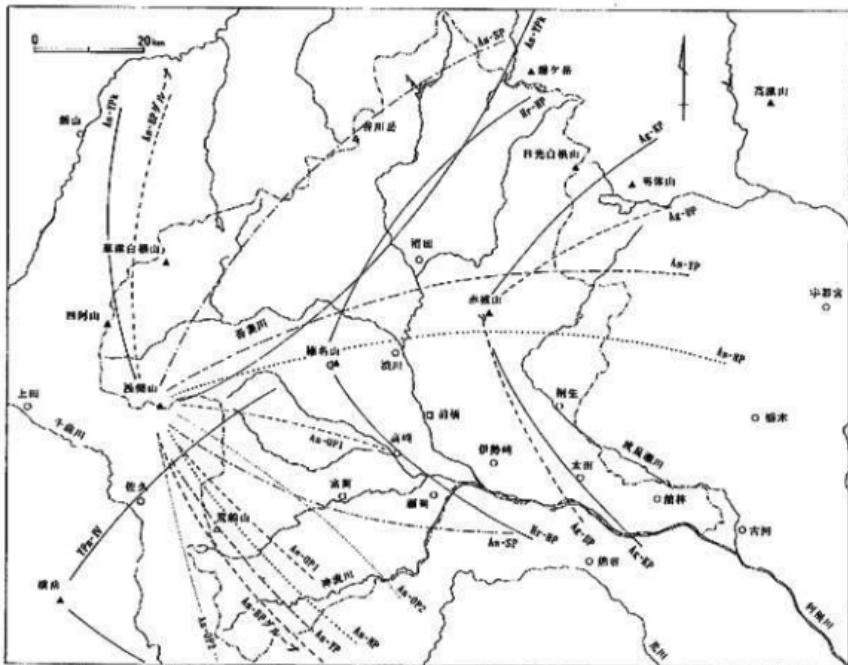


1図)が日本列島を広く覆い、列島全土を火山灰の砂漠と化す大事件が発生した。最近の古環境に関する研究では、この火山灰の降灰が、直後のまたは間接的に人間生活に大きな影響を与えたと推定されている。このATは、信州にも10cmほどの厚さで堆積したようである。その後数百年ほど経ったある日、浅間山で軽石を大量に放出する軽石噴火(アブリニー式噴火)が突然発生した。このときの軽石は、東南東方向を中心に堆積した(第2図)。「浅間一室田軽石(As-MP)」の噴火の発生であった。

As-MPの噴火の後、しばらくして大規模な山体崩壊が発生した。この崩壊により黒斑火山の山体の大半が崩れ落ち、岩屑なだれ(高速の地すべり、岩層流)となつて山麓に流走した。この岩屑なだれは、当初東方に向に向かったものの、浅間火山の東方に南北に連なる山地が障壁となり、北麓や南麓に広がることになった。佐久市北部に認められる岩屑なだれ堆積物は、「塙原岩屑なだれ」と呼ばれる。また塙沢付近に堆積するものは「塙沢岩屑なだれ」、さらに北麓の群馬県長野原町付近に広がるものは「応桑岩屑なだれ」と別々の名称で

呼ばれている。

岩屑なだれが厚く堆積した地域には、岩屑なだれに特徴的な「流れ山」と呼ばれる小丘が多く認められる。佐久市塙原付近に認められる小丘群も、この流れ山である。高速な地すべりによって岩屑が移動するために、堆積面上に微起伏が残る。このうち堆積面から突起した地形を、流れ山といつのである。流れ山の一つでは、良好な地層の断面が観察できる(写真2)。ここでは、黒斑火山の火口付近で形成されたと思われる溶結した堆下堆積物や溶岩、そして軽石など崩壊以前に山体を



第2図 旧石器時代の示標テフラの分布

構成していた様々な地層がジグソーパズル状に堆積しているのがわかる。また、当然それらを充填した柔らかい地層には、流水を媒介として流走したときにできる層理は認められない。

岩層などでは、信州ばかりでなく上州にも大きな地形の変化をもたらした。庄屋泥流と呼ばれた岩層などが呑斐川の谷に流れ込み、本物の泥流と化して下流域を襲ったのである。その泥流の規模は、江戸時代の天明3(1783)年の噴火で発生した泥流の比ではなかった。泥流は呑斐川から利根川を伝い、浅間山から約50km離れた前橋一帯に約15mもの厚さで堆積した。当時、利根川沿いに広がっていた扇状地は、一面にして深い泥の海に変化したのである。1985年に発生した南米コロンビアのネバド・デル・リオス火山の泥流の惨劇を御記憶の方も多いことと思われるが、呑斐川沿いの泥流はアルメロという町を一瞬のうちに埋没し、22,000人の死者を出したこの泥流とはほぼ同じ規模なのである。泥流の堆積により、前橋付近に発生した埋没現象とその後の湿地化は、旧石器時代の人々に居住の舞台を提供することを拘り続けることになった。

一方、浅間山は山体崩壊の後も噴火活動を長く休むことはなかった。東に開く馬蹄形をした火口からは、As-MPなどの規模ではなかったものの、軽石や火山灰が数10年から数100年の休止期をはさんで間欠的に噴出した。群馬県松井田町付近では、このときに放出された降下テフラを、少なくとも8層認めることができる。As-MPを含めたこれらのテフラ層群は、從来、浅間-板鼻褐色軽石群(As-BP Group)と呼ばれてきた(新井, 1962; 早田, 1990)。このような噴火は、約1.6万年前まで続いたらしい。たび重なる噴火の結果、馬蹄形の火口内に再び成層火山が形成された。

III. 大規模な軽石噴火と火碎流の発生

—仏岩期と軽石流期—

約1.5万年前より、それまで火山活動を起こしたマグマよりも、より珪長質(SiO_2 に富む)で、粘性の大きなマグマによる火山活動が発生した。「仏岩期」と呼ばれるこの時期には、白条軽石(As-SP)が噴出し、東方を中心に広く分布した。一連の活動により、山頂火口からは粘性の高い溶岩流が流出し、山体斜面を流下している。この溶岩流は、仏岩溶岩流と呼ばれており、現在でも前掛山南斜面、追分原上方の蛇ヶ城岩と呼ばれる延々と延びる絶壁に露出している。

仏岩期の後、約1.4万年前より軽石噴火と大規模な火碎流が頻繁に発生する時期が訪れた。この時期が、「軽石流期」と呼ばれる時期である。火碎流とは、テフラがガスを放出しながら、高温を保ったまま高速で流走する流れのことという。このところの雲仙火山皆賀岳

の噴火で盛んに発生しており、噴煙を巻き上げながら斜面を流下するその姿をテレビの画面でご覧になった方も多いと思う。この火山現象は、火山災害を引き起こす現象の中で、最も恐ろしいものである。そして、軽石流とは火碎流の中で軽石がとくに多く含まれる比較的大規模な流れを指す用語である。

軽石流期には、大庭沢第1軽石(As-OP₁)、中沢はか(1984)、大庭沢第2軽石(As-OP₂)、板鼻黄色軽石(As-YP₁、約1.3-1.4万年前、町田ほか、1984)、草津軽石(As-YP₂)、嬬恋軽石(As-Sj₁、約1.1万年前)など多くの大規模軽石噴火が発生した。また第1軽石流(約1.3-1.4万年前、高程、1983; 樋口、1990)や第2軽石流(約1.1-1.2万年前、小林、1964; 樋口、1990)と呼ばれる大規模な火碎流も発生している。

このうち第1軽石流堆積物は、佐久地方にとくに厚く分布しており、小諸城址の崖や信越線沿いの谷壁でその桃色の断面を容易に観察することができる。従来、この時期の噴火は、板鼻黄色軽石(As-YP₁)→第1軽石流→草津軽石(As-YP₂)→第2軽石流の順に発生したと考えられてきた(荒牧、1968)。しかし、最近ではこの順序を見直す必要が生じている。

なお、群馬県境に近い佐久市下茂内遺跡で検出された大型両面加工尖頭器の包含層のうち、下位の第II文化層(近藤・小林、1990)はAs-OP₂の下位にあることが最近の調査で明らかになった。この第II文化層からは土器片が検出されており、テフラとの層位関係から、わが国でこれまで検出された土器の中で最も古い一群に相当する可能性が指摘されている(早田ほか、1991)。

IV. 前掛山の形成

—前掛期—

軽石流期の後、およそ1万年前頃から山頂部に新しい成層火山が形成された。こうしてできた山が前掛山であり、その形成時期が現在まで続く「前掛期」である。この時期には、中規模の軽石噴火が約1,000年に1回ほど発生し(第3回)、また小規模な火碎流もたびたび起こっている。軽石噴火の中で比較的規模の大きなものは、約8,200年前、約5,400年前、約4,500年前、4世紀中ごろ、天仁元(1108)年そして天明3(1783)年に発生している。

約8,200年前に発生した噴火に由来する降下軽石は、群馬県藤岡市周辺でよく見かけることができるところから、筆者は「浅間-藤岡軽石(As-Fo)」と呼ぶことにしている。藤岡市街地での厚さは、3cm程度である。約5,400年前の軽石は、浅間山から北東方向を中心分布しており、群馬県六合村付近でよく認められるところから「浅間-六合(くに)軽石(As-Kn)」と呼ばれる

(早田, 1990a)。約4,500年前に噴出した浅間D軽石(As-D)は、浅間山から南東方向に分布している。このテフラは、群馬県松井田町の千秋木岩陰遺跡において、縄文時代中期・加曾利E式土器の包含層中に純層として認められた(能登, 1975)。

4世紀中ごろに浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C)は、東方を中心に分布している。群馬県下では、このAs-Cをはじめとするテフラによって埋没した水田構造が多く検出されている。この中でAs-Cは、古墳時代初期の群馬県域に大打撃を与えたテフラである。1990年8月現在、このテフラによって埋没した田畠は、14遺跡で検出されている(小島, 1990)。

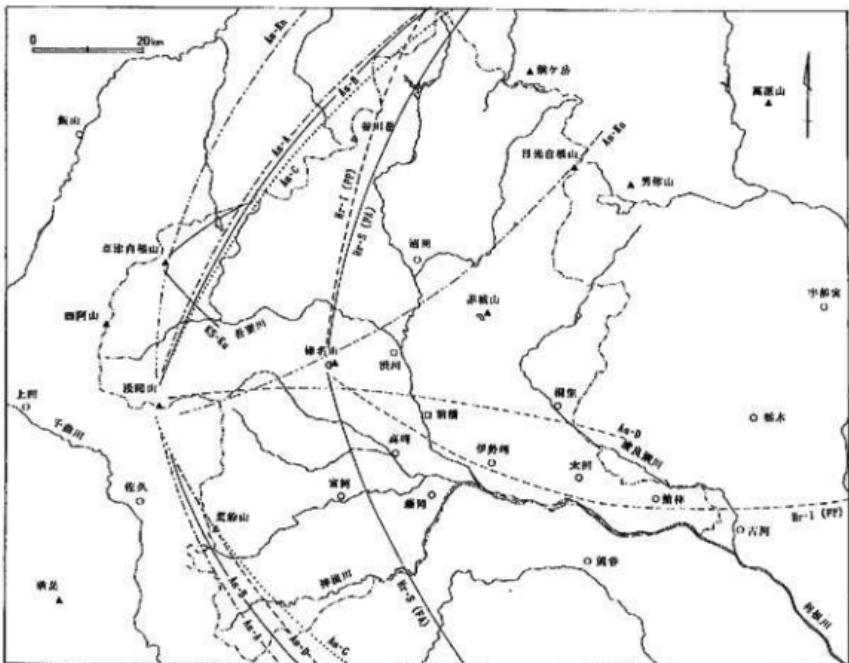
なお、原田・能登(1984)は、テフラに覆われた水面に残された人の足跡から、テフラ埋没直前に行われた農作業を推定し、農事暦と照らし合わせることによって、テフラの降灰した季節を推定している。それによれば、As-Cが噴出した季節は、初夏であるらしい。

V. 歴史時代の噴火

—天仁の噴火と天明の噴火について—

天仁元(1108)年の噴火は、前掛期の噴火の中でも最大規模の噴火であった。このときに噴出した浅間Bテフラ(As-B)は、現在でも関東地方一帯で肉眼で検出される。荒川低地帯に位置する東京都高島平北遺跡では、厚さ約2cmほどで認められた(早田ほか, 1990)。この噴火の年代については、以前、弘安4(1281)年とする説があった(荒牧, 1986)。しかし「中右記」に、天仁元(1108)年9月の浅間山の噴火で群馬県域の田畠が埋没し、当時の社会に大打撃を与えたことが記されている。実際に、群馬県域ではAs-Bによって埋没した水田が多く検出されることから、最近ではAs-Bは天仁元(1108)年の噴火によるものと考えられるようになっている(新井, 1979)。1990年8月現在、As-Bによって埋没した田畠は、86もの遺跡で検出されている(小島, 1990)。

As-Bは、合計49のフォール・ユニット(隕下単層)から構成されている。この中には軽石に富むユニットやスコリアに富むユニット、さらに桃色の細粒火山灰



第3図 縄文時代以降の示標テフラの分布

層など、様々なタイプのユニットが認められる。そこで、このテフラについては、B軽石やBスコリアと呼ぶより「浅間Bテフラ」と呼んだほうが便利である。この噴火では、「進分火砕流」と呼ばれる比較的大規模な火砕流が浅間火山の北麓と南麓を広く覆った。また、「舞台溶岩流」と呼ばれる溶岩流が北斜面に流出した。

最近、これまでAs-Bとして一括されてきたテフラの中に、噴火時期の異なる別のテフラがあることが明らかになった。筆者がこのことに最初に気付いたのは、1990年に調査が行われた群馬県柏川村西部グラウンド遺跡の発掘調査のことである。そこで、筆者はこのテフラを「浅間一柏川テフラ(As-Kk)」と呼ぶことにしている。この遺跡では、浅間Bテフラ上部の桃色火山灰の上位に、厚さ3mmの泥炭層を挟んで灰色細粒火山灰層の堆積が認められた。このテフラこそ、As-Kkなのである。このようなAs-Kkは、5月末現在、群馬県および栃木県下の4遺跡で確認されている。今後、古文書を解説することにより、As-Kkの噴火年代を明らかにする必要がある。

世界的に名高い、浅間山「天明の噴火」は、天明3(1783)年5月9日(以下、新暦)に始まった。その後6月25日には、火山灰が上州に降灰した。豪雪を営んでいた農民は桑の葉に降った火山灰を川の水で洗い流し、蚕に与えた記録が残っている。

その後、30日ほどの休止期を挟んで7月25日に噴火が始まった。しかしその規模は6月25日のほどではなかったらしい。8月2日の午前中の段階で、中山道倉賀野宿(高崎市倉賀野)付近では、それまで降った火山灰を認めるることは難しい状況にあった。ところが8月2日の午後から始まった噴火活動は、それまでは比べものにならないほど激しいものであった。降灰によって高崎周辺では昼間も夜のように暗くなり、人々は略燈をつけたり、ちょうどちんをもって道を歩く始末であった。

8月3日の午後2時ころには、迫分や掛掛でも噴火が尋常でないことに気付いた人々は、老人や子供から順に避難を始めた。そして夜には、降ってきた火石(高溫の軽石)が軽井沢宿にも及ぶようになり、地面に落ちて割れた瞬間、軽石からは炎が上がったという。また家屋に降り掛かった軽石からは火が燃え移り火災が発生した。また獣が街中に飛び出してきた。さらに、華大もあったこの軽石にあたって亡くなる人もいた。

そして最大の悲劇は、8月5日に発生した。それに先立つ8月4日午後4時ころに発生した吾妻火砕流は、浅間北麓の六里が原の木々を焼き払い、獣たちを焼死させた。しかし集落から離かれた地域で練り広げられたこの光景を眼のあたりにしても、浅間山北麓の人々には、まさか1日と経たないうちにそれが自分た

ちの身の上に降りかかるこようとは思えなかつたようである。その後も噴火は激しさを増していった。8月5日午前10時ころ、北麓一帯を大規模な火砕流が襲つた。「鎌原火砕流」の発生である。火砕流は、吾妻火砕流の堆積域の西側を通り、高速で山麓に広がつた。北麓にあった鎌原村は、このとき発生した火砕流(集落に到達した時点には、すでに岩屑などに変化していたらしい)によって埋没してしまつた。

吾妻川の谷に流れ込んだ鎌原火砕流は、河川の水を取り込んで泥流となって下流域を襲つた。その流下域にあった木々はもちろん、家屋や人馬までも下流に押し流された。渋川市中村遺跡では、厚さ3m以上にも及ぶ泥流堆積物によって埋没した田畠が検出されている(渋川市教育委員会ほか, 1986)。また、玉村町上之手八王子遺跡や小坂大塚遺跡では、降灰後に一度復旧された畠が、泥流堆積物によって埋没した様子が明らかにされた(能登, 1990)。

1151名もの犠牲者をだしたこの歴史的大噴火は、この鎌原火砕流の発生の後、終息段階を迎える。この後発生した顕著な活動は、8月5日午後2時ころに発生した水蒸気爆発と思われる火山灰の噴出であった。現在、北麓に広がる鬼押出し溶岩流はこのころより流出を始めたものと考えられるが、とても不思議なことに記録には残していない。筆者はこの最後の火山灰までのテフラ、浅間A軽石(As-A)を42ユニットに区分し、さらに火砕流との層位関係を調べることで天明の噴火を時間単位で詳細に復元しつつある(たとえば早田, 1990b)。

VI. おわりに

浅間火山から噴出したテフラは、時間指標として関東地方一円の地域で遺構や遺物の編年学的研究に廣く利用されてきた。最近では、浅間火山起源のテフラが東海地方や東北地方にまで広く分布している可能性が指摘され、より広域にわたって同一時間軸を用いた編年学的研究が可能になりつつある。その意味で、長野県佐久地方や群馬県域は、この広い地域の編年学的研究のスタンダードの役割を果たす重要な位置にある。

一方、浅間火山が噴火するたびに、火山災害の主要な舞台となってきた群馬県域では、発掘調査によってその被災過程が考古学研究者の手によって詳細に復元されている。しかし、長野県でも軽井沢町などは、噴火のたびに群馬県域よりさらに深刻な被害を受けてきた。また天正元年の噴火などでは、追分火砕流が長野県域にも広く分布している。今後、追分火砕流やそれに引き続いて発生したと思われる泥流・洪水の堆積による被災痕跡が長野県域でも検出されることと考えられる。長野県の考古学研究者の方々にも近い将来必ず、

火山災害遺跡の調査に携わる機会が訪れる。

浅間山の活動の歴史や火山災害の過程を研究することは、火山灰細年学（テフロクロノロジー）の資料を増やすだけでなく、今後発生する浅間火山の活動や噴火活動の推移、さらに火山災害対策などに非常に重要な情報を提供することになる。考古学と火山学との共同研究は、考古学における遺物や遺構の編年研究を進めるだけでなく、災害を通してより地域社会に密着した分野で貢献できるのである。考古学と火山学の共同研究のさらなる展開が期待される。

文献

- 新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀層年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫（1964）前編泥炭層の¹⁴C年代。地球科学, 70, p.37-38.
- 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.157, P.41-52.
- 荒牧重雄（1968）浅間火山の地質。地図研究報, no. 14, 45p.
- 原田恒弘、能登 健（1984）火山災害の季節。群馬県立歴史博物館紀要, no.5, p.1-21.
- 橋口和雄（1990）浅間山活動史の研究。千曲, no.66, p.15-33.
- 小林国夫（1964）縄文文化と無土器文化の¹⁴C年代。科学, 34, p.96-97.
- 小島牧子（1990）群馬県の水田・畠遺跡一覧表。日本第四紀学会1990年学会選挙「上州の完新世テフラと自然災害遺跡」案内書, p.22-24.
- 近藤尚義・小林秀行（1990）大形画面加工尖頭器の典型的な製作跡。考古学ジャーナル, no.324, p.18-22.



■ 白田武正

新幹線・長野冬季オリンピックが決定し、埋蔵文化財調査にかかわるものとしては、当分の間頭の痛い日々が続くかと思います。

しかし、頭を痛めてばかりでも嬉があきません。む

町田 洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰—姶良Tn火山灰の発見とその意義—。科学, 46, p. 339-347.

町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—。古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p. 865-928.

中沢英俊・遠藤邦彦・新井房夫（1984）浅間火山、黒班～前掛層のテフラ層序。日本第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.

能登 健（1975）千駄木岩陰遺跡。日本考古学年報, 26, p.50.

能登 健（1990）噴火が人類・社会に及ぼす影響—考古学から見た一江戸時代の火山災害。日本第四紀学会講演要旨集, no.20, p.46-47.

浜川市教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公团（1986）中村遺跡, 609p.

平田 魁（1990 a）群馬県の自然と風土。群馬県史通史編, I, p.37-129.

平田 魁（1990 b）浅間火山1783年噴火に伴う降下テフラ。日本火山学会講演予稿集, no.2, p.60.

早田 熊・矢作健二・小田静夫（1990）古墳時代以降に江戸に降灰した火山灰—高島平北遺跡のテフラ層序。日本第四紀学会講演要旨集, no.20, p.162-163.

平田 魁・近藤尚義・小林秀行・新井房夫・徳永重元（1991）長野県下茂内遺跡から出土した土器の層位と年代。日本文化財科学会研究発表要旨集, p. 31-32.

富樫茂子（1983）浅間火山第1軽石流堆積物の炭化木の¹⁴C年代。火山, 第2集, 28, p.163-165.

しきこれを機会として、より一層の埋蔵文化財保護をはかるための知恵をはしりだす時期であるように思います。より多くの議論があってよいでしょう。

■ 近藤尚義

関越自動車道建設に伴って調査した下茂内遺跡の遺物整理もいよいよ大詰めをむかえてきました。この遺跡では、話題となった最古の土器片もさることながら尖頭器を含むガラス質安山岩の接合資料群は圧巻です。特に尖頭器未成品数点を含み45cm以上もの大きさになる接合資料には絶句です（しかしこれは持つだけでも腕が疲れます）。

この遺跡の膨大な遺物分布図を効率的に作成するために、コンピュータシステムを導入し、データを入力しています。

「佐久郡市埋蔵文化財センター」設立に向け ての提言

広域に調和のとれた埋蔵文化財保護を目指して

堤 隆

引抜きなんてあたりまえ自 治体が発掘専門員奪い合う

—考古学の現場で起きている仁義なき戦い、
きつい・汚い・暗いの三Kが学生に嫌われて—

朝日新聞ウイークリー『アエラ』の本年3月26日発行No.13号には、このような見出で埋蔵文化財調査の専門職員不足の記事が載った。御覧になられた方は多いかとおもうが、私が申し上げるまでもなく、そうした人手不足はもはや深刻な社会問題である。

1 埋蔵文化財調査専門職員の数

いったい県内埋蔵文化財調査に従事する専門職員とはいっていいどれくらいいるのだろうか。その数については、第1表に示した(本年5月の県文化課調べ)。佐久郡内では、佐久市7人・小諸市2人・御代田町2人・望月町1人となっていることがわかる。郡内2市と北佐久の2町に専門職員がおり、南佐久では専門職員をかかる町村がないということになる。(ただ自治体職員という限定をつけなければ、調査担当能力のある方は幾人かはあるわけである)

今年度の佐久郡内の専門職員の増減では、佐久市で3名の減、御代田町で1名の増となっている。佐久市では手痛い3名減である。また、県内では市町村で5名の増、県で14名の増があり、全体では19名の増である。

奈良国立文化財研究所調べの1989年の統計資料では、長野県の県関係の専門職員数は76名で、大阪・群馬・千葉・埼玉・徳島に並び47都道府県中6位の数の多さをみせている。市町村関係の専門職員数86名で、大阪・千葉・福岡・埼玉・群馬・東京に並び8位の上位ランクではある。

しかししきかけの数字上の優位とは無関係に、なぜ我々はこれほどまでに日々調査に追いつめられるのか。むしろ考古学のロマンや期待とは無関係に知らず知らず遺跡地理圖になりきがってしまっていることが怖い。

第1表 長野県埋蔵文化財発掘調査専門職員数

(平成3年5月1日現在)

市町村名	本邦	現文セ ンター	博物 館等	計	市町村名	本邦	現文セ ンター	博物 館等	計
市	6	82(20)	88(20)	富士見町	2				2
町	+0	+14(+2)	+16(+2)	波野町	1				1
長野市	4(3)		4(3)	美郷町	1				1
松本市	7(5)		6(5)	飯島町	1				1
上田市	2	2	4	明神町	1				1
須坂市	3(2)		3(2)	喜島町	1				1
深志市	2		2	横山町	1				1
須坂市	1		1	松川町	1				1
小諸市	2		2	高森町	1(1)				1(1)
中野市		1	1	上郷町	2				2
大町市	2		2	情浦新町	1				1
伊那市	1		1	信濃町	1				1
駒ヶ根市		1	1	板門町	1(1)				1(1)
男谷市	1(1)		1(1)	小 計	24(2)				2 26(2)
須坂市	1		1	昨年比	+0(+0)				-3 (+2)
茅野市	5(1)		5(1)	宮田村	1				1
更級市	3		3	白馬村	1				1
佐久市	7		7	木島平村	1				1
福島市		2	2	日向村	1(1)				1(1)
小 計	33(8)	10(4)	8	51(12)	原 村	1			1
町	+1(+2)+2(-2)	+1	+3(-2)	小 計	4(1)				4(1)
望月町	1		1	昨年比	+(-1)				(+1)
羽代町	2		2	木崎村	1				1
東部町	3		3	小 計	1				1
坂城町	1		1	昨年比	+1				+1
戸倉町	1		1	明神台村	10(4)				10 82(15)
下郷町	2		2	昨年比	+1(+1)(2)				+1(+1)
丸子町	1		1	合 計	90(1)	92(6)			10 170(17)
黒文化財専門員会議資料による。				昨年比	-8(-2)	-16	-2	+10(+2)	

2 職員不足の実情

さきのアエラ誌上においてみえる、佐賀県文化課の高島忠平課長の職員採用についての言とは、「一、足で稼げ。二、とにかく会って、くだけ。三、よその県の職員だろうが、横取りしてでも引っ張ってこい。」である。そしてその求人には「恐怖の依頼リクルーティング」と呼ばれる職員があたっているという。氏の発言が誌上にどこまで忠実に伝えられているかはわからないが、三の暴力的ともいえる発言は、ある意味でその深刻さを如実に伝えている。これ以外にも、葛飾区の職員募集の記事が考古学ジャーナル誌上(本年2月号)にみえたことにも驚いたが、これも深刻な状況から生みだされたひとつであろう(第1図)。

民間企業では有能な人材の引き抜きが相次ぎ、そのためのスカウト会社が利潤をあげているというが、この業界でも俗にいうデューケーは珍しいことではなくった。いずれとは言わないが、佐久郡内においても、組織のひずみのなかでもがいていた専門職員数名が、他の組織に転職したという事実を御存じの方も多いことと思う。

ところで、多くの考古学専攻生を抱える関東や関西



第1回 人材不足による記事

の都市部の大学でも、近年は考古学関係に就職するのではなく十名に遠くおよばないというのだから、需要と供給のバランスが満たされるはずはない。例えは県内出身の専攻生を中心として県に十名以上が採用になったとすれば、いittai市町村に入る専攻生は幾人が残るか。考古学の殿堂ともいわれる某大学の学生に聞いてみると、「就職は県レベル、地元の市なら考えますが、町村の募集ではちょっとね、遺跡調査以外の業務に忙殺されるのはごめんですよ。・・・県と市町村の双方が内定したとしたら、当然県に就職しますよ」という。

おいおい、ちょっとまで、じゃあ小さな自治体で努力している担当者たちはどうなるんだ。無論設備や体制は上位機関のほうが堅っているのはあたりまえだが、小さな市町村でも良さはある。決裁等のシステムが複雑でない分生きた意見は生き残りやすいし、自らが作り上げるという喜びも大きい、また地域の歴史を継続して総合的に充実できるのもひとつとこに落ち着いてこそというものだ（反面、それは小地域の姉妹にはまりやすいという難点も抱えるが）。

いずれにせよこうした状況について、「食えなくとも考古学がやってみたい」とがんばった、30代以上の就職希望者の方々はお嘆きに違いない。

とはいっても人はいない。自治体に専門職員を入れなさい。上位機関は指導するが、どこに人がいるというのだ。のっつきならない状況になり理事者は、人員削減の潮流の中で定数条例を改正してまでも職員採用を決断する、しかし人はいない。話が立ち消える。専門職員のいるところでは、結局それまでの担当者がさ

らに仕事を背負込み超過は百時間を超える、しかし手当は40時間で切り、健康を害し、家族との不調和も生れる。・・・ありがちなケースである。

3 埋蔵文化財調査の不均衡

専門職員のいる自治体は遺跡が多い、いよいよ自治体では少ない。だいたいこんなこと自体がおかしい。存在する遺跡は本来存在しているのであり、確認の努力がなされていないだけなのである。開発部局からは専門職員の採用によって遺跡調査が増加し、かえって開発が阻害されているという理不尽な発言を耳にするところは往々にしてある。

本佐久郡において最多数の古窯址群をかかえるB村の教育長は、うちの村には遺跡というものはないから助かっているといったそうだが、圃場整備事業で壊滅した古窯址の「跡」に散らばっている須恵器を、いくつかの地点で採集し空しい気持ちになった。C村では、自らが指定し保存した著名な旧石器遺跡を、ご丁寧にその指定の標識を取り外した後に村道拡幅工事をおこなっている。・・・遺跡であることに気付かなかつたのだろうか。・・・これについてあまりのお粗末さに、県にも通報がいって始末書がとられ、新聞報道などを通じて世論にたたかれる羽目になっている。

ところで、行政界を境に、片方は遺跡、片方は遺跡として認知されていないという場合は意外に多い。開業者が行政界付近で開発を行なうとして、そこが遺跡部分であることを知り、遺跡となっていない他の行政区画に場所を若干ずらしたということを聞いた。業者側の対策としてはしごく当然かもしれないが、そのような不均衡は現実に生じている。A自治体では民間開発は黙認のになぜこの自治体では大掛かりな発掘予算を押さえなければならないのか。そうした声もよく聞く。また、調査のフルイが行政体によって公共事業レベル、民間開発レベル、個人住宅レベルまでと段階差を生じていることも、不均衡を顕現しているといえよう。

遺跡は平等に守られるべきものだ。自分の住むあるいは所属する自治体の遺跡のみが保護されればひとまずよいというご都合主義では困る。

埋蔵文化財保護の網を均等にかけなければいけない時期が確実にきている。

4 都市（埋蔵）文化財センターについて

たとえば千葉県では、いくつかの都市文化財センターと呼ばれる組織が設立されている。印旛・香取・君津・山武などの都市の文化財センターがそれである。いずれも一都内の市と都の共同出資による財團法人組織である。

出資者と基本財産

佐久市・大藏白石町	300万円(昭和59年度設立)
山武市・成瀬町・北山町・佐野町	300万円(平成元年追加)
横川町	300万円(平成2年追加)

目的

山武市域内における文化財保護研究及び市民の文化財保護意識の調査と普及等を図るとともに、開発と相容れる調査を図り、住民生活の向上と地域文化の充実に寄与することを目的としています。

事業概要

文化財センターは以下のような仕事をしています。

I. 調査研究に関すること

埋蔵文化財の発掘調査、出土遺物の整理、遺物、遺跡等の分析調査研究、資料・情報の収集、調査報告書・年報の作成

II. 保存管理に関すること

収集資料(出土遺物、記録資料、有形・无形資料、情報資料)の整備、保管及び伝承の機能、監視、審査に関すること

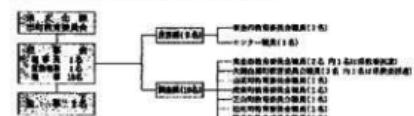
収集資料の販売、専門技術学習会・講演会・現地調査会の開催、講演会の開催、その他の実務の実践

IV. 一般運営に関すること

施設の運営、運営監督、予算編成、財政収支、開発機関との連携

運営組織

文化財センターは、加入市・町から選ばれた理事によって構成される理事会で、議決したり監修の権限を行っています。現員は、加入市・町が委嘱した財政顧問及びセンター幹事の選出で構成され、定期的につながるための諮詢会をしています。



第2図 健山武都市文化財センターの概要(要監査より)

そのうちのひとつ、山武都市文化財センターの要監査(1990)によりその組織を見てみよう(第2図)。その基本財産は総額1500万円で、1市6町の200万円~800万円の出資で成り立っている。その運営は市町推薦の理事による議決等で業務執行が決定され、各市町教委からの派遣職員(市町に派遣された県職員2名を含む)が調査や啓蒙普及活動などにあたり、一方で組織運営や庶務がなされている。ちなみに近年の事業費は三億円前後であり均等に割り当てる調査員ひとりあたりの消化額は三千万円程度、負担面積では1万m²程度となっているようである。

さて、こうした都市(埋蔵)文化財センターの利点は幾つかが上げられようが、ことに以下の二点は大きなメリットであるといえよう。

①広域かつより均等な文化財保護、②有効な専門員の人材活用という点である。

まず、①の広域かつより均等な文化財保護ということは、文字通り都内の埋蔵保護を広域にカバーできることと、埋蔵保護の格差が是正されることである。例えば同等な規範・構造の遺跡の調査でも行政間によって、調査の精度、その期間や予算に大きな格差が生じていることは事実であり、ことに後者は開発原団から不合理と指摘される原因もあるが、広域に一本化することによりそうした問題をよりよく均等に解決できることである。

②の有効な人材活用という点は、例えば、ある自治体では専門員が埋蔵文化財調査に従事しない期間があるのに、かたや専門職員がいないため調査が実施できないという、自治体間の齟齬の解消がはかれようし、より充実した人材の中でそれぞれの専攻分野に合致した職員配置体制が組めるといういわば満員過度も望めよう。無論、組織の広域化は人材雇用の拡大にもつながる。

たとえばさきの数百万円という出資金自体は、現在の自治体規模でいって予算化不可能な非現実的な額ではあるまい。また、事務職員数といった小規模な教育委員会で現実に職員派遣が不可能な自治体でも負担金の削減などによる対応で解消は可能となろう。

5 その提言

長野県教委は当分のところ専門職員の市町村派遣は考えていないという見解を示している。しかし、市町村に就職する考古学専攻生はきわめて限られている。苦しみもがいて民間の発掘調査会社に調査を委託しようとしても、新幹線やオリンピックを歓迎したようには、そうした委託を容認しないという。目の黒いうちは、そうした会社に壁を越えさせないという。では、地域の埋蔵文化財保護にたずさわるものは、ただただ立ち尽くすしかないのか。

こうした問題解決の糸口のひとつに、都市(埋蔵)文化財センターの設立があるように思えてならない。ここに「佐久郡市埋蔵文化財センター」の早期設立を望むのである。しかし無論これは私ひとりの提言であり、幾つかのご意見も当然あろうかとおもう。十分に議論を尽くし、もし賛同が得られるものなら、学会の要望として行政に働きかけることもやぶさかではないまい。地域の文化財保護について、真剣に論議すべき時は来た。

佐久考古通信原稿募集!

- 佐久考古通信では、会員の皆様からの原稿を募集しております。
- 原稿の集まりが悪く、どうしても編集者等の埋蔵調査が入らざるを得なくなります。気軽な冊子ですのでどんな内容でも厭わざご寄稿下さい。

第4回 佐久地方遺跡調査報告会について

去る4月20日、御代田町福祉センターにおいて第4回佐久地方遺跡調査報告会が開催された。今年は御代田町川原田・城之腰遺跡の遺物展と日程が重なったため、御代田町教育委員会の厚意により同会場で並行して開催することとなった。

プログラムは午前10時、開会の辞が黒岩崎会長よりなされ、御代田町長の祝辞、由井会長挨拶、竹原の全体報告に統いて個別報告へと移った。

午前の部は旧石器・繩文時代を中心とする遺跡として佐久市立科F遺跡・南牧村中ッ原遺跡群5B地点、御代田町川原田遺跡の調査成果を須藤隆司・吉沢靖・堀隆の3氏より発表していただいた。昼食をはさみ午後の部は古代～中世の遺跡として小諸市竹花遺跡、佐久市聖原遺跡、佐久市金井城跡をそれぞれ調査を担当された星野保彦・小林真寿・小山岳夫の各氏より報告があった。最後に林幸彦会員より各報告遺跡のまとめがなされ、黒岩崎会長の辞で報告会を閉じた。

発表遺跡の詳細については報告会資料に譲るが、後期III石器時代初頭の石器・集落の様相を知る上で重要な発見となった立科F遺跡、佐久地方でははじめて繩文集落の全貌が明かとなり、焼町土器をはじめ中部高地と関東地方の活発な土器文化の交流を窺わせる川原田遺跡、佐久盆地北部における古代の拠点的集落である竹花・聖原遺跡、地表面の観察からは想像もできない各種の遺構・遺物を検出、從来の中世城郭のイメージを大転換させ得る金井城跡の調査成果等、いずれも注目に値する遺跡の面目白押しだった。

報告会を振り返ると、午前中、遺物展の主体ともなった川原田遺跡の発表の頃入場者数ピークに達したが、午後はめっきり減ってしまい、午前からの顔ぶれはごくわずかとなった。これについては係として責任を感じるが、発表が長時間に渡ったことも原因の一つと思う。来年は1遺跡の発表時間を短縮し、昼食をはさまずにできるようにしたらどうであろうか。

最後に資料の掲載・発表を快諾して頂いた関係機関、発表者の各氏、御代田町教育委員会、会員各位に感謝を申し上げる。

(竹原 学)

1991年度佐久考古学会総会報告

1991年6月22日午後1時より、恒例の佐久考古学会総会が、佐久市中込駅前COMBE 21三階コミュニティホールで開催された。

井出正義事務局会長のものと、黒岩忠男副会長の開会の辞、由井茂也会長の挨拶の後、議長に佐々木広准会員が選出がされ、議事に入った。

当考古学会12年の悲願であった「佐久考古5号古い土器を追う」と発刊の中心として大いに盛り上がった90年度の活動報告が行われた後、決算報告、会計監査報告が相次いでなされ、第1号議案は溝講一一致で無事通過。

続いて第2号議案91年度の活動計画・予算案の審議が行われた。91年度活動の根幹は、当学会のやはり積年の課題である矢出川遺跡群の保存に向けての動きである。本学会活動の両輪の一翼を担う例会においてもこの保存問題を中核において検討して行こうという意欲的な意見が提出され、同様に溝講一致で採決された。

総会が満席なく終了した後、恒例の講演会に移った。本年は、当学会の活動のメインテーマと運動して、旧石器時代研究の最先端にいられる文化省の岡村道雄先生が迎えられた。

先生の『最古の狩人を求めて—日本旧石器時代史ー』と題するご講演は、最近20万年を越えるとさえいわれる前期旧石器時代について先生等が中心となって調査された宮城県内の馬場塙A遺跡などについてスライドをまじえて非常に分かり易く概観された。旧石器時代についてのお話は矢出川遺跡群を抱える我々佐久地方の人間にとって誠に興味深いものであった。

講演会終了後、岡村先生をお招きしていつもの洞庭春で懇親会がもたら。夜が更けるまで歓談が続き、鶴の鳴き声が聞こえるころに家にたどり着いた人も多かったようだ。

(小山岳夫)

1991年度役員紹介

会長：由井茂也
副会長：黒岩忠男・白倉聰男
事務局長：井出正義
事務局幹事
總務：◎木内 挑・小山岳夫
企画（研修旅行）：◎佐々木宗昭・高村博文
(懇親会)：◎羽田卓也

(例会) 各月担当者

(遺跡報告会) ◎竹原 学

書記：◎三石宗一・島田恵子

会計：◎小林真寿

通信：◎堀 雄

保護活動：◎林 幸彦・福島邦男・須藤隆司

佐久考古学会 会則

第1条 本会は「佐久考古学会」と称する。

第2条 本会は佐久における考古学研究の興隆を計るとともに、会員相互の研究・観察、文化財の保護を推進することを目的とする。

第3条 本会の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 総会
2. 役員会
3. 例会
4. 「佐久考古通報」の発行
5. 調査研究
6. 講演会
7. 文化財の保護
8. その他必要なこと

第4条 本会の会員は本会の主旨に賛同し、会費を納入したものを会員とする。ただし、会費の支払いをしたにもかかわらず2年以上滞納した会員については、退会したものとみなす。

第5条 本会の運営の経費は次のように定める。

1. 会費
 - ア 一般会員 1) 個人 年額4000円
 - 2) 団体 年額4000円
- イ 学生会員(中・高校生)の会費は個人・団体とも一般会員の半額とする。
- ウ 賛助会員 年額4000円

2. その他

第6条 本会は次の役員をおく。

1. ア 会長(1名): 会長は本会を代表する。
- イ 副会長(若干名): 会長を補佐する。
- ウ 事務局(若干名): 事務局長1名と幹事若干名で構成し、会務を執行する。
- エ 事務局長: 事務局を代表し、会務執行を統轄する。
- オ 事務局幹事: 会計幹事、書記幹事等その性必要な幹事。
- エ メンバー

佐久地域をI地区(軽井沢町、御代田町、小諸市)、II地区(北御牧村、浅科村、立科町、望月

町)、III地区(佐久市)、IV地区(白山町、佐久町、八千穂村、小海町)、V地区(北柏木村、南柏木村、南牧村、川上村)として、VI地区(佐久地域外の地区)を加え、各地区の会員から若干名、代表者を選出し委員とする。

オ 会計監査員(2名): 本会の会計監査を行う。

2. 役員の任期は2年とする。但し再任はさまたげない。
3. 会長、副会長、事務局長、委員、会計監査員の選出は総会においてするものとする。又、事務局幹事は総会または、役員会の承認を得て事務局長が任命するものとする。

第7条 本会は役員会をおき、会の運営にあたる。役員会の構成メンバーは、第6条第1項のアーエの役員をもってあたる。

第8条 本会は顧問をおくことができる。

第9条 本会の会則の変更は総会において決定する。

第10条 その他の運営に必要な規定は別に定める。

附則	昭和46年5月29日発効	昭和57年6月6日改正
	昭和50年10月5日改正	昭和60年1月13日改正
	昭和52年9月10日改正	昭和61年5月25日改正
	昭和53年6月10日改正	平成2年6月23日改正

佐久考古学会慶弔規定

第1条 本会に、貢献した方に慶弔事及び疾病が生じた際にこの規定を適用する。

(1) 会員の喪事には、お祝を贈る。

(2) 会員の弔事には、香料を供する。

(3) 会員の病院には、御見舞をする。

第2条 第1条に該当する事項が生じた際は、その都度協議して決定する。

第3条 本規定における慶弔及び御見舞に対するお祝はいただかないものとする。

第4条 本規定は昭和53年7月1日より施行する。

♪ 編集後記 ♪

オリンピックが決まった。その「錦の御旗」の下になんでもゆるされてしまわないかと危惧する。例えば埋文破壊、自然破壊、心理的抑圧、財政的逼迫による他方面への縮小。もちろんスポーツがもたらしてくれる大きいなるものはある。南北朝鮮の国交断絶を越えたスポーツ交流は感動的であった。

しかし最近のスポーツの異様な部分も感じる。社会主义国でその勝利のために幼い頃からマシンのように鍛え上げられる子供らがいる。勝つことが至上命令となりドーピングも厭わなくなる。一方で企業のコマーシャル戦略との競争。・・・長野オリンピック、もたらされるものと失われるものとは

(つつみ)

佐久考古通信 No53

発行所 佐久考古学会

〒384-11 南佐久郡小海町東馬流5047
井出正義 方
郵便番号 長野 7-2842
TEL 0267 (92) 3171

発行者 山井茂也

編集者 提融

印刷所 ほおづき書籍舎



★ 目 次 ★

■ 佐久の遺跡と遺物 古墳時代 塚原古墳群	1
■ 繩文・弥生時代と現代	小山岳夫 2
■ 石材とセトルメントシステム 一南関東におけるIH石器時代遺跡の理解	角張淳 5
■ 新刊紹介 「下茂内遺跡」「中ッ原第5遺跡B地点の研究」	糸井栄子 10
■ 土偶のつぶやき 一会员の身近なたより	各会員 11
■ インフォメーション	事務局 12

佐久の遺跡と遺物
パート4 古墳時代

—塚原古墳群—



佐久市岩村田を過ぎ、中佐都に入るといわゆる「流れ山」といわれる百以上の残丘が目立つ。およそ二万年前の黒斑山の山体崩壊による「塚原岩層なだれ」によって残されたものである。

文字通り「塚原」という地名の由来となったこの「流れ山」は、それ自体があたかも古墳状の景観を呈し初めて見る者にとまどいをあたえるが、まさにこの残丘をうまく利用して築造された数多い終末期古墳が「塚原古墳群」である。ちなみに「流れ山」上には、現在でも多くの墓所が設けられ石塔が建てられている。

かつては50基を数えるとされた「塚原古墳群」も現存するのはその半数以下である。そしてその多くは7世紀中葉～後葉の所産と考えられる。この「塚原古墳群」の大きな特色として、①墳丘に「流れ山」の自然地形をうまく利用していること、②石室に「塚原岩層なだれ」中の多孔質巣塊岩（いわゆる浅間の焼け石）や輝石安山岩を利用していることがあげられる。

「塚原古墳群」は、浅間山麓の自然環境を反映した地域的特色のある古墳ということができる。

なお、塚原古墳群の出土遺物の代表的なものは、現在中佐都小学校の郷土資料室に保管されている。

写真は塚原古墳群のうち家地頭1号古墳の昭和五十（1975）年の発掘調査風景である。写真左から、佐藤敏・（故）森京定勝・（故）武蔵金・三石延雄・井上行雄氏が、満身の力を込めて動かそうとしている巨石は輝石安山岩、天井石としてみえるのはあばた状の表面をみせる多孔質巣塊岩である。また、古墳が構築されているのは幅40m・高さ7mの巨大な「流れ山」上である。

長方形のプランをとるその石室主部の現存長は4.5m奥壁幅2.45m玄門部幅1.4mを測る。出土遺物には、馬具（骨・青珠）、玉（切子玉・丸玉・小玉）、鐵鏃、須恵器の他、円筒埴輪や、人物・獣ともみられる形象埴輪の破片が出土している。



力をあわせて（1975年塚原古墳群家地頭1号墳の調査）

縄文・弥生時代と現代

—佐原真先生の講演を聞いて—

小山岳夫

1992年4月26日は私個人にとって記念すべき日となった。考古学を始めて以来常に憧れ、夢の上のひととして崇めてきた佐原真先生をこの佐久の地にお招きすることができたのである。

先生をお招きするきっかけは、今年の2月のこと。御代田町主催で毎年行っている文化財講演会の講師をどんな方に依頼するか同僚のT.T君と話し合っていた。私が丁度仕事で、佐原先生のいらっしゃる奈良国立文化財研究所へ何うことになっていたので一か八か佐原先生に依頼してみようということになった。実際のところ大変ご高名な方。末端の町の講演会講師など引き受けくださるととは思ってもいなかった。

2月17日、懇親の先生を眼の前にして私はすっかり緊張し、要領を得ない講師依頼をしてしまった。「あっ、そうですか。私をお招きいただけます。それはありがとうございます」とうございます。私は急いでいますのでこれで。」実際に氣取らない、気さくな先生である。あっけなくご承諾いただいだ、その間わずか3分。

ところでここでは4月26日の大変有意なご講演をかい摘まんで紹介させていただくが、佐原先生の経験については案外知られていないことが多いと思う。

まず、佐原先生ご自身を紹介したうえで、講演内容を説きさせていただい

佐原 喬先生の略歴

先生は1932年大阪府にお生まれになり、高校時代に絹文化研究の礎を築かれた山内清男先生に師事、大阪外語大学でドイツ語を習得されたのち、京都大学大学院博士課程では弥生時代研究の大家小林行雄先生に師事された。その後、銅鐸の研究、弥生土器における繪描文の法則性の発見、朝鮮半島・日本列島に特有な銘々器の提唱、斧の論文など次々に卓越した高論を発表してこれらられた。これら一連の研究の根底には小林先生の様式論に則った過去の生活文化の究明にあるようと思う。堪能な語学力を駆使して世界各国を巡り、

世界的な視野と広範な知識で日本の過去の生活・習俗の特色を鮮明にされ、考古学をやさしく楽しめる分野に押し広げる運動を実践されている。この運動の代表作が1987年小学館発刊の『大系 日本の歴史 1』であり、会員諸氏も是非ご購読されることをお勧めする。なお、先生は今後4月より奈良国立文化財研究所の埋蔵文化財センター長の要職に就く見になっている。

講演会発表要旨

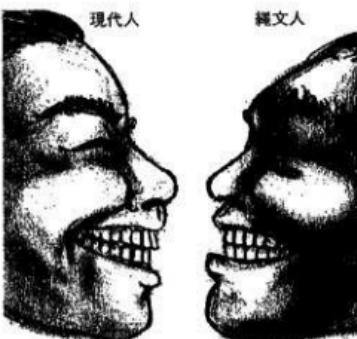
—縄文・弥生時代と現代—

広く理解を得るために

人類が誕生して4百万年、日本では最近宮城県で29万年前の遺跡がみつかった。過去にないほど平等で豊かな現代は果たして本当に頂点なのだろうか。私たちは差別の目で大昔を見ていなければどうか。大昔あったのに失われたもの、大昔なかったのに今あるもの、文明のよい点を伸ばし、文明が壊してしまったものを大昔に学ぶ必要がある。今日は学術的でなくおもしろくお話ししようと思う。

縄文人の歯、現代人の歯

私たちを理解するために、縄文人と今の私たちを比べることはかなり意味がある。例えば歯、縄文人は上の歯と下の歯が毛抜きのようにかちあう。現代人は上と下がハサミの刃のように食い違う。本数も32本から28本に減る。また、縄文人は歯並びがよく、現代人は悪い。これらの変化はすべておよそ1万2千年前の土



縄文人と現代人の歯のかみ合わせの比較
佐原信 1987「大系日本の歴史！」より



縄文人の歯と現代人の歯の違いを解説される佐原先生



先生はステージの上でお話しすることをわられ
受講者と同じ高さで、お話しされた

器の発明に原因がある。土器の発明によって生では食べられない、あるいは日保ちしないものが煮炊きすることによって軟らかくなり、食べられるようになった。以後、食べ物はどんどん軟らかくなった。特に戦後、本当に堅い食べ物が減った。咬む必要がなくなり、使わないので下顎が衰え、小さくなり、歯並びが悪くなつた。日本は世界の中でも土器の発明が非常に古く、これが現代人の歯並びの悪さと無関係でない。例えばオーストラリアの原住民アボリジニは土器を発明しなかつたが彼らの歯は今でも上下32本、歯並びが良く、毛抜き式で温しく食べている。このままでは日本人の歯は益々退化する、これからは子供のころからいかに歯を使わせるかが大事である。

肉食嫌いの日本人

日本には未だ例がないがアメリカではゴミ捨て場の発掘調査が行われている。重さにして70%がまだ食べられるものであるという。この10年ほど無駄遣いをしている時代はない。最近出土人骨の科学的な分析によつて当時の人々がどんな種類の食糧をどのくらいの割合で食べていたかがわかるようになった。長野・千葉県出土の縄文人の人骨の分析では本州の縄文人は80%近く木の実（ドングリなど）を摂取し、主食としていたことが明らかとなつた。これに対して中国、西アジア、ヨーロッパでは古来よりずっと家畜の肉を食べていた。従つて、毎日肉でも大丈夫。日本の中で違うのが沖縄とアイヌ人。過去沖縄で2度講演をした際、アンケートしたところ殆どの人、たとえ老人でも毎日肉を食べたいと答えた。沖縄では狩りから農業の歴史の中で家畜を飼い、肉を食べていた。その他の地域の日本人は歴史上肉を食べていなかったので今でも、毎日肉を食べることを嫌う人が多い。

花の表現の歴史

今日信州へ来て開闢の桜を見てふと気が付いた。縄文でも弥生でも花を表していない。花を表現するのはいつからだろうか。

日本では約1400年前、平安時代の寺院の軒丸瓦に表す。海外でも6000年前。そして花を専門に描くようになるのは本当に新しい。ゴッホなどに代表される絵画を描く時代である。人間は自然を愛せば愛すほど花を愛するようになった。本来、自然の花は淡い色、現代の艶やかな花は品種改良によるもの、土や季節を知らない花も多い。人間が作り出した花で飾り立てるのが果たして自然を愛することであろうか。

働き過ぎの日本人

弥生時代道具は石から鉄へ変わる。道具の変化は「生産力を飛躍的に拡大させた」と説明されている。石斧で30分かかる仕事が、鉄斧だと10分。確かに効率は良くなる。だが本当に生産力は拡大するのか。

ニューギニア・オーストラリアでは1950年代石→鉄が実現した。ニューギニアでは斧を使うのは男の仕事。鉄が入り男は80%仕事しなければならなかつたのが50%で済むようになった。空いた時間彼らは隣村の宴会に出掛けるようになり、ごちそうの豚の消費量が増えた。豚が不足し、豚泥棒が増えた。そして復讐の為に争い、戦争が増えた。ひとつも生産力は飛躍的に拡大しなかつた。ここでの主食はサツマイモ。日保ちしないので畑をいくら増やしてもしょうがない。生産力を拡大させる必要もなかつた。

オーストラリアのイーンヨロント族。石斧は男の所有物だがお願いすれば女も貸してもらえた。石斧は男の権威を象徴した。ところが白人が畜した鉄斧は男女どちらももつことができた。男女の力関係が逆転した。

それはさておき、鉄を使って仕事時間が短縮され、彼

らは何をしたか。一寝た。昼寝した。一これを読んだとき私は笑った。しかし、最近それが正解なのかと思うようになった。私たち日本人は勤労、勤勉、良く働くことが美德と何代も前から頭に植え付けられて来た。それが良いことなのか。現代は高速交通化して短い時間で移動できるようになった。何のために時間を短縮するのか。休むためではない、仕事をするためである。かつてないほど豊かで平等な経済大国日本はこの積み重ねによって築かれた。ひょっとすると道具は自分で忙しくするために進歩してきたのではないか。豊かになつた今、これからは休息、遊びの精神に切り替える時期ではないか。

見せびらかしの話

見せびらかしには2つある。ひとつは共通の理解の上に成り立つもの。例えばブランド商品。もうひとつは大きなもの、広いもの、高いものなど見るからに他を圧倒するもの。見せびらかしが社会的に大きな意味をもつるのは階級社会成立以降、薩ノ木古墳、古代寺院、金閣寺、安土城、聚楽第など権力者はずっと偉さを誇示するために見せびらかしをやって來た。たいがいのものを誰もが手に入れられる今の時代である。見せびらかしは意味を失いつつある。ブランド商品などにとらわれず、これからは内面を飾ることが大事ではないか。最近奈良のお寺を歩いていて仏像の素晴らしさを発見した。仏像の階級は、如来→菩薩→釋迦・天の順である。釋迦・天は私たちと同じ、菩薩は穏やかな顔だが冠などアクセサリーをつける。如来は肌着同然、これを一番惜った姿としているのだ。

戦争の話

狩人と農民ではどちらが戦いを好んだか。狩人の時代は戦争は殆ど無く、本格的戦争は弥生時代から。なぜ、狩人は富み、蓄えがないから奪うものがいない。農民は農業によって蓄えができる者たちができるくるし、土地を巡っての争いも起きる。世界的に戦争は農耕と

ともに起きる。

考古学的な戦争の証拠 ①守りの村(環濠集落) ②武器の出土 ③戦士の墓(九州では100体以上) ④武力擧げ(最近長野県でも証拠がみつかっている) 9500年前、世界最古の戦争が起こつた。人類4百万年の歴史を4mに例えると399cmまでは戦争がなかった。日本本土では尻尾の2.4mm、沖縄、北海道では0.5mmまで戦争をしなかつた。私たちは自分たちのことをホモ・サビエンス・サビエンス(知的・知的な人)と呼んでいる。知的を2つも重ねるほど私たちは賢いか? おこがましくはないか。戦争をしなかつた399cmまでの間の方がよほど賢くはないか。

私は考古学を通じてずっと平和を訴えている。考古学は過去を学ぶ學問だが、現代を知り、将来を知る事にも役立てる。大昔の人々の残したものを見ることによって、当時の人々の考え方を振り返ることもできるのだ。こうした観点からも文化財保護に対するご理解を頂きたい。

この後、佐原先生は与謝野晶子の「君死に給ふことなかれ」を会場全員で唄うことを提案された。難しいメロディーのため受講者一同大いに戸惑ったが、ほとんどの人が一生懸命覚えようと唄い続けた。気持ちが一つになり、言い知れぬ感動のうちに閉会となつた。講演終了後、先生は駆け足で佐久の遺跡・史跡を巡られた。ご案内する車中での先生のご感想「日本にもまだこんなに土地が残っているところがあるんですね。イヤーッ、ホッとした」普段、恵まれた環境の中で暮らしている私たちはともすれば自然の有り難みを忘れがちである。私たちはこの環境を守って後世に伝える義務があるのではないか。先生にお供したのは僅かな時間だが、学問的な部分だけでなく、これから生きる方向を示唆して戴いたようにも思えた。私にとて忘れ得ぬ一日であった。



昼食もそこそこに縄をつくる佐原先生



佐久地域の若手研究者たちと談笑される佐原先生

石材とセツルメントシステム

—南関東における旧石器時代遺跡の理解—

角張淳一

1はじめに

筆者は藤波啓容氏とともに1986、87年論文で武藏野台地の石刃技法について論じた。当時は、石刀を生産する技術の特性が、時間的・空間的に限定されており、そこに特定の集団を照射できると考えていた。ところが、「『石刃技法』の認識が硬直していたために、…資料の認識と解釈に看過できない誤謬を生じてしまった。」(安斎1992)。これを反省し、自らの方法の中ですでに固定化してしまった技術論を打破するために、安斎正人(1988、1990a, b, 1991a, b)氏、佐藤宏之(1988、1989、1990)氏、田村 雅(1989、1990)氏の研究をモデルとして、石器が残されるシステムをセツルメントのバーカーから帰納しようとした(角張1991)。また、それを補う意味で武藏野台地のV層石器群を分析した(角張1992)。筆者の2つの論文は繰り返し同じ方法を用いて石器群を分析しようと努めたが、ここでも「基礎的資料の未見、石器・石器群の誤認、概念操作の過失、記述の混迷など不備」(安斎前掲文)が目立ち、論旨が把握しにくいという反省をしなければならないことを痛感している。そこで、筆者の1991、1992年論文の要旨を、テーマを絞って記述することで、視点と展望を明確にすることを努めた。

2 石器製作技術と我々が技術を認識する時の認識レベルについて

理論a) ひとつひとつの石器は個人が製作するのであるから、石器の形や技術には個人的な癖が表現されているはずである。(安斎1977)。

理論b) ひとつひとつの定型的な石器は、石器製作集団が伝統的に保持する石器製作技術の範型によって製作されているはずであるので、石器の形や技術には集団の範型が表現されているはずである。(小林1967)。

2つの理論からは、石器製作技術というフィルターを通して、石器製作者の属する社会と個人について、記述されることが論理的に可能である。筆者は考古学的歴史叙述について、石器で歴史的個人を語ることの可能性があることを研究のひとつの目標におきたい。

さて、石器が仮に個人を語りえたとしてもそれは歴史的叙述に繋げることができるのだろうか。石器の剥片生産技術分析といえば、石器研究者にとってごく身近な分析である。石核と剥片の接合資料を手にした場合、大きな打面再生剥片を剥離したため、作業面と打面のなす角度が大きくなりすぎて、そこで剥離作業が中断されている資料があるとする。この石核が未だ十分剥離作業に耐え得る大きさを保っているとすれば、剥離作業を行なった本人の悔しさはいかばかりかと想像できる。そして、発掘によってその石核が、接合する剥片の集中部よりも10数mm離れた場所で、ボツンと出土したとしよう。剥離作業を行なった本人が悔しさのあまり石核を放り投げたとしても解釈したくなる。

このような例も石器分析を通して個人が歴史に登場するとも言えるが、いまのところ歴史叙述にはあまり有効ではないかもしれない。

では、次のような例はどうであろう。

近畿地方に国府型ナイフ形石器という石器がある。これが南関東の特定時期に出現するのだが、本来は南関東にオリジンのある石器ではない。そこで、事実関係を追ってみる。

①国府型ナイフ形石器は南関東の該期のナイフ形石器の數量に比較して極端に少ない。

②国府型ナイフ形石器の石材は、武藏野・相模野台地の近辺の石材である。

筆者は以上の事実から、国府型ナイフ形石器を作成する人々が、少人数で南関東へ来訪し、南関東の集団の中に移入したと解釈した。また、国府型ナイフ形石器を狩猟用具と假定したときに、移入時には、狩猟具を作成する男性が存在したことを想定し、それ以前の時期とは異なる婚姻形態に移行し、社会に構造変化があったことを仮説として提出した。ここには、特定石器の範型のオリジンとそれを製作する個人という両方の視点が含まれている。そして、実際に南関東で国府型ナイフ形石器を作成した当時の関西人は、歴史的個人である。

ところで、筆者の解釈とは別の解釈も存在する。織笠昭氏は、南関東の国府型ナイフ形石器が、本場の国府型ナイフ形石器に比較して刃角が分厚いことを指摘した。それを解釈するにあたって、南関東の国府型ナイフ形石器は、関東人が国府型ナイフ形石器を真似て製作したのであり、本場よりも刃角が分厚いという理由は南関東人が国府型ナイフ形石器を製作するときの個性であると解釈している。そして、その歴史的意味は、南関東人と関西人との接触による技術伝播であると解釈されている(織笠1992)。

どちらの解釈をとるにしろ、そこには石器製作に携わる個人と地域の伝統に基づく範型が視点の中心とな

っている。

3 石材の流通という視点

信州和田岬産の黒曜石は、南関東の姶良Tn火山灰層前後の石器に多用される。原産地が遠く離れた信州の石がなぜ現在の東京都近辺で頻繁に発見されるのだろうか。これについて、当時の信州と関東の集団相互に、黒曜石を媒体のひとつとして、贈与・交換体系が確立したという解釈がある。それらはさらに演繹されて、婚姻の連絡網を有する準部族的社会の存在(安斎1990)や、特定集団が黒曜石を集中入手・管理して他集団へと再分配する首長制再分配システムの存在(福田1984)という理論が出されている。

私の考えは信州産黒曜石は同一集団群による直接採取である。その理由は幾つかあるが、石材だけで考慮した場合を以下に記そう。その理由のひとつに南関東の姶良Tn火山灰層前後のナイフ形石器石材について、信州産黒曜石が利用される率が多すぎるのだ。それは圧倒的ともいえ、まるで南関東近辺にある石材を無視するような出土の状況である。南関東において、別の時期では、南関東近辺の石材を頻繁に利用しているにもかかわらず、この時期だけは信州産黒曜石しか利用しないといつても過言ではない。

私には、南関東人が信州人と石材の交換をしていたとは思えない。石器という生きるのに必須の道具の原材料を他人の手に委ねているとは思えないからである。そこで、私が解釈するところは以下である。

南関東で、近辺の石材が利用されず、遠く離れた信州の山の黒曜石が頻繁に利用されるということは、むしろ信州人が南関東へ出稼ぎへ行くという状況ではないだろうか。獲物を追い掛けているばる関東まできた信州人は、そこには、ろくな石がないことに気付くであろうし、また石器に利用できる石のある場所を知らないのではないだろうか。信州は山の頂に石器の石があり、関東は山の迫る小河川やその支流の河床に石器の石があるから、石器の石を探る場合の立地は正反対である。だから、関東へ獲物を追い掛けしていく時には、自分で利用する石を携へていって出発するのだろう。これを少し気取った言い方に代えれば、信州と関東を結ぶ広域移動の集団があり、その集団は信州に居住拠点をもつため、関東の地域石材資源を開拓するノウハウを持たないといえる。さらに言い換えれば信州と関東では石材獲得方法に差がありすぎて、その結果信州産黒曜石を獲得するシステムに適応していた集団は、関東の河川流域で石材を獲得するシステムに気付かない、若しくはシステム内に組み込むことができなかつたのである。そして、石材の問題は、さらに次のセツルメント・システムと合わせることで、重要な問題を提

起することができる。

4 セツルメント・システム

セツルメント・システムについてはビンフォードの2種類のシステムが有名である。狩猟採集民にはフォレイジャーとコレクターという2種類があり、それらは対照的である(安斎1990b)。ビンフォードの記述を、そのまま日本の後期旧石器時代の適用することは適当でないかもしれないが、十分に有益な示唆を与えてくれるだろう。

私がセツルメント・パターンについて十分な示唆を受けたのはアンソニー・マーカスの説明(安斎1988)である。マーカスは中東の石刃技術発生について環境変化と石材資源獲得行動との関連から、放射型と循環型の2種類のセツルメント・パターンを導きだした。前掲の安斎論文を引用すれば、放射型とは「水や主要資源との空間的位置関係と石器組成の面とで異なる多様多様な痕跡、つまり頻繁に居住の繰り返される定着性の強いベース=キャンプを中心に、関連諸遺跡で構成された<放射型>」である。植物が繁茂し、動物が密集し、地下水の容易に利用できる気候条件が最も良い時期に、比較的狭い地域の小地形に応じた活動分化によって初期ムステリアン人は地域資源を常時集約的に開発利用していたようである。』また循環型とは「類似した石器組成と日々繰り返された居住層をもつが、めだたった活動的変異の証を欠くだけの遺跡からなる。』上記のセツルメント・パターンの説明を、日本の、特に南関東地域に照応させるならば、おそらく放射型がVI層石器群に、循環型がIV層下部石器群に照射可能であると、私は考えた。

VI層石器群とは石材の項目でも述べたが、信州産黒曜石が多用される時期である。そして個々の遺跡の石器組成は、遺跡ごとに変異が大きい。例として、武藏野台地の鈴木遺跡VI層と花沢東遺跡VI層、武藏台遺跡VI層を比較する。鈴木遺跡は黒曜石の多量の石刀と石刀製のナイフ形石器が40数本残されており、他に珪岩による若干のスクレイパーと黒曜石の彫器がある。花沢東遺跡は、粘板岩の軽石を用いて半設打面の石刀と石核のみが残されている。武藏台遺跡は黒曜石の石刀と、小形の剥片製ナイフ形石器が残されている。

3つの遺跡は石刃生産を基調にしながら、それぞれ残されている道具に大きな片寄りがみられることがわかる。これらの遺跡の他に、相模野台地に寺尾遺跡VI文化層があり、そこには、石刀製ナイフ形石器、小形剥片製のナイフ形石器、スクレイパー、磨石、黒曜石の原石などが残されている。寺尾遺跡と武藏野台地の3遺跡を比較すれば、寺尾遺跡には、武藏野台地の遺跡に残されていた石器種類のほとんどが残されている

ことが理解できよう。これをマーカスの放射型に照応させれば、寺尾遺跡がペースニキャンプ的遺跡であり、武藏野台地の遺跡が特定作業を行なった小遺跡であると解釈することもできる。

IV層下部石器群の時期は武藏野台地の遺跡数が膨大になる。その中のひとつに東京都練馬区東早瀬遺跡がある。第V文化層として把握されるのが当該時期と同じ段階に属する石器群である。石器ブロック26、礫群16基が発掘された大遺跡である。この遺跡には、ひとつの原石から剥ぎ取られた剥片や石核が、幾つもの石器ブロックにわたって出土していたり、ひとつの礫が割れて異なる種群の中に存在していたりする。同じ石塊が異なる石器ブロックや種群に亘るという現象から、同じ石のあるブロックはそれほど時間差をおいて形成されていないと判断すると、26の石器ブロックは13群に纏められる。さらに、13群は石器組成で5類に整理される。

1類はスクレイバーのみのブロック、2類はナイフ形石器とスクレイバーのブロック、3類はナイフ形石器・スクレイバー・角錐状石器・ドリル・楔形石器のブロック、4類はナイフ形石器のブロック、5類はスクレイバー・彫器のブロックである。1~5類に整理された石器種類の数量は、それぞれの類のブロック群のなかで1~3点である。従って5類に整理された13のブロック群も、相互に比較すれば、決して量的に卓越した石器があるわけではない。そしてその場に石器が残されるということは、当たり前のことだが、その場に石器を棄て去った行為の結果であること、しかし石器は製作された場所と使用される場所、及び棄てられる場所が同じであるとは限らないことから、5類に整理された石器組成は、頻繁に移動する際に起る廃棄行為の中でのヴァラエティであることが理解できる。それは言い換えれば、東早瀬遺跡第5文化層を残した人々が保持している道具の中身は、ナイフ形石器とスクレイバーを基調として、他に種々の遺物を持ち、その場を立ち去る時に不要になった石器の種類を廃棄していくということであろう。このように解釈するならば、当時練馬の東早瀬遺跡にいた人々が残した26の石器ブロックの中で、取り立てて石器の種類に片寄りのあるブロックは無いといえる。そしてこれらは、マーカスの説明の循環型と合致していると思うのである。ここにおいて、遺跡の内容から2種類のセツルメント・パターンが設定できた。私はVI層石器群のそれをマーカスの言を借りて放射型、IV層下部石器群相当のそれは単位型という言葉で整理することにした。

さて、以上のセツルメントと先に石材からみた移動領域について組み合わせるならば、南関東の後期旧石器時代人のより具体的な行動パターンが設定できるだ

ろう。

そこで石材についてVI層石器群とIV層下部石器群について比較検討をしてみよう。

VI層石器群は信州人の関東出稼ぎ型であった。ところがIV層下部石器群相当になると、石器ブロックの石材はいきおい関東近辺の石材が増えてくるのである。武藏野台地でいえば珪岩、相模野台地でいえば玄武岩や凝灰岩である。VI層の時には石のある場所がわからなかった信州人とはうってかわったように、関東近辺の事情に詳しくなっているのが、IV層下部人の姿と想像できる。しかし、関東近辺の石材を利用はしているものの、ナイフ形石器に対する黒曜石の比率は依然高い。表1はIV層下部相当の石器群について、ナイフ形石器の石材比率をカウントした表である。表では一部の遺跡しか扱わないにしろ、ナイフ形石器には相当の半で黒曜石が利用されていることが理解できるだろう。そして、より重要なと思われることは、全体の石材組成に対して、ほんの少しナイフ形石器の黒曜石比率が上回るという事実である。おそらくこれは、黒曜石が優先的にナイフ形石器素材に充当されていることを示すのではなかろうか。

ここで石材伝統を考慮にいれると、黒曜石がナイフ形石器に利用される伝統が、少なくともVI層石器群の時期には形成されていたことより、IV層下部相当の石器群を残した人々は、VI層の信州人の後裔だといえるのではないだろうか。つまり、VI層の信州人はIV層下部相当層の時期には南関東人になっており、その間に人々の居住拠点を移す大きな移動があったことを示しているかもしれない。尤も、IV層下部相当人が南関東へ居住拠点を設けたとしても、依然として信州産の黒曜石は南関東に入り続いているので、IV層下部人が、信州まで出稼ぎに行くという状況が想像される。そして信州の黒曜石原産地の遺跡である男女倉遺跡では、南関東のIV層下部相当の石器群が残されている可能性があるのである。

そこで、VI層とIV層下部相当石器群との石材の差が移動領域を示しているとすれば、移動の頻度や期間に程度の差があろうとも、両方の石器群を残した人々の行動型は信州と南関東を往復している広域循環型として把握できる。そして、両者の差異は、VI層が信州拠点型、IV層下部相当石器群が南関東拠点型である。

これまで述べてきたことを類型化し、まとめると以下のようになる。VI層は信州拠点型の広域循環放射型であり、IV層下部相当石器群は南関東拠点型の広域循環単位型である。

ここで、IV層下部相当石器群について補足をしておこう。実はIV層下部相当石器群というのは、武藏野V層・IV層下部にある石器群なのだが、それはおそらく

表 I-1 V層中・下部石器群のナイフ形石器の黒曜石比率

西之台遺跡B地点V層	(1点中1点)	100%	
戸山遺跡	(41-35)	85%	珪岩5・頁岩1
天文台構内遺跡V層	(12-7)	58%	珪岩2・頁岩2・他
彦八山第3・4ブロック	(8-0)	0%	安山岩6・泥岩1・珪岩1

表 I-2 V層上部のナイフ形石器の黒曜石比率

花沢東遺跡V層	(22-18)	81%	安山岩1・粘板岩1点・他
鈴木遺跡B地点V層	(10-6)	60%	珪岩4
鈴木遺跡D地点V層	(5-3)	60%	珪岩1・頁岩1
鈴木遺跡II・V層	(44-22)	50%	珪岩12・安山岩3・頁岩
武藏台遺跡V上層	(5-2)	40%	珪岩1・頁岩1
地蔵坂遺跡B2U下	(4-2)	50%	安山岩1・凝灰岩1
島原遺跡B地点V層	(46-32)	70%	頁岩7・珪岩6・他1

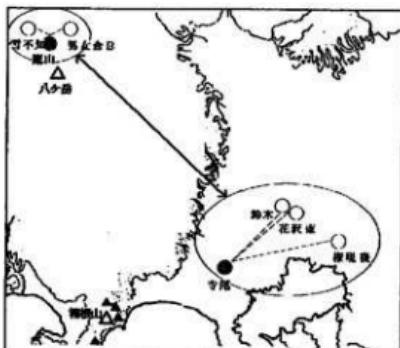
表 I-3 IV層下部のナイフ形石器の黒曜石比率

黒曜石数 全数	$\times 100$		中目黒遺跡 (%)
	黒曜石数	全数	
鈴木遺跡流域下水道調査(2)	(15-0)	0%	60%
鈴木遺跡御幸第1地点第2文化	(3-0)	0%	100%
花沢東遺跡IV中文化層	(31-29)	93%	84%
鈴木遺跡都道地点(II)	(442-334)	76%	67%
若葉台遺跡第5ブロック	(5-2)	40%	35%
多摩蘭坂遺跡第2文化層	(50-14)	28%	12%
鈴木遺跡都道地点・IV	(56-14)	25%	67%
大門遺跡第2文化層	(9-1)	11%	12%
東京天文台構内遺跡IV下層	(3-0)	0%	18%
多摩ニュータウンNa774・775第2文化	(25-6)	24%	珪岩18・珪質頁岩1
草柳一丁目B2L層	(16-10)	62%	凝灰岩1・安山岩1
小瀬前畑遺跡	(4-0)	0%	凝灰岩・安山岩・珪岩・他

表 I ナイフ形石器に利用される黒曜石の比率



第1図 IV層下部信州拠点型のモデル



第2図 VI層南関東拠点型のモデル

3段階の変遷があることを、私は予想している。この段階変遷の方法で重要なのは、個別の石器が組成するという議論では段階分離是不可能ということなのである。上記で述べたようにセツルメント・パターンと石材の相関関係、そして2で述べたように、石器製作技術の見方を加えて、観察される属性相互にどのような相関関係があるかで、私は段階の区分を行ないたいのだ。V層石器群については既に拙稿(1992)があるが、IV層下部石器群については現在準備中である。しかし、予想だけ述べておくならば、IV層下部石器群は前半と後半に分離され、その前半は、私がV層石器群で設定したV層段階後葉と同じ段階である。後半は具体的な分析を準備中である。

5 おわりに

以上が私の1991、92年論文のテーマの一部である。残された大きななテーマとして、後期旧石器時代前半期の時期区分の問題がある。それは安斎正人氏(1992)によって指摘されている。私は、南関東の後期旧石器時代前半期の画期をIX層とVII層石器群の間に設けているが、安斎氏はVII層とVI層石器群の間に画期を設けられている。私がVII層石器群を画期とした理由はIX層石器群ではみられない広い範囲で大形石刃が出土し、ナイフ形石器が型式設定できる(須藤1986)という事実からである。最近、国学院大学考古学資料館紀要(第8輯、1~61頁)に掲載された「黒摩石原産地遺跡と消費地遺跡のダイナミズム:後期旧石器時代の行動論的理説」によると、安斎氏のVII層とVI層の境界が、須藤氏のIX層とVII層の境界と一致する。つまり、須藤氏のVII層とVI層の間に画期を設けていることになる。

それはVII層石器群は広域循環放射型の初期型であるという私の仮説に適用可能な現象であると思う。このテーマについては、新たに書き下ろしたいと思う所存である。

謝 辞

佐久考古通信の掲載にあたっては、いつも堀隆氏に力をわざわせてしまっている。記して御礼申し上げる次第です。

引用文献(既出版)

- 1986 角張 淳一・藤波 啓容
「武藏野台地におけるIX層~VII層石器群の一考察」
『東京考古』4
- 1986 「右刃技法に関する覚え書き:後期旧石器時代に於ける石器製作構造論に基づく編年試案と方法論序説」
『東京考古』5
- 1991 角張 淳一
「黒摩石原産地遺跡と消費地遺跡のダイナミズム:後期旧石器時代の行動論的理説」
『先史考古学叢』第1集、25~82頁
- 1992 「武藏野台地V層石器群の分析—VI層石器群の解体と新しい地盤性の生成」
『國學院大学考古学資料館紀要』第8輯、1~61頁
- 1998 安斎 正人
「斜軸尖頭器石器群からナイフ形石器石器群への移行:前・中期/後期旧石器時代過渡期の研究」
『先史考古学研究』第1号、1~48頁
- 1990a 「石器は人(individuals)を語れるか」
『先史考古学研究』第3号、35~44頁
- 1990b

『無文字社会の考古学』六興出版

1991a

「日本旧石器時代構造変動試論」

「岩手県山形村 早坂平遺跡—原産地遺跡の研究—」
山形村教育委員会、99-120頁

1991b

「斜軸尖頭器石器群の進展：日本旧石器時代構造変動論(1)」『先史考古学論集』第1集、1-23頁

1992

「ナイフ形石器群の発生—日本旧石器時代構造変動論(2)」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第10号(上)、103-127頁

佐藤 宏之

1988

「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』第73巻3号、1-37頁
1989

「後期旧石器時代前半期の研究—現状・視点・展望—」
『考古学ジャーナル』No.309、2-7頁

1990

「後期旧石器時代前半期石器群構造の発生と成立」
『法政考古学』第15集、1-42頁

田村 隆

1989

「二項的モードの推移と巡回：東北日本におけるナイフ形石器石器群成立期の様相」
『先史考古学論集』第2号、1-52頁

新刊紹介 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 1

下茂内遺跡 (財)長野県埋蔵文化財センター刊

ついに出た！ 佐久市香坂下茂内遺跡の発掘調査報告書である。本遺跡は関越自動車道の建設に伴って調査された、旧石器時代末～縄文時代草創期の尖頭器製作地で、眼下の河床や周辺に良好なガラス質安山岩の原石を産する原産地遺跡である。

尖頭器の文化層は、浅間の大森沢第2軽石(13000-14000年前以前)をはさんで上下二枚が確認されており、下の文化層からは尖頭器と共に日本でも最古の一例に属する土器片が出土した。火山灰層やC¹⁴年代によるなら、その土器は14000年前を越えるという驚くべき古さをもつことになる。

また、尖頭器の製作工程を復原できる豊富な接合資料も多いのが注目される。なかでも、尖頭器を含むおよそ50cmを測る接合資料は日本最大だろう。よくぞまあつけた！ 重くて簡単に持てないそんな接合である。

本学会員でもある近藤尚義さんや小林秀行さんなど長野県埋蔵文化財センターの皆さんらが中心となってまと

1990

「第2節 野見塚遺跡の先土器時代—コア・リグクションと狩猟・採集戦略」『松本市 野見塚遺跡・前原I遺跡・根之神台遺跡・中内遺跡・中野遺跡・新橋台I遺跡・申崎新田東里所在野馬除土手—北緯開発鉄道埋蔵文化財調査報告書山一』263-280頁

財團法人 千葉県文化財センター

安藤 政雄

1977 「遺跡の中の遺物」『季刊どるめん』第15号

小林 達雄

1967 「長野県西筑摩郡柳又遺跡の有舌尖頭器とその範型」
『信濃』第19巻4号

織笠 昭

1992 「南関東における国府型ナイフ形石器の受容と変容」
『えびの歴史－海老名市史研究』第3号、1-23頁

稻田 孝司

1984 「旧石器時代武藏野台地における石器石材の選択と入手過程」『考古学研究』第30巻4号

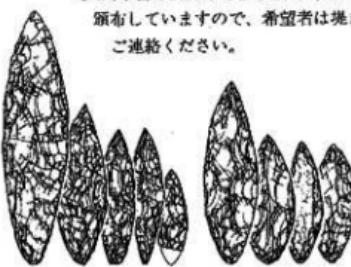
須藤 隆司

1986 「群馬県敷塚遺跡の石器文化—ナイフ形石器の型式学的考察—」『明治大学考古学博物館報』No.2

めた本書は、国内の当該時期を代表する質の高い報告書といつても過言ではないだろう。大作をまとめられた関係者の功がほんとうに偲ばれる。

今後の研究課題は、下茂内で製作された尖頭器がどここの消費地遺跡に運ばれたらしく、その八風山安山岩の原石利用の広がりについてなどであろう。

なお、本書は長野県考古学会で4,500円で頒布していますので、希望者は是非までご連絡ください。



下茂内遺跡の尖頭器

新刊紹介

『中ッ原第5遺跡B地点の研究』

八ヶ岳旧石器研究グループ刊

今からおよそ40年前、野辺山の矢出川遺跡において日本で初めて細石刃文化の存在が確認されたが、同じ野辺山において、矢出川細石刃文化とは全く性格の異なる細石刃文化遺跡の調査が近年なされた。

中ッ原第5遺跡B地点の学術調査は、1990年佐久考古学会員や近県の旧石器時代研究者らからなる八ヶ岳旧石器研究グループによってなされたもので、その研究成果が『中ッ原第5遺跡B地点の研究』である。

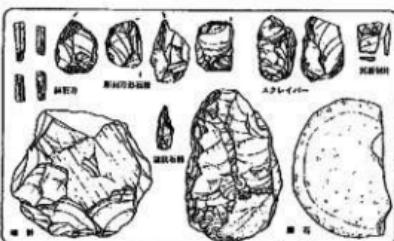
中ッ原5B地点から検出された細石器は、剥離法による細石刃石核や荒屋形磨刻刀形石器を含む(図)北方系の細石刃文化資料で、今もっとも話題を集めているトレンディな石器群である。

さて、本書のタイトルが単なる報告書ではなく、研究書となっていることからも窺えるように、事実報告

を越えるボリュームで細石器についての充実した研究論文が本書には掲載されている。石器の使用痕や、編年論、製作技法や石材产地、火山灰・脂肪酸分析などの諸論文である。石器研究者のみならず、佐久地方の考古学関係者は必携の研究書といえる。

なお、本書は有志による自費出版であるため、より多くの方々のご購読による資金援助をお願いしたい。

1冊=6,000円、申込みは、堤 隆まで
〒385 佐久市岩村田1317-1 電話 0267(32)3328



中ッ原第5遺跡B地点の石器



会員の身近なたより――

竹之内敏幸

最近ごぶさたしてすいません。先月4月18日に13年間住み慣れた会社の寮を追い出されて、現在岩村田の上城に住んでいます。先日アパートの駐車場横の畑で須恵器と土師器の破片を見つけました。古代人の住んだ場所に自分が同じ場所に住んでいるかと思うと妙な気分になりますが、湯川を望むこの台地は古代人にとっても日当りが良く住みよい場所であったと思います。

さて今度5月23日から山梨県で開催される考古学総会(通信が発行されるところにはすでに終っていると思いますが)で新洞の先輩が卯ノ木遺跡で出土した縄文草創期の土器について発表することになっており、私もついて行くことになっていますので会場で会いまして宜しくお願いします。

佐久考古通信

原稿募集

あなたの原稿をお待ちしています。
どうぞお気軽にお書き下さい。
編集者の知合いの原稿が多くなりがち
でございます。

高地正雄

縄文時代早期～後期にかけての土坑には様々なものがあり興味深くおもいます。歴史の練返しのなかで、これらの土坑はどのように利用されてきたのでしょうか。たとえば食物を貯蔵する場合には、屋外の貯蔵から屋内の貯蔵へと変化があったかもしれません。また、土坑内の様々な石は押し蓋に利用されたのでしょうか。いずれにしても、地中の中への食物の貯蔵は今も変りなく行なわれています。

さて、現代人は海の幸を得るのに、採集から養殖へと変わってきています。自然界的海の幸・山の幸を得ていた縄文の皆さんも、山の幸からの簡単な栽培による食料生産に移行したのでしょうか。土坑の中から叫ぶ縄文人の声を聞きたいのですが・・・・。

■再会

学生時代、土器に入っている岩石や鉱物を見て原始の交易について考えてきた私にとって、長野に移り住んでからの発掘中心の一年は、丘に上った裸のカッパ同然のものであった。四六時中、何の不自由もなく見えた七色の鉱物の代わりに目の前に広がる茶色の発掘現場の中で、頭の中から苦心して覚えた鉱物や岩石の形が日々に日に薄れていくのを感じた。むしろ集落調査の面白さがそれらを忘れさせつつあった。

そんな中でこの4月、遂に偏光顕微鏡を購入することができた。当然、分相応の教材用の一冊安いものであったが、それは私に最も大切な旧友に会うような感動を与えた。ライトをつけ、反射鏡をあわせる。調整ネジをまわすと、昔表した土器のプレバーラートの中の1つ1つの鉱物が浮き上がってくる。最初に視野に入れた斜長石は涙に満って、その輪郭さえもすぐには見えなかった。

■キンランかギンランか

佐々木春蔵

昨年、小海町小原廃跡の発掘をしたとき、剥ぎとられた表土の中に野生のランをみつけた。キンランであるかギンランであるかよくわからなかったが、大事に家に持て帰り、庭に植えた。

庭のどのあたりに植えたのか芽の出てくるのを待つていると、4月中旬ごろそれらしい芽がでてきた。一本植えたものが、二本になっていた。かわいい芽であった。その後芽は順調に伸びているが、今のところキンランであるか、ギンランであるかよくわからない。

黄色い花が咲けばキンランで、白い花が咲けばギンランである。どちらの花が咲くのか今から楽しみである。伸びて来た葉の間から蕾の出てくるのを待っているが、今になんでも蕾の見えてくる気配がない。このまま花が咲かなかつたら私の夢も半減してしまう。蕾の出てくるのを待ちわびている毎日である。

INFORMATION インフォメーション

●住所変更

例年なく、多くの方々が住所を変更されました。新居を構えた方、仕事の都合で引っ越された方など新しい希望にむけて居を移された方々ばかりです。これからのご発展をお祈り致します。

白田 武正	〒384-01	佐久市桜井879	☎(0267)62-8133
森泉かよ子	〒385	佐久市上平尾1723	☎(0267)68-3363
田中正治郎	〒381-22	長野市川中島町原311-2 アーバンタウン原A103	☎(0262)83-2591
林 幸彦	〒384-01	佐久市桜井632-10	☎(0267)63-1963
高村 博文	〒384-01	佐久市小宮山320-51	☎(0267)63-2406
羽毛田卓也	〒384-01	佐久市内山5568	☎(0267)63-2072
竹原 学	〒399-07	塩尻市大門幸町8-29 ハイツ幸町A-1号	☎(0263)53-7529
竹之内敏幸	〒385	佐久市岩村田2592-6 ハイツ幸町D号	☎(0267)68-8704

♪ 編集後記 ♪

不況が騒がれはじめた。昨年までどこの発掘現場も慢性的な作業員さん不足に悩まされていたというのに、今年は応募が多く断るほどだという。やはり雇用が安定しなくなって、発掘へ、という構図であろうか。

ところで、佐久考古通信も慢性的な原稿不足に悩まされて発行が遅れている。掲載を予定していたN君の原稿も、彼の牛歩戯術に負けて、次号に送らざるを得ない。諸氏のご寄稿を切にお願いする次第である。

資源保護に向けて、世はリサイクルブームである。復原によって大量に発生する石膏の残粉未をもう一度水で溶いて使えないかと考える私は・・・(つづみ)

佐久考古通信 №54

発行所 佐久考古学会
〒384-11 南佐久郡小海町東馬場5047
井出 正義 方
郵便番号 長野 7 2842
☎(0267) (92) 3171

発行者 由井 茂也
編集者 堤 隆
印刷所 はおづき書籍 制
佐久考古学会
シンボルマーク

★ 目 次 ★

■ 佐久の遺跡と遺物 奈良時代 一鉄師屋遺跡群	1
■ 犀牛馬信仰の世界 一農耕儀礼としての牛殺し・馬殺し	櫻井秀雄 2
■ 有柄尖頭器、そのひろがり	堤 隆 8
■ 1992年度 佐久考古学会総会報告	小山浩夫 10
■ 井出事務局長お疲れさまでした	事務局 10
■ 白田新事務局長 あいさつ	白田武正 10
■ 会員訪問 一第1回 中島芳栄さん	11
■ 土偶のつぶやき	各会員 11
■ 若林弘子先生講演会と第5回佐久地方遺跡発掘調査報告会のお知らせ	12
■ 1992年度 佐久考古学会役員	12
■ インフォメーション	12

佐久の遺跡と遺物 パート5 奈良時代

いもじや 鉄師屋遺跡群

佐久市西原塚一帯には、昭和の圃場整備による条里水田が広がるが、その整備事業に伴う発掘調査によって奈良時代のムラが出現した。鉄師屋遺跡群がそれである。

鉄師屋遺跡群は、野火付・鉄師屋・前田・十二・根岸の5遺跡から構成される遺跡群である。

これまで、佐久地方において奈良時代のムラの調査例がなかったわけではないが、奈良時代の土器群の抽出がままならなかったため、検出されたのが奈良時代のムラと認識できない状況もあった。

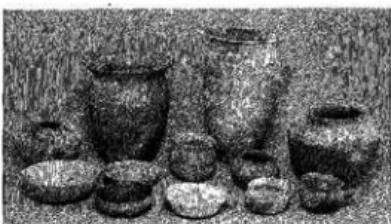
奈良時代の土器群については、小諸市曾根城遺跡・佐久市若宮遺跡での検討を経て認定が固まりつつあり、佐久地方の奈良時代土器の様相の人件を確定したのが鉄師屋遺跡群における編年研究の成果であった。鉄師屋遺跡群では、およそ四半世紀単位で土器の変遷が明らかにされている。

写真は鉄師屋遺跡群十二遺跡25号住居跡の土器セットで、奈良時代初期に位置付けられるものである。須恵器と土師器の、壺・長頸壺・小形壺・短頸壺・長頸瓶などである。

鉄師屋遺跡群に集落が構えられるのは、古墳時代であるが、大幅な移住が進行するのは奈良時代に入ってからのことである。8世紀の前半・後半それぞれにおいて100軒を超える堅穴住居址が認められている。

集落の性格としては、多量の馬骨の出土から、隣接して存在したという御牧「塩野牧」を運営した人々の居住や、東山道長倉駅との関連が取沙汰されている。

前田遺跡からは、「長倉寺」と記された墨書き土器も発見され、その関連性を彷彿させるところである。



奈良時代の食器セット（十二遺跡25号住居跡）

殺牛馬信仰の世界

—農耕儀礼としての牛殺し・馬殺し—

桜井秀雄

1 殺牛馬信仰とは何か

汎世界的にみられる祭祀習俗に、動物犠牲がある。動物の殺害を伴う祭儀である。匈奴では「天地の神々や鬼神や先祖の靈を『神降』して、白馬などを犠牲にささげ、人々の多幸と家畜の増殖を祈願」(江上1984)し、マダガスカルでは「新年の大祭にあたり、王国の安泰のために牡牛が犠牲にされるとき、王がその牛け質の上に立って祈禱と感謝を捧げるや、侍従たちがこれを屠殺した」(フレイザー1951)という。また、スマトラのドラバク人は「瘤の成長が悪いときには、祖神サンボアンに凶作の代償としての共同の水牛を捧げる公共の供禱をおこなう。それには部族全体で適当な水牛一頭をもとめ、村々の中心になる広場に飾柱を立てて、その水牛をこの柱につなぐ。そして犠牲の水牛を屠る」(宇野1944)ことが紹介されている。古代中国では祭祀には動物犠牲を伴うのが一般的であり、また重要な役割をもっている。「唐令拾遺」をひもとくと(竹井田1933)、天を祀る郊祀の礼や祖先を祭る宗廟の礼をはじめとしてほとんどの祭祀には犠牲が記載されていることがわかる。また、朝鮮半島においても一般的にみられる祭祀習俗である。

それでは古代日本においてはどうであったのだろうか。

「日本書紀」皇極天皇元年六月条には、「戊寅に、群臣相詣りて日はく、村村の祝部の所教の隨に、或いは牛馬を殺して、諸の社の神を祭る」という記述がある。

これによれば、七世紀には牛馬を殺して諸々の社に祈願するという兩乞い方法が行われたことが理解される。また、「続日本紀」桓武天皇延暦十年九月条には、「斬伊

勢。尾張。近江。美濃。若狭。越前。紀伊等国百姓。殺牛用祭漢神。」というように、八世紀末には伊勢などの七ヶ国において、漢神を祭るにあたって牛を殺す儀礼が執り行われていたことを示す記載がみられる。このように、日本古代においても、神を祭るに際して牛馬の殺害を伴う祭儀が存在していたことが認められるのである。

このような祭儀は從来から注目されており、「殺牛儀礼」(井上光貞1984)、「殺牛殺馬の祭祀」(土肥孝1984)、「牛馬の屠殺をともなう祭祀」(岸本敏大1984)、「殺牛祭神」(佐伯有清1958、栗原朋信1969)などと論者によってその呼称は異なっているが、私はこれを「殺牛馬信仰」と呼びたいと考えている。(ただし、その論者の所説を紹介する際にはその論者の呼称に従う。)

さて、この殺牛馬信仰は、世界各地でみられる動物犠牲の一環としてとらえられるわけであり、また古代日本と深い関係にあった中国や朝鮮半島では一般的な祭祀習俗であることからも、古代日本においてどのような存在の在り方をしていたかを探ることは日本古代社会を理解するうえで極めて重大なテーマなのである。

2 殺牛馬信仰研究の現状

さて、前節で論じたように古代日本において殺牛馬信仰が存在したことは明白な事実であろう。しかしながら、存在したことと、それがひろくいきわたった一般的な祭祀習俗であったということとは全く別な問題である。殺牛馬信仰に関する研究史を振り返ってみると、殺牛馬信仰をひろくいきわたった一般的な祭祀習俗であると理解する論者と、その存在は認めるものの、それはあくまでも例外的な存在であると理解する論者がその解釈を二分し、そのためいただ定説を得るには至っていないのである。そこでまず両者の見解をまとめてみたい。

(1) 古代日本では一般的な祭祀習俗であるとする論

殺牛馬信仰の問題をはじめて本格的に追究したのは佐伯有清が最初であった。その研究成果は、昭和33年に発表された「八・九世紀の交における民間信仰の史的考察—殺牛祭神をめぐって—」(佐伯1958)と、昭和42年の「牛と古代人の生活」(佐伯1967)によって知ることができる。(以下、佐伯の引用はこの二つの文献による。) 佐伯はまず、日本における殺牛祭神には大きく、①雨乞いなどの農耕儀礼に関するものと、②祟りをはらうための漢神信仰に関するものとの二種類があることを指摘する。そして從米の研究はこの二者を同一視していることが研究の混乱をまねいている原因であると論じる。そして①は汎世界的な傾向をもつもので他の多くの農耕民族の場合と同じく、稲作伝来より



第1図 小島1991より

日本に存在した固有の信仰であると理解し、一方の②は史料的には八世紀代の聖武天皇の時代以前にはさかのほれないところから、比較的新しく大化改新以後におこなわれるようになつたもので、おそらくは大陸より流入したものであろうと説いた。

佐伯の業績には大きなものがあり、殺牛馬信仰研究を飛躍的に前進させたのみならず、今日に至るまで大きな影響力をもつてゐる。特に殺牛馬信仰にはさきに述べたような①と②の二種類が存在するとの指摘は、その後の研究に大きな確を築くものであった。そして、②の禊神信仰に関する殺牛馬信仰が外來の祭祀習俗であるとする見解についてはその後も異論は認められず、ほぼ研究者の意見は一致したものとなっている。

同様に農耕儀礼としての殺牛馬信仰が古代日本においてひろく一般的にいきわたっていた祭祀習俗であると論ずる代表的な研究者に下出信吾がいる（下出1972）。

下出は①も②もともに日本固有のものではなく、いずれも帰化人のもたらした漢神信仰の範疇でとらえられるものだと理解し、弥生時代以来の日本固有の祭祀習俗ではないと佐伯の論に反対する。しかし、殺牛馬信仰が大陸伝来のものであるとはするが、のちにはひろく農民層にまでひろがっていった、地方的かつ農民的なものであると考えておらず、この点では佐伯と一致する意見である。つまり佐伯と下出の論の差異は、農耕儀礼としての殺牛馬信仰の起源を日本固有のものとするか、それとも大陸伝来のものにするかということであつて、こうした祭祀習俗が日本古代においてはかなり一般的なものであったとする点では同じ理解なのである。二人が与えた影響力は大きく、この観点にたつ研究者はかなりの数にのぼっている。

(2) 古代日本では一般的な祭祀習俗ではないとする論
こうした佐伯や下出の見解に対して、栗原朋信は反対の意を示した。（栗原1969、以下、栗原の引用はこれによる。）東洋史学者の栗原は、動物犠牲を古代中国の祭祀儀礼と古代日本のそれを比較研究することから追及しようとする。栗原によれば、古代中国では動物犠牲を用いて神に祈ることは祭祀習俗のごく一般的な



馬頭観音像（『梵釋抄』卷46）
〔新修大正大藏經〕四函第4巻より

第二回 小島1991より

傾向であり、その最高の犠牲は牛であるという。そして「犠牲」と称される供物は、生きている動物を殺すことにして最も重要な行為があったことを指す。それに対して古代日本では、血を忌むのが習俗であり、旱天・霖雨・風禱に際して、神前へ馬を捧げた例がみられるものこうした奉納馬は生馬に終始しており、幣帛にすぎないのであって、犠牲にしたのではないと論じ、動物犠牲の風はとりいれられなかつたと説いた。したがつて、文献史料にみられる殺牛馬信仰の例も栗原によれば、決して一般的な祭祀習俗ではなく、あくまでも例外的なものだと考えるのである。

井上光貞は、こうした栗原の論を高く評価する。井上は律令研究の一環として、中国律令と日本律令との比較をおこない、その注目すべき差異の一つとして動物犠牲をとりあげた。（井上1984、以下、井上の引用はこれによる。）そして、古代日本においても動物犠牲が全くなかったと考えることは誤りであるとするが、唐の公的祭祀とは著しくその色彩を異にして、令や式を定める公的祭式には動物犠牲性の質が折年祭での白猪、白馬、白鶲の供献をのぞいてはみられないことなどから、それが一般的な祭祀習俗であったとは考えられないとい論じた。そして、井上は殺牛儀礼をおこなっていたのは、文献の上からは確實に認めることはできないとはしながらも帰化人である可能性が強いと考え、少なくとも異國の宗教儀礼とみなされていたことは確かであろうと述べている。したがつて、文献にみられる殺牛儀礼もあくまでも例外に属するものだと結論づけるのである。

以上、代表的な四人の研究者の所説を簡単にたどつてみたが、殺牛馬信仰が古代日本においていかなる位置を占めるものであったか、その存在のあり方はいまだ明確にはなっていないのが現状なのである。

3 文献史料にみられる 殺牛馬信仰

殺牛馬信仰には、①雨乞いなど農耕儀礼に関するものと、②漢神信仰としてのもの、の二種類が存在することは前節で触れた通りである。このうち、②の漢神信仰としての殺牛馬信仰については古代の比較的新しい時期に流入してきた外來の思想であることはほぼその認識は一致している。そこでここでは議論のわかれ、①の農耕儀礼に関するものについての文献史料を紹介し、私見を述べてみたいと思う。

第1節でも触れたが、「日本書紀」聖武天皇元年七月条には以下のような記事がみられる。

『戊寅に、群臣相語りて曰はく、「村村の祝部の所教の隨に、或いは牛馬を殺して、諸の社の神を祭る。或いは頻に市を移す。或いは河伯を禦る。既に所教無し。』

といふ。】

群臣らが話し合い、村々の祝部の教えに従って、まず牛馬を殺して諸々の社の神に祈り、また、頻繁に市を移し、そして河の神に祈る、そのような雨乞いをおこなったが、結局は効果はなかった、という記述である。この文章の後には、「大臣の蘇我蝦夷が仏教の教えにしたがって雨乞いをするが、小雨しか降らず、最後に天皇自らが雨乞いを行ったところ、雨は五日間も続いた」という記述が続いている。古代日本において雨乞いに牛馬を殺すという、殺牛馬信仰が存在し、しかもそれが村々の祝部によるものであることが示されているなど、殺牛馬信仰に関する解説で重要な史料である。

佐伯有清はこうした雨乞いのための殺牛馬信仰は世界各地の諸民族にひろくみられる農耕儀礼のひとつであると理解し、この「儀礼の原型が、大陸から入ってきたとしても、すでに長い年月にわたり農耕をおこなってきた古代日本人のあいだで、祭られてきたものとみてさしつかえない」ため、日本固有のものとみてよいと論じた。そしてこの佐伯の論に依拠して、この史料をもって殺牛馬信仰が古代日本でひろくおこなわれた祭祀習俗であると考える研究者はかなりの数にのぼっている。たしかに「村々の祝部」に従った雨乞い儀礼であり、一般民衆層にまでいきわたった習俗と理解することは自然な解釈といえるかもしれない。

しかしながら、この史料には「牛馬を殺して諸の社の神を祭る」と併記して、「頬に市を移す」と「河伯を禱る」という記事がある。「市を移す」とは市場を他のところに移して、市の門を閉じて、人をいれないで祭りを行うことであり、「河伯を禱る」とは、河の神、つまり水霊を祀って雨を祈ることで、いずれも中国風の習俗であることは衆目の一一致するところである。佐伯有清も「市を移す」と「河伯を禱る」が中国的な儀礼であることは認めるのではあるが、「牛馬を殺して諸の社の神を祭る」についてのみは日本固有の儀礼であるとする。しかしこれは苦しい解釈ではなかろうか。

この殺牛馬信仰に関する文章の後には蘇我蝦夷による仏教的雨乞い、それに統いて天王自らの雨乞い儀礼の記事がみられている。つまり、本史料は、①中国的な雨乞い、②仏教的な雨乞い、③天皇による雨乞い、という構成になっているわけであり、さらに①も②も結局のところ雨乞いの成果はなく、③の天皇による雨乞いによって否定されている存在であることが理解できるのである。したがって、「牛馬を殺して諸の社の神を祭る」ととも中国的儀礼と考えるのが自然であろう。

井上光貞もこの点を重視し、「この条の作者は殺牛馬儀礼がわが國固有の思想とは異質であることを意識した書き方となっていることを示している」という。私も井上の論に賛成したい。

しかしこういう意見もあるかもしれない。この殺牛馬信仰は「村々の祝部」に従つたものであるのだからやはり村落レベルまで達していた日本固有の一般的な習俗であったのではないか、と。これについては直木孝次郎が興味深い考察を示している。(直木1968)直木によると、日本書紀には「村」と「邑」という二種類の用法があるが、中國古代の「村」については、①邑にくらべると起源が新しい、②蛮族や流民によるものがあり、非伝統的・辺境的・傍流的・賤民的である、③屯田を起源とするものがあることは、「村」が計画村落の面を強くもつことを示す、ことが指摘できるとし、「村」は中国の村落制の上で非正統的・傍流的であり卑賤な地位にあったことは、日本書紀の編者にも感じとられていたのではないかと考える。そして五、六世紀以降、鐵器の普及による開墾が進み、氏族の発生の地となったような、山脚部や谷の出口などに作られる自然的村落のはかに、朝廷または朝廷の支持をうけた地方豪族の力による開拓地の村落が、相次いでつくられた際には、遷化人や部民の労力によるところが大きかったであろうと推測する。そのため日本書紀における「村」は部民や異民族起源の村落や辺境の村落をいう場合に用いたのであると結論づけている。まことに領地に値する論である。栗原朋信も直木の意見に賛意を示し、さらに「村主」が遷化人系の姓であることからも本史料の場合の「村々の祝部」とは「遷化人部落の祝部」である公算がたかくなると指摘している。

たしかに本史料の場合には「村」との記載であり、さらに「市を移す」「河伯を禱る」という儀礼が中国的な習俗であることを考慮すれば、殺牛馬信仰も外米の思想と受け止められてきたと考えるべきではなかろうか。

ここで古代日本でおこなわれた雨乞い儀礼を史料的に探ってみると、「統日本紀」文武天皇二年四月条に「戊午、馬を芳野水分坐神に奉る。雨を祈へばなり。」、また、同年六月条には、「丙申、馬を諸社に奉る。雨を祈へばなり。」など馬を奉じるとの記事がみられる。こうした馬は犠牲にされたものだと理解する研究者も少なくないが、このように神社等に奉納された馬は「延喜伊勢太神宮式」に、「凡ニ所太神官櫛御馬各二疋。簡幣馬内。恒令養飼。白外馬皆放神牧。」また「類聚三代格」寛平七年六月廿六日条にも丹生川上別御神社の雨乞いに際して「白昔至今奉馬。仍四至之内。放牧神馬。」とみられるように、生きたまま飼われており、決して犠牲にされたのではないのである。あくまでも生馬の奉納なのである。このように古代日本でひろくおこなわれた雨乞い儀礼は生馬の奉幣であることに注意したい。殺牛馬を伴う雨乞いは古代日本では通常には例のない方法なのである。また、この殺牛馬信仰に

よる兩乞いが天皇による兩乞いの効力によって否定されている存在であることからも古代日本においてひろくいわゆる祭禮習俗であるとは認め難く、そして吉村武彦がいうように「吉村1991」、「中国の習俗が民間信仰として定着したもの」とも私には考えられないものである。

おなじく農耕儀礼に伴う殺牛馬信仰として取り上げられる史料に「古語拾遺」御歳神条がある。

「一いは、昔在神代に、大地主神、田を嘗る日に、牛の糞を以て田人に食はしめき。時に、御歳神の子、其の田に至りて、饗に睡きて走り、糞を以て父に告しき。御歳神怒を発して、娘を以て其の田に放ちき。苗の葉忽に枯れ損はれて蘿竹に似たり。是に、大地主神、片巫〔志止々島〕・脛巫〔今の俗の應輸及米占なり。〕をして其の山を占ひ求めしむるに、「御歳神禪を為す。白猪・白馬・白鶴を弑りて、其の怒を解くべし」とまをしき。教に依りて謹み奉る。御歳神答へ曰ししく、「實に吾が意ぞ。麻柄の以て糞に作りて之に神ひ、乃ち其のを以て之を掃ひ、天押草を以て之を押し、鳥扇を以て之を扇ぐべし。若し此の如くして出で去らずは、牛の糞を以て溝の口に置きて、男菜形を作りて之に加へ、〔是、其の心を厭ふ所なり。〕葦子・蜀椒・胡桃の葉及塙を以て、其の畔に班ち置くべし。〔古語に、葦玉は都須玉といふなり。〕とのたまひき。仍りて、其の教に従ひしかば、苗の葉復茂りて、年穀豐稔なり。是、今の神祇官、白猪・白馬・白鶴を以て、御歳神を祭る縁なり。」

話は神代のことである。大地主神が田をつくる日に、農民に牛の肉を食べさせたことからこの話ははじまる。御歳神の子がその田を行ったが、それを不愉快に感じたため、睡をその料理にはきかけ、煽るやいや父である御歳神にその旨を報告した。それを聞いた年穀の神、つまり田の神である御歳神は怒って田に娘を放ち、稻を枯らしてしまったのである。この娘は困った大地主神が片巫や脣巫にその理由を占わせると、御歳神の娘だとわかったので白猪・白馬・白鶴を献上したのであるが、すると、御歳神は麻柄を糞にして、糞をそれにかけ、その糞で掃い、天押草で押さえて鳥扇で扇いでみれば、娘は出ていくと教えた。そして、それでももし出なければ、牛の肉を溝の口に置いてそれに男根形のものを作りて加え、葦子・山椒・胡桃の葉を畔に置けばよいといつてある。そこでその通りにすると、苗の葉は復活し、稻は豊作となったのである。そしてこのような故事により、現在では神祇官は御歳神を祭るに際しては白猪・白馬・白鶴を献上するのだ、という内容である。この史料を農耕儀礼としての殺牛馬信仰をあらわすものと理解する佐伯有清によれば、農耕のはじめにあたっては「牛を殺し豊穣を祈ること

がおこなわれ、屠った牛の肉を食べる饗宴がひらかれた事実」があったことを暗示させ、「古代日本人も、農耕儀礼のなかで牛を殺し、その肉を田の神に捧げ、また饗宴を催すという習俗があった」ことを主張するのである。そしてこのような解釈にたつ研究者は非常に多いのである。

では農耕儀礼としての殺牛馬信仰が一般的なものであったとしたら、なぜに御歳神は怒ったのであろうか。これについて佐伯は「日本書紀」天武四年庚寅条に四月一日から九月三十日までの間、牛馬大猿鷦の肉を食べることを禁止するとの法令が出されていることに注目し、これは農耕にかかる禁制であるとみるのが自然であり、つまり、御歳神が怒ったのは「旱や蟲害の際、あるいは、旱をあらかじめ防ぐために、牛を屠ったり、牛の肉を食べてはならないという禁忌の意識」を表現したものだという。なるほど卓見である。しかしそれではなぜまた、御歳神は牛の肉を溝の口に置くように命じたのであろうか。これについては佐伯は「虫害駆除や諸事の儀礼において、最終的な手段として、男の性器をかたどったものとともに、牛の肉を溝の口に供える祭りをおこなった」のであると説明する。つまりは、非常事態に際しての最終的な手段としてのものであるというわけである。しかしながら御歳神は大地主神が農民に牛の肉を食べさせた際にあれほどまでに怒ったのである。それがいくら最終的手段だといっても、また、牛の肉を溝の口に置かせたのでは、その行動が矛盾してはいないだろうか。私はこのように溝口に置かれた牛の肉を御歳神への獻上品であるとする見方ではこの史料は解釈できないのではないかと思う。

そこでこの史料を見直すべく本文に立ち返ってみよう。まず、大地主神が農民に牛の肉を食べさせたことに怒り、御歳神が田に娘を大発生させて苗葉を枯れさせてしまったことにはじまり、そこで御歳神の娘を解くために以下の方法を用いるのである。これは大きく二つに分けられよう。

①糞を作り糸を巻き、麻の葉でこれを捲い、天押草によってこれを押し、鳥扇をつかってこれを扇ぐ、ということである。これは西宮一民によれば（西宮1985）、糞に糸を巻くことにより娘の自由を束縛し、麻の葉で娘を捲うのだという。また、天押草とは、ごまのはぐきの古名であるが、押草ということから娘を扇ぎ出す呪術であり、鳥扇とは松扇のことであり娘を扇ぎ出す呪術であると解釈している。つまり、これらはみな、娘を田から追い出すための方法であることは間違いなかろう。

②牛の肉を男根形とともに溝の口に置き、さらに葦子と山椒、胡桃、それに塩をその畔に置く、ということである。葦子と山椒、胡桃については池辺眞樹が「葦

子蜀椒與桃葉は、みな油づよく蠍の得食ぬもの』であると述べているが(淮辺1928)、たしかに田の畔に散布して防虫の効果をねらったものであろう。塩は清めのためであろうか。ともすれば、ここ部分も蠍を退治するための呪術について記されたものであるとの理解ができるであろう。

つまり、①が、蠍を田から追い出すための方法であるのに対して、②は追い出した蠍を再びその田に近づけないための方法であると見ることができよう。私はこのような溝口に置かれた牛の肉は殺牛馬信仰とは全く関係なく、蠍を田に近づけないためにその臭気を利用してしたものではないかと考えるのである。柳田国男によれば、「カガシ」とは「おおよそはカグ(喰ぐ)という語の他動形を、名詞にしたもの」であり、「すなわち悪い臭氣のするものを田畠のへりに立てて、動物の中でも主として獣類に不安を感じさせて追い退けることから」導きられる命名なのだということである。(柳田1990)つまり、案山子の本来は、臭気によって田に妨害が入らないようにするものであったことがわかる。

要するに溝口に置かれた牛の肉は殺牛馬信仰としての御歳神への献上品などではなく、蠍を追い出す方法の一つであり、おそらく案山子と同様な役割を果たすものと考えるべきなのである。

大地主神が農民に牛の肉を食べさせたことはおそらく殺牛馬信仰につながるものであったであろう。しかし、これは御歳神によって徹底的なまでに否定されている存在なのである。したがって、この史料からは佐伯のいうように古代日本の普遍的ひろまっていた習俗とは考えられないのである。

このように文献史料を再検討してみると、古代日本においては漢神信仰としてのものばかりではなく、農耕儀礼としての殺牛馬信仰も一般的な祭祀習俗とはみなされていなかったことが理解されるのである。

4 殺牛馬信仰への

考古学的アプローチ

さて、前節において文献史料から殺牛馬信仰のあり方を探ってみたが、その史料は限られたものであり、文献史料のみで殺牛馬信仰を論ずることには限界がある。やはり考古学的見地からもアプローチしていくかなければならない。そしてその最大の手掛かりとなるのは近年、発掘調査の未曾有の増大に比例してか、遺跡から検出される事例が非常に増加している牛馬遺存体であろう。しかし、当然ながらすべての牛馬遺存体が殺牛馬信仰と関係するわけではなく、また、骨や齒といった牛馬遺存体は完全な形で残ることはまれである。そのため、牛馬遺存体から殺牛馬信仰を論じようすることはことのほか困難を極めるのである。なに

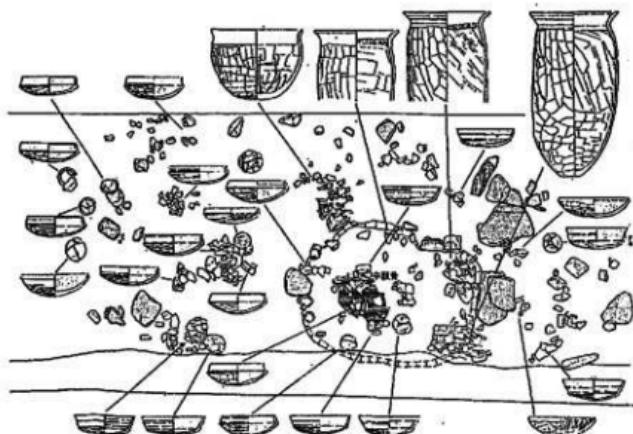
よりも考えなくてはならない問題は、遺跡から出土する牛馬遺存体が殺牛馬信仰によるものなのか否かということである。

松井章は遺跡出土の馬についてではあるが、「出土状態からそのウマがなんらかの人間の目的(呪術?)のために意図的に『殺された』犠牲馬か、あるいは、寿命、事故、病気、過労などによって、結果として『死んだ』馬か、あるいは皮、肉を目的として廻馬として『殺された』廻馬か」にまず最初に注意を払うべきだと述べている(松井1991)。これは牛についても同様に考えるべき重要な問題である。

しかし、その判断をつけることは容易なことではない。ただ、牛馬遺存体は、墓域に関連する遺構の他にも、住居址、井戸、土坑、溝や河川、貝塚、水田、などその出土する場所は多岐にわたっているが、土坑や溝・河川、廻馬後の井戸などは一種のゴミ捨て場としての役割も果たしていたことを考えると、まずは廻馬としての可能性を第一には考えるべきではないだろうか。したがって、遺跡から出土する牛馬遺存体と殺牛馬信仰とを結び付けて理解するためにはかなりの慎重な態度が必要であろう。そしてそれを見極めるためにはやはり発掘調査におけるひとつつの事例を正確に把握していくことが求められるのであろう。また、現在までに殺牛馬信仰の痕跡を如実に示していると思われる遺跡の事例もいくつか認められている。ここではその中で、鍛切遺跡を紹介したい。

鍛切遺跡は神奈川県横須賀市に所在するが、その中には、東西方向に約1.3m、南北方向に約1mを測る土坑に、6世紀末から7世紀初めの頃と比定される、S K 01がある。これは隅丸のやや方形に近いプランを呈し、その外縁部には蝶が各辺に2~5個が配置されている。そしてこの土坑の中央部からやや西寄りに2歳ぐらいの牛の頭骨が仰向けの状態で出土しているのである。この頭骨は土坑底部から8cmの覆土上面から検出されており、頭骨上には土器器皿3個体と甕がおかれて、その周囲から同一レベルで土器器皿3個体と甕2個体が出土し、さらに土坑東側の端にも甕2個体がみられる。これら同一層位、同一レベルであることからも一連の関係がある一括遺物とすることができる。土器は土坑中に牛の頭骨を伴う埋納のもの、頭骨を中心におかれたりものと考えられると報告者は述べている。(横須賀市教育委員会1986)

牛馬遺存体は自らは何も語ってはくれない。そんな牛馬遺存体から殺牛馬信仰の有様を探っていくためには、このような事例をひとつひとつ積み重ねていく以外には現在のところは方法はないのではなかろうか。そうした作業を積み重ねていく中で、日々の重い牛馬遺存体もやがて殺牛馬信仰の有様について静かに語り始



第3図 錢切遺跡 S K01 (横須賀市教委1986)

めてくれるにちがいない、私はそう思っている。

以上、殺牛馬信仰について私の拙い考察をつづけてきたわけだが、私自身、殺牛馬信仰研究の入り口に立ったばかりにすぎない。今後はより深く、そしてより広い視野から探求していくかなくてはならないと痛感している。

引用文献

- 荒木敏夫 1986 「古代国家と民間祭祀」(「歴史学研究」560号)
- 池辺眞株 1928 「古語拾遺新註 下」大岡山書店
- 井上光貞 1984 「日本古代の王權と祭祀」東京大学出版会
- 宇野円空 1944 「マライシアに於ける稻米儀礼」日本書院
- 江上波夫 1984 「騎馬民族國家」中公文庫
- 小島理禮 1991 「人・他界・馬」東京美術
- 秦林朋信 1969 「犠牲禮についての一考察」(「福井博士頌寿記念東洋文化論集」所収)
- 佐伯有清 1958 「八・九世紀の交における民間信仰の歴史的考察—殺牛祭神をめぐって—」(「歴史

学研究」234号)

- 佐伯有清 1967 「牛と古代人の生活」至文堂
- 下出穂与 1972 「日本古代の神祇と道教」吉川弘文館
- 直木孝次郎 1968 「古代国家と村落」(「奈良時代史の諸問題」) 岩波房、所収)
- 仁井田陞 1933 「唐令拾遺」東京大学出版会
- 西宮一民 1985 「古語拾遺」岩波文庫
- フレイザー 1951 「金枝篇」岩波文庫
- 松井章 1991 「ウマの起源をめぐって」(「日本馬具大鑑1 古代上」)
- 柳田国男 1990 「牛中行事観察」(「柳田国男全集16、ちくま文庫」)
- 横須賀市教委 1986 「錢切遺跡—C・D地点の調査」
- 吉村武彦 1991 「古代王權の展開」集英社版日本の歴史第3巻

なお、本稿は「信濃」において発表した拙稿をもとにしている。あわせて目を通してくださいたらと思う。

桜井秀雄「殺牛馬信仰に関する文献資料の再検討」
('信濃' 44-4, 1992)

佐久考古通信原稿募集!

- 佐久考古通信では、会員の皆様からの原稿を募集しております。
- 原稿の集まりが悪く、どうしても編集子等の埋蔵稿が入らざるを得なくなります。気軽な冊子ですのでどんな内容でも厭わざと寄稿下さい。

有植尖頭器、そのひろがり

堤 隆

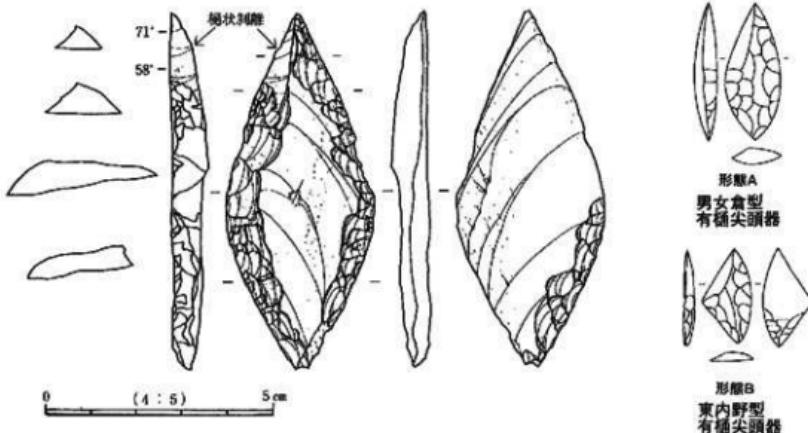
ここでプロフィールをご紹介する有植尖頭器（ゆうひせんとうき）は、川石器時代でもおよそ2万年前以前に東日本でしか認められない特徴的な石器です。

有植尖頭器は、1989年のシンポジウム「中部高地の尖頭器文化」などを契機として、近年再び注目を浴びています。

今回、川上村の青木の平遺跡の良好な有植尖頭器を見る機会がありましたので、ご紹介かたがたその全体についてのお話をさせていただきます。



ここで紹介する有植尖頭器（1）は、渡辺智徳さんによって川上村の青木の平遺跡で採集されました。最大長79mm・最大幅33mm・最大厚8mm重量16.5gを測り、左右の対称の木葉形のアロボーションを呈し、刃端の縦長剥離片が漸減となっています。素材の背面側には周縁加工がなされ、その特徴である植状剥離が左肩になされた後、植状剥離の末端と右縁の先端部に若干の加工がなされています。また、剥片の腹面は、ヴァルヴ部の一部にのみ加工がなされています。



第1図 青木の平遺跡の有植尖頭器と有植尖頭器の型式（右）

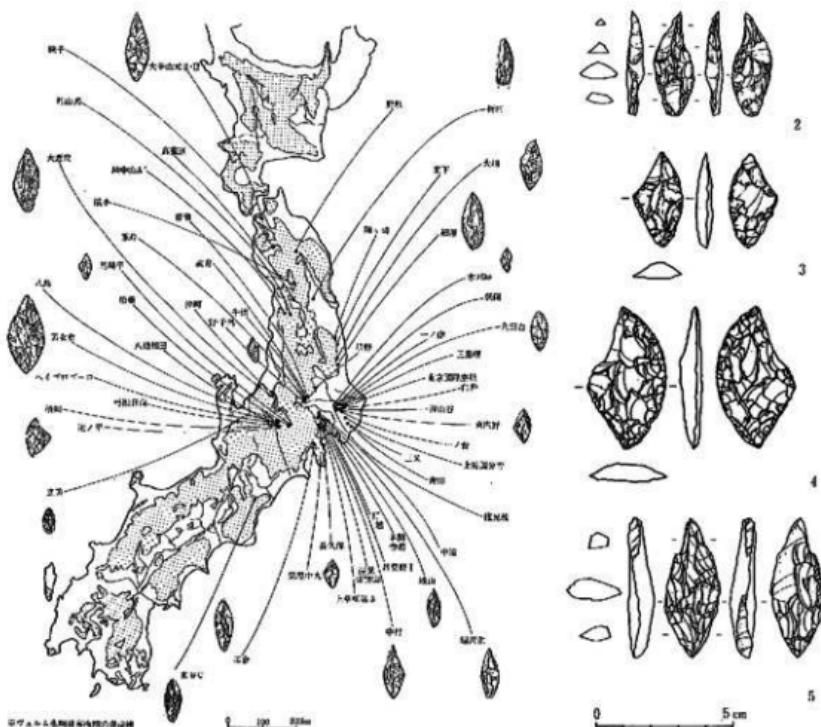
この種の石器を特に注意したのは、県の考古学会の会長である森嶋先生でした。先生は和田村男女倉遺跡の調査から1975年に「男女倉技法」を提唱され、そのなかに、植状剥離の鋭角になる「男女倉型ナイフ形石器」、植状剥離が直角になる「男女倉型尖頭器」、加えて植状剥離の認められない「男女倉型搔器」が存在すると述べられたのです。また、千葉県の東内野遺跡で特徴的に認められたこの種の石器は、1977年藤原正さんによって「東内野型尖頭器」とよばれています。「ファシットを有する石器」と幅広くとらえたのは村井美子さんでした。

さて、1988～1989年にかけて私は、この種の石器の再整理に着手しました。「男女倉技法」が、植状剥離の鋭角になる「有植尖頭器」と、植状剥離が直角になる「尖頭形彫刻刃形石器」の、ふたつの製作にあてられ、「男女倉型搔器」はその存在の真偽を含め、その中に含まれないものとしました。また、有植尖頭器には、左右対称形となる「男女倉型有植尖頭器」（第1図の形態A）と半画面加工で一方の刃がくの字状となる左右非対称形の「東内野型有植尖頭器」（形態B）の二型式が存在することを主張しました。その考えに基づくなら、青木の平遺跡のものは「男女倉型有植尖頭器」になります。

なお、有植尖頭器においては、その植状剥離が向かって左側に施されるものが、全対数の8割近くを占めており、これも形態的な特色といえるでしょう。



有植尖頭器は、およそ2万年前の旧石器時代に登場し、細石刃文化の始まる1万4千年前には消滅した石器と考えられます。私は有植尖頭器が、長野県の



第2図 有種尖頭器のひろがりと野辺山・川上の有種尖頭器(右、1:2)

和田岬周辺の黒曜石原産地で最初に登場したという意見をもっています。

その分布は、第2図のよう、北海道を除いた東日本にのみみられ、西日本には全く認められないという偏ったあり方をみせています。北は青森の大平山元遺跡、南は三重県の東谷C遺跡が、それぞれ分布限になるようです。型式別では「男女倉型」が東日本に広く分布しているのに対し、「東内野型」が下総台地周辺に集中するという分布の違いが認められるようです。

野辺山・川上では、馬場平遺跡で「男女倉型」(第2図2)と「東内野型」(第2図3)が、柏原遺跡で「東内野型」(第2図4)が、首の平遺跡では「尖頭形彫刻刀形石器」(第2図5)がみられるほか、柏原遺跡の東側の東森遺跡でも小形の「男女倉型有種尖頭器」が7点ほど採集されています。

なお、興味深いことに、柏原遺跡では尖頭器が何千本と採集されているにもかかわらず、有種尖頭器は僅か数点しか認められていません。このことから柏原遺

跡の尖頭器の大部分は、有種尖頭器と時期を異にするものとも考えることができます。

つたないご紹介をしてきました。この頃は、新潟の村上市付近で「東内野型」が数多く拾われておらず、茅野市の遺跡でも充実して出土していると聞きます。新たな資料からの発見に期待したいとおもいます。

有種尖頭器について触れているいくつかの文章を最後にご紹介しておきます。

- 森崎慈ほか 1975 「男女倉」
- 森原正 1980 「東内野型尖頭器と種状剥離に関する一考察」(『大野政治先生古稀記念論集』)
- 堤 隆 1988, 1989 「種状剥離を有する石器の再認識」(上・下) (『信濃』40-4, 41-5)
- 川口潤 1988 「種状剥離を有する尖頭器の再検討」(『信石器考古学』36)

1992年度 佐久考古学会総会報告

小山岳夫

1992年7月12日、佐久市ホテル中島において午後2時より佐久考古学会総会が会員30名で開催された。

病も癒え、久々に元気な姿を見せた白倉盛男副会長の発声により開会、由井茂也会長の挨拶、小山幹事の日程説明の後、議長に羽毛田伸博会員が議長に選出され、議事にはいった。

第1号議案は昨年度の会務・決算報告が小山・小林幹事より行われた後、井上行雄会計監査より監査報告があり、満場一致で通過。

第2号議案では役員改選が行われた。井出正義事務局長の副会長就任、白出武正会員の事務局長就任等を含めた役員会を承認案が提示され、議論百出したが、これも原案通り無事通過した。

第3号議案は本年度の活動計画・予算案について審議された。本学会の基本的活動のひとつである例会については本年も現地の見学・踏査を中心において行うこと、矢出川遺跡群等を含めた遺跡の保護活動を強化すること、講演会については高床式建物の研究にご造詣の深い若林弘子先生にお願いすること等が提案され

これも満場一致で承認された。

議事終了後、議案以外の諸連絡があり、長野県考古学会の矢出川保存対策委員会の動態が報告された。これを受けて地元の組織佐久考古学会としても更に保存に向けた活動を強化するよう意志統一がなされた。

総会終了後、由井会長の米寿、堤隆会員の藤森栄一賞受賞の祝賀会がもなれた。池田勝吉郎会員のご尊父松旭齊天昇氏のマジックショーなど色々な職業の方が参加されている佐久考古学会ならではの愉快な催しがあり、終始なごやかなうちに、解散となつた。



和やかな祝賀会

井出事務局長、お疲れさまでした！

本年度の総会をもって、三期6年間にわたり、本会の実務の総指揮をとつてこられた井出正義事務局長が本職を辞し、白田武正氏にバトンを渡された。

一口で6年間というが、その間に井出事務局長の果たされてきた役割は極めて大きい。1986年長年にわたり本会の求心力となってきた木内撫氏、佐久市教育委員会社会教育課長就任に際し、事務局長辞任を申し出られた。本会にとってはまさに青天の霹靂であり、後任人事は難航を極めた。押し倒す形で井出氏に引き受けた頂いたわけであるが、わがままで個性の強い人間が多い事務局幹事を調整し本会を切り盛りされた心労は大変なものだったと思う。就任後、6年間、考古学会20周年記念式典の挙行、悲願の「赤い土器を追う」刊行など、大きな仕事はもとより、本会を學問的水準の高い、広く一般に開かれた学会に押し広げることができたのは、井出事務局長の温厚な人柄、高度な学問的知識なしには語ることができない。

今、これまでの非礼をおわびし、本当にご苦労様でしたと深謝申し上げます。今後は、副会長として本会の重石となりご活躍下さい。

白田新事務局長 あいさつ

佐久考古学会は会員数も100名を超え、地道ながらも継続的に活動を展開している地域単位の考古学研究団体としては、県内でも稀な存在です。

佐久における学会の占める位置とその役割については、設立20余年の歴史が如実に物語っていますが、その在り方は、時の社会情勢や考古学研究の動向に大きな影響を受けてきたことも事実です。

これまでにも、学会は様々な問題に直面しながらも常に前向きの姿勢で対処してきました。そうできたのも、遺跡の調査・研究・保存に対する会員の熱意と学会の組織力が根底にあったからにはなりません。

今、佐久考古学会は矢出川遺跡群の保存をはじめ、地域に根ざした広い意味での考古学研究の在り方をめぐって、いくつかの重要な課題を抱えています。

今こそ、「学会（会員）としてできること・すべきこと」が問われているように思えてなりません。

この度、井出事務局長の後を引き継いで学会運営のお手伝いをさせていただくことになりました。事務局はもちろん、実質的には会員ひとりひとりが運営する佐久考古学会を目指して努力したいと思います。

会員訪問



第1回

中島芳栄さん



八ヶ岳のふもと野辺山に在住される本学会会員の中島芳栄さんの個展がひらかれたと聞き、今回訪ねてまいりました。

野辺山の八ヶ岳高原ロッジアートサロンにおいて、「書を彫る—芳栄展」と題された個展が、8月中旬の1か月間開催されました。八ヶ岳高原ロッジの中島さんの個展は1986年よりすでに7回を数えるということで、ご出身地の静岡県沼津市から多くの御客様がご覧にみえたそうです。

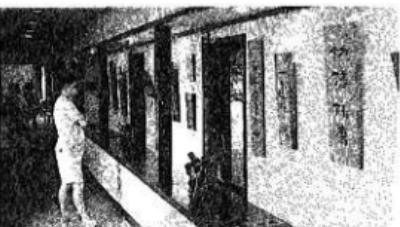
中島さんが絵画で描かれているのは、ことばをそのイメージに合致した書体で彫るという彫書で、「近代詩文」というジャンルに属するそうです。けやきや朴の木に書が彫られ、思い思いの着色がなされます。ちなみに、今回は50点以上の出品がありました。

写真の、中島さんの横に見える彫書「獨庫觀心」とは、独り座って心を観る意。ただ毎日を懶だらしく送

っている我々には、まさに必要なことかもしれません。「まっ黒な土、土のにおい、土は生きている」は、雪解けの春さき表面採集に歩くとかけらうの土から上の香りがする、そんなイメージを抱かれる方（考古学会員に限り）もあるかとおもいます。今回の展示にはありませんでしたが、「野に咲く花 ゆらゆら」は、わたしの大好きな作品です。これは中島さんの風流な山荘にいくとある陶板ですが、わたしの勝手なイメージでは、野辺山の草原に柔らかな秋の日差しを浴びてゆれる花が彷彿されるのです（これは私とある人の思い出の場面にも一致するのですが・・・）。このほか「春日遙々」「森羅万象」など数々の彫書がありました。

様々な事に果敢にチャレンジする中島さん、自然を愛し、お酒をたしなみ、大いに語る中島さん、そんな中島さんのファンは会員のなかにも多いと思います。中島さんの好奇心は今後も色あせることなく続くでしょう。

（つづみ）



土偶のつくりやき



会員の身近なたより

福島邦男

きたる10月2・3・4日、望月町出身の書家比田井天来の生誕120周年記念展が町をあげて催される予定で、目下その準備をおおわらわです。書道界においては、全国レベルで注目されているこのイベントの成功が気掛かりです。

その他も、強歩大会・町誌編纂・歴史民俗資料館運営と身体を休める暇もなく仕事が日程押しです。

堀龍みさと

佐久市瀬戸山で発掘作業をしましたが、変貌著しい佐久平の開発に心が痛んで仕方ありませんでした。

現場にいたタヌキ、キジ、ヒバリのさえずりが頭から離れません。

助川朋広

御無沙汰しています。自分の力不足ゆえ、仕事がたまってしまうばかりです。

山井会長、堤さんのお祝い当面には仕事がはいっていますので、申し訳ありませんが欠席させていただきます。由井会長、堤さんのお二人に「おめでとうございます。」と遠方より言わせていただきます。

白倉盛男

療養中欠席ばかりで失礼をしておりましたが、やっと快復に向かいました。

今年度は一心に勉みたいと考えています。宜しくお願い致します。

若林弘子先生の講演会と
第5回佐久地方遺跡発掘調査報告会のお知らせ

6 1991年調査の総括
講演会 講師 若林弘子先生
演題 「高床式建物の源流」

来る10月24日高床建物の研究でご造詣の深い若林弘子先生の講演会と第5回佐久地方遺跡発掘調査報告会を下記のとおり行います。講演会は日本の高床建物のルーツを探り、また、報告会は佐久地方の発掘遺跡の情報を得る良い機会です。多数ご参加下さい。

記

- 1 日 時 平成4年10月24日午後10時より
報告会 午前10時～12時30分
講演会 1時30分～3時
- 2 場 所 COME21(佐久市中込田中央名店)
- 3 プログラム
報告会 1 穴沢遺跡(小海町)
2 西一本柳遺跡(佐久市)
3 寄山古墳(佐久市)
4 塩野西遺跡群(御代田町)
5 石神遺跡(小諸市)

1992年度 佐久考古学会役員

- 会長 山井茂也
副会長 白倉盛男、黒岩忠男、井出正義
地区役員
I地区(軽井沢 御代田 小諸) 高地正雄 森川宗治
II地区(北御牧 浅科 立科 望月) 福島邦男 倉見 渡
III地区(佐久市) 佐藤 敏 木内 挑 羽田野伸博
IV地区(白田 佐久町 八千穂 小瀬) 佐々木春彦 佐々木廣雄
V地区(北相木 南相木 南牧 川上) 土屋忠芳 中島房榮
VI地区(佐久地区以外) 田中正治郎
会計監査 井上行雄 山井 明
事務局長 白田武正
事務局幹事 島田恵子 林 幸彦 高村博文 佐々木宗昭
森泉かよ子 小林眞寿 寺島俊郎 堀 隆
羽毛田卓也 三石宗一 小山岳夫

INFORMATION インフォメーション

私たちに新しい強力な仲間が増えました。3名の新入会員の方はいずれも長野県埋蔵文化財センターに勤めの考古学のエキスパートです。これからどしどし「佐久考古通信」投稿を予定されている皆さんです。

- 青沼博之 〒385 佐久市岩村田2166-5 コーポ相生3号 ☎(0267)68-8619
桜井秀雄 〒384-01 佐久市中込299-2 コーポまほろば221号 ☎(0267)63-2087
藤原直人 〒385 佐久市岩村田3192-3 ☎(0267)68-8581

♪ 編集後記 ♪

本誌のようなジャーナル誌を編集していく、いつも頭にくるジャーナル誌がある。そう、皆さんご存じのあの「黄色く薄い月刊誌」である。通常号1300円、臨時増刊号3800円(約100頁)、年間購読料25000円也。「中ッ原」が高額としかられたが、某誌はどうだろう。そして内容は…。考古学の全国的な月刊誌としては唯一であるのに、その姿勢たるや疑いたくなる。

加えて編集部にも常識が無いようだ。以前寄稿を依頼されたが、礼の一言もなく本誌の一冊さえ届かなかった。私と共通の感情・経験をお持ちの方も多いと聞く。反面教師として良識ある編集を心掛けよう。(つつみ)

佐久考古通信 No.55

発行所 佐久考古学会

〒384-01 長野県佐久市桜井879
白田 武正 方
郵便番号 長野 7-2842
☎(0267)63-8133

発行者 山井 茂也

編集者 堀 隆

印刷所 ほおづき書籍社



佐久考古学会
シンボルマーク

矢出川遺跡関連小特集号

★ 目 次 ★

■ 佐久の遺跡と遺物 奈良時代2 — 芝宮遺跡群と海獣葡萄鏡 —	1
■ 山井茂也会長、地域文化功労者として表彰!!	2
■ 講師として — 由井茂也に聞く、半生の一場面 —	3
■ 矢出川遺跡群保存に向けての経緯	6
■ 矢出川遺跡の細石刃文化について	8
■ 会員訪問 — 第2回 倉見達さん —	10
■ 上偶のつぶやき	11
■ インフォメーション	12

佐久の遺跡と遺物
パート6 奈良時代2

— 芝宮遺跡群と海獣葡萄鏡 —



この10年、高速道路を念願においた圃場整備や工場用地・区画整備事業などの大規模開発が計画され、これに伴う発掘調査が増大し、現在に至っている。こうした事業が増加した佐久平北部の畑作地帯(岩村田・長土呂付近→信越線間)では、それまではあまり大規模な開発がなかった。

昭和59年から数年に及んだ佐久市西屋敷一帯の圃場整備に伴う調査(佐久市・小諸市・御代田町)によって古墳時代後期から奈良時代を中心とする古代の大規模なムラ(鶴ヶ原屋遺跡群・前号掲載)が発見された。その後昭和62・63年、高速道路に伴う発掘調査(栗毛坂・枇杷坂遺跡群)においても平安時代のムラが発見され、畑作地帯の開発の歴史が、古墳時代後半から開始され、平安時代になり周囲へと拡大してゆくことがはっきりしてきた。



そして現在、仙林湖北側に鶴ヶ原屋遺跡群と同様な開発拠点となる大規模なムラが現在発見されようとしている。

長土呂遺跡群の聖原遺跡(流通團地・高速道路)では数年に及ぶ調査が実施され、すでに800軒にのぼる古墳時代後半から平安時代のムラが発見され現在も調査中である。この遺跡からは瓦塔(かとう)が出土し、平安時代には佐久地方で仏教が信仰されていたことが判明した。



聖原遺跡に北接する芝宮・中原遺跡(高速道路)においても数百軒に及ぶとみられる同時期の聚落が調査されつつある。この3遺跡が鶴ヶ原屋遺跡群と同様以上の規模をもったムラになりそうである。この一帯の中心地となりそうな芝宮遺跡群からは出切りと直交する幅5~10m、深さ3mの人工溝や大型掘立柱建物址が検出され、海獣葡萄鏡や銀鏡の馬具・金環(写真)など古墳に副葬される遺物が出土している。

海獣葡萄鏡は光形で、直径6cm、重さ84gと小型である。全国では30数例、県内では2例目である。鑄型からはかなり多くの鏡が造られたらしく海獣や葡萄は非常に不明瞭である。

(寺島俊郎)



芝宮遺跡群の馬具・鏡・金環

おめでとうございます！

1992年11月6日

由井茂也会長 地域文化功労者として表彰される!!



▲昭和28年、馬場平遺跡の調査にて。岩崎卓也・
麻生俊・芹沢長介・吉崎昌一・戸沢充則氏らと



▲昭和33年、(故)直良信夫博士を雨の三国峠に
案内して



▲昭和29年、矢出川遺跡の二次調査にて。芹沢
長介・吉崎昌一・戸沢充則氏らと



▲平成元年、自らが発見した柏垂遺跡において
旧石器時代の若手研究者に囲まれて。

本年11月6日、山井茂也会長の地域に根ざした文化活動が評価され、文部大臣より地域文化功労者として表彰されました。昭和58年に設けられたこの表彰では、団体も含め毎年全国でおよそ100名程の人しか栄誉を授かる機会がないのだそうです。素晴らしい表彰、由井会長はんとうにおめでとうございます。

矢出川遺跡発見40周年をひかえ、保存運動山場に！ — 矢出川遺跡関連小特集 —

1953年、矢出川遺跡において日本縄石刃文化の感動的な発見がありました。そしてたる1993年には、その発見から40周年を迎えます。

これを節目に、矢出川遺跡の保存運動も大きな山場を迎えようとしています。1983年の矢出川遺跡保存対策特別委員会設置から早10年、来年にはなんとか矢出川遺跡の国指定にこぎ着けたいところです。

今までの保存運動の歩みを振り返り、また矢出川遺跡の考古学的な価値を知る。そして矢出川とともに歩

んだ由井会長の來し方などもうかがう。そんな構成で本号は「矢出川遺跡関連小特集」としました。

岩宿遺跡などとともに日本の旧石器時代を代表する矢出川遺跡、そしてハシバミの群落などとともに水期の原景観をとどめる野辺山原。この地が「旧石器のふるさと」といわれる所以はここにあります。

会員が一斉開拓し、ふるさとの矢出川遺跡を、よりよいかたちで未来に伝えようではありませんか！



山井茂也の言葉
「農民の自立をめざす運動」
「農民の自立をめざす運動」
「農民の自立をめざす運動」
「農民の自立をめざす運動」

闘士として

—由井茂也に聞く、半生の一場面—

著　者　著　者

日露戦争勃発、日本海海戦前夜の明治38年1月23日
山井茂也は川上村御所平に生れた。そして今、彼の中に88年の歳月が積み重なりつつある。

著　者　著　者

この一文は、この夏の終り、山井茂也が静かに語ってくれたこれまでのエピソードの幾つかを短く構成したものである。

二

『信州少年』13、14歳頃の多感な少年であった私の心をくすぐった雑誌があった。史跡や名勝の紹介・科学的な読み物などどれも少年の好奇心を満たすのに十分であったが、そのなかでの遺跡の散策や遺物の探集の記事が、思えば私を考古学へと導いた糸口であったのかもしれない。かつての県知事であった林虎雄や下伊那郡で自主青年連盟に身をおくいた羽生三七なども『信州少年』の常連の投稿者であった。

それは大正年間のことである。寒村の川上で雑誌など買えようはずもない。長野や甲府にいたる知人に購入を頼んだり、月遅れのものを東京の古本屋から郵送してもらい購読したことを憶えている。

三

時代が大正から昭和へと変わるそのとき、私はちょうど二十歳を迎えた。その頃農村は貧困化し苦しい農民生活の実感はつるばかりで、私の中でしだいに社会問題への関心が高まっていった。その折り、新潟県木崎村で4年越しの小作争議の結果無産農民学校が誕生したことを知り、これに学ぶべく新潟へと旅立った。

木崎争議から学んだ、農民の自立と团结という貴重な教えを、「北越の農村から」という文章にして東信新報に投稿したのはその後であるが、この信州の片田舎

での農民への自立の呼びかけは、これら最初のものであったと思う。

プロレタリア文学者で農民運動の指導者でもあった高倉輝を招いて川上の青年団で話をしてもらったのはその数年後のことである。演説は農村の貧困問題についてで、200名を越える聴衆が会場を埋めた。なお、昭和5年御牧ヶ原の事件の際、別所温泉に身を置いていた高倉が、私の身を案じてよこした書簡は今でも大切にしまってある(次頁)。

著　者　著　者

ここで、昭和5年に由井茂也が竹内園衛らと結んで行なった御牧ヶ原大運動会での反戦ビラの撒布事件について紹介しておこう。それについては、大井隆男の『農民自立運動史』に詳しい。

『竹内園衛が版宣をもって飄然と川上村の由井茂也を訪れたのは昭和5年5月のことであった。二人で反戦プランを練った。機会は5月27日、竹内の生地=御牧ヶ原で行なわれる大運動会に反戦のビラを撒こうというのである。この運動会は日露戦役最大の勝利=日本海海戦を記念して行なわれたもので、北佐久郡下の全小学校尋常科3年以上が参加した。昭和5年は第25回にあたり、参加児童1万人観客3万人、海軍中将中島資



御牧ヶ原大運動会



由井

久
井
高
輝
川
山
別
所
温
泉

手
紙

三
月
廿
日

高倉輝からの手紙

別所温泉にいた社会主義活動家高倉輝からの由井あての手紙。昭和5年6月19日の消印がある。由井の身体を気づかう書き出しで、社会主義運動で犠牲となる風潮があるが、それ自体は小児病のようなもので決して好ましい事ではなく、極力犠牲となる事を避けてほしい旨が記してある（初公開、協力＝上原邦一氏）。

朝の参列もあった。

山井と竹内は文書を練り、由井が原紙を切り、柳沢恰が印刷、①治安維持法反対・②軍国主義反対・③帝国主義反対・④天皇制打倒・⑤戦争を記念する運動会の廃止の5項目を盛込んだ反戦ビラが作られた。竹内の回想によると運動競技に見とれている親衆の隙をうかがい風呂敷や脱いた上着のポケットにビラを忍ばせたのだという。問題はこれに止まらなかった。運動会に出席した中島中将は引き続き小諸小学校講堂で講演したが、この時玄間に脱いだ彼の長靴から反戦ビラが発見され大騒ぎになったのである。犯人は小諸署の厳重な捜査の結果柳沢恰ということが判明し、警官6名が柳沢宅を包围して逮捕、1週間ほど拘留されて厳しい尋問を受けた。彼はビラは自分が書いたと主張して最後まで口を割らず、官憲側も警備の虚を衝かれた不面目もあって拘留で終った。

一方、山井茂也も駆在巡査の家宅捜査を受けた。検束された竹内の自白が新聞に載ったからだというが、事件発生の翌日、別所に住む高倉輝の使いで鈴木茂利美が長村（現実田町）から自転車で駆付け、柳沢恰がビラは自分が書いたと由井に真似た筆跡を示して頑張っているから、絶対に事実を否認するように伝言した。山井は指示に従い高熱をよそおって取り調べを引き延ばし、捜査でも証拠物が発見されなかつたため、有耶無耶の裡に事件は落着したのだという。」

（大井1980、pp376～378）

＊＊＊＊

京都大学から別所温泉に身を移し、上小地方の農民運動や社会主義活動の指導、援助にもあたったプロレタリア文學者の高倉輝が、由井茂也に宛た書簡が残っている。日付は昭和5年6月19日とあるので、御牧ヶ原の事件直後の書簡であることがわかる（上図）。

＊＊＊＊

内容は、病身の由井を案じる書き出しで、例の件（=

御牧ヶ原の事件）では、極力犠牲となることを避けてほしい、犠牲心の風潮は小児病のようなもので、そのつもりで今回の件に向かって欲しいとあり、犠牲にならぬよう繰り返し説かれているのが印象的である。

さきの引用にみる事件直後の高倉の配慮が、この書簡にもはっきりと読み取れる。手紙の中にある竹内君・鈴木君とは竹内罔斎・鈴木茂利美のことである。

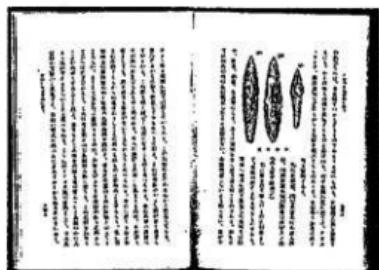
□

反戦行動や農民運動への参加から「アカ」というレッテルを貼られた私には、それ以後就職の口など有りようはずもなかった。そしてようやく佐久通運に就職ができたのは、昭和13年頃、30才を過ぎてからのことであった。

□

昭和17年頃、私は大野雲外の『日本古代遺跡遺物の研究』という本を手にした。その「石槍の形式分類に就いて」という文章のなかに、南佐久郡大澤村（現佐久市大沢）出土の石槍が掲載されており、私の関心をさせた。

この頃といえば、真珠湾攻撃が始まり日本は暗雲の



大野雲外の紹介した佐久市大沢の石槍
三本のうちのもの

道をたどっていった時代であった。しかし私の考古学への興味は途切れるものではなかった。

□

矢出川での細石器の確認は、戦後の混乱期ではあったが、皇国史観から解き放され、新しい歴史をむさぶように求めたそんな気運の中から生れた。

昭和28年12月26日、まさに年も暮れようというその時、私と芹沢長介・岡本勇の二人は、吹雪の矢出川にいた。人影もない荒野の果てで雪中を徘徊する黒い一団、私は遠くの銃声が気になり、熊と間違えられて撃たれぬよう大声を張りあげた。雪も激しさを増し、寒さにいたたまれない。もうあきらめて帰ろうと岡本さんを止めさせようとしたら、芹沢さんが「あれは闘士だから大丈夫だ」といって止めさせない。ふと私はおもしろかった。・・・ああ闘士か。そして娘かしかった。

□

やがて芹沢さんが黒い塊を掘り出したが、決っていわからぬ。矢出川に洗いに向かったが吹雪で先が見えない。仕方なく芹沢さんはその塊に最後の手段を加えた。白の温かい体液を往々かけたのである。その瞬間、黒い塊は日本で初めてという「細石核」に変身した。やがて岡本さんも一本の細石刃を見付けた。とっさに芹沢さんは「消すな、消すな」と声をかけた。また霜柱かもしれないと思いつめたのである。しかし細石刃は決して消えることがなかった。

私にはいつも簡単にみつかったこの石器が、どうして日本で初めてという大きな意義をもつのか不思議でならなかった。それならとくに、言わぬうちに採集していたのに・・・様々な思いや興奮からその感は裏つかれなかった。

小指の爪ほどの右肩が、細石器というものだと知ったとき、夢見るような懐疑と好奇心から私とこの右器とのにらめっこが始まったのである。

□

矢出川の本調査の前夜、芹澤さんたちが学生とともに私の家に泊まつた。彼らに矢出川の石器を見せると生れて初めてみる石器に驚くだろうとひそかに思っていたのに、誰も一言もださない。しばらく沈黙がつづいてから誰かが「どうしちゃったんだ」といふと、麻生優さんが「息が止まっちゃった」といって溜息をついた。ようやく緊張がほぐれて、皆が大声で笑いだした。

□

その矢出川の調査には、あの岩宿の発見者である相沢忠洋さんの顔もあった。その折り、相沢さんはカメラをもってきて私に記念写真を撮ってくれといった。ただシャッターを押せばよいのだという。私は生れて

このかたカメラなどいじったことなどなかったので、彼写体である相沢さんにレンズを向けないままシャッターを押してしまった・・・・・。

□

群馬県赤堀村の相沢さんの自宅を訪ねたことがある。相沢さんの家は遺跡の上にあった。そして相沢さんはその家の遺跡を掘ってみるのだが、大家に「借家人の分際で人の家を掘りちらかすな」と怒鳴られたのだという。そこで相沢さんは、家の縁の下を、夜懐中電灯をつけて掘ったと聞いた。一方、布団を解いては、その縁を石器の下に敷くのに使っていた。自分はというと、それこそ藁の中で寝るのだという。

ここにも面白い人間がひとりいた。

□

いつもニコニコしていて、子供のように純真な心をもった相沢さん。戦後の食糧難であったその時代、我が家で炊いた温かい白い飯をすすめても、持参した黒い麦の握り飯を新聞紙で包んで食べていた。彼一連の強がりと気遣いであったのかもしれない。

その相沢さんも数年前に逝ってしまった。またひとり同志を失ってほんとうにさみしい思いがする。

□

さて、農民運動や考古学との関わりについて私の思いつくままに話してきた。

最後に、これは以前にも述べたことだが、私はこれまで考古学という学問の裾野の広さの中に、大きな喜びを見出してきた。学問の高い山の頂点を目指し競っている研究者も当然いる。しかし、裾野には幅広の新鮮な研究分野があり、そこにある私たちの役割もまた大切なのである。私の考え方とは、そうした学問の裾野に印されたひとすじの道のようなものかもしれない。

※ ※ ※

「年をとってくると、盆が過ぎたり、子供が帰ってゆくのがさみしくて」と、つぶやくように由井が言ったのが印象的であった。しかし、優しい眼差しで語りかける由井茂也は、いよいよ健在なのである。時は流れでなく積み重なるのだ、そんな苦樂を耳にしたことがある。私は、夏の終りの短い晴れの中で、由井の中に積み重なった時をしばし垣間見ることができた。

由井茂也から、農民運動との関わりあいなどの話を聞くにつれ、私の目の前にいるこの穏やかな人間とその内なる激しい情熱というものの剛たりが、ある意味では不思議でならなかった。

そして由井自身の懐述である「ああ闘士か。そして娘かしかった」という言葉に、すべてが凝縮されているように、志をもって歩んできたひとりの闘士の姿がここにあるのである。

(聞き取り1992年8月25日 つづみ)

矢出川遺跡群保存 に向けての経緯

矢出川遺跡群は、長野県南牧村大字二ツ山（通称・野辺山・矢出川）に所在する。

この遺跡は由井茂也氏により昭和10年代から黒壁石の破片が散在していることがすでに確認されていた。当時この地は原初的景観をそのままとどめていたが、終戦後、外地よりの引き揚げ者をはじめ諸方面よりの開拓入植がなされ、その結果、現在のような日本有数の高原野菜生産地にまで開発された。

次に見出しから今日までの保護の経過を記す。

1953（昭和28）年明治大学芹沢長介先生・明治大学考古学研究室・山井茂也氏により最初の発掘調査が実施された。

1963（昭和38）年さらに、明治大学考古学研究室・由井茂也氏により発掘調査が実施され、また、信州大学・信州ローム研究会等数次にわたり発掘調査が実施され、その結果、縄石器文化研究の学史の上でも意義をもつ重要な遺跡であることが確認された。そして矢出川文化として関係各方面より注目され続いている。

1974（昭和49）年～1981（昭和56）年、京都女子大学考古学研究会による野辺山原の詳細分布調査。

1979（昭和54）年～1981（昭和56）年には南牧村当局の援助と協力により八ヶ店東南麓における洪積世末期の自然文化の共同研究及び矢出川遺跡群総合調査が実施された。その成果はすでにシンポジウムで発表（報告書）されているように矢出川第1遺跡を中心に92ヶ所にも及ぶ先土器時代の遺跡群が確認された。さらに矢出川遺跡沿岸の湿地帯からは遺跡とともに原生植物群落や泥炭層など自然環境要素も確認されている。

1953（昭和28）年発掘以来、縄石器の極めて貴重な遺跡であることがすでに確認され、その段階で保護保存の方策をなすべきであった。がしかし、それが遅れ、遺跡周辺のほぼ全域が野辺山開拓者の手に分割され開墾されるようになった。また、東京大学の宇宙電波観測所も建設された。その間も保護保存の必要性を南牧村当局・村民と話し合ったが、思うにまかせなかった。

1981（昭和56）年、南牧村当局は、遺跡の重要性に気付き、遺跡の中心部4,000m²を買い上げて、村指定の遺

跡とした。

1981（昭和56）年6月7日、長野県考古学会において「矢出川遺跡群とその自然環境を保存するために（アピール）」と題して、県考古学会会長人沢和大、佐久考古学会会長山井茂也、矢出川遺跡群総合調査団代表戸沢充則によりアピール文が提出された。その後においても由井茂也氏は、地元南牧村を中心とし、保存に力を注いできた。しかし、県考古学会においては、事務局の異動もあり地元考古学会においても組織的に具体的な保存運動が展開されなかつた。一方、野辺山地域においては、開発の手は厳しく、遺跡周辺の矢出川流域における当時の自然を残す湿地帯を含むダム建設・スキーリング建設・ゴルフ場建設等の噂がでるようになつた。また、野菜畑は深耕又は削平、客土が進行する事態もでてきている状況である。

1983（昭和58）年、長野県考古学会・佐久考古学会において「矢出川遺跡保存対策特別委員会」の設置が決議される。また、県考古学会秋季大会を佐久市が開催され、矢出川遺跡保存へ向けての大会宣言がだされる。1983（昭和58）年7月10日、佐久市大字岩村田・浅間会館において第1回矢出川遺跡保存対策特別委員会が開催され、保存の方向と内容が次のとおり検討された。

- 1 日本全国に類のない非常に重要な遺跡であるためすでに村指定になっている、4,000m²を中心に遺跡指定地を拡大して約10倍とする。
- 2 矢出川遺跡内に存在する湿地（貴重な植物と泥炭層）等の保存。
- 3 総合調査で確認された92地点の分布地は、農業と遺跡保存を両立させることを基本とし、客土等により深耕をしないむ方向にもっていく。

会長に山井茂也氏、副会長に林茂樹氏と戸沢充則氏の一氏を決定。他の役員は、小委員会を結成し、小委員会で決める。なお、小委員会は、矢出川遺跡保護保存の推進母体となり、保存運動を展開していくことを一任された。

1984（昭和59）年、対策特別委員会・小委員会は『信濃考古No.79』を矢出川遺跡群保存特集号とし、「矢出川遺跡第2号」・冊子「矢出川遺跡群」を発刊した。これらの資料をもとにカンパ活動も盛んに行ない資金面も充実した。また、南牧村議会に「矢出川遺跡群国史跡指定の推進ならびに矢出川湿原の長野県天然記念物指定による保護対策の推進に関する請願書」を提出する

等、活発に保存活動を展開した。10月11日には、文化庁河原主任調査官が現地視察に訪れ、保存運動は一歩に達し、この日程にあわせ、これまでの保存運動をまとめた資料『矢出川遺跡群と自然を守るために』の作成、及び、10月27・28日には野辺山社会体育館で展示会「野辺山高原の自然と遺跡を知ろう」を開催した。

しかし、文化庁河原主任調査官の現地視察の際に県文化課は全面的に保存を推進することを約束したまま、運動の前途はみられなかった。

1985(昭和60)年、八ヶ岳ファミリーパーク建設に関して要望書の提出、南牧村村長・教育長に矢出川遺跡群ならびに温湿保存に関する質問書の提出を行なう。

1987(昭和62)年10月18日に県文化課・県考古学会・対策特別委員会が会談し、保存運動の経過と現状について分析・検討した結果、今後の方針を下記のように二者で確認した。

- 1 昭和60年度において検討してきた、矢出川第I遺跡(村有地)の4,000m²を含めた1ヘクタールの遺跡地を確保し保存を推進することを再確認した。
- 2 当面、矢出川第I遺跡を中心として、あらゆる努力をし、可能な範囲で国史蹟指定をすみやかに実現する。
- 3 これを拠点として逐次、追加拡大して遺跡群を保存する。

1990(平成2)年、佐久考古学会12月例会にて、矢出川遺跡群保存運動について話し合い、矢出川遺跡群保存対策特別委員会のありかたを再検討することと、例会のテーマとして「矢出川遺跡群の保存運動」を取り上げることを決定した。

1991(平成3)年5月26日、佐久市浅間会館において県文化課の同席するなか、県考古学会・対策特別委員会が、長野県教育委員会教育長名で送付された平成3

年5月8日付けの「矢出川遺跡の史跡指定について」を検討し、南牧村が公有地化した約4,000m²を国史跡に指定することが現段階で最善のことであることを確認し、これを拠点として追加拡大していくこと等を長野県教育委員会に要望することとなる。

※ 対策特別委員会・県考古学会の確認事項として、南牧村が公有化した約4,000m²を早急に国史跡に指定することが最善であるとし、約4,000m²の国指定後も、これを拠点として周辺を追加拡大していく方向で努力し特に周辺における6地権者37,555m²を含めた41,736m²を最低指定拡大範囲として県教育委員会に要望することを決定する。

1991(平成3)年6月17日、長野県考古学会長名で「矢出川遺跡の国史跡指定についての要望書」を長野県教育長に提出する。

1992(平成4)年7月19日、県考古学会総役員会において、その後の経過について、同席した文化課から説明を受けた。その結果、村有地指定については、隣接地権者の承諾を得ることが必要との指揮が文化課から村教委になされて、接触中であることが明らかになった。ただし、この点については、承諾を得るのではなく、指定の主旨説明が本来の行為ではないのかを、再確認するよう文化課に要請した。

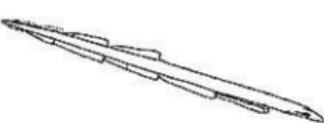
1992(平成4)年7月29日、南牧村において文化課と村教委の打ち合わせがあり、対策特別委員会・県考古学会・佐久考古学会も各代表が同席し、主に昭和62年以降の経過と現状が話し合われ、隣接地権者の承諾については必要がなく、遺跡の重要性と指定の主旨説明をして将来に向けての理解と協力を求めることが確認された。また、村教委としては、村有地の指定申請に向け積極的に村長にも話をし対応する旨が、教育長から表明され、現在に至っている。

以上の経緯を記録し今後の保存運動の資としたい。

(平成4年9月現在 作成=事務局)



矢出川遺跡の村有地部分（村指定史跡）



細石刃をつけた槍先（デンマーク出土、長さ23cm）

矢出川遺跡の細石刃文化

日本列島における細石刃文化の確認

1953年冬、日本考古学にとって記念すべき出来事がありました。矢出川遺跡において日本列島で初めて細石刃文化の存在が確認されたのです。細石刃とはカミソリの刃のような小形の石器、細石刃石核とはそれをはがした母体のことです。そして矢出川を特徴付けるのはいわゆる半円錐形の細石刃石核でした。

一方、その5年後の1958年、矢出川の細石刃文化とは性格を異にする新潟県荒原山遺跡の細石刃文化の調査もなされました。舟底形の細石刃石核と丸底型彫刻刀型石器をもつ細石刃文化が確認されたのです。

1950年代、日本列島において対峙する二つの異なる細石刃文化の発見が相次いでなされたことになります。

矢出川遺跡の細石刃石核

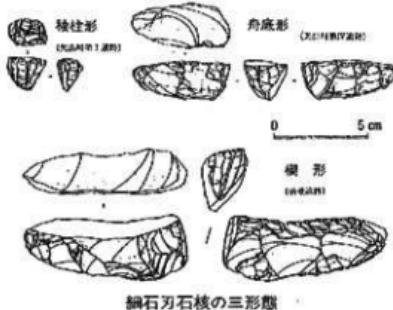
日本の細石刃石核は、その技術的・形態的特徴から大きくは次の二つに分けて考えることができます。すなわち「稜柱形」「舟底形」「楔形」です(下図)。そのうち矢出川の細石刃石核は「稜柱形」としてとらえることができますが、「半円錐形」「野岳休場型」あるいは「矢出川型」などと認識される場合もあります。

矢出川遺跡の細石刃技法

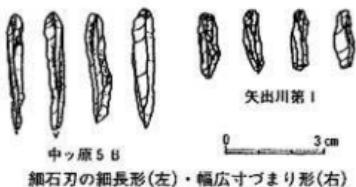
さきの三つの細石刃石核を生み出す技法としては、「稜柱形」の製作に関する「矢出川技法」、「舟底形」の製作に関する「ホロカ技法」、「楔形」の製作に関する「湯別技法」や「西海技法」があります。

矢出川遺跡の細石刃

矢出川の細石刃は、「湯別技法」による細身で長い細石刃に比べ、幅広すづまりのかたちをみせます(上図)。



細石刃石核の三形態



矢出川第1
中ッ原5B
細石刃の細長形(左)・幅広すづまり形(右)

また、細石刃は、柄に装着するにあたって不適合な部分、例えば頭部や末端部が折り取られて(折断)使用されたと考えられます。そしてそれは柄に単独で装着されたのではなく、複数が埋め込まれる組合せ道具として使用されたことが予想されます。細石刃を埋め込んだ道具は残念ながら日本では発見されていませんが、セベリアや中国、そのほかでの出土例を参考にすることができます(7頁下段図)。

矢出川の細石刃文化に伴う石器

矢出川の細石刃文化に伴う石器としては、削器・砸器が主で、ナイフ形石器や尖頭器・彫刻刀形石器を伴わないのが特徴です。

矢出川遺跡の編年的位置

矢出川遺跡にみるような「稜柱形」細石刃石核を持つ遺跡は、中部高地や南関東では、細石刃文化の古い段階に位階付けられているのが大方の理解です。

例えば細石刃文化を四段階に区分するならば、

第1段階 稜柱形細石刃石核のみが認められる段階

第2段階 稜柱形細石刃石核に加え、舟底形細石刃石核が認められる段階

第3段階 楔形細石刃石核が認められる段階

第4段階 楔形細石刃石核に、尖頭器や石斧・土器が伴う段階

と区分する考えがあります。この場合矢出川遺跡は第1段階に、矢出川遺跡に隣接し「楔形」細石刃石核を持つ中ッ原第5遺跡B地点は第3段階に相当させることができます(次頁図)。

矢出川遺跡の年代

矢出川遺跡それ自体の年代については、今のところ出されていません。しかし、矢出川と同様な「稜柱形」細石刃石核を持つ静岡県の休場遺跡では、00000年±0000年前C¹⁴年代が得られており、これを参考に矢出川遺跡の年代を今から14000年前後と考えることができます。また、矢出川の隣の中ッ原5B地点の細石器の水和層年代は12600年±1300年前となっており、これに先行すると考えられる矢出川細石刃文化の年代の参考になります。

いずれにしても細石刃文化の年代については、今から14000年から12000年前頃までの2000年間ほどの期間を考えておくことが妥当かもしれません。

段階	相模野	中部・関東	野辺山
4 12,000年前?		○	○
3	○		
2 7,700年前?			
1 14,000年前?			

中部日本の細石刃文化の移り変わりについての試案 (諫訪岡 1991より)

矢出川人のなりわい

矢出川人が狩りの対象としていたのは北方・草原性の野牛や馬などともいわれています。植物ではハシバミやチョウセンゴヨウ、コケモモやクロマメノキなどの実が食料となっていたことでしょう。

なお、新潟県荒屋遺跡の細石器からは魚類の脂肪酸が検出されており、この頃からすでにサケ・マスなどの漁獲がなされていた可能性も考えられるようになってきました。

はたして矢出川人も魚を食べていたのでしょうか。



倉見 渡さん

▲様々な楽器と歴史の文献に囲まれて



ヴァイオリン・ギター・マンドリン・ウクレレ・フルート・トランペット、そして人の身体以上もあるコントラバス。

まるでこじんまりとした管弦楽団といった、様々な楽器がひしめきあっている倉見渡さんのお宅を、望月町茂田井に訪ねました。

◆

数多くの楽器をこなされるという倉見さんは、実は青年時代を楽団員として過ごされたというユニークな経験の持ち主です。

茂田井に生れた倉見さんが、村内の伊藤先生についてヴァイオリンを習ったのは、昭和初年、16才の頃でした。同じ村内には、島倉千代子の御師でもある伊藤の流謙太郎が良きライバルとしていました。今でも好きだという「クシコスの郵便馬車」などの曲をよく演奏したのだそうです。ただ時代の背景からして楽器などに夢中になるものは道楽者よばわりをされ、ずいぶん肩身の狭い思いをして、と苦笑されました。

ちょうど二十歳のころ、音楽に志立てて上京した倉見さんは、浅草の大官太陽舞踊團の楽団員となり、およそ6年間関西から九州の西日本を中心にヴァイオ



▲レトロなデザインの流行歌の楽譜類

この他クラシックの楽譜も数多くある

▼自宅の地下を改造した整理研究室



リンを持って演奏旅行を続けました。当時のノスタイルックな楽譜が数多く保存されています(写真)。

しかし、いよいよ戦局も怪しくなった頃、内地の宇都宮において復員業務手伝のため召集となりました。

◆

戦後しばらくは茂田井に帰り農業に従事することになりますが、仲間からの誘いがあつてしばしば演奏活動にでかけます。

御存じの方も多いでしょうが、倉見さんがおのディックミネのバックバンドでコントラバスを弾き、「上海ブルース」や「ダイナ」といった名曲を演奏されていたのも戦後です。倉見さんのみのディックミネは、おおらかできっぷのいい人だそうです。

音楽活動をしていた時代は、歌を唄う機会などもあり、占賀メロディーの「月夜船」を唄ってみないかと誘いがあったこともありました。

♪ おおい そこゆくのはり船 今夜は月夜だ ど

こ行きだえ 船底いっぱい荷をつんで 築石行

きだよ 追風だよ 追風だよ ♪

そして、こんなエピソードもあります。

浅野小学校に演奏でよばれたとき、演奏が終わって

から校内をぶらぶらしていると、女の先生が得意げにピアノを弾いています。しかしながらそこそこいい演奏です。倉見さんはそれをみて、ヴァイオリンでその演奏にあわせて曲を即興で弾いてみせました。驚いた先生がなんでも即興でできるのかと尋ねると、私どもはそればかりですよ、と笑って答えられたといいます。実際、楽団では楽譜を渡され、すぐに演奏が要求されます。楽譜さえ読めない私にとっては、何ともうらやましく感じられるお話を聞きました。

◆

そんな倉見さんが、楽団での活動を休止し、茂田井に戻って農業に専従することになるのは、三十も半ばを過ぎた頃でした。お父さんが亡くなったこともあります。親戚の人などの悲願によって戻されたのだといいます。ご結婚されたのもこの頃だということです。

ところで、現在情熱を注いでおられる考古学に興味をもたれたのも十代の頃だそうです。ただ、楽団にいる頃からその後しばらくは考古学と接する機会があり

ませんでした。望月町での初期の調査である昭和53年の犬飼遺跡の発掘をなんともうらやましく見ていたということですが、発掘に参加する機会を得たのはその2年後、望月の新木遺跡が最初だということです。それ以後は望月町を中心として、川上村の三沢遺跡・小海町中原遺跡などの調査に精力的に参加されています。倉見さんの卓越された土器復原能力について御存じの方も多いと思いますが、自宅の地下にはなんと自らの復原整理室をお持ちなのです(写真)。整然とした整理室では、現在も倉門町の円光房遺跡の土器復原が着々と行われています。

◆

音楽にのめりこんだ青春時代、そして考古学に情熱を注いでいる現在、さまざまな出来事が倉見さんを包んでいます。

倉見さんの好奇心をとらえてやまないそんな関心がある限り、いつまでもお元気でご活躍されつづけることとおもい、少しばかり勇気づけられた私でした。

(10月1日訪問、聞き手 つつみ)



■ 青沼博之

今年4月から動長野県埋蔵文化財センター佐久調査事務所にお世話になっています。

月並みな言い方ですが、浅間山と佐久平の広さに感激しています。佐久平には初めての長期滞在、単身赴任でもあり何かとお世話になりますがよろしくお願ひ致します。

中信平を余り出たことがないため、顔付きの違う繩文・弥生土器や古代土器に戸惑っています。文化的の違いを感じるとともに、上器の勉強をしなければと思っています。こちらの方もよろしくご指導下さい。

当センターの発掘調査は、上信越道関係分が終盤を迎えるましたが、新たに北陸新幹線分が始まりました。20名の職員一同力を合わせて取り組んでいますが皆様のお力におすがりすることも多々あるかと存じます。調査現場、発掘事務所へお気軽に立ち寄り頂きご指導願えれば幸いです。

■ 桜井秀雄

この度入会させていただきました桜井です。この四月より県埋文センター佐久調査事務所勤務となりました。大学入学以来、7年ぶりに生まれ育ったこの佐久の地へ帰ってまいりました。

日々、浅間山に包まれながら発掘していますが、久しぶりの浅間山は、とてもなく雄大で思わず圧倒されてしまいます。以前はなんということもなく眺めていたのですが……。そして何よりも季節によってこんなにも趣が違ってくるものなのかと改めて浅間山のもう底力に驚いています。古代の佐久人はいったいどんな気持ちでこの浅間山を見あげていたのだろうかとふとそんなことを考えてしまう毎日です。

■ 藤原直人

この4月に長野県埋蔵文化財センター佐久調査事務所に権ノ井の事務所から異動してまいりました。現在長上山の芝宮遺跡群を調査しています。

佐久に来てまだ半年で、右も左もまだわかりませんが何卒よろしくお願ひいたします。

■ 鳥居亮

現在、御代田町の塩野西遺跡群の遺物整理をおこなっております。繩文早期から繩文後期にかけての豊富な遺物と日々対面しています。

仕事としての考古学から離れては、テニスや山歩きを楽しみ、スキーシーズンが待ちどおしい日々です。

新刊紹介 川上村誌 先土器時代編

先土器時代（旧石器）のみを独立した巻として発刊している市町村誌はきわめて稀である。国内でも、神奈川県『大和市史』ぐらいの他は、寡聞にして聞かない。先土器時代編の刊行は馬場平や柏垂遺跡を抱える川上村ならではのはからいとして評価されるだろう。

真をめくってみる。500頁にわたるその内容もきわめて充実していることに驚く。やさしい旧石器の解説・遺物の写真と図示・遺跡の特徴や人々の暮らしよりの再現などが、余すところ無く伝えられている。執筆は由井明・白倉盛男・山井茂也氏、そして京都女子大考古学研究会のOBの方々である。由井氏や鈴木忠司氏の指導のもと1970年代に同研究会が行なった野辺山原の地図など分布調査活動の成果が本書の核をなしている。すでに家庭に入られている同研究会のOBの方々が、これだけのものをまとめられたことに感動する。

ただ、一冊1万円というのは、高額すぎる。市町村誌の手頃さ・一般性を考えると5千円以内におさめてほしいものだ。申込みは川上村教育委員会まで電話で

川上村教育委員会 ☎ 0267 (97) 2600

価格 10,000円 送料実費（着後、代金振込み）

発見、縄文の福耳！

御代田町塩野、古刹「真乗寺」の手前の滝沢1.遺跡から縄文時代の珍しい耳型土製品が発見されました。

その耳型土製品は、ふつうの人の耳よりはやや大きめのいわば福耳で、縄文後期の横円形の土坑から発見されました。いわば墓壙に副葬された状況を想像させます。

こうした耳型土製品の発見は、全国でもかなり稀な例と考えられます。

このほか、滝沢1遺跡の縄文後期の墓域からは、石棺内から人骨が検出されたり、ユニークな彫刻の滑石製ペンダントが出土したりと話題が豊富です。また、敷石住居址もまとめて発見されています。

高速道本線の調査・そして箇場整備に伴う調査によって、浅間南麓の縄文文化が次第に明らかにされつつあります。



INFORMATION インフォメーション

長野県考古学会30周年記念大会のお知らせ

長野県考古学会30周年の記念行事として「中部高地における弥生集落の現状」と題する研究会が下記の通り行われます。佐久はもとより県内・周辺5県の実態を知る上で大変有意義な資料が公表されます。広く他の地域を見て地元を知りましょう。県考古学会員以外でも参加可能です。参加希望者は小山舟舟(0267-67-1202)まで。

記

- 1 日時 1992年12月12日午後1時から13日午後3時半まで
2 場所 松本市中央公民館(松本城近く)

- 3 テーマ『中部高地における弥生集落の現状』
4 内容 県内9地域・県外5地域による発表

♪ 編集後記 ♪

「コロンブスを発見したアメリカ人」という言葉を聞いた。1492年、丁度今年から500年前コロンブスはアメリカ大陸へと到達した。しかし先住の原アメリカ人はすでにこの大陸に2万年前からいたのだ。從米四部劇をみて白人=正義・インディアン=野蛮という構図しか描かれずにいた。反して映画ダンスウイズウルブスはインディアンの豊かな世界観を見事にとらえた。

一方的な文明社会のパラダイムのみではなく、先住民・現生少数民族等の豊かな世界観に学ぶことこそ、病める文明社会に今必要とされるべきことではないだろうか。

(つつみ)

佐久考古通信 No.56

発行所 佐久考古学会

〒384-01 長野県佐久市桜井879
白田 武正 方
郵便振替 長野 7-2842
☎0267 (62) 8133

発行者 由井 茂也

編集者 岡 隆

印刷所 はおき書籍舗



佐久考古学会
シンボルマーク

★ 目 次 ★

■ 佐久の遺跡と遺物 一幻の寺院 (平安時代) -	堀 隆…1
■ 意外 白倉盛男 副会長	2
■ 「高床式建物の源流」 -若林弘子先生の講演から-	島田恵…3
■ 男女倉からの報告	白田 明…6
■ 立石遺跡採集の神子柴型石斧	吉澤 靖…8
■ アルプス山中の凍結ミイラから	森川宗治…10
■ 土偶のつぶやき 一会员の身近なたより	各 会 員…11
■ 第五回 佐久地方遺跡調査報告会開催さる	小山岳夫…12

佐久の遺跡と遺物

パート7 平安時代

— 幻の寺院 —



佐久地方に最初に寺院名がみえるのは、日本三代実録で、貞觀8年(866年)に定額寺となつた「妙樂寺」(みょうらくじ)の記事である。この妙樂寺は、現在の佐久市長生・呂付近に存在したともいわれるが、確實な存在地はいまだ明らかでない。

1990年、御代田町塩野の川原田遺跡の住居址から「大平寺」という墨書き1点と「大内寺」という墨書き2点が出土した。ともに10世紀初頭の土器に書かれた墨書きである。平安時代の妙樂寺とは同じ頃に、そうした文献にみえないいわば幻の二つ地方寺院が付近に存在したことを見出す貴重な発見である。

そしてこの二つの墨書きが示すそれぞれの寺院は、川原田の平安集落と深く関わっていたことも推測に難くない。ところで、現在川原田遺跡に隣接して古刹真楽寺が存在しているが、その存在は平安時代までさかのばると考えることもでき、川原田の平安集落は真楽寺と密接な関わりをもつて存在していた可能性もあるのである。それゆえ当時の真楽寺と関連深い大平

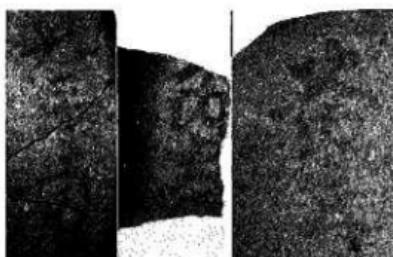
寺・大内寺の墨書きが、川原田遺跡の平安集落に残されたものとの解釈も成り立つ。



写真の、向かって右の1点が「大平寺」、他の2点が「大内寺」の墨書きである。文字の不鮮明な部分もあったので、国立歴史民俗博物館平川南教授に判読をお願いし、このように判読できた。

これらの墨書きのほかに、佐久市の鎌ヶ屋遺跡群前田遺跡からは「長倉寺」なる墨書きが見つかった。こちらの長倉は、延喜式記載の御牧「長倉牧」にも冠せられている長倉と同様である。前田遺跡そのものは寺院遺構は認められなかったが、浅間山麓のいずれかにこの「長倉寺」なる寺院が存在していた可能性が強い。

浅間山麓の一連の発掘調査によって、こうした幻の寺院の性格がより鮮明になってくる日を待ちたい。



川原田遺跡の墨書き(大平寺・大内寺)



追悼　自倉盛男　副会長

白倉盛男副会長は、本年1月7日、入院先の浅間病院で永眠された。享年80歳であった。

葬儀は1月9日佐久市岩村田の龍雲寺でしめやかにおこなわれ、本学会から多くの会員が故人を偲んで参列した。

白倉盛男先生は、明治45年3月15日、佐久町余地でお生れになり、昭和15年野沢中学校を卒業後、中込尋常高等小学校の代用教員となられたのをはじめに、田口・野沢・穂積の尋常高等小学校の代用教員として教鞭をとられた。

昭和17年には、東部第55部隊に臨時招集をうけて参戦まで外地勤務をされた。復員後は教職に戻られ、昭和25年には、地学をさらに深く学ぶため東京文理科大学校に内地留学をされ、藤本治義博士などの教導を受けた(その折りの大森英蔵の記念碑のスケッチが右にある)。そのうち、昭和35年八千穂中学校教頭、昭和38年小諸美里小学校校長をへて、昭和41年小諸南ヶ丘小学校校長をもって38年間の教職を閉じられた。退職後は、小諸市火山博物館館長、佐久市文化財保護審査委員・佐久市志趣纂研委員などを兼任され、本学会の副会長は昭和57年より務められた。

著作は、地学関係の論文多数のほか、小海・岸野・佐久・川上などの市町村誌の地質部分、また考古学関係もいくつかる文章を残された。本佐久考古通信では、「佐久地方出土の石器の石質について」(No.12)、「チャートについて」(No.17)、「考古学事始め二碑」(No.45)を執筆されている。佐久地方の発掘調査報告書でも、遺跡の自然環境部分を先生にご執筆いただくことは慣例であった。

本学会の行事では、昨年夏の総会に、一時の病から



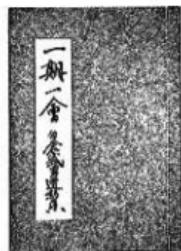
内地留学の折りの本商目録の破のスケッチ

回復されたお元気な姿をみせられ、会員一同胸を撫で下ろしたところであった。総会や会議の折りなどの先生のご挨拶には、関係者へのやさしい心配りがうかがわれ、実感を込めて「ほんとうに」という言葉を加えられるのが、口うけであった。

葬儀の灰席の席に、「一期一会」という先生の遺稿集が配られた。昨夏に先生が、もしもの場合にとみずからが準備されたという米し方の記録である。みずから生を見つめられた先生は、亡くなられる最後まで病の苦しみをご家族に口にされなかつたといふ。

この冊子をひもといてみて、いまさらながら先生の残された業績の大きさを実感するのである。それにしても、奥様と一緒にやさしく微笑みかけられる先生の写真をみると、つい明日にも、あのミニサイクルに乗ってニコニコしながら、やあ、と街角で声をかけられそうな気がしてならない。

会員一同先生のご冥福をお祈りする次第である。



白倉盛男遺稿集「一期一會」

高床式建物の源流

—若林弘子先生の講演から—

島田恵子

私が若林弘子先生のお名前を知ったきっかけは、三年前のことです。

立科町人庭遺跡で発掘調査をした時、住民の皆さんの熱心な要望によって、奈良時代の堅穴住居址と掘立柱建物址の上屋を復原して公園を作ることになりました。教委の係長さんとどのように作るかということでお各地へ見学に行ったり、すでに飛文中期の住居を復原している隅町の望月町教委の経験を伺ったりして、それなりに研究していました。その時に研究仲間のK・K氏に相談したところ、高床式建物の源流をたどって中国雲南省へ踏査・研究を続けてられる、女流建築家の若林弘子という先生がおられるから、そうした専門の先生に設計、建築をお願いしたらどうか?とアドバイスをいただきました。先生の書かれたお厚い「高床式建物の源流」「雲南への道」などの本をお貸りして、教委の方へその旨伝えたところ、とにかく会ってご教示いただこうということになりました。

今から思えばなんておしつけなことをしたと恥しくなるのですが、出版社に住所・電話番号を問い合わせて、いきなりお電話で復原の状況をお話し、一度出向いていただきたいとお願いしたのです。先生は島田さんの一生懸命さが伝わってきたからとおっしゃって下さり、お忙しいスケジュールを調整して、雪の積った立科に向いて下さいました。



高床式建物についてご講演される若林先生

その夜は、繩文時代の柱列群に注目して、全国各地の出土例を集大成し、研究を重ねている井戸尻考古館の仲間たちと先生を囲んで雲南の高床式建物のお話を聞きしました。とりわけ、私は若林弘子先生を紹介してくれたK・K氏は、早くから雲南に注目し、若林先生のお書きになった本は全部読み直しているだけに、話がはずみ時間のたつも忘れて解散したのは深夜でした。

その後、阿久尻遺跡の柱列群を見学に先生がおいで下さったのですが、佐久考古学会の総会があったためお会いすることができませんでした。その時、事務局の小山さんに、「今日、若林弘子先生が見えているけれど残念ながら会えないが、来年の講演会には先生を講師にお願いしたいと希望しているがどうかしら?」と話すと、小山さんは、「滋賀県での弥生の高床式建物のシンポジウムに先生は体調をこわされたからと欠席されたのでとても残念に思っていたので、佐久へ来ていただければいいですね」と日を輝かせていました。強力な味方が出来たことと、幹事会で快く承諾していただき今回の講演会が実現しました。

建築家および研究者

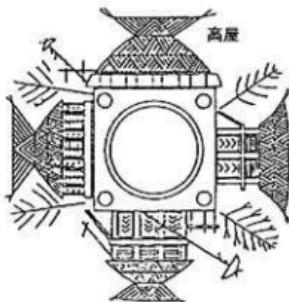
としての若林弘子先生の略歴

東京に生まれ育った先生は、明治大学工学部建築科に入學し、堀口捨己博士、神代雄一郎博士に学びました。明大では戸沢光則先生の2年後輩にあたります。

卒業後は、浜口ミホ・ハウジング設計事務所、櫛早川正夫建築設計事務所にお勤めになった後、その才能をさらに生かすため独立し、若林弘子建築設計事務所を設立されました。ビルやマンションの設計をし、同時に建築現場にも出向いて管理にあたられています。また、先生は子育てで仕事から離れていた時は、夕方になって部屋の窓から帰宅するサラリーマンを見ていると仕事が忙くて涙が出たそうです。そうしたご自身の経験から、先生の会社は子育てをしている女性た



若林先生を囲んで

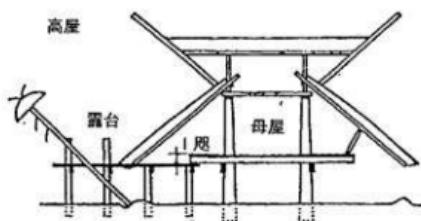


第1図 家屋文鏡建物の線画(若林弘子による)

ちも仕事が続けられるように、自宅での勤務ができるよう新しいシステムを作られて、才能ある女流建築家を育てていられます。

先生のご研究は、大阪教育大学名譽教授の島越憲三郎先生のチームと共にすでに10年にわたって、中国雲南省やタイ国の山岳少数民族の村々を踏査して、弥生人のルーツを建築学の視点から探っています。踏査七年目の昭和61年でそれらの集落の人々が住んでいた高床式住居と生活を美しい実測図と写真に起して詳細にまとめた、「高床式建物の源流」の大冊が刊行されました。この中の第四章日本古代の建築との関連では、奈良盆地の西側馬見丘陵には、国史跡指定の一大古墳群が形成され、古墳は古代豪族の墓城氏と関係ある墳墓と推定されています。この群集墳の1基佐味田宝塚古墳から家屋文鏡(三世紀末~四世紀初頭)と呼ばれる鏡が出土しています。先生はこの鏡に描かれた建物の構造が雲南省の少数民族の住居である高床式建物と酷似していることに着目され、そのことにも触れています。

さらに、昭和62年に島越憲三郎先生と共に「家屋文鏡を語る古代日本」を発刊し、家屋文鏡の構造を解明されました。ここでは、従来の研究に見られない、人体寸法を用いての建物の復原を試み、これまで定説となっていた屋根がかなり下までふきおろされている1棟の竪穴式住居と呼ばれていた建物は、露台と母屋から構成される、高床式住居であることを提唱しました。模型製作を示し、さらに各棟の復原図での微細な表現は、女流建築家ならではのこまやかな配慮が伺えるものです。先生はこの論文によって工学博士としての学位をおとりになられました。ここまで過程の中で、昭和60年9月「人体寸法で復原する家屋文鏡の建物」と題した論文を、先生が理事をしていられる、日本生活文化史学会にすでに発表されています。



第2図 家屋文鏡高層の人体寸法による復元

その他、島越憲三郎先生のチームとの共著、「雲南への道」があり、論文には、「人体寸法による倭族の建物」「ラワ族の高床式住居」「ラワ族の家の神」「雲南倭族の高床式住居」などがあります。

講演会発表要旨

一 高床式建物の源流 一

倭族

『稻作を伴って日本列島に渡來した弥生人の源流について島越憲三郎先生は、揚子江を遡った雲南の地に求められた。しかも雲南から河川を通じてひろく各地に移動分布した諸民族を、日本人と祖先を同じくするものとして「倭族」の名のもとに捉える新説を提唱された。

そしてこの倭族を規定するもっとも顕著な文化的特質として、中国雲南省で水稻の人工栽培に成功し、水稻農耕という生産形態に依拠してつくられた高床式建物を共有することが挙げられている。』

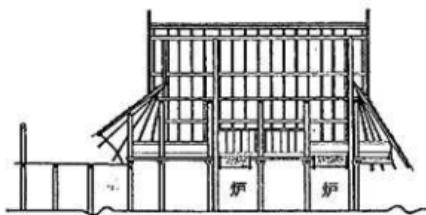
『倭族は中国大陸における戦争の中で、また自らの興亡によって東南アジアへ南下移動し盛衰をくり返した。』(高床式建物の源流 1991.2月 埋蔵文化財研究会)

この移動の中で日本の地にたどりついた一団が倭人である弥生人で、これらを含めて総称したのが「倭族」であり、「倭族論」であります。

高床式住居と土間式住居

稻作農耕民である倭族の住居形態は、すべて高床式であるが、キビやアワなどの稲作農耕に起源をもつタイ国の非倭族系の山岳少数民族の集落は、同地域と一緒に住みながらも土間式住居で生活を続けています。こうした状態がみられるのは高床式住居は高温多湿の地域の代表的な住居であるという、風土や気候の面から捉えられていた風土論は成り立たないのである。

日本においては、古墳時代以前の集落は高床式倉庫と竪穴式住居とがセットになっていると定説になって



第3図 倭族の高床式住居

いますが、こうした現実を見た時に疑問を投げかけざるを得ない。渡来してきた倭族の弥生人は高床に住み、土着の縄文人は竪穴式住居に住んでいた二系統があつたと考えられはしないだろうか。それは現在まで延々と続く水稻農耕と密接な関係をもち、日本人の住居は現在に至るまで倭族少数民族の影響を受けた高床である。長い歴史で結ばれた文化の土着性がここにある。

また、島根県の高床式住居には高床面に炉が設けられている。炉の火床のつくり方は、炉だんが根太の下にさがらない原始的な形式のものから、炉だんが根太よりきがる吊り火床の進歩的な形式のものまで、いくつかの形式がみられます。日本各地の発掘調査（図3）の報告では、柱穴の跡だけしか発掘されないため、すべての掘立柱が假想であると考えられてきました。

高床式住居と人体寸法

高床式住居は、母屋とそれに付設する露台から成り、母屋の屋内形態は就寝・炊事・食事などの居住機能を一つの屋根の下に集中させた単様型です。露台は屋根のない床で、建物の安側に付設され、ここでは、収穫した穀類を干したり、各種作業を行なわれます。

このような建物が日本にも存在していた事実があります。図1の佐味田宝塚古墳から出土した家屋文鏡および東大寺山古墳出土の鐵刀環頭飾りの家屋文文あります。この建物図は平面の面だけを見せるもので、これまでその規模や構造を具体的に捉えられていないかった。それはわが国古来の度量が未だ解明されていないことに関係していると思われる。しかし、斐南奥地やタイ奥地の少数民族の間では、今だ公定尺としての物差しを用いないで、建物の規模は水平・垂直方向とも尋・肘・咫などの人体尺によって決められており、施工においても足場などの仮設物を必要としないのです。それは垂直方向の断面寸法が、人体寸法で施工することのできる高さの範囲内に測られているからです。

こうした例にならって家屋文鏡に描かれた四棟の建物に、その図を崩すことなく人体寸法をあてはめ、立体的、平面的な規模を求めるとともに構造を推定し復



第4図
吉武高木遺跡高殿復元図

原図したものが、皆さんの手元にお配りした図です。（図2参照・鏡の図は200:1ということが判明した。）

このように、わが国にみられる木造建築の祖形が、母屋と露台とからなる高床式住居や高床式穀倉および高床式出作り小屋など、雲南・タイ国の少数民族の建物に求められることなど思いもよらなかったことである。この高床式という建築様式は、水稻農耕民として倭族が考案した文化的特徴です。

この後、先生が雲南およびタイ国少数民族の集落を踏査した時のスライドを見せていただきながら説明を受けました。画面に映った生きしい光景に、家屋文鏡に描かれた、今まで竪穴住居として定説となっていた住居はまさに高床式建物であるということを実感として感じたのです。そして、今まで調査されている弥生時代の掘立柱を見直すと共に、「倭族論」に大きな教訓を与えられたのであります。

考古学は総合的な學問です。私たち発掘調査にたずさわっている者が、その全てを解明することはとうてい出来ないことです。最近特に目立って各地から弥生時代の巨大建築物の跡が発見されています。図4は、11月20日に発表された福岡市の吉武高木遺跡の弥生時代では最大級の掘立柱建築跡で、これは若林弘子先生が人体寸法によって復原した建物です。家屋文鏡に描かれた建物の構造解説によって、考古学界では若林先生に大きな期待が寄せられています。どうかこれからも考古学の中では一番遅れている遺構の上屋構造の解説に先生のご援助とご教示をいただけますことを願っています。

初めてお迎えすることができました女性の講師の先生でしたので、懇親会では質問せずに会いましたが、どの質問にも懇切丁寧に応じて下さいました。細いところまで気配りをしておいでになり、女性的なやしさがにじみ出ているステキな若林弘子先生でした。

男女倉からの報告

臼田 明

1

1991年5月27日この日は私にとって忘れられない記念の日となる。長く押えていた考古学への火が再びついた様な……。

新和田トンネル料金所の東側のゆるい丘。すい寄せられるようにその土手へ進んで行った。料金所から男女倉集落に入る補助路を入り、最初の人家に近い路上に駐車させた。道路傍の畠に既に黒曜石の破片が見え

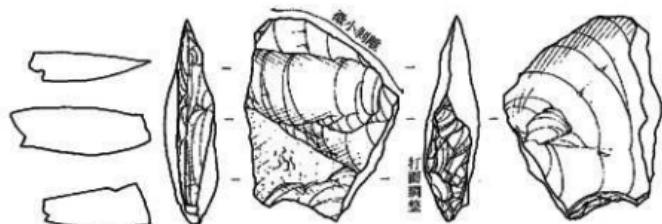
る。二段目に水田が何枚かあり、その上はずっと野菜畠となる。栽培ハウスが倒木が見える。

土手というはこの畠と下の畠との境である。

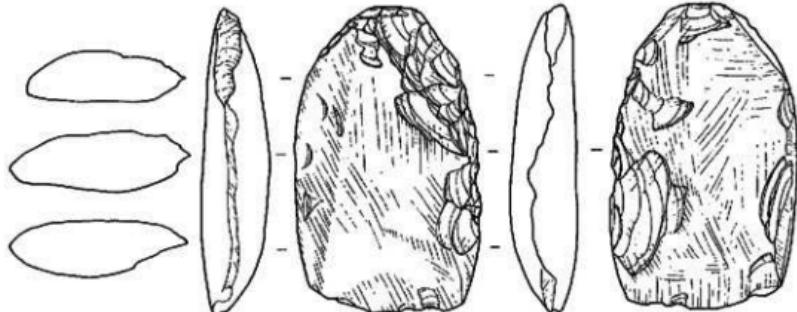
農道を登りはじめると、つい先程までの豪雨のために、黄色い泥水が至るところ流れ下って地を削っている。耕作を持つ畠は水をすってドブドブの真黒だ。耕作面の表土が黒くのっている。その表土の下は黄色い土の層が厚く積もっている。この地層の中にある様な気がする。遺物がはさまっていることは、何度も本で見ていているから。ゆっくりと粗心に見てゆく。

黒曜石の一部がのぞいている。無造作に引き抜いてみる。あ！と声を上げる程の大きな石刀だ。しかも少褐色の良質の黒曜石。途中から折れているが、はじめ手にした黒曜石が間違いない石器。その横も触れてみると、ぬるぬるする様な黄色い土の中、まだ何かある。これも抜いてみると、平べったい石！

黄色いねっとりした土がついているが、あざやかな、うす緑色がバッと目に入る。手に入る位の大きさ…、もう私の足はかけていた。水たまりを探して…そして



1 斷面石器（黒曜石）



2 磨製石斧（蛇紋岩）

0 5 cm

第1図 男女倉採集の石器 (2:3)

それは緑色の石おのだった。

どっかりと腰を下ろして…興奮から大きな溜息が。

2

1は、黒曜石の折断石器である。背面に平坦な自然面を残す縱長剥片の片側が折り取られており、残された打面と折断面に規制され台形を呈している。また、その基部には表面からの急角度な剝離が認められる。長さ52.5cm、幅41.0cm、厚さ13.4cm、重量28.1kgを測る。いわゆる「台形様石器」(佐藤1988)にも類似する石器である。

2は、蛇紋岩の磨製石斧である。一部に剝離痕を残すが、全体の八割以上の部分に研磨がおよび、片刃状に仕上げられている。長さ81.0cm、幅48.8cm、厚さ17.4cm、重量79.2kgを測る。

旧石器時代の局部磨製石斧は、近隣では諫訪市茶臼山遺跡(3)や信濃町杉久保遺跡(4)のものがよく知られている。双方とも蛇紋岩製で、10cm強の長さを有しており本例よりや大ぶりである。また、双方とも研磨がなされるのは刃部においてであり、本例のようにほぼ全体におよぶものではない。堤氏のご教示によるなら、研磨がほぼ全体におよぶ旧石器時代の磨製石斧は、秋田県地蔵田B遺跡や富山県白岩蔵ノ上遺跡に類例があるという。あまり數は多くはないがそうした石斧も類例がないわけではないことになる。

いずれにしても日本の旧石器時代の石斧は、今から三万年~二万年前の後期旧石器時代前半に盛行したものであり、本例もそうした時期の所産である可能性が残る。

3

「142号線の和田岬一帯は旧石器時代の密集地帯である。この地帯の沢水のつくり出した丘陵や段丘面はまたほとんどが遺物を包藏する大遺跡群である。『遺跡と遺物』昭57年版。恩師からは夢のように聞かされていました」と語った。

4

近代史のための調査、水泳、スケートの練習と、これまで何十回この峠を越えたことだろう。一度は確かめてみたい。男女倉を歩いてみたい。春の芽ふき、早春の雨上がり、晩秋の凍結に、常に心を留めながら何年も何十回も見て来た男女倉の景色。しかし一度も車を降りることはなかった。庶民の細長い集落をすぎて南に向かって狭い中山を進む。右手に旧和田岬の登り口が、更に直進すると景色が開けて料金所が…ここからは右に大きく迂回して新和田トンネルへの道が一望できる。

左手に丘陵地帯が、右手は男女倉川と合流する沢とや、河川敷のような場所に入家が散軒。この平頂部にG、H、K、J、等の発掘地点がある。有名なヘイゴロ

ーはどこだろうか、東餅屋、諫訪側にも紹介があつたが…いつも想像してみる。しかし一度も実現することなく20年近くが過ぎてることになる。もとよりズブの素人、聞きかじりや空想をますます強くして…。

5

恩師に報告する。

「そりゃーよかった。すぐおいで」。いつもより早目に学校を飛び出し黒岩宅へ向かう。忠男氏の自宅を訪ねるのもここ久しぶり、意外と元気そうに見える。

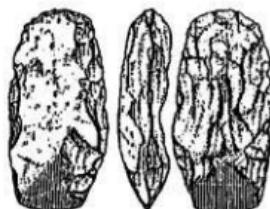
結果は…「ばか者、大馬鹿者」と同じ。「証拠が何もないじゃないか、写真は…?」と。

2週間後、再び現場を訪れてみる。やっと探し出した現場は大分流されていて、すっかりと草に覆われていて、旺盛な成長にはただただ驚くばかりであった。

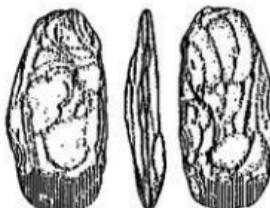
6

これを機に私は僅く男女倉に熱中することになる。今回の発見は、何よりも長く忘れていた考古学への炎を呼びましたこと、そして杉久保、諫訪の茶臼山出土の磨製石斧の出土を想起させ興奮を高めたのである。現在旧石器時代の遺跡からは磨製石斧のみならず研磨ナイフまでが確認されているといふ。本石器について会員諸氏の様々な意見を賜われば幸いである。

なお、この様な機会をつくっていただいた森鳴鶴、黒岩忠男、白田武正、堤隆の諸先生方に深く感謝いたします。



3 茶臼山遺跡(蛇紋岩)



4 杉久保遺跡(蛇紋岩)



第2図 局部磨製石斧(1:3)

立石遺跡採集の 神子柴型石斧

吉澤 靖

1

川上村立石遺跡は縄文時代草創期に比定される遺跡であり、その資料の一部はすでに報告してある（吉沢 1990年）が、そのなかで立石遺跡での段階的な変遷についての見通しをたてたことがある。しかし最も古期段階に位置付けた神子柴文化段階についての資料は、十分と言えるものではなかった。

ここに報告する石器は、立石遺跡の内容を知る上で

重要であるばかりか、佐久地方で2例目に発見された本器種石器としても重要なと考えられる。

2

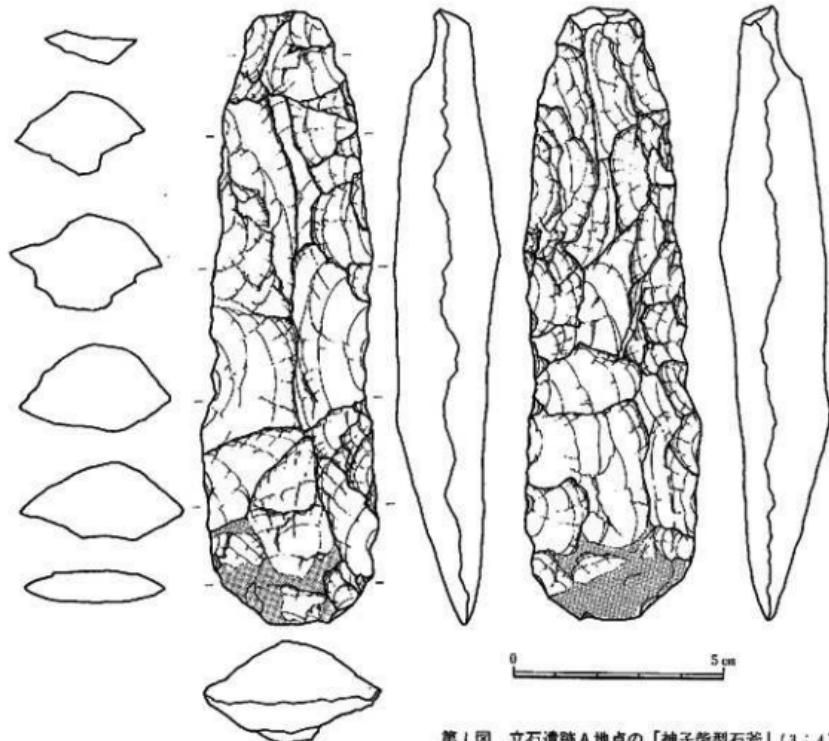
図示した石器は、A地点の遺物が集中する範囲の東南側のはずれから採集された。この付近はA地点のなかで最も高位にあたり遺物の散布も希薄である。この付近から先に報告した頁岩製の槍先形尖頭器の断片が採集されている。

最大器長14.8cm、最大器幅4.3cm、最大器厚2.5cm、刃部角は34°～50°で平均36°、粘板岩系の石材製。

平面形は伏長で基部から刃部へと緩やかに広がる楕円形。断面形は基部より上半部で幅と厚さの比が少ない角柱状、刃部よりの器体下半部はカマボコ状から始刃様の刃部へと緩やかに移行する。

刃部は両刃で表裏両面に研磨がみられる。平面形でみると刃線は弧状を呈している。

この様な形態を作り出す調整剝離は、どの様に行われ、そこにはどんな特徴があるのか、器体に残る剝離



第1図 立石遺跡A地点の「神子柴型石斧」(3:4)

面の観察から推定してみるとする。

まず厚めの素材の一方面に急斜度の粗い幅広削離を施して器体表面側を粗整形する。次にもう一方（器体裏面）に急斜度の幅広削離と、それより浅い階段状削離を施し基部側上半を整形する。さらに同じ面の刃部側下半部には平坦で深い幅広削離を多用して下半部も整形する。そして再び器体表面にもどり下半部を刃部側から器体中央に向う様な深めの削離と若干の階段状削離を施す。これにより、基部から続く器体表面の中央線は断切られた。最終的な調整は、表裏両面に細かな削離による整形と刃部の研磨により本石器は完成した。

以上が本石器に残る削離痕の切合状況から推定した石器製作のプロセスである。

この石器は、形態的にみても、製作技術からみても神子柴型石斧のカテゴリーとして差し支えのない特徴を持ちあわせているといえる。

3

神子柴型石斧は、神子柴遺跡出土例をタイプとして、精巧優美な槍先形尖頭器と共に神子柴文化を特徴付ける遺物である。

神子柴文化は東北日本を中心に広く全国に分布することが知られ、青森県長者久保遺跡、大平山元1号遺跡長野県庄沢B遺跡は、本文化を代表する遺跡として著名である。そして神子柴遺跡と同時期に発掘調査された長者久保遺跡の両者の遺跡名をとて「神子柴・長者久保文化」と呼称する場合もある。

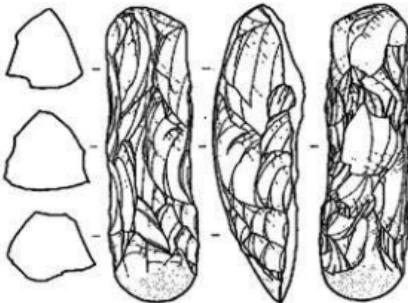
神子柴文化は、一般的に細石刃器文化に後続する編年的位置づけがなされている。そして土器の供出などから日本列島での土器起源にかかる段階の文化であると考えられている。しかし土器の起源には、細石刃器文化のなかで最も後出の石器群も関ることが神奈川県上野遺跡などで知られている。また、佐久市下茂内遺跡資料も、この問題にからんでくるものであろう。

ところで長野県内では約40ヶ所以上の神子柴型文化遺跡が確認されるという（森嶋1988）が、それは野尻湖周辺や菅平高原、開田高原などを中心とした地域でまとまって確認されている。

ところが佐久地方では、佐久市株名平遺跡で神子柴型尖頭器が、白田町井上遺跡で神子柴型石斧（堀1990）がそれぞれ1点づつ採集されている他は、川上村柏垂遺跡と立石遺跡で頁岩製の神子柴型尖頭器と考えられる断片が採集されているのみである。

4

立石遺跡において今回発見された神子柴型石斧は、立石遺跡の変遷のなかで以前に推定した神子柴文化の



第2図 井上遺跡の関連資料（堀1990）(1:2)

存在を実証したとともに、旧石器時代末期遺跡の多い野尻山原で唯一、神子柴文化を特徴付ける槍先形尖頭器と局部磨削の石斧がセットで確認された例として重要なである。

また、この神子柴型石斧は、当石斧を積極的に研究する森嶋によれば「新しい段階のものは狹形であり、小型になることも注意される」（森嶋1988）といい神子柴文化のなかでも新段階のものといえよう。

最近になって佐久地方でも旧石器時代最終末から編文期初頭にあたる段階の遺跡が相次いでいる。それは、前記神子柴文化資料の他に下茂内遺跡資料、中ツ原5B、1G遺跡の細石刃器文化資料である。それに加えて從来より問題視されてきた馬場平遺跡や、柏垂遺跡の一部の資料も十分な整理検討がなされれば、本段階での佐久地方が解明されるであろう。

また、筆者は昨年12月に南牧村遺跡詳細分布調査に参加し、矢出川遺跡群第VI遺跡で採集されたと伝う小形の神子柴型石斧を実見する機会に恵まれた。いずれ、この資料についても報告したいと考えている。

参考・引用文献

宮下健司・吉沢靖 1982「野尻山原における土器出現期遺跡の発見」『報告・野尻山シンポジウム1981』

吉沢靖 1990「川上村立石遺跡の新資料」（佐久考古通信No.51）

森嶋鷺 1988「II時代と編年 1 先上器時代の石器」（長野県史考古資料編全1巻(4)遺構・遺物）

森嶋鷺 1988「II生産と生活の道具 1 先上器時代の道具」（長野県史考古資料編全1巻(4)遺構・遺物）P360 21行～22行

栗島義明 1988「神子柴文化をめぐる諸問題」（研究紀要第四号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団）

堀1990「臼田町井上遺跡の「神子柴型石斧」」（佐久考古通信No.50）



アルプス山中の
凍結ミイラから
森川宗治

平成3年の9月、オーストリアのアルプス山中で氷河の中から、狩人の姿のまま凍結した人間のミイラが発見されました（読売新聞1991.11.4、上岡）。

この凍結ミイラは、20~40歳代の男性で、毛皮の服を着て、弓とオノを持っており、このほか石製のナイフ、ネックレス、さらに火打ち石が入った皮のボーチまで身につけていたとのことです。

なお、毛皮の服は二重になっていて糸できちんとふちどられ、中には草を詰め込んである完璧な防寒服だそうです。

私、この凍結ミイラのイラストを見たとき、正面なところ、せいぜい2~3百年くらい前の人ではないかと思いました。しかし、ミイラの持っていた、オノの様式から紀元前2千2百年から同1千8百年の青銅器時代の狩人であるということなのです。

そして、今まで直接的な証拠がほとんどなかった時代の遺物だけに、今後さらに年代測定など、興味深い結果が出るだろうといわれていました。

それから約1か月後、このミイラは放射性炭素による年代測定の結果、4千6百年前から4千8百年前の狩人であることがわかったそうです（12・8読売）。

なお、これは、防寒用に詰め込まれていた草の放射性炭素を分析した結果、判明したとのことです。

彼がどのような状態で死に至ったかは全く不明であり想像に過ぎませんが、移動する際、足をすべらせてクレバスへ落ち込んだのでしょうか。また雪なだれに巻かれたのでしょうか。そのとき彼の脳裏をよぎったのはきっと家族のことではなかったでしょうか。彼の

冥福を祈らずにはいられません。

服装の違いの驚き

ところで、私がこのイラストを見た瞬間、せいぜい2~3百年前の人ではないかと思ったのは、服装や持ち物が立派で鉄製のオノまで持っていたことからで、我が国の縄文時代中期に相当する年代の人とは全く思えなかったからです。

そこで、縄文人のイメージのイラストを見るとそのほとんどが、男性も女性も毛皮のパンツを履き、肩から斜めに毛皮をかけ、しかもはだしの状態で描かれているのが一般的ではないでしょうか。

縄文人とこのミイラとの服装の違いの背景の一つに両者の国々の気象条件の差があり、寒さに対する防寒の工夫の意識に差が生じたものと考えています。

一方、縄文の中後期といっても、現在とほぼ同一気象条件だったと聞いている私にとっては、この服装の差には非常に驚きました。

縄文人はオシャレだったはず

縄文時代の遺跡を発掘すると、ネックレス、ピアス、ペンダント、腕輪など、多くの装身具が出土します。

したがって、縄文人も身をまとう衣類についても相当、知恵と工夫を重ねてきたのではないかと思う。いつまでも前時代的な服装ではなかったと思います。ただ、衣類は他のものと違って、嵩張しやすいため実のところどんな布地だったのか、わからないだけではないでしょうか。

しかし、私のおぼろげな記憶でも福井県の遺跡からは編んだ布地が出土しているし、また後期に至っては各地から織布も発見されています（遺跡名の記憶はないが、5千年前くらい前に鹿の骨製の針穴つきのアミ棒と思われる棒も発見されている）。

また、土偶にもきちんとパンツを履き、シャツを着ているものも出土（岩手県八幡遺跡）しており、これ以前のころからすでに縄文や桶を編む技術を知っていたことからすれば、植物纖維から布を編んだりしてもっと立派なものを身につけていたのではないかでしょうか。

さらに、ツツについても、アケビのツルや山ブドウのツルなどを利用して、作って履いていたのではないかでしょうか。

縄文時代約9千年間の歴史の中で、衣服も服飾も進歩していかなかったとは考えられません。なお、毛皮についても、もちろん防寒用や寝具用として改良されていたことは、論を持たないでしょう。

いずれにしても、冒頭の凍結ミイラと、縄文人との間に服装の違い（実際はわからないけれど）がありすぎたので思いついたままを書いてみました。

土偶のつかき



会員の身近なたより

■砂原遺跡の発掘調査から

峯村今左夫

昨年の秋、北佐久農業共済組合会館の建設にともないその予定地、浅科村塙名田区内の砂原遺跡の発掘調査が行われ、私ははじめて発掘作業に参加することができました。

重機による表土の剥取作業のあと、堀先生から確認作業のジョレンの使い方を教えてくれました。私はこの手で長い年月ねむりつづけている土の層へ、静かにジョレンをあててみました。私の全神経はその古代が含まれている土の間に集中する瞬間がありました。そして古代の土の感触がジョレンを握る両手に伝わりやがて全身に拡がっていく熱い流れをおぼえました。

終局の問題は何んのために掘るかということはどうですが、初心者の私にとっては何が出来るかが関心事でありました。両刃を使い移植ゴテで掘採る土器は、不見識とおもわれるでしょうが何ものにも勝る宝物を探し当てた心地がしたものでした。

古代がねむっているこの地下の資料館からは、作業のすすむにつれて住居址や多量の土器が発見されていました。また発掘断面には包含層の上に細の歴史の層があつて、その歴史を砂が埋めつくし更に堆積してのち現在の地表が出現しています。そのような自然現象まで発見されました。これらは上に刻まれた貴重な歴史の表現であります。

「1つの土器のかけらはヘロドトスの歴史全卷よりもずっと雄弁だ」という有名な言葉がありますが、ここ出土物の雄弁な物語を分析し総合していくけば、膨大な頁を要するほんとうの歴史が組立てられると思われます。

私はこの作業現場を管理していましたので、みなさんの帰られたあと建物に鍵をしてから、作業現場を見回ることにしていました。そして夕暮れの構造で、堆積した砂の層の下で生活していた古代の人達が、6軒の堅穴住居で何かを話しかけるかのような、切せつと吹くオカリーナの素朴な音が聞こえてくるかのような気がしてしばらく佇んでいたものでした。

■伐採と祭礼

土屋長久

軽井沢町歴史民俗資料館（軽井沢町資料館・追分宿郷土館）の軽井沢森林史合同展で資料調査をへて、気づいたことを述べたい。

森林史を学問的には林政史といい、徳川林政研究所はあまりにも著名である。近世までの造林には、「木曾伐木運材団会」（長野営林局所蔵、昭50復刻）これには、祭山神団として祭神は山津見神（やまつみのかみ）、山伎大明神が記され、株祭の図があり、これは、「とおさたて」と称され、延喜式の祝詞、万葉集にも唄われ、植人たちが、山神祭と共に幾久しくうけ継いでいた儀礼のひとつである。

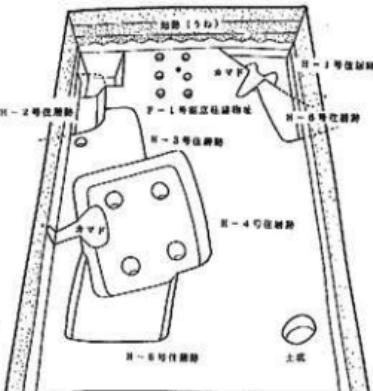
日本民族は、農耕民族であり、農作と同時に森林資源の活用は大きかった。株祭の儀礼を考古学的遺構、遺物まで、扱うのは飛躍的すぎるものであろうか？

浅間山の南麓の植生を考える時、元仁元年（1108）弘安4年（1281）の2回の追分火砕流が、信濃国側へ、流下し、当時の東山道も迂回し、中世以前の諸文化は全て埋没してしまったこととなる。吉澤好藏の『四部譜蔵』には、土中より木炭出土の記述があり、現在でも工事中、広葉樹林の天然木炭が出土し、戦次中は、土地の人々は、炭の代用品として使用したという。

先述の2回にわたる追分火砕流は、いずれも石尊山中は被っていない。

町指定文化財の室町末期浅間神社本殿、中世では郷土館保管の大般若經、延喜式長倉牧場跡が、指定保存され、これをいかが扱うかが、問題点となる。

村人の伝承から、浅間神社の本殿は、往古石尊山中にはあったといい、追分大明神の本殿もしくは、奥宮もそこに存したかもしれない。ともあれ、鎌倉以前は、浅間山南麓には、原生林があったと推定される。



■歴史の道

習合宗教ともいえる修驗道は、古来より山岳を神靈のすむ所と考え、祠を設けて祭りを行なった。山岳などの靈地を重視する仏教、とくに密教・道教・シャマニズムなどの外来宗教が入ってくると、山岳修行を行なう行者があらわれてきて、平安時代の中頃より修驗道とよばれる宗教が形成される。

日本の各地の山々は皆この対照となる。この修驗道のメッカである吉野、熊野の山岳において行なわれる掛修行について、去る昭和61年から3年にわたり3回修行に参加した。佐久の修驗者もあるいたと思われる

大井源寿

同じ道をあるいてみた。總走行距離125km 5日間かけ、1日平均25kmを歩いた。朝3時に起床朝食、勤行をすませ午前4時懐中電灯で足元をてらし出発。もくもくとあるのである。道は古の森林のなかの一本のけもの道、けわしい所では六根精生の呪名をとなえ、岩場はクサリで登り、岩下に一本の丸太橋を渡った。サーカスもどきの行脚修行である。雨天決行、無言の、休みなく続く走破のすさまじい修行であった。

この行を終えて、ふと、縄文時代に墨曜石や石材を運搬した人達はみなみならぬ苦労をしたであろうことをとりとめもなく思った。

第5回 佐久地方遺跡発掘調査報告会開催さる

1992年10月24日午前10時より第5回佐久地方遺跡発掘調査報告会が申込COMIE21ホールで開催された。

本年は通例より、開催時期が遅れたため、平成4年度の調査進行中であるが、平成3年度の調査報告に限って行われた。

白山事務局長の開会発表の後、由井茂也会長より挨拶があり、報告に入った。

最初は小海町穴沢遺跡の発掘調査の発表が井山正義副会長から行われた。九兵衛尾根I式を出土する縄文時代中期初頭の集落址で、日本最古と見られる石棒が注目された。

アサヒグラフの表紙にも掲載された弥生時代中期の人面付き土器が出土した佐久市西一本柳遺跡Iの報告は林幸彦会員によって行われた。佐久市最大の遺跡密集地帯から発見であり、整理後の位置付けが注目される。同じく佐久市奇山古墳の報告が宇賀神誠司氏からなされた。7世紀前半代の非常に造存状態の良い古墳で、該期の古墳の中では最も大きな石室を持つということだ。

御代田町塚田・塚田・下弥堂・下荒田遺跡の報告は

小山岳大が行った。縄文時代前期初頭の集落が検出された塚田・下弥堂遺跡、標高800mを越える高冷地での弥生集落が発見された細田遺跡など注目される遺跡のスライドが公開された。

小諸市石神遺跡の調査報告は花岡弘会員によってなされた。特に縄文時代前期の集落と佐久地方では数少ない晩期の資料が注目された。

ところで本会の趣旨は、近年佐久地方で増加している緊急発掘調査の成果を研究者のみならず、広く一般に周知・把握せしめることにある。佐久考古学会は行政の枠を超えて広く参考を呼びかけることができる立場にあり、過去5年にわたって当方の考古学的発掘調査の公開・普及に努め、役割を果たしてきたように思う。しかし、毎年の参加者は70~100名の範囲に落ちておりなかなか参加者が増えないという現実にも直面している。特に参加者は高年齢の方が多く、時代を背負うべき若者には鼻も引っかけられないのは、これから考古学の存亡にもかかわる深刻な問題である。学会として広告宣伝力の不十分さ、個々の話術の稚拙さなどを惹き寄せる努力が足りないこともあるが、今後考古学をより一般に開かれたものにして行くためにはどうしたら良いかみんなで考える時期に来ているように思う。

♪ 編集後記 ♪

3月の開通に向けて、佐久インター周辺の環境変化がめまぐるしい。実は1万年前には浅間の火砕流が覆い、人間はもちろん草木すら無くなつたその場所が、いまいちばん厭やかな場所となりつつある。

そして高速道路は平尾山にスキーチャンプまでつれて来るという。雪の無い地に、むりやり雪を降らせてしまう人間とはなんと罪深いことか。高速道路が象徴する、コンビニエントを暮らしにおぼれてしまうわれわれが、失ったものの大きさに気付く日もうう遠くはあるまい。

(つつみ)

佐久考古通信 No.57

発行所 佐久考古学会

〒388-01 長野県佐久市桜井879
白田 武正 方
郵便振替 長野 7-2842
☎0267(62)8133

発行者 山井 茂也

編集者 堀 隆

印刷所 はおづき書籍舗



佐久考古学会
シンボルマーク

★ 目 次 ★

■ 佐久の遺跡と遺物 パート8中世— 金井城	寺島俊郎…1
■ 野辺山は静かな感動につつまれて 一山井茂也会長の祝賀会から	実行委員会…2
■ 野辺山にて 一芹沢長介先生のお話から	4
■ 新刊紹介 『草原の狩人』一山井茂也日記抄	7
■ スクレイピングにもちいられた網石刃	堀 隆…8
■ 訃報! 黒岩剛会長	小山善夫…10
■ 1993年度 総会報告	10
■ 会員訪問 第3回 山井一昭さん	11
■ インフォメーション	12

佐久の遺跡と遺物 パート8 中世

— 金井城 —

佐久地方の戦国時代といえば、数年前に放映された大河ドラマ「武田信玄」の中、佐久への侵攻を武田館内で、落城させた城を信濃の絵屏風に小旗を刺して喜んでいたシーンを思い出させる。1540年～1547年武田氏は佐久を手中に納め小県・川中島や上州をうかがう重要な拠点とした。

昭和63年から平成元年にかけて小田井工業団地造成事業に伴う佐久市の発掘調査によって明らかにされた「金井城跡」はその城域が20万m²を越えるものと想定され、まさに武田軍の駐屯地を思わせる平城であった。右岸から湯川に流れ込む2条の深い谷によって抱え込むように南・東・西側を自然の要害に囲まれ、開口した北側には幾重もの空堀が巡る。湯川に面した断崖(標高差50m)の張り出し部には主郭が置かれ、主郭から層状に二郭・三郭・外郭・北郭が空堀によって囲まれて配されていた。

この調査では主郭と二郭を除く居住域を主体に8万m²(中世城郭の大規模調査としては県下において例を

見ない)が実施され、平成3年には膨大な資料と成果が報告されている。平成4年には市教委によって道路工事に伴い外郭の一部が調査され、同年北陸新幹線の予定地内が鰐長野県埋蔵文化財センターによって三郭・北郭のほか新たに二郭の外側約半分が調査された。昭和63年から検出された総面積は9万5千m²、遺構総数は堅穴建物跡730基、掘立柱建物跡76棟、塙24条、土坑860基にのぼる。二郭と三郭には中央に道が走り整然と区画された居住空間が想定され、郭内各々の空間の大きさからは二郭に上級武士が三郭には下級武士が別れていたことが想像される。また、新たに水の流れる堀とそこに降りる洗い場が確認されたり、二郭中央の空堀からは三郭から入る橋が確認された。遺物は佐久市の報告と同様少なかったがその中でも、長さ27～32cm・20kgを越える鉄鎌が出土した。(寺島俊郎)



三郭の洗い場(外側から入る)



1993年6月12日、野辺山黒岩荘において、由井茂也会長の地城文化功労者文部大臣表彰および『草原の狩人—山井茂也口記抄一』の出版祝賀会が開催されました。考古学関係者では、芦沢長介・岩崎卓也・森嶋稔・戸沢充則・安藤政雄・武藤雄六・樋口昇一先生ほか佐久考古会員・京都女子人考古学研究会員・永井千尋・蛭田信二先生・藤原忠彦・川上村長・菊池和儀・南牧村長・丸山敏一郎文化課長代理・ご親戚・ご家族など多くの方々のご列席のもと、静かな感動の中に会が催されました。

丸山敏一郎文化課長代理のご挨拶では、祝辞が述べられた後「なんとかして矢出川跡を国指定にこぎ着けたい」と頼もしいお言葉をいただきました。

藤原忠彦・川上村長は、「自分は由井さんの親戚筋にあたるものであるが改めて由井さんの大体業に感動しており川上村の誇りである」と述べられました。

菊池和儀・南牧村長「由井さん、考古学一筋で今まで歩まれてきて、このたびのような記念すべき会おめでとうございます」と述べられました。

はるばる仙台からお越しいただいた芦沢長介先生の

ご挨拶では、「由井さんに最初にお会いしたのはちょうど40年前の夏です。八幡先生のご本で馬場平に石の槍が出てることを知り、これは縄文時代以前のものを感じ、やもたてもたまらなくなってきたのです。同じ年の暮、雪の野辺山高原で日本で初めてという細石器を岡本君と由井さんと私の手で掘りだしました。いまその情景が、こうして由井さんのお顔をみているとありありと浮かんできます。どうぞ由井さんこれからもお元気で長野県の考古学の発展ためにご尽力ください」と述べられた。

岩崎卓也先生は「当時は右も左もわからぬかけだしの学生である私を、暖かく向かい入れ、家に泊めていただきました。お嬢さんをお風呂にいれてやってくれ、などと頼まれたこともあります(笑い)。私もなんとこの春筑波大学を退官しましたが、今こうして考古学を続けてこれたのはそんな由井さんの暖かいお気持ちもあったからだと思います」と述べられた。

戸沢充則先生は「由井先生からは、考古学をこころと教わった。そしてその教えを大切につたえたい気持ちです。しかし残念ながらふるさとの矢出川の保存が達成されていない。この貴重な遺跡をなんとか守り伝えたいものです」と述べられた。

この後由井さんに贈られた記念品は、佐久考古会員でもある中島芳榮さんが心をこめて彫られた彫刻、「細石器、其は草原の狩人の生の証しか」という作品である。

森嶋稔先生のご発市で祝宴に入ると、しばしおやかな会話があちこちでみられた。祝宴のなかでは、由井さんの思い出のアルバムから、懐かしい写真がスライドで上映された。

祝宴は、「ちょうど私の祖父と同じ世代の由井さん、これからもますますお元気で」という武藤雄六さんの言葉で閉じられ、暖かい気持ちでそれぞれが帰路についた。



「由井さん、ほんとうにおめでとうございます」と森嶋先生



「矢出川をなんとか守りましょう」と戸沢先生

有瀬也さん 古都大臣表彰
日講出版 紀念講演



ごあいさつ

懐かしいみなさん、日頃覗くしていただいているみなさまのお顔をこうして拝見しておりますと、もうそれだけで胸がいっぱいになってしまいまして、何と御礼の言葉を申し上げてよいかわかりません。

ほんとうにはるばる遠くから、また、公私ともご多忙のところ、ここにお出かけくださいましてありがとうございます。さきほどは身に余るお祝辞を頂戴しました。

このたびの日記につきましては、自分自身でこのような出版を意図して書いていたものではございません。当時は、運送会社のべいべいの社員でした。いろいろな過去をもって働いていました関係から、職場に対してだけは誰にも負けないつもりで仕事をやろう、そんなつもりで勤めました。しかし自分の生業として仕事に忠実でなければならない私が、一方であのようなく占学ばかりの日記をつけ遺跡を歩いていた、それが知れたならないまでいえば文句なしにタビを切られていたものでしょう。

日記抄は、ほんとうにメモ程度のものでおはずかしいのですが、すばらしいご寄稿と、編集にあたられたみなさんのご尽力でこのような本になりましたことをたいへんうれしく思っております。

また、地域文化功労者表彰を私があげただくとするなら、私というよりは、これまで支えて下さった今日ここにお越しいただいた私のまわりのみなさんへ贈られたものであるような気がしてなりません。

心から感謝の気持ちを申し上げ、御札の言葉とさせていただきます。



野辺山にて

—芹沢長介先生のお話から—

由井茂也会長の祝賀会には、日本の旧石器時代研究のバイオニア、東北大学名誉教授芹沢長介先生が、久しぶりに佐久の野辺山の地においで下さいました。

ここでは、祝賀会当日の先生のお話、そして翌日野辺山の矢出川遺跡などをまわられた際にうかがった先生の興味深いお話しなどを再構成してみます。

—久しぶりに野辺山の地に立たれていかがですか。

芹沢： 野辺山も、矢出川発見当時の40年前とくらべるとずいぶん様変りしたようですね。當時野辺山駅周辺にはたくわん工場が4つとあつただけでした。

小海線もじつにゆっくりと走っていて、追いかけて飛び乗ることができそうなぐらいでした。當時は新宿から川上までの汽車賃が400円、旅館の宿賃が500円、そういう時代でした。

當時、川上はものすごく寒く、朝起きてみると飲みかけの湯呑みの水が凍ってしまっていたのが印象的でした。

あの頃、由井さんのお宅によくおじゃましたのが懐かしいですね。

由井： 家は当時のままです。そして、あの頃の小海線といえば、いまのようなござっぱりとした車両ではなく蒸気機関車でしたね。

一昭和28年という年、芹沢先生は北信濃尻尾湖で杉久保ナイフを発見され、翌月には、馬場平まで来られます。そして馬場平の発掘、その暮には吹雪のなかでの矢出川の発見と、めまぐるしい調査を行なわれていますが、やはり信州にターゲットを絞られていましたのです。

芹沢： 信州に的を絞っていたかどうかはわかりませんが、この信州の地にある石器が続けて私の目に映ってきました。そしてなにかに取りつかれたかのようにこの地に足を運んだわけです。

野尻湖から帰京してまもない日、八幡一郎先生の『南佐久郡の考古学的調査』を読んでいて、馬場平から尖頭器が採集されていることを知り、

馬場平までやってきました。そして由井さんを訪ねたというわけです。

—芹沢先生は、由井さんのほか、岩宿の発見者である相沢忠洋さんなど在野の研究者と交流をもたれながら旧石器時代研究を開拓されたと拝察しますが。

芹沢： 山井さんも、相沢さんも遺跡をみつける天性の感覚でもいうものがあるのでしょうか。

宮城には、藤村新一という人がいます。彼も天性の感覚を持ち主で、最近の東北地方の前期旧石器時代の遺跡は、ことごとく彼がみつけています。不思議なもので、それまで石器が出ていなかった場合でも、彼がきてひとたび移植ゴテをふるうとかならず石器が頭をだします。

長野でも前期旧石器はほとんど出ていませんね。藤村さんをよんで、前期旧石器の遺跡をみつけてもらいたいかがですか。(笑)

—その藤村さんが発見にかかわった、宮城の高森遺跡は最近の新聞発表では何と50万年前という古さをもつともいうことですが、そうした古い遺跡が今後も見つかるのでしょうか。

芹沢： その頃は、古地磁気の逆転を目安に地層の年代をうかがいやすいので、数万年前といった遺跡も今後ある程度みつけられるでしょう。

ところでこの頃は、斜軸尖頭器などをもつて石器群も光沢して発見されてきました。山形の袖原という遺跡でも10万年前頃の斜軸尖頭器が出土しています。これまでの資料の蓄積から、日本の旧石器時代も、12万年前頃までを「前期」、およそ3万年前までを「中期」、それ以降を「後期」として三分割してもよいころだと考えています。



野辺山の細石器を観察される由井会長(右)と芹沢先生



「吹雪の中、由井さんが指さすあたりを凍えながら発掘しました」と芹沢先生

◆由井さん宅で矢出川の縄石器をご覧になって
芹沢： 矢出川の縄石刀には、細かな調整がみられる
ものが目立ちますね。使用痕を観察するとおもしろいとおもいます。それにしても小さい縄石
刀が多い。2倍ぐらいに拡大した実測図がいいりますね。

そう、このエンドスクレイバーを見て、矢出川に縄石器が存在することを考えました。相沢さんの資料で群馬の樹形遺跡にも同じようなものがあり、樹形に似た縄石核（舟底形）が出土するかともおもいました。

矢出川の扇平で小さな縄石核は「柿のタネ」と當時愛称していたものです。（笑い）

由井： そういうえば発見の翌年（昭和29年）の矢出川の調査の時は、お天気が悪かったです。

芹沢： そうでしたね。確かに完全に晴れた日は一日もなかったように記述しています。深く霧が立ちこめた日もありましたね。

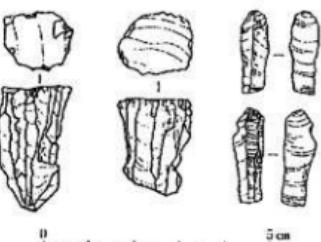
一ところで、矢出川遺跡の眼下には清流が流れていますが、矢出川人は魚を取って食べていたのでしょうか。

芹沢： どうでしょうか。ヨーロッパなどでは事例がありますが、ところで由井さん、このへんにもサケはのぼってきたのですか？

由井： マスは千曲川をのぼって川上まできました。サケは小海町の八那池（やないけ）まではのぼってきたようです。八那池とはサケのヤナからきた地名のようです。

子供の頃私も、千曲川でマスをとった記憶があります。それはいきがよくておさえるのが大変でした。私は、矢出川人たちは当然魚を食べていたとおもいます。

芹沢： 新潟県荒屋遺跡の彫刻刀からは魚類の脂肪酸



矢出川出土の縄石刀(右2個)と縄石刀核(左2個)

芹沢長介著 1982『日本旧石器時代』岩波新書より

がみつかりました。荒屋の人々は、眼下の川からサケなどをとる漁労をしていたのでしょう。荒屋遺跡は信濃川と魚野川の合流点にあたる高台にあります。

ここで大量に出土した彫刻刀にみえる使用痕から、サケの調理を推定することも不可能ではありませんね。

由井： 魚の脂肪が1万年以上も石器についているのですか？

芹沢： そのようです。帶広畜産大の中野という人の分析です。

矢出川遺跡発見当時にもそのような分析があったなら、矢出川の人々が魚を食べていたかどうかわかったでしょう。（笑い）

芹沢： 由井さん、それでもたくさん縄石刀を矢出川遺跡で採集されましたね。福井岩陰では千本以上の縄石刀が出土しましたが、矢出川では何千本という単位で出土しているのではないですか。

由井： そのようです。発掘資料や、山井明や由井・昭などの採集資料をあわせると膨大な数になるとおもいます。

芹沢： ところで岩陰といえばこの近くにもありましたね。

一北相木村の柄原岩陰です。信人の故鈴木誠教授らが発掘されたもので、ここでは押型文から表裏縄文段階までの文化層がみつかっています。近くの考古館に入骨や土器、骨角器などその資料が展示しています。柄原の付近には有望な岩陰遺跡の候補がいくつかあります。

芹沢： 実外、その近辺の岩陰を調査すると、縄石刀ぐらいの文化層にいきつくかもしれませんね。

◆矢出川遺跡に立たれて

芹沢： 当時、私があの山に大きなカメラを担いで登り、野辺山の遺跡を撮影した時には家もまばらでした。いまではこの地にスキー場やゴルフ場まであるんですね。

一野辺山は今まさにリゾート開発の只中にあります。

芹沢： 山井さん。私たちが発掘したのはどのあたりですか？

由井： そのあたりだとおもいます（指をさす）。

芹沢： そうですか。

私は雪の中から掘り出した黒い塊を、矢出川の水で洗おうとおもいその斜面を下りましたが、吹雪でおもうようにならず引き返してきたんですね。

※

「このあたりが問題の石器を採集した地点だと山井が教えてくれた。千曲川の支流西川の上流で、矢出川とよばれる細い川が高原の末端を区切って流れている。雪はすでに五一センチメートルも積もっているので、地肌はまったくみえないのだが、山井の指さすあたりをスコップで掘ってみるとした。まだ凍土にはなっていないので、雪を取り除いてみるとすぐに黒土があらわれた。三人はそれぞれ少し離れた場所で発掘を進めたのだが、はげしい雪と凍りつくような寒さで作業がはかどらない。地下足袋の中の足が冷えきって、感覚が麻痺しそうになる。岡本はときどきスコップを捨てて雪のうえを走りまわる。体を暖めるためだといふ。私も感覚が失われた足をひきずって走った。

突然、大きな声で山井がオーオーイと呼び出した。どうしたのかと思って聞いてみると、このような吹雪の中で黒いものが動いていると、熊と間違えて獣鉄を



昭和30年頃の野辺山（芹沢先生撮影）

打ちかける者がいるのだそうだ。だから、ときどき大声を出して人間がここに居ることを知らせる必要があるのだという。おそらく私たちも声をあげた。

そのうちに、スコップの先に何かが当たりはじめた。三~四センチメートル大の石片であるらしいが、泥と雪にまみれているので形も色もわからない。三人で掘りあてた石片がいくつか溜ってきたので、何とか泥を落して正体を見分けたくなつた。軍手でこすってみたが、凍てついた泥はそれともない。私はその中の円みのある一つを掌の中に入れて立ち上がった。丘の下まで降りてゆけば矢出川の流れがある。しばらく歩いていったが吹雪は止みそうにないし、視界が狭いので迷うおそれもある。どうしたらよいかと考えあぐねた末に、私はふと名案を思いついた。雪のうえに掌の中の資料を置き、その上に自分の体から暖かい液体を注ぎかけた。

湯気があり、凍てついた雪と泥は見る間に落ち、青い半透明の石の肌があらわれた。それは見事な細石刃核であった。この時の感動はおそらく生涯忘れることができないだろう。横なぐりに顔を打つ吹雪の中を走りながら私は大声で叫んだ。

「細石器が出たぞ！日本にも細石器があったんだぞ！」
(芹沢長介著 岩波新書『日本旧石器時代』より)

※

芹沢： 山井さん。私の手元には当時のカラー写真などの記録もたくさん残っています。

いつかふたりで、矢出川調査の報告書を書いてみたいのですね。

※

40年をへて矢出川の地に立つ由井さんと芹沢先生、お二人の心にはきっとあの頃の光景がよみがえっていたことでしょう。

私のなかにも芹沢先生の美しい文章の情量がうかび、いいしれぬ感動が胸に訪れました。（ききて=つつみ）



爾来40年 矢出川の丘に立つ

新刊紹介

草原の狩人

—由井茂也日記抄—

——本稿の題字は由井茂也さん——

由井茂也会長の日記抄『草原の狩人』が、まちにまた本年6月9日、刊行となった。

『草原の狩人』の編集は、本会員島田恵子・白田武正・宮下健司氏の手になるものである。

○
草原をイメージさせる鮮やかなグリーンの表紙には矢出川遺跡と矢出川の細石器の写真がみえる。

日記は、昭和28年から30年まで、馬場平・矢出川の発見前後の3年間のものである。また、日記以外に、山井会長の年鑑、短歌・俳句、エッセイ、馬場平から矢出川の発見までの亮明な記録がおさめられ、由井会長と親交をもった方々の寄稿も掲載されている。

○
頁をくってみよう。

片沢長介さんの序文をみる。

「なにか熱病にとりつかれたような、あの頃の私たちの旧石器探求へむけての心の昂ぶりは、40年後の今でも、まるで昨日のことのように思い出される」とある。岩宿発見を旧石器元年とするなら、その4年後の昭和28年もまさに日暮ぐるしい旧石器発見の年であった。そしてその舞台が馬場平と矢出川、主役は片沢長介と由井茂也その人らである。

○
日記の書き出しの昭和28年は、鳥居龍藏博士の訃報に接した年である。晩年の鳥居龍藏の不遇を憂い「学者をあなどり学問を軽んずるのは國の常とはいいながら、誠にお氣の毒でたまらない」と記されている。

同七年、山井さんはさかんに野辺山で表探をつづけているのが日記にみえるが、大深山で出土した縄文土器への関心から、山内清男や島崎一らへ手紙をしたためている。山内や島崎らの手紙が手元に大切に保管してあることは、本人の弁である。

○
片沢先生が山井さんを最初に訪ねた記念すべき日は昭和28年8月19日である。その後には、八幡一郎・岩崎卓也・戸沢充則・佐藤達夫氏らとの交流の様子も

みえる。この間の出来事は日記をお読みいただき、あえて申し上げる必要もないだろう。

○

馬場平の発掘は同年11月2日から始まった。

1万年以上前のローム層中から初めて出土した石槍をみて「この手もて振り この眼もて確と見し 赤土より出でし石槍」との短歌が詠まれた。

○

日常生活では、じつに20年ぶりにオーバーを買いかえたという話、頭のてっぺんが博くなってきてハゲ頭になることが心配だという話、いは病が治らなくて切った話など、身近なユニークな話もある。

○

以降の日記では、片沢長介さんとの交流や、考古学との関わりあいなど、さまざまなことがらが語られているのでご覧いただきたい。

○

第Ⅳ章「矢出川遺跡の発見と馬場平遺跡の調査」は日本旧石器時代研究の幕開けを飾るその一大遺跡の発見から調査までが克明に、しかもじつに感動的な文章で綴られている。その発見にかかる物語は、読み物として一般読者の心をひきつけるばかりでなく、学史としての重要な侧面をもあわせもっており、研究者にとっても得難い文章である。

第Ⅳ章は、由井さんとの心のふれあいについて、多くの方たちが語られている。

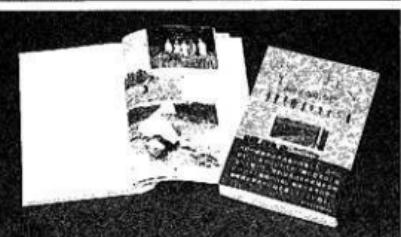
岡本勇・戸沢充則・岩崎卓也・吉川国男・山中一郎・永井千尋・藤原忠彦・上村長・京女大考古学研究会の林浩世さんなどの方々である。

「山井茂也先生の八十八歳の人生と学問には、ほんとうのものが光り輝いている！」戸沢充則先生の言葉に『草原の狩人』を手にした多くの読者たちは、深くうなづかれるにちがいあるまい。

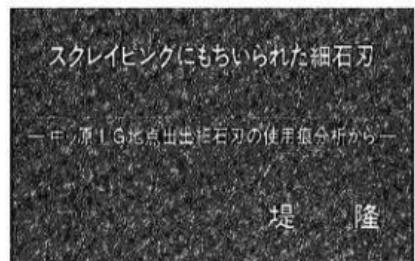
四六版 311頁 1800円

申込みは島田恵子さんまで、ハガキか電話で

〒384-06 佐久町羽黒下110 ☎0267(86)3143



『草原の狩人』—由井茂也日記抄—



スクレイピングにもちいられた細石刃

—中・原1G地点出土細石刃の使用痕分析から—

堤 隆

1 はじめに

かつて私は、中・原5B地点から出土した152点の細石刃の使用痕分析をおこなったとき、そのうちのわずか8点ではあったが、特徴的な使用痕を抽出することができた。それは、「細石刃の側縁に平行する一方向からの濃密な線状痕」で、しかもそれは「片側縁のみに認められる」というものであった（堤1991）。

そしてその機能については、「積刃器の軸と平行した状態で正位もしくは逆位で植刃され、あるいは柔らかい対象物の切断に関して、側縁と平行する一方向に働きかけた」という結論を得ることができた。

さて、今回使用痕分析の対象としたのは、同じ野辺山で、5B地点より500m東に位置している中・原第1遺跡G地点出土の細石刃である。分析の結果、1G地点の細石刃からは、5B地点と異なる興味深い使用痕がみいだせたので、ここに報告することにする。

2 観察

観察対象は、中・原1G地点発掘資料の黒曜石製細石刃26点である。観察には、オリンパスの金属顕微鏡BHIMJを用い、主として200倍で検査した。試料は検査前にエタノールを含ませた脱脂錠でふきとった。

このうち、図の1点の細石刃から検出された特徴的な使用痕について、以下に記載する。なお、記載は（御堂島1986）に準拠した。

3 細石刃に残された使用痕

図の細石刃は、最大長31.6mm・最大幅9.6mm・重量0.60gを測る黒曜石製で、右側縁に連続した調整加工が施されている。使用痕の性状は以下のとおりである。

① 細石刃の調整加工のなされた片側の側縁（図1-a）からは、表裏両面から線状痕が検出された（写真1・3・4・6）。一方、反対の側縁からは一切線状痕は検出されなかった（写真5）。

② 片側縁に残された線状痕は、比較的幅が狭く、まちからかな底と縁をみせるもの（aタイプ）で、側縁に直交している。密度は、図のaの部分で濃密であり

（写真3）、cの部分では疎らであった（写真6）。

また、b・dの部分では線状痕は認められない。

③ aの部分の縁部付近では、わずかに御堂島のEタイプ「細かな凹凸が多數みられる純いボリッシュで、発達すると内部が丸みを帯びるが、それ以外は粗れた面であり、細かなビットや線状痕が多數みられる。ボリッシュは刃部縁辺の狭い範囲に限られる」に類似したボリッシュが観察された（写真2）。

4 細石刃の機能

以上の観察結果から導きだされる細石刃の機能とは次のとおりである。

まず、操作法としては、aの部分を機能部としたスクレイピングが想定される。そして表裏両面に線状痕がうかがえることは、対象物が柔軟性のあるものか（図1-A）、あるいは細石刃をかなり立ててもいた（図1-B）可能性が残る。

また、御堂島によれば、Eタイプのボリッシュは乾燥した皮に対して作業をおこなった時に特徴的に生じるものであるという。乾燥皮ならば柔軟性があるので、線状痕が両面についてもおかしくはない。ただ、観察されたボリッシュが微弱であることからも、被加工物の特徴は避け、中程度の硬さの物質（木や竹・乾燥皮など）が対象となつた、と幅をもって考えておくほうが無難なようである。

以上をまとめると本細石刃は、

「中程度の硬さの物質のスクレイピングにもちいられた」と結論できよう。

5 おわりに

今回の特徴的な使用痕がみいだせた細石刃は1点のみで、特定機能を示す資料の量的なまとまり、という点において難点が残るもの、興味深い観察結果を提示できたこととおもう。「一方向の切断」と「スクレイピング」という対置的な機能の二者は、細石刃が、いくつかの道具の代替可能な一部としていくつかの機能を発揮したことを暗示的である。特に細石刃のような簡便な石器においては、一器種=一機能という限定はできないのかもしれない。

なお、本分析と解説にあたっては、御堂島正氏の貴重なアドバイスをいただいた。厚く感謝の意を表する次第である。

引用参考文献

- 堤 隆 1991 「細石刃に残された損傷」『中・原第5遺跡B地点の研究』
御堂島正 1986 「黒曜石製石器の使用痕」『神奈川考古同人会十周年記念論集』

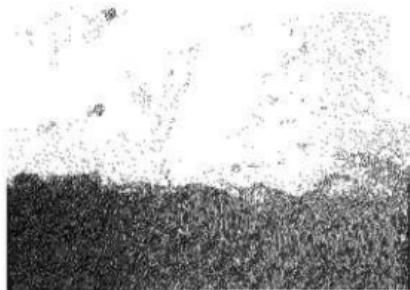


写真5 雄状痕・ポリッシュ等の観察されない左側縁 (×200)

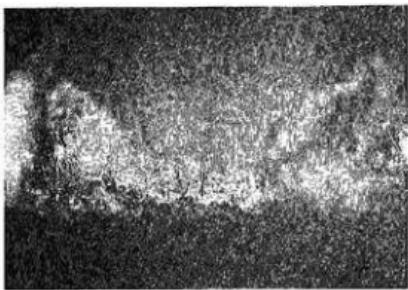


写真1 側縁に直交する線状痕 (×200)

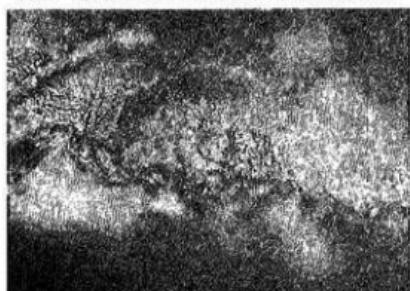


写真6 石器裏面にみられる側縁に直交する線状痕

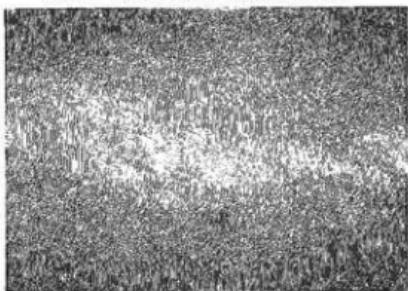
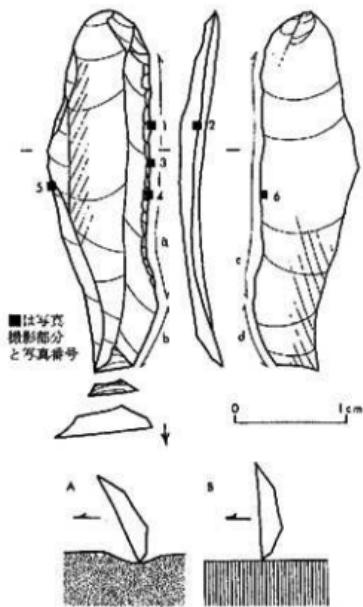


写真2 ポリッシュ (Eタイプ?) (×200)



第1図 観察した細石刃と使用方向

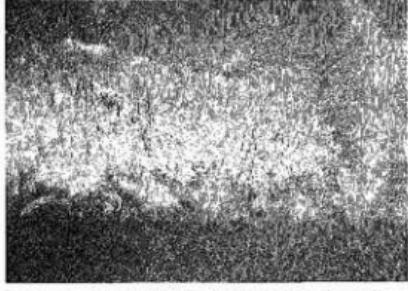


写真3 側縁に直交する濃密な線状痕 (×200)

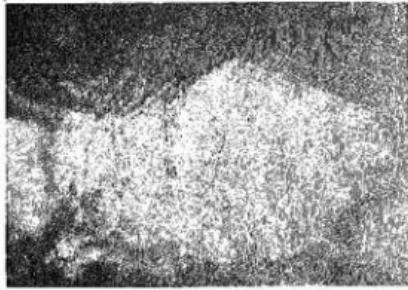


写真4 側縁に直交する線状痕 (×200)

計報！ 黒岩副会長

発足以来、常に佐久考古学会の顔であり、巻台骨を支え続けて来られた黒岩忠男副会長が1993年6月13日早朝心不全のため逝去された。享年77歳。前年2月より腎臓を患い療養生活を続けられ、床に臥せつてはいることが多かったようだが、異変の起きる前日は至極爽快でご自分で起き上がり、病院へ治療に行かれたという。山井会長のお祝いを終えたばかりでのあまりに急な訃報に接し、関係者一同は呆然失したことは言うまでもない。

副会長は大正6年3月28日当白田町に生まれ、田野沢中学を卒業後、24歳から教職を歴任した。この間に当会事務局長白田武正氏も教えを受けている。私は黒岩副会長が白田氏のことを最も誇らしい教え子だったとうれしそうに述懐されていたのを覚えていた。昭和48年小諸市坂の上小学校を最後に教職を退かれたが、これを機に在職中より学問的熱意を注がれて来た考古学にますます傾注されることになる。副会長が行われた遺跡発掘は数え上げれば限りがないが、昭和60年に社団法人佐久理謙文化財センター発足を契機に佐久市のすべての遺跡の発掘調査団長を努められた。足が不



自由であるにもかかわらず、ミニバイクで現地指導に赴いてくださる副会長の暖かい人柄に、當時切迫した苦しい調査を続けていた私たちは幾度となく勇気づけられたものだ。また、副会長は大の酒豪でもあった。私などは度々大御歓走になり、楽しい時を過ごさせて戴いた。最近は職場が変わりご無沙汰ばかりで申し訳ないと思っていた矢先の出来事だった。何の恩返しもできず悔やまる。いまはただ合掌。（小山岳夫）

1993年度佐久考古学会総会報告

1993年6月12日午前11時より、標高1000mの野辺山高原「黒岩莊」にて、本年度の佐久考古学会総会が開催された。

本年は総会後に由井茂也会長の『地域文化功労者文部大臣表彰』受賞及び日記抄『草原の狩人』出版のお祝いが予定されていたためか、いつになく盛會で40名近い参加者を得て行われた。

由井正義副会長による開会の発声のち、由井会長のあいさつか行われ、次いで本年1月7日逝去された白倉盛男副会長に対し、黙禱が捧げられた。

小山岳夫幹事の日程説明の後、議長に羽毛田伸博会員が選出され議事に入った。

第1号議案の近年になく活発であった活動報告は白田武正事務局長、活動に連動してフルに支出された決算報告は高村博文幹事より行われた。由井 明会計幹事より異状なしとの監査報告を踏まえて第1号議案は

満場一致で承認、通過した。

第2号議案は活動計画が白田事務局長より提示された。本年は矢巻川遺跡発見40周年の年に当たり、八ヶ岳石器研究グループが秋に野辺山での開催を計画している縄石器のシンポジウムへの共催も併せて講られた。そしてこれについても満場一致で承認された。

最後に今年は提案されなかったが、当会の財政は会員各位が考えられる以上に切迫していることをお伝えしておきたい。本会の予算は通常50万円程度。財源の殆どは会員一人一人から頂く4000円の会費が集積されたものである。昨年度の決算を見ると通信の印刷費28万円、通信費9万円で予算の殆どを使ってしまっている。諸物価高騰のおり、印刷費もぎりぎりの線でやってもらっている事情もあり、来年度は会費値上げも含めた会の財源の確保を検討して頂きたい。

（小山岳夫）



佐久考古学会の三山井といえ、山井茂也・山井明・山井一昭さん。みなさん川上村御所平で、地元の旧石器遺跡の地道な踏査をつけられている方々です。今回はそのなかの若手、オタクの背れ名高い由井一昭さんを訪問することにしました。

◆

さながら「由井博物館」とでもいえるような一昭さんの標本室に入ると、壁一面に国内の蝶の標本があります。

— どのぐらいの蝶の標本がありますか。

— 昭： 国内の蝶の生着種はおむね230種といわれていますが、一種類（タイワンツバメシジミ＝種子島）をのぞきすべての標本はあります。

数は1300頭ぐらいでしょうか。とはいっても、夜の蝶はとったことがありません（笑い）。

— 昭： 最近は、相次ぐ開発で、蝶も棲息地を潰され絶滅の危機にひんしています。長野五輪の白馬ジャンプ台の付近は、日本でたった四ヶ所しかないギフチョウとヒノギフチョウの混生地でした。いまは壊滅してしまいました。

◆

— 旧石器の資料はどれぐらいあるのでしょうか。

— 昭： 柏垂の尖頭器はざっと千本はあるとおもいます。破片もいればその倍はあるでしょう。

— すごい数ですね。冗談でなく尖頭器は日本一もっているのではないかですか。

ところで、どうして石器の採集に興味をもったのですか。

— 昭： 小学校の春休み、山井明さんから馬場平に石器が落ちているというのを聞いて、表面採集がはじまりました。

親父（故人、由井昭三さん）も生前は表面採集に熱中していました。

高校一年の時、柏垂遺跡の発掘があり、芹沢長介先生たちの発掘のお手伝いをしました。私の柏垂通いが始まったのはそれ以来です。

柏垂では、いっぺんに尖頭器30本を採集したことがあります。当時はものすごい数の石器が採集できました。

— ご自慢の石器は？

— 昭： そうだなあ、やっぱり柏垂の頁岩の細石刃核かな。あれは見事だもんね。

◆

— もう20年も表面採集をつづけてこられたわけですが、表探にたいする特別な思いはありますか。

— 昭： みんな表探資料というと軽視しているけど、馬場平や矢出川もみんな表探資料がもとになって日本で初めてという発見につながっている訳ですよね。

ただ、表探する側は、資料の採集遺跡をそしてその中の地点までわかるように保管しておかないとね。それがごちゃまぜになるから、表探資料が軽視されるんですよ。

— 最近は表探が難しくなった遺跡も多いですね。

— 昭： 確かにね。野辺山の耕地も客土や削平が進行しているから。客土はまだいいけど、ブルドーザーでいっきに畑が削平されたら遺跡はひとつたりもないですよね。

後記： やっぱり由井一昭は達人だ。石器をみつける超能力をもっている。「ユイケラー」というそのあだ名もまんざらではなさそうに、一昭さんは笑っていた。川上の「由井」の石器採集の伝統は、茂也・明・一昭と脈々と受け継がれてゆくのだ。

（ききてニツツミ）



森嶋先生のお宅で若手の旧石器研究者と（前列左）

INFORMATION インフォメーション

講演会

人と森との共存世界

—アフリカ狩猟採集民の生活—

「人と森との共存世界—アフリカ狩猟採集民の生活—」と題した講演会が下記の日程でおこなわれます。

浅間山麓では縄文時代の狩猟採集民の生活が掘り起こされ、また国際先生民年でもある本年、遠きアフリカ狩猟採集民の生活に想いをめぐらせてみるのも有意義にちがひありません。

あわせて浅間山麓の縄文遺跡に狩猟採集民たちが残した出土品の展示会もおこなわれます。

どうぞみなさんご参集ください。

記

- 1 時 1993年 8月8日(日)
午後1時30分～3時
- 2 場所 御代田町福祉センター (入場無料)
- 3 主催 御代田町教育委員会
- 4 講師 京都大学アフリカ地域研究センター
市川光雄 助教授
- 5 内容 市川先生は、ながらくアフリカ地域の狩猟採集民ビグミ一族の調査にあたられてきました。ビグミーとともに暮し先生が学んだビグミーの暮らしや世界観をスライドを交えながらお話しいただきます。
- 6 出土品展示会
浅間山麓、御代田町から出土した縄文早期から後期までの土器や石器を展示します。

日時 1993年 8月7日(土)・8(日)

午前10時～午後4時

♪ 編集後記 ♪

官公庁の書類サイズが、4月からB5からA4になった。一口でいえば大きくなつた、ということである。このA4というのは何でも国際規格だそうだ。

報告書もB5とA4それぞれがある。少なくとも私個人は、A4の報告書は好みない。デカくて見にくいくらいだ。そのうえ分厚いときたひには、調べる意欲は半減する。シンポジウム資料にはよくB4版がある。あれは広げると幅をとるし、本棚に横積みしなければならず、ひっ迫り出す時にタイトルがわからない。

コンパクトで見やすい報告を作りたい、と私はおもうのだが、どうおもいますか、みなさん。(つつみ)

シンポジウム

縄石刃文化研究の新たな展開

矢出川遺跡発見40周年記念と矢出川遺跡の国史跡指定へむけて、佐久考古学会と八ヶ岳旧石器研究グループの共催で、下記のとおりシンポジウムが開催されます。国内で縄石刃文化を研究するより多くの方を集め、記念すべきシンポジウムとなるかと思います。

ふるってご参加下さい。

記

- 1 日時 1993年 10月30日(土)・31日(日)
- 2 場所 野辺山高原(会場一帯露ロッヂ)
- 3 テーマ 縄石刃文化研究の新たな展開
- 4 内容 講演会
基調報告
シンポジウム
- 5 その他 詳しい内容、申込み等はお問い合わせいたします。



ムブティ ピグミー

佐久考古通信 No.58

発行所 佐久考古学会

〒384-01 長野県佐久市桜井879
白田 武正 方
郵便振替 長野 7-2842
☎0267 (62) 8133

発行者 山井 茂也

編集者 堀 隆

印刷所 はおづき書籍舎



佐久考古学会
シンボルマーク

★ 目 次 ★

■ 佐久の遺跡と遺物 —平安時代・川原田遺跡の火熨斗—	1
■ おめでとう！由井会長、第二回相沢忠洋賞受賞	2
■ 繩文人の知恵に学ぶ —釣針の縄密—	3
■ シンボリズム 繩石刀文化研究の新たなる展開開催さる	5
■ 石器作りに挑戦！	6
■ ロシアへの旅 I —沿岸州ウスチノフカ遺跡の調査記行—	8
■ 会員訪問 —第4回 桜井秀雄さん—	11
■ 新刊紹介	12
■ インフォメーション	12

佐久の遺跡と遺物

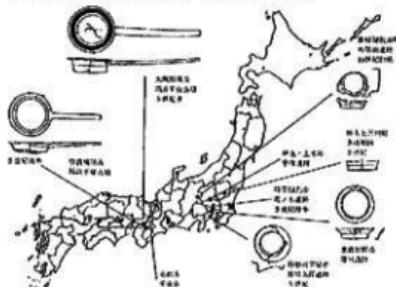
パート9 平安時代

— 川原田遺跡の火熨斗 —

火熨斗。

古代のアイロンである。現在、国内で9例が知られているのみの火熨斗が、御代田町塩野・川原田遺跡の10世紀初頭の堅大住居から発見された。

年代的には、古墳時代5世紀後半のものが2例・平安時代9世紀のものが2例・10世紀初頭のものが1例（川原田）、時期不明なものが4例となる。



川原田の火熨斗は、把手の部分を失っているが、皿部分の底部径は8cm、重量は144gである。

東京国立文化財研究所の平尾良光先生の分析によるところ川原田の火熨斗の素材の主成分は、銅で、このほか鉛・ヒ素・鉄・銀がわずかに含まれるらしい。ちなみに国内出土の火熨斗の素材の主成分は、いずれも銅であるという。

ところでこの火熨斗、半島（大陸）産か国内産かが気掛かりである。来春に出されるという平尾先生の分析結果が待ちどおしいところである。

火熨斗は、その皿の部分に炭火を入れ、底を布に押しあててシワをのばすものである。希少品であることから、実用品ではなく、祭祀用や古墳の副葬品であるという意見もある。

この希少な火熨斗が、東国の大分田舎の川原田のムラから出たのか。古代寺院と関係が深いとされる集落の性格も含め、その興味がつきない。





1

これら陽の差し込む夏井戸の木立、セミの声が響く初秋の9月15日、第二回相沢忠洋の授賞式が行なわれました。この記念すべき栄誉の受賞者は、みなさんも新聞でご存知のように本学会由井茂也会長です。

夏井戸は、群馬県新里村の故相沢忠洋さんの研究所とお住いのあるところで、前期旧石器の夏井戸遺跡にあたる場所です。そして現在は、相沢さんの資料などが展示された相沢忠洋記念館が建てられています。

2

木立の中に設けられた式場に登壇した加藤稔先生（東北芸術工科大学教授）は、「芹沢長介・吉崎昌一・江坂輝也・加藤稔の選考委員による選考の結果、第二回相沢忠洋は由井茂也氏に決定した」と、その受賞について述べられました。

つづいて、芹沢長介東北大学名誉教授から賞状の授与がなされました。この質状というのは芹沢長介先生のご尊父である染色家の芹沢桂介氏の製作したオリジナルな賞状で、美しい切り絵のふちどりがある希少なものでした。芹沢先生は由井会長の受賞理由について、「右檜の馬場平・細石器の矢出川と日本の旧石器研究の黎明期に多大なる発見の功績があり、また、佐久考古学会会長として後進の指導にあたってきた功績はまさに大なるものがある」とおっしゃられました。



芹沢長介オリジナルの賞状を読みあげる芹沢長介先生と由井会長

「かつて矢出川発見当時は、ある人家に細石器をみせたところ、こんなものは火山萍だ、芹沢君もまだまだ勉強があまい、といつて一笑にふされたこともあった」と発見当時のエピソードももらされました。

3

あいさつに立った山井会長は、「本日、相沢賞をいただき胸がいっぱいです。相沢さんは、岩宿跡での日本の旧石器の発見者として、輝かしい業績を残された方です。そして考古学を一般市民に開放された方でもあります。私はもう先は長くはありませんが、相沢さんの名を汚さないよう人間としての良心を持ち続けて生きてゆきたいとおもいます。」と、その感激を語られました。

4

この授賞式では、小諸で呉服商を営み相沢記念館の充実に功績があった森高榮さんにも感謝状が贈られました。来賓では新里村村長が祝辞を述べられ、元内閣総理大臣中曾根康弘氏からの祝電も披露されました。

5

授賞式の後の祝賀パーティーの席上、故相沢忠洋氏の夫人相沢千恵子さんにお話をうかがったところ、

「由井さんはアマチュアの考古学者であり、相沢と同様な立場におられます。由井さんの矢出川の発見は相沢の岩宿発見と同じ意義をもつものです。相沢も矢出川の発見には参加しましたが、私もその話を幾度か聞かされ、由井さんのことは気になる存在で、ぜひお聞きあいしたいとも思っておりました。こんなかたちでおいきあいできるることをほんとうにうれしくおもっています。地域に根ざして活動を続けられている由井さんの受賞を心よりお慶び申し上げます。これからもますますお元気でご活躍ください！」

とのあたたかいお言葉をいただきました。



受賞者のパーティーで、左から加藤・芹沢・由井・森・相沢夫人・岡矢各氏

縄文人の知恵に学ぶ

一釣針の秘密一

白田 明

1

本年3月13日佐久考古学会の例会として北和木村の棚原遺跡及び考古館の見学が行なわれました。棚原遺跡では山井会長や渡辺重義・井出正義氏ら実際に発掘調査に携わった方々の話を聞きました。文献には触れられない興味深い話があり、この流域に添って存在する岩陰や洞穴遺跡の更なる可能性が示唆されました。

2 25年ぶりの対面

棚原岩陰遺跡は昭和40年11月、興水利雄・新村薫の発見によって最初の報道がなされ、以後順次テレビ、新聞に報じたものです。それは今日大々的に行なわれている野尻湖の発掘に勝るとも劣らない興奮を覚えました。しかも翌年からは信州人が中心となって本格的な発掘が始まり、多量の遺物、完全な人骨の発掘と、縄文前期の生活をそっくり復元出来る成果を上げていました。私はそれまで2度発掘に参加したことがあり丁度受験期に入り、期待と不安の日々を送っていたのでした。この遺跡の発掘は、その後何年も経くのですがその機会は以外と早く全く別の形で訪れます。昭和43年、私は信州大の学生となり、その年の夏休み医学部第二解剖実験室で、およそ発掘品のすべてを、くまなく手にとって見ることが出来たのです。それらは、小形の尖底上器、美しい石器類、大量の人骨、端正な顔を持った頭骨、そしてこの骨の中にベッドを持ち込み寝食していた鉢木誠教授の強烈な生活を今でも忘ることができません。

現在の木總針とほとんど変わらぬ穴を穿たれた精巧な縄針には、ただただ舌を巻くと共に、ガラスビンに

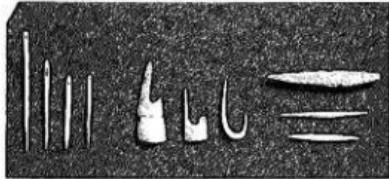


図1 棚原遺跡の三種類の針

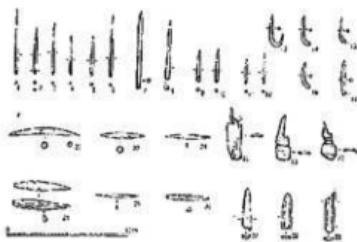


図2 棚原遺跡の骨角器 鈎1~12、釣針13~26 長野県史より
入っていた数本の釣針に何となく引かれるものがありました。特にまっすぐでやや巾の広い針に中央に切り込みのあるまっすぐの針は深い感動を受けたものです。本館には人骨の本物以外は、ほぼ全品が返却されることを再確認しました。

3

当日は三滝までドライブし、周囲の自然を観察、3ヶ月の連休を利用して、再度柏木川最上流まで疎行、魚類調査を併ねました。本稿では私自身が行なって来た在来マスの調査をもとに、先に記したまっすぐの釣針（直針、直線針、逆T字針等の呼び名もあるが、以後まっすぐ針に統一）の説を追いながらレポートします。

4 対象魚を特定する

まずこのまっすぐ針にかかる魚について考えてみましょう。長く魚にかかわっている私には瞬時にイワナ、ヤマメ（サクラマス）とわかるのですが、これまでの体験実験、出土品や古環境とのかかわりからも特定してみましょう。

今日のように大衆化、進歩、発展、分化した釣りでは「釣り針は魚の形、口の形によって針の形を選ぶ」。釣針はしの字型で返しのあるもの、無いもの、組み合

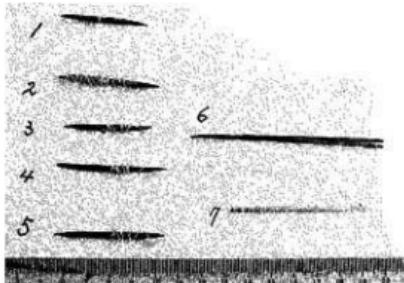


図3 竹製釣針（1~5）
筆者使用の実物である（昭和50年頃使用）。6は針とセットにして使う。7はつまようじ

わせ針も、イカ釣り針等すべての針はしの字型か、レの字型であり、これまでまっすぐ針の釣りや、それに関連する文献や情報の紹介は日本では極めて稀であったと言って良いでしょう。

その初は『ネイチャー』シリーズ(魚類編)の中に「逆T字針」という名称で紹介されたのが最初でしょうか。当博物館での、この針についての使用法は、①餌をくるんで流す、魚が餌に食いついて飲み込んだところで引っぱると胃袋に入った針が刺さる」と挿絵入りで紹介し、②おそらく養殖場のニジマスであろう魚のレントゲン写真二葉で①の状況を説明しています。

①はヨーロッパの古代の釣りの絵に出てくる広々とした草原で、長い糸につけた流し針の釣りを楽しむ子供たちの絵をモデルにしたものと考えられ、②はネイチャーのレントゲン写真をモデルにして、松本の日本民俗資料館の考古学室に展示されている逆T字針の映るX線写真と同じネガからの写真であろうと想定されます。

さて歯のある魚は、

△ウナギ、ナマズのようなおろし金状の歯をもつ魚
△コイ、フナ、ウグイの様な頭部に臼歯をもつもの、
△草魚の如く円盤状の大臼歯とヤスリ状の歯を前後に動かして草をすりつぶす働きをするもの？

△ハイワナ、ヤマメ等のように生きた飼だけ、しかも昆蟲や小魚等をとらえる働きをする歯、等があります。

まっすぐ針は貧食のナマズには極めて有効です。ウナギには全く駄目、穴釣りに用いても駄目でした。コイは萎縮物の場合には功を奏するが、力が強いために失敗も大きいです。口の小さいウグイは全く駄目。雷魚(カルムチー)は効果があるが、みち条の工夫が重要ブラックバスは果たしてどうでしょうか。ニジマスは極めて有効です。

ナマズは中下流のゆるやかな流れや暖かい湖沼を好み、雷魚、バス類は外來魚、ニジマスもイワナヤマメと同じマス科ですが、これも明治34年以降の移入魚、草魚も大正期に桜井村の白田雄太郎が中国から持ってきたもの、以上はすべて対象外の魚となります。

信州は古くはサケの産地でした。一昔前の佐久輕の里も実はヤマメ域、佐久平を流れる千曲川支流の片貝川にもヤマメはめずらしくなかったし、千曲川は鮭の産地であり、同時にマスの豊かな川でサクラマスは川上村秋山まで棲っていました。鮭渦の地名やマスを得ていた証言はつい60年前のことです。

それだけではありません。信濃川に西大瀧ダムが完成し、サケマスの統計が一切消えるのは昭和20年でしたが、昭和33年佐久市桜井の千曲川では岡村元によつて数後の鮭が捕獲されており、これが千曲川での最後のサケ漁となっています。



図4 イワナ 川上村秋山の小学校前で遊んでいた子供 1976.8

更に遺跡から発掘された大量のカワシンジェガイは移入されたものではなく近くで捕られたものに間違ひありません。この種はイシガイ、ドブガイ等の濱池性泥性を好む貝と異り、渓流～清流の砂地に生息する種類です。しかもこの貝の幼生クロキジウムは、孵化後わずかな期間ヤマメ等の魚に付いて幼貝となります。つまりこの対象魚はイワナとサクラマス(ヤマメ)だったということがこの様な面からも証明できることになります。

5 捕獲法・漁法

このまっすぐ針を用いる方法は川上村では捨て針、置き針、又は受け(針)ヒテ針と呼ばれ、古くから行なわれていた冬の漁法の一つです。一般に針は竹を使いツマ楊子大がそれより小さく、前口に網や深みのイワナのいそな所に沈めておき、針は同じ河川でとれるカジカを使用します。コツは図5のNo.1は針のカジカの頭が水流に向かうように入れる方法で、図2の24の針がこれに相当します。

糸のついた針をカジカの口から胃袋へ押し込むようにしながら、突った方の先端をカジカのエラにひっかけるか、エラから僅かに出すようにする。こうすると胃袋側の先は折りとられているので胃壁を破ることもなく、針のカジカはどこも傷つくことなく幾日も生き続けることができます。カジカは尾部から飲み込まれ

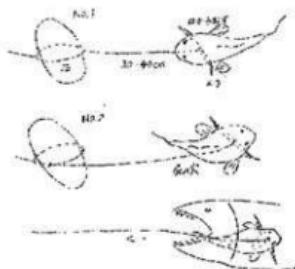


図5 白田明 S53「佐久理科同好会研究紀要」14より

るが、針は上向きに仕掛けられているので、イワナにとっては全く苦になりません。

図5 No.2は頭から飲み込まれるように工夫したもの。針をはさむ工夫をした竹製の道具にはさみ、尻の穴から口を通して一気に針を抜き出す。針をとり、片手で尻穴の方へ糸を引きながら、針の先端をカジカの肉エラに斜めにひっかけるようにする。あるいはNo.1と同様に一方の針先は斜めに口から出しておいてもよい。図2の21、22、23、25の針がこれに該当します。

糸のカジカは反生きしないが、冷水の中であり数日間は沈めておくことができます。一般にイワナ類は大きな餌は頭から飲み込むので、この方法は極めて効率が良い。力いっぱい引っぱられたり、イワナが強い力で糸を引いた時は針は逆板してT字型になる。これが逆T字針の由来です。また斜めに胃壁に刺さることもあります。

しかし熟練した古者は静かに引き寄せるので、魚はほとんどあればることもなく、糸と共に針が胃に入ったままの状態、あるいは大きく口を開け、アゴやエラに針がひっかかった状態で、ほぼ無傷のまま取り込むことができるのです。(1993. 4. 6)

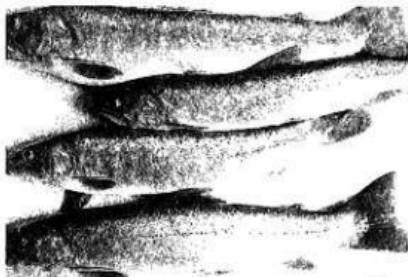


図6 イワナ 1977.3.9. 当時はこの位(25~30cm)のものも釣れたが…。

註

- ① 今年度は加工跡の鮮明な木製槍と呼べるもの、ナウマンゾウの骨製ナイフ、傷のある骨、石器をつくる「たたき石」など更に具体的なものが出土した(3/27~4/1日信濃毎日新聞他)。
- ② 1993年筆者による相木川の自然と魚類調査。当河川は本来はイワナ・ヤマメ城であった。現在カジカも一部に生存。泥生・汚水生のアブラハヤは聚落内にも生存範囲を広めている。
- ③ 插圖「軽井沢高原のイワナ」『信濃教育』1138号(昭56)、同「軽井沢高原のヤマメ」1158号(昭58)。
- ④ サクラマス、日本特産の在来マス。極めて美味。降海したものは70cm~1mにもなる。ヤマメは陸封型。
- ⑤ 「ネイチャー」シリーズ。1971(昭46刊)第四巻にある。
- ⑥ 1993. 5. 18日、筆者は日本民俗資料館を訪ね確認。同館に展示されていたものが北相木に移されたことも確認した。
- ⑦ この学のサケは13匹。種の絶滅を心配した西人漁業協会が海からダム下に集まつた鮭上サケを背負って上流に放流した最後の年。その一部である。
- ⑧ (ヒテ針) 1992年、川上村御所平で採録。沈め針から発見したものだという。



さる10月30・31日の両日、野辺山高原において細石文化発見40年を記念して、シンポジウム「細石刀文化研究の新たな展開」開催される。

八ヶ岳のふもと、北海道から九州におよぶ全国各地から150名の研究者をあつめておこなわれた。また、各地から実資料も持ち込まれ、検討する機会ももたらされた。

懇親会はすべての酒が飲みつくされる夜更けまでつづいたことはいうまでもない。

日本列島における細石刀文化の系譜やその様相、古き、細石刀制作法、使用法、当時の生業などについて熱心な議論がかわされた。

当日、参加者の賛同を得て、矢出川遭難と野辺山の遺跡と自然の保護に関するアピールが採択され、後日南牧村村長・川上村村長・県文化教育長に提出された。多くのみなさんのご賛同を得るにつけても、矢出川の保存問題は早く決着をつけたいものである。

石器を作るコツ①



石器作りに挑戦！

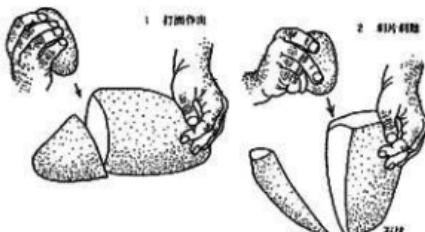
★ やったー！ボクにも割れた。

野辺山に元気な声がひびきわたります。今日10月3日(日)は佐久考古学会主催の石器作り教室です。

◇ 今日はみなさんに野辺山から出た1万年以上も前の石器についてよく知ってもらいたいと、石器作り教室をひらきました。さあ、石器作りに挑戦してください！由井考古学会長さんのあいさつです。

ところでこの野辺山には、カミソリの刃のような小さな石器「鋸石刃」が日本で最初に発見された矢出川遺跡があります。佐久考古学会では、この矢出川遺跡を国史跡としてきちんと後世に伝えようという運動をしています。そのためにも地元のみなさんには野辺山の石器をよく理解してもらおう、というわけです。当日は小学生から大人まで40人ぐらいの人があつまってきたました。

◆ 石器作りは素材選びから、よく黒曜石や安山岩の原石を吟味してから作りはじめましょう！



石器を作る順序

- ★ イテッ。石をたたかず手をたたいちやった。なかなかうまくいかないようです。
- ★ そうか、こういう角度で、右のこの場所をたたくとうまくハクヘンが取れるんだね。エイッ！
- ★ ヘー。ハクヘンを細工するには、こんな鹿の角でたたくときれいに仕上がるんだ・・・ふーん。最初はこなごなに砕けてしまった石も、だんだんうまくできました。

★ そうか。石器人も適当に石を割っていたわけじゃないんだ。ちゃんと順序立てて作ってるんだ。

◆ そうなんです。そして石器作りの順序や削り方をみることで当時の技術を知ることができます。

★ おじさん。この黒曜石はどこでとれるの。

◆ この近くでは八ヶ岳の麦草峠や和田峰でとれるんですよ。和田峰の黒曜石は、東京の叩石器人々や縄文人たちにはひんぱんに使われているんだ。当時の人们は動物を狩りてからしていたから、その狩りの道具の材料となる黒曜石は、ほんとに大事なものだったんだ。当時の人们には黒いダイヤだったんだろうね。

★ アーッ。黒曜石で手を切っちゃったヨ。絆創膏！

◆ 黒曜石はガラスのかけらみたいなんものです。だから動物の肉や木もかんたんに切ることができます。じゃあ、ほんとうに肉を切ってみましょうか。

★ うひょ…。けっこう切れ味がいいや。今の包丁と変りないね。

◆ ヒヤあ切った肉をナベに入れてうどんを作ろう。

★ あたたかくておいしいや。石器人たちもこうやって切った肉を入れてうどんを食べたのかな。

◆ 残念ながら石器人たちは、お米や小麦をつくる農耕をしなかったんだよ。旧石器時代には、ナベに相当する土器も発明されていなかったから、肉は石焼きにして食べてたんだとおもうよ。

◇ 石器作り教室に参加した子供も大人も、自分が作った石器を手に手に教室を後にしました。うまくできて満足げな人もいれば、なかなかうまくいかず途中で欠けてしまった石器をもって帰る人もいます。

一日石器人になってもらったことで、当時の石器作りの技術や、石器の使い方を知っていただくよいチャンスになったとおもいます。



石器作りの風景

ロシアへの旅 I

—沿海州ウスチノフカ遺跡調査紀行—



堤 隆

◆ 「ヒグマ・オオカミまれにはトラも出るので注意」

東北福祉大の梶原洋から届いた参加要項を見て、気弱なぼくとしては内心少し不安になった。

今回の渡航目的は、ロシア科学アカデミーと東北福祉大学が主催する沿海州ウスチノフカ3遺跡の発掘調査に参加するためである。

壮行会は「やきとりこんどう」で、親しい友人たちが集まって催してくれた。歳別だというので包みをほどいてみると「ウナ虫よけスプレー」。調査中はテント生活、かなり大量に蚊が発生するので、虫よけ薬と蚊取り線香・防虫ネットの所持が義務付けられているのだった。友人というのにはありがたいものだ…？。

8月15日、リュックに旅行用の手さげカバン、ジーンズにトレッキングシューズといつたいでたちで、小海線に乗り込んだ。リュックの中身は、民ゲツ・寝袋・カッパ・衣類・虫よけ・移植ゴテ・カメラ……ほか、すききらいの多いぼくとしてはロシアの食事が万一口にあわない場合も考えマグカップヌードル12食も詰め込む。ロシア側へのお土産は中々原の報告書のほか、千代紙・百円ライターなどを数多く用意した。

1ドルは2000ルーブル前後、600ドルを所持する。現在のロシアはインフレの嵐、物価は日本の10倍である。人々の平均給与は日本円にして2万円前後と聞く。旅費は円高のため金額的には安くあがりそうだ。

こうしてぼくのロシアへの旅がはじまった。

郊外に墜落した戦闘機



◆ ウラジオストークへの直行便が開設された新潟空港につくと、古環境研究所の杉山真二（植物珪酸体学）・早田勉（火山灰編年学）・東北歴史資料館の山田晃弘（旧石器考古学）らと合流した。やや乗り心地の悪いエアロポート航空SU808便は、ぼくらを乗せてどんよりとした日本海上空へと飛び立った。

午後8時すぎに到着したウラジオストーク空港の空は、時差のためまだ明るかった。税関を抜けると、船便での先発隊の梶原洋（東北福祉大）・横山裕平（石器文化論話会）・西谷泰昭（群馬大）・西谷香世（フリーライター）・藤井誠二・中沢研（東北福祉大生）らがいた。また、それにまじって、ロシア科学アカデミーのニーナ・コノネンコさんらが出迎えてくれた。

◆ 「オーチン・ブリヤートナ！」

「はじめまして」という片言のロシア語がなんとか口から出た。空港からエクエイタ（赤道）ホテルへと向かう。その夜ホテルの一室で、ニーナさんとぼくたちとできさやかな飲み会がもたれた。一緒にいたニーナさんの息子アリョーシャは日本曲のかなりできる大学生、長澤剛と坂本冬美の歌が好きだという。

飲み会も終り、シャワーを浴びて寝ようとしたのだが、いっこうに湯がでない。こんなことは日常茶飯事らしい。当然、水道から出るにこった牛水はそのまま飲めない。ロシアのホテルには、ジェジュールナヤと





呼ばれる櫻番のオバサンがいて、宿泊客の世話をしてくれる。手土産に「代紙を渡すと、オバサンは機嫌よく飲用の湯ざましの水をくれた。

◆

8月16日は、科学アカデミー東部歴史・考古学民族学研究所での資料見学である。今回の調査の主催者のひとりでもあるニーナ・コノネンコさんが案内してくれ、ウスチノフカ3遺跡のポイント（尖頭器）やグルバトカ遺跡のクサビ形のマイクロコア（細石核）などを手にとってじっくり観察することができた。

ニーナさんは、石器使用痕研究の父といわれるあのセミヨーノフにかつて師事し、使用痕研究を続けていたというが、ロシアの経済状況では研究のための良い機材がとうていそろえられないと嘆いていた。「オリンピアの顕微鏡などとうてい買えません」とつぶやかれたのが印象的だった。聞くところによると国の研究機関でも、経済状況の悪化から研究員の給与がカットされ、やむなく転職する研究者も多いという。

◆

その日は、ウラジオストク郊外のレストランニースナヤ・ゼイムカで研究所主催の歓迎の昼食会がもたらされた。日本の観光ガイドにも載っているこのレストランは有名な場所らしい。乾杯はウォッカ。会食者それぞれがそれぞれの乾杯のことばをもって立ち、杯を重ねるというのがロシアの礼儀だ。その際、杯に酒を残すとわざわざを残したということになるので、かならず



飲み干さなければならないという。日本側は、梶原・横山・早出といずれも酒豪ぞろい。梶原さんが「H露共同調査の成功を祝って乾杯」と始めると、研究所のニコライさんは「科学と国際交流のために乾杯」とやり、何回も乾杯が繰り返された。ぼくもオヤジゆすりで酒には多少自信があったのだが、さすがにこの永遠のイッキ大会にはまいってしまった。腹の調子がおかしくなりそそくさとトイレにかけこんだ。

トイレに入るとさらに気分が悪くなるのだった。

便器はもちろん床までウンチだらけなのである。作家の椎名誠は、ロシアのトイレは世界一汚いと書いているそうだが、著名なレストランでこれなのだからまいってしまった。よっぽど野ゲソのほうがましまである。デリケート？ なほくは、その後に続くフルコースに対する食欲がいっぺんに失せてしまったのである。

◆

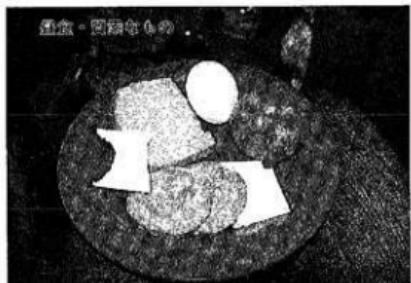
翌8月17日は、いよいよウスチノフカ遺跡に向けて出発である。その朝、ぼくたちを12時間かけて遺跡に輸送するのにやって来たのは、フロントガラスに蜘蛛の巣状のヒビが入ったおんぼろバスだった。

バスにゆられ郊外に出ると、舗装のないタゴト道が続いている。バスがくぼみにはいるたびフロントガラスのヒビが進む。誰かがガムテープを取り出してフロントガラスに貼りつけた。やがて雨が降ってきた。雨もりがひどく、バスの中で傘をさす始末である。

途中、バケツに入ったたくさんのピロシキがおやつででた。やっぱり本場のピロシキはうまい！ 日本語通訳として同行したナターシャさんが、作ったものである。ナターシャさんの日本語は堪能で、きれいな言葉で「さくらさくら」を歌ってくれた。

「お上手ですね」とほめると（もちろん日本語で）「おせじはやめてください」と返ってきた。なかなかのものである。ぼくはいっぺんでこのナターシャさんのファンになった。彼女が日本語に堪能であるばかりか、ぼくらの心情をよく察してくれ、そしてなによりブロンドの美人であったからだ。





ロシアの農村風景

日本より20~30年は遅れているのでは?

途中、細石器などがでているオシノフカ遺跡に寄る。ここで食事。パン・サラミ・チーズ・トマト・キュウリのメニューである。

車窓には一面白い花のソバ畑がうつりゆき、やがてシホテアリニ山脈越えである。うっそうと続く樹海。デルスウザーラの舞台となったアンバ(トラ)のいる密林がある。密林が時折ひらくと農村があった。

バスは途中カーメンカ(石)村に止まった。ロシアの純農村である。農家から運転手さんの親戚だという太っちょのおばさんが出でた。いかにもロシアの農家のおかみさんといった感じだ。よい機会なのでちよっと家やサウナ(風呂はサウナ)を見かせてもらう。

結局、バスにみられること13時間半、ようやくウスチノフカ村の発掘キャンプについたのは、夜の10時半だった。キャンプでは発電機によってこうこうとランプが点され、歓迎パーティーの支度がなされていた。ロシア側の調査隊員は30名ぐらいいるだろうか。さっそくウォッカで、恒例の乾杯である。

「オーチン・ブリヤートナ! ス・バーミ・バズナコミツツア、ミニヤ・ザブット・ツツミ」(はじめまして、お目にかかるぞうれしいです。境と申します)

乾杯の際ここまでは丸暗記のロシア語がでたのだが、後が続かない。ロシア語ミニ会話の本を片手に、発掘中にできるだけ基本単語を覚えようとおもった。

パーティーで本場ボルシチは最高の味だった。

パーティーが終ると、今度は焚き火を囲んで歌の交歎である。ギターが持ち出され、ロシアの歌がいくつか披露された。早いばくも高校時代にバンドの経験があり、「22才の別れ」ぐらいならすぐ弾けた。

「♪あなたにイー、サヨナラっていえるのはー、今日だけー」とやると、これが意外にうけた。とくにナターシャの娘さんの女子大生アリョーナが気に入って「ノートに歌詞を書いて」という。もちろん母親ゆずりのきれいな日本語である。(帰国後、アリョーナには「22才の別れ」のテープを送った)

「どうか、日本の歌で、意外にロシアの女の子がくどけるかも?」なんて勝手な想像をしながら、調子にのって「スタンドバイミー」まで歌ってしまった。

そばにいて、なんて、むしのいい話である。

◆
夜も更け、やがて朝。さらさらという川のせせらぎで目が覚めた。キャンプの脇を流れる名もない川である。悲惨な野音といった状況を想像してきたのだが、発掘キャンプはきわめて快適だった。今風にいうなら海外でのアウトドアライフといったところだろうか。こもれ日が差し込み、鳥のさえずりも聞こえてきた。

と、ここまで書いてきて、ほとんど考古学の話をしていないのに気付いた。次回はロシアの考古学事情やウスチノフカ遺跡についてふれてみることにしよう。

会員訪問 第4回



今回の会員訪問は「粹笑亭洒落駒（すいしょうていしゃれこま）」の高座名をもつ桜井秀雄さん。小諸市出身で、現在長野県埋蔵文化財センター佐久調査事務所に勤務されています。

— 桜井さんが、考古学に興味をもったのは？

桜 中学のとき野沢南高の文化祭で堀隆さんの発表を聞き考古学がくもすばらしいものと知りました。

— ウンウン……。エッ！、馬鹿にしてるんですか！

桜 高校は野沢北に進みました。同期には水沢教子さんがいます。高校時代は映画班に所属してました。

ラブストーリーの主役を演じたこともあります。

エッ！。ラブストーリーの主役……？



ボ・ボクはフグで～す／

桜 といつても、3人にふられる役。セリフも一つだけでした。

大学は金沢大で、卒論は古墳時代の石製構造品です。修士課程では鞍牛馬信仰をやりました。……つまりウシやウマのいにえですが、結論とすれば古代日本に鞍牛馬信仰は存在しなかった、ということになりました。

— で、大学のサークルで落研に入つたんですね。

桜 はい。得意な話は「転失氣（てんしき）」というオナラの話です。ある知ったかぶりをする人が転失氣のことをオナラと知らず、さかずきのことだといひはって恥をかく話です。

この話を県考古学会の懇親会で、大塚初重・石野博信・岩崎卓也先生の前でやったところ、石野先生はフンフンとうなづかれ「考古学者にもこういう知ったかぶりは多いんや」とさかんにうなづいてくれました。

— 大学では学園祭などで高座に上がつたんですか？

桜 はい。老人ホームに懇親にいったこともあります。得意の転失氣をやつたんですが、だれも、ちっとも笑ってくれません……？。

あとでそこの職員がきて耳もとでいうことには「ここのお年寄りたちの半分は耳が遠いんです」

「そして半分はボケ老人です」

— ガッハッハ、そいつあ～、イイ。

桜 稲島の朝市で、旅館前で落語をやらされたこともありました。「落語で旅館に客を引いてほしい」ということからです。しかし、いっこうに客が入らずすぐさま旅館から「もういい」といわれました。

現場や飲み屋でやらされることもよくあります。

— 最後に今後の抱負は。

桜 はい。古代の祭祀の究明に向けて日々努力したいのですが、妻子がいないので行き詰まり状態です。

— おあとがよろしいようで……。



現場の休憩時間に上がつた高座



シンポジウムにあわせて刊行された論文集で、二分冊からなる本書は700頁を超えるボリュームである。

第一分冊では、九州から北海道まで各地域の細石刃文化の様相がくまなく検討され、資料の提示がなされ、地名表が付されている。

第二分冊では、細石刃の発生と消滅、細石刃はどのように作られ使われたか、細石刃文化の人々ははたして漁獲をおこなっていたか、などの問題についての考察がなされている。

久出川遺跡から始まった細石刃の遺跡数は、いまや千をはるかに越えている。こうした遺跡のあり方から40年を経過した細石刃研究の現状が示され、その可能性が模索されたのが本書である。

★価格 6000円 送料600円 (税別僅少!)

★申込み ハガキで

〒385 佐久市岩村田1317-1 場 隆 まで

INFORMATION インフォメーション

★ 11月20日、本会員で坂町教育委員会勤務の助川潤広さんが荒井明美さんとご結婚されました。

ご縁結び人はやはり本会員の宮下健司さんご夫妻です。助川さんは宮下さんの中学時代の教え子。永いお幸せをお祈りいたします。

★ 私たちの仲間9名が新会員として加わりました。どうぞよろしく!

飯島智郎子 〒384-01 佐久市平賀5283

上原 学 〒389-01 群馬県高崎市2354 ☎ (0267) 45-4323 (佐久市教委埋蔵文化財課)

小栗 集 〒384-01 佐久市平賀1005-6 ☎ (0267) 62-1305

富沢 一明 〒386 上田市住吉3208 ☎ (0268) 24-1579 (佐久市教委埋蔵文化財課)

長崎 治 〒384-14 川上村御所平1-144-2 坂下住宅 ☎ (0267) 97-3816 (川上村企画課)

穂口 弔一 〒399 松本市寿台6-7-2 ☎ (0263) 58-5176

増永佐代子 〒248 鹿児島市大町6-3-26 ☎ (0467) 22-3677

宮本 宣子 〒236 横浜市金沢区並木2丁目6-6-101 ☎ (045) 785-2717

山浦 嶽 〒384-21 浅利村御馬寄1501 ☎ (0267) 58-2477

♪ 編集後記 ♪

つぎ何ヤルですかー。発掘現場でオバちゃんたちから声がかかる。この「つぎ何ヤルですか」コール。いつなんどきたりとも容赦はない。遺構の切り合い・セクション・遺跡の構造など、さまざまに巡らせた思考を切り裂いてくる。(遊んでてよー)とか(ちょっと休憩しててよー)ともいえず、プラン確認など段取りを終えて戻ると、頭は真っ白。さきの思考も消えてしまう。もちろんこれは担当者の傲慢な考え、発掘は皆さんの一致協力でできるもの。しかし心情的には、複雑な遺跡の構造に頭を悩ます担当者が、このコールに飛び込む気持ちもわからないではない。(つづみ)

佐久考古通信 №59

発行所 佐久考古学会

〒384-01 長野県佐久市群馬879
白田 武正 方
郵便振替 長野 7-2842
☎ 0267 (62) 8133

発行者 山井 茂也

編集者 堤 隆

印刷所 はおざき書籍舗



佐久考古学会
シンボルマーク

★ 目 次 ★

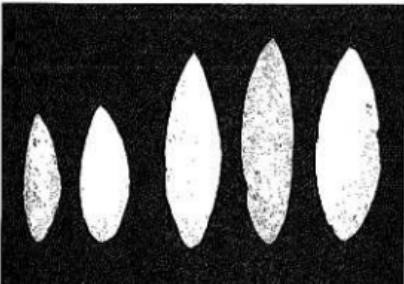
■ 佐久の遺跡と遺物 下茂内遺跡の木葉形尖頭器と土器.....	1
■ 稲作文化圏の掘立柱建物から考古学へ.....	2
■ ロシアへの旅日 - 沿海州ウスチノフカ遺跡調査紀行 -	7
■ 喜川宗治さんの逝去を悼む.....	11
■ 「野辺山の二万年前を知るつどい」開催さる！.....	12
■ 矢出川園指定申請へ.....	12

佐久の遺跡と遺物 パート10 旧石器～縄文時代

— 下茂内遺跡の尖頭器と最古の土器 —

八幡山をひかえる佐久市東部の香坂川上流域は、ガラス質安山岩の原産地としてよく知られており、現在でも容易にその軽石を入手できる。下茂内遺跡は香坂川に臨むテラス上にあり、昭和63年上信越自動車道長野線建設に伴って発掘調査がなされた。

下茂内では大庭沢第2軽石と呼ばれる約20cmほどの浅間起源の軽石層をはさんで上下二枚の石器文化層がみつかった。上位の第Ⅰ文化層、下位の第Ⅱ文化層とともに、八幡山のガラス質安山岩を用いた旧石器～縄文にかかる木葉形尖頭器の製作跡である。

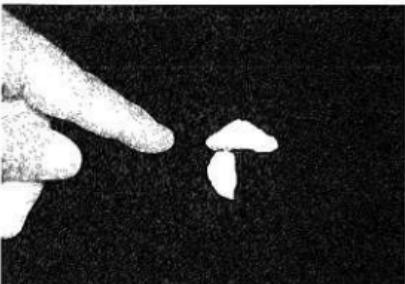


第Ⅰ文化層の木葉形尖頭器（『下茂内遺跡』より）

第Ⅰ文化層では木葉形尖頭器の完成品5点、未完成品125点が出土した（写真左）。第Ⅱ文化層では木葉形尖頭器の完成品は無く、未完成品が81点、土器片？2点が出土した（写真右）。両文化層とも完成品のほとんどは遺跡外に持ち出されたと考えられるが、出土先の遺跡はまだみつかっていない。

土器片？については、2点とも3cm程度の小破片であり、土器片かあるいは自然遺物かの見解が研究者によつては分かれるものであった。このうち写真のものについては、熱ルミネッセンス法により500度程度まで被熱していることがわかり、焼かれた土器である可能性の一端がうかがえた。

ところで両文化層にはさまれた大庭沢第2軽石は、火山灰層年代でいうと13000～14000年前より新しくならない。また、第Ⅱ文化層は16000年前というC14年代が与えられている。となると、この土器片、頸端を話、世界最古の年代を示すものといつてもいいすぎではないか。いずれにせよ国内でも最古のグループに属するものと考えてよさそうである。



第Ⅱ文化層の土器片？（『下茂内遺跡』より）

稻作文化圏の掘立柱建物から考古学へ

建築家

若林 弘子

東アジア・東南アジアの稻作文化圏は、高床式建物の文化圏でもある。そして、そこにみられる高床式の住居や穀倉は、弥生時代の建築文化を考察する上で、見逃すことのできない資料を提供してくれる。

床の高い建物を穀倉だけに認めてきたこれまでの考古学に対して、高床式建物の中には住居もあると主張してきた。それにもとづいて「掘立柱建物」の復元にも携わってきた。しかし地上の建物をすべて失っている古代建築を復元する作業には未解決の部分が多く、少なくとも考古学と建築学との接点が必要である。

そこで稻作文化圏の「掘立柱建物」の中の高床式建物を中心にして紹介し、発掘現場の参考にしていただきたいと思う。

本稿は中国・雲南省滄源佤族自治県の佤族の高床式建物のうち、「出作り小屋」と「住居」を取り上げたい。

佤族は雲南省西南部の澜滄江と怒江との間、ミャンマーとの国境地帯、海拔2,000mの山腹から1,000mの山裾にかけ、約35万人(1992年現在)住んでいる。彼らはもと平地での水稻農耕民であったが、戦乱に破れて今日では山岳地帯に逃避し、燒畑による陸稲を営んでいる。しかし環境がどのように変わろうとも、古来の高床式住居に高床式穀倉を伴って暮らしている。

紹介する二つの建物は、ともに省力型で原始的な構造であるところが、古代建築を考察する好例だと考えている。

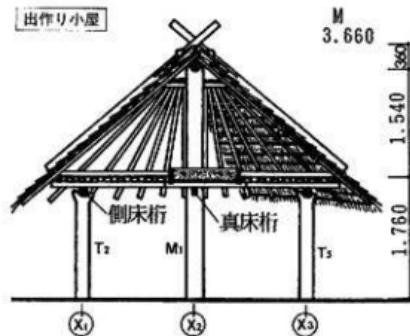


(1) 出作り小屋

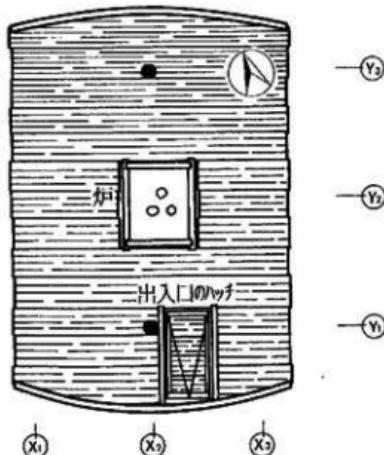
彼らが建築する高床式建物の中に「出作り小屋」があるが、住居や穀倉と並んで重要な建物である。集落から離れた焼畑のただ中に建てられ、近年は政府の指導で一部が水田に変わりつつあるが、農繁期の仮の宿として使われる。また旅人が誰でも何時でも黙って利用できる宿ともなる。

そのため高床面には、炊事の火所である「炉」が設けられている。外観を一見しただけでは穀倉建築のようであるが、炉が切られているところが穀倉建築と大きく異なる。炉には二つ石が据えられていて、すぐでも炊事を始められるようになっている。彼らは家を出るとき米だけを持ち、出作り小屋の近くで水を求め、鳥や魚を捕えて炊事する。

出作り小屋



3図 姿側断面図



4図 床上の平面図 1:80

また出側で行われる稻作儀礼にも、この出作り小屋は稻穀を迎える場所として大切な役割を果たす。時に稻が不作だったりする年は、故意に焼されることもある。そして場所を少し移動して新しく建て替える。

建築構造と空間構成 この出作り小屋の構造上のもっとも大きな特徴は、2本の柱から成る棟持柱が建物全体の骨組の中核となっていることである。棟持柱が床および屋根を構成する主柱で、平面図（1図）に示すとおり、床上に立ち上がる柱はこの2本の棟持柱M₁とM₂のみである。他に7本の柱T₁～T₇があるが、これらはすべて床下で終わる床東である。

したがって床上の壁を構成する柱がないので壁もなく、建築空間は床と屋根から成っている。断面図（3図）にみられるように屋内は三角形断面で、棟下通りの床の両傍だけがどうにか人の立ち入り振る舞いのでき

る極少の空間である。

屋内への出入りも、壁がないので床を切り抜き、ハッチ式の扉をとりつけ、それに対して梯子がかかっている。出作り小屋は家の住み處ではないので、建築材の量が少なく、材の加工や組み立ての手間が極力はぶけるよう、平面的にも立体的にも必要最小限の省力型につくられる。壁がなく、床を屋根だけで覆うという知恵と工夫がみられる。

柱の棟持柱 ここでえて柱の棟持柱と呼んだわけを説明しよう。この出作り小屋の棟持柱は地中に掘っ立てられ、樺木まで1本通し、つまり1材で貯われているので純柱である。純柱の好例として取り上げるものであるが、純柱でない棟持柱もあって、その種類は変化に富んでいる。これについては改めて紹介しようと思うが、1例をあげると、床の部位で床下と床上に切斷され、2材で貯われる棟持柱がある。

棟持柱が2材になると、1材のものと機能が異なり、その組み立て方も変化する。つまり樺木の支え方は多様であるので、発掘される「樺立柱建物」に棟持柱らしい柱穴が発見された場合、それが純柱であるか否かの慎重な検討が必要である。

掘立柱の深さ 棟持柱が地中に掘っ立てられる深さは、一般に1腕または1肘の長さである。しかし地盤が軟かい場合や風あたりが強い立地の場合は、1腕以上の長さに掘る建物がある。また棟持柱が純柱であるか否かで、1腕の場合と1肘の場合があり、さらに柱を掘っ立てる順序によっても、組み立て上の都合で一様ではない。

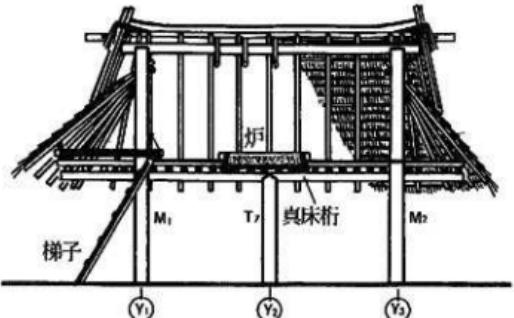
地面に掘られる柱穴の直径は、柱径の3倍ほどである。掘り方は堀畠の播種に用いる突き棒で地面をつつき、土を軟らかくして、その上を5本の指と手の平で搔き出す。どんどん搔き出して、腕がこれ以上入らなくなるまで掘る。そうすることで、自と1腕ほどの長さに掘られることになる。

1腕以上に掘るには、ひょうたんに長い柄をつけるなどの簡単な道具を使って土を搔き出す。

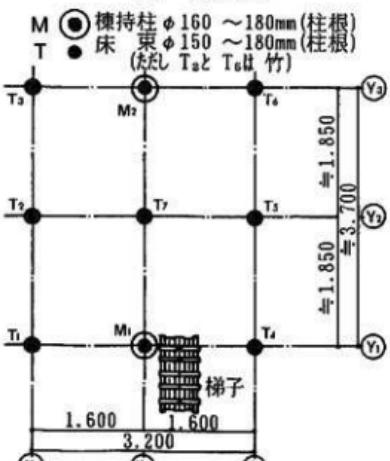
床東 地面の柱配図（2図）に示すとおり、床東は7本あって、そのうちの1本T₁は真（床）桁を支えるために棟持柱M₁とM₂の中間に掘っ立てられている。

このT₁のように建物の中心にある柱穴を、発掘現場の報告書では、迷わず「棟持柱がある」と記録されるであろう。

しかし、必ずしもそうではないことを、



4図 平側断面図



2図 地面の柱配図

この出作り小屋の床東T₁から学んではほしい。

床東T₁～T₆までの6本についても同様で、発掘報告書には、床東とは解釈せず軒まで達する母屋柱と記録されるであろう。ところが、この出作り小屋のように床東である建物もあるということを考慮されたい。

なお床東の柱穴の深さであるが、この出作り小屋のように規模が小さいものでは、1肘の長さに掘っ立たれる。

発掘についての報告書によると、ほとんどの「掘立柱建築」の地表面は、多かれ少なかれ削平されていると記録されている。そのため、1肘ほどの深さに掘っ立てられた柱穴は、失われていることが多いことを念頭におかねばならない。失われた地層に建築構造を解く鍵があると考えてよいであろう。

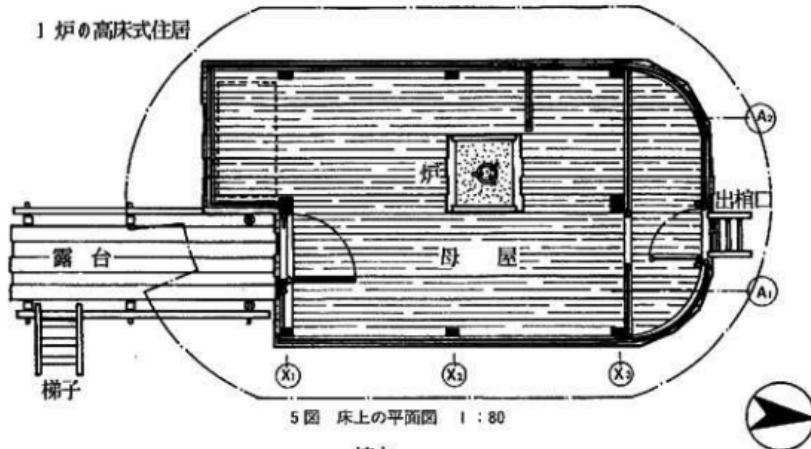
(2) 一炉の高床式住居（省力型）

佤族の高床式住居には、同じ集落に炉が1カ所のものと2カ所のものがあって、前者は本家筋の世帯、後者は分家筋の世帯である。分家は経済力を蓄えると2炉の住居に建て替える。

このほかにも1炉の住居があり、それは木亡人など経済力の弱い世帯が建てるものである。建築は材の出し、加工、組み立てまでの全行程を「縫」で行い、建築主は建築儀礼に供犠する雞や豚、また結に集まつて来てくれた人びとに必要な食料や酒を用意する。経済力の弱い世帯の建物は、1かであるとともに建築構造や規模、そして材料などが省力型である。

ここに紹介したのは、そうした省力型の高床式住居である。とはいっても住み処であるから、前述した出作り小屋までは省力されておらず、壁を構成する柱が

1 炉の高床式住居



5図 床上の平面図 1:80

棟木

親叉首

子叉首

火棚

大引

M₁

T₁

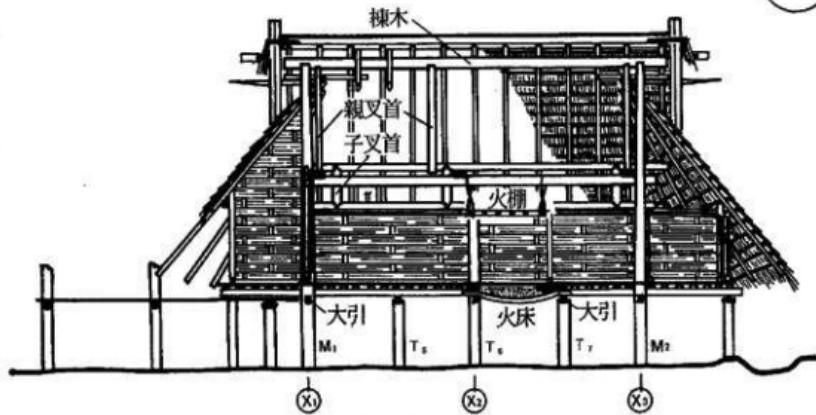
火床

T₂

T₃

大引

M₂



7図 平側断面図

ある。この1戸の高床式住居を山出作り小屋と組みにして紹介するわけは、後述するように純粋の棟持柱が構造の中軸を荷っているという点で共通するからである。そして床を支える柱が側柱と床束の二つの機能をもっているところを、山出作り小屋の床束だけの場合と比較してほしいからである（9図・10図）。

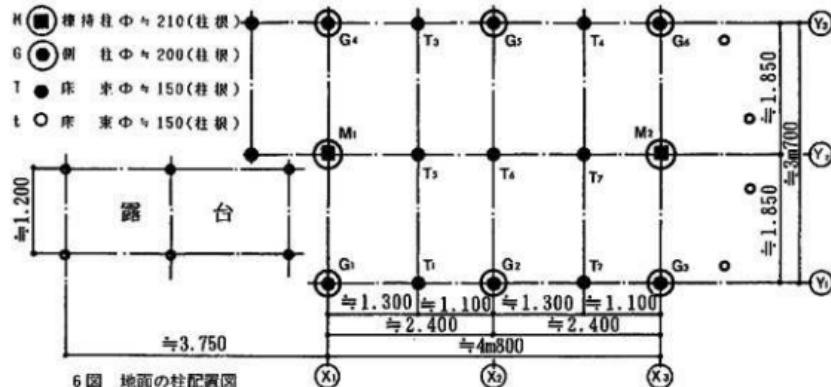
建築構造と空間構成 1炉の高床式住居の建築構造上の特徴は二点あり、その一点は既述したように、出作り小屋と同じように2本の総柱から成る棟持柱が建物全体の骨組みの中軸となっているところである。二点目は棟を構成する柱が使われてはいるが、それが母屋柱ではなく側柱であるところ、つまり母屋柱が省略されていることである。

省力型でない場合、母屋柱は A₁と A₂の通りに立つ(8図)。この建物は棟間の距離が小さいので、母屋柱

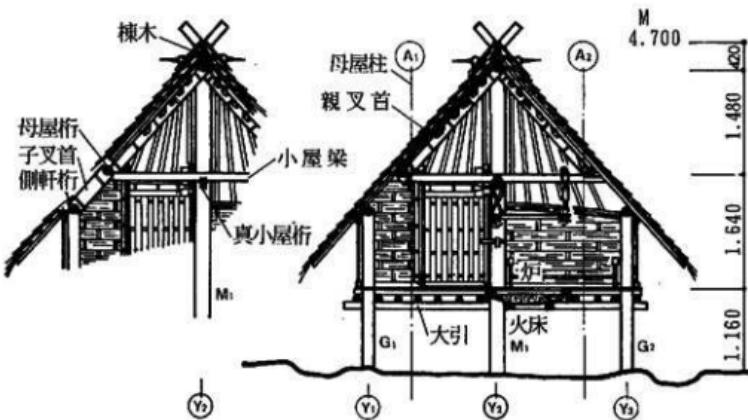
がなくても構造は成立する。そのための工夫がみられ、小屋梁を左右バランスをとって真（小屋）桁の上に乗せ、親又首を配して母屋桁と棟木に突っ張らせ、三角形組（トラス）を形成して固めている。そして側（軒）桁と母屋桁の間に子又首を突っ張らせて、さらに脅組を堅固にしている。

この親又首は棟木を支える棟持柱の補助としてよく使われる材で、構造図(10図)に示すように、棟持柱 M_1 と M_3 に添って1組ずつ、その間に1組、合計3組配されている。子又首も親又首の近く、両行間に3か所配されている。

榦柱の棟持柱 出作り小屋と同じように榦柱の榦持柱が、床および屋根の荷重を受けている。ところが床組の方法が異なる。出作り小屋の床組（床の骨組）は、榦持柱が床の部位で横架材を平行方向に支持して



6 図 地面の柱配置図



8 図 要側断面図

いるのにくらべて、住居の床組は棟持柱と側柱が構架材を梁間方向に支持している。

つまり出作り小屋の方は棟持柱が、桁行方向で真(床)桁を貫通させているのに対して、住居の方は梁間方向の大引を貫通させているという違いがある。床組が一様ではないことも、古代建築の構造を推測する上で考えておかなくてはならない。

そして大引は棟持柱と側柱には貫構法で配されているが、床東には東頭の股木の上に乗っている。この大引に直交して根太が配される。根太はまず桁行に丸太を並べ、さらに丸太に直交して半割り竹を並べる二重根太である。この上に竹簀(アンペラ)を敷いて床ができる。

側柱と床東 省力型の住居に母屋柱が省略されていることについてであるが、これを「獨立柱建物」の柱穴だけで判断した場合、母屋柱か側柱かを見定めることは非常に難しい。しかしこうした原初的な建築構造のもものもあることを知っておく必要がある。

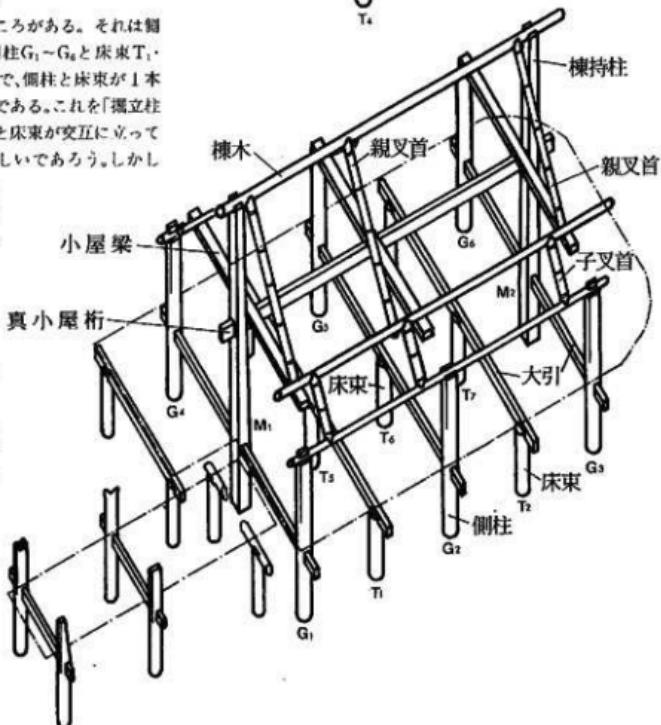
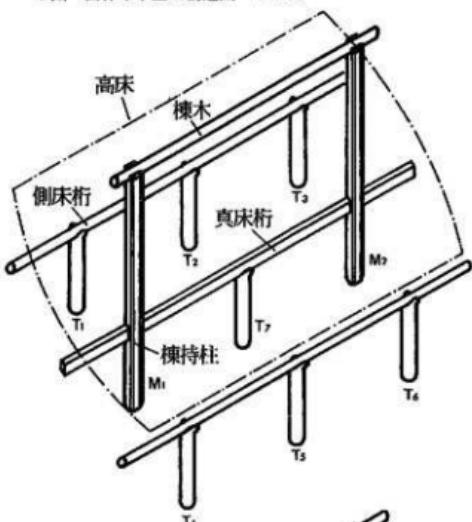
さらに見定めにくいところがある。それは側柱通り⑩と⑪の柱は、側柱G₁～G₆と床東T₁～T₇およびT₂～T₄の二種類で、側柱と床東が1本おきに立っているところである。これを「獨立柱建物」の柱穴だけで、側柱と床東が交互に立っていたと判断することも難しいであろう。しかしこうした例は「獨立柱建物」の中に、かなりの確率で見られると考えている。

なお側柱と床東の太さは、ほとんど同じ径である。したがって柱穴の径もほとんど同じである。ただし棟持柱の柱根は側柱より少し太い。

次の機会には同じ猪源伍族の2軒の高床式住居を紹介し、1軒の省力型と比較しながら、ひとくちで「獨立柱建物」といっても、その建築構造は多種多様であることを示したい。

(1994.1.15)

9図 出作り小屋の構造図 1:80



10図 1軒の高床式住居の構造図 1:80



1993年8月、僕はウスチノフカ遺跡の調査に参加するためロシアの沿海州を訪ねた。前号には、その紀行文の前編を掲載した。今回はその続編である。

◆ウスチノフカ遺跡群

ウスチノフカ遺跡群は、ウラジオストークから北西に700kmのカバレロボ郡ウスチノフカ村にある。ここは石器の素材となるタフ（＝珪質凝灰岩。こちらでいう硬質頁岩に近い感じ）の原産地で、石材環境を反映した原産地遺跡群としてウスチノフカ1～5遺跡が知られている。

ロシアには、ウスチカレンガとかウスチキャフカとかウスチを冠する遺跡が多いが、ウスチとは河川の合流点を示す意味の言葉だという。

さて、ウスチノフカ1遺跡は、日本の旧石器研究者にはかなり知名度の高い遺跡である。なぜなら日本でいう剥片尖頭器やナイフ形石器といわれるものが発見された遺跡であるからである。これまでないといわれた北海道에서도ナイフ形石器が出土しはじめ、そして今度はロシア沿海州での発見である。日本のナイフ形石器文化について、羅日本海的な動態のなかで理解する必要を生じさせた、問題の遺跡がこのウスチノフカ1遺跡なのである。

ウスチノフカ4遺跡は、薄削技術的なカサビ形細石刃石核や翫屏型剥削刃形石器を出土した細石刃文化の遺跡である。

今回調査の対象となったウスチノフカ3遺跡は、木葉形尖頭器や局部磨製石斧が出土した遺跡である。

一方、ウスチノフカ遺跡群に隣接してあるのは、スボロボ遺跡群で、スボロボ1～7の遺跡が知られている。スボロボ3遺跡では、木葉形尖頭器や片刃打製石斧が出土している。

なお、これらの遺跡はタドゥーシ（ゼルカリナヤ）川沿いの河岸段丘上に点々と存在するが、おそらくこれ以外にも数多くの遺跡が未発見のまま眠っているものと考えてよいだろう。



第1図 ウスチノフカ遺跡とナイフ形石器の分布

◆石器群の編年

ウスチノフカ3遺跡は1961年に発見され、1971年に試掘調査、1987～1989・1992年、そして今回の1993年にかけて発掘調査が実施されている。現在までに発掘調査されたのは170m²ほどの面積である。

1987年の調査では、3327点の石器が出土し、大形木葉形尖頭器（第2図1）、局部磨製石斧（第2図2）、掃器、彫刻刃形石器、石鎌、大形両面加工石器などがみられる。石刃技法もあるが、主たるところではなっていない。また、土器も出土していない。

この石器群をみて連想するのは、日本の長者久保・神子柴石器群である。大形木葉形尖頭器・局部磨製石斧の存在がそれを強く印象付けるのである。

ロシア科学アカデミーのニーナ・コノネンコ博士による編年を第2図にあげたが、それによるとウスチノフカ3遺跡はおよそ9000年前の年代が想定されている。これはこの遺跡での花粉分析によるハシバミ属の花粉の増加というプローラに着目し、第四紀のボレアル期に比定したものである。

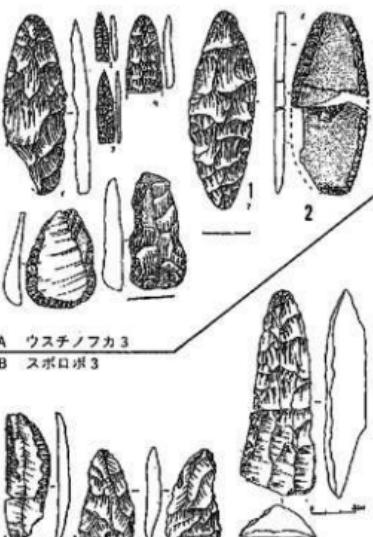
しかし日本でいえば、この種の石器群は12000年前後に位置付けるのが妥当といえるだろう。晩氷期の石器群の変遷を環日本海的にとらえるとするならば、年代観の齟齬の修正が今後の課題といえる。

なお、木葉形尖頭器や片刃石斧も含むスボロボ3遺跡はウスチノフカ3遺跡の直前に位置付けられている。年代はともかく、両遺跡を同じ段階に置くことには異論はあるまい。

phase	period	time	date	archaeological sites	ref. date	
2		2200-2000				
3	Cult. Diorak					
4		2150-2050		Melanesia-Papua New Guinea	1950±42 1950±42 1950±42	1950±42 Spak
5				Obiuary Yonaka	1950±45	
6				Rabula (Lower Layer)	1950±49	
7	Archae.	2050-1950				
8		2050-1950		Sitobata	1950±40	
9		2050-1950		Hanabata 3 & 4 Hanabata 2 & 3 (Upper Layer)		
10	Pre-Microl.	1950-1850				
11	Inner	1850-1750		Konore 4 & 5	1950±49	
12	Outer	1750-1650		Hanabata 2	1950±40	
13		1650-1550		Hanabata 1 (Lower Layer)		
14		1550-1450		Arinambo		
15		1450-1350				
16		1350-1250				
17		1250-1150				
18		1150-1050				
19		1050-950				
20		950-850				
21		850-750				
22		750-650				
23		650-550				
24		550-450				
25		450-350				
26		350-250				
27		250-150				
28		150-50				
29		50-0				

Table 1. Stratification between Paleolithic and Archaeological Sites in Palau

コノネンコ博士の掲年



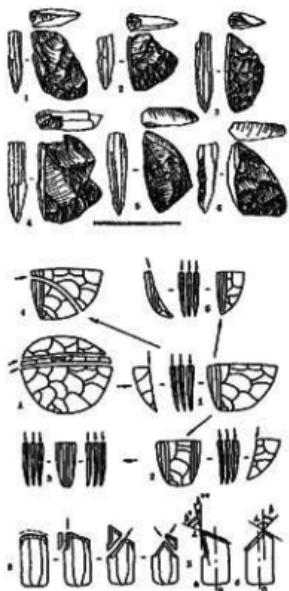
C ウスチノフカ 1 (上層)



D スボロボ 4



E ウスチノフカ (下層)

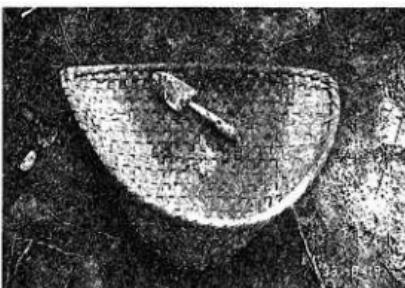


ウスチノフカ 4 の 鋸石刃技術

第2図 沿海州タドゥーシ（ゼルカリナヤ）川流域の旧石器と櫛年



第3図 ウスチノフカ遺跡の調査



第4図 発掘用具（ミト移植）



第5図 発掘でのミーティング

一方、ナイフ形石器といわれるもの（第2図4）が出たウスチノフカ1遺跡下層は16000年前頃、刃片尖頭器が出た（第2図3）同遺跡上層が10000年前頃とされている。この場合、年代的な位置付けの前に、顔付きのあまり違わない双方の文化層の分離に関しての検討がまず最初に必要であろう。

全体を通じてみると、沿海州地域の更新世末から完新世にかけての石器文化暦年は、根本的にその枠組を作り直す必要があるといえる。今回の日本とロシアの共同調査がまさにその格好の契機となるのである。

また、自然科学との提携として、早田勉による広域火山灰同定や杉山真一のプラントオパール分析による古環境復元の成果も、遺跡を総合的に解明するうえでより重要といえるだろう。

◆遺跡の調査

ウスチノフカ3遺跡はミズナラの木立の中にあった。すでに何次かの調査を終えた部分があり、その横が今回の調査区である。表土をうっそらと剥ぐと、すぐ石器がびっしりと出てきた。まさに原産地特有の出土状況である。石器が出た場所にすぐさま焼島のクシが立ち並んだ。

ところで物不足のロシアにはボリ袋など毛頭ない。私たちは大抵出土遺物をボリ袋に収納するが、ここで

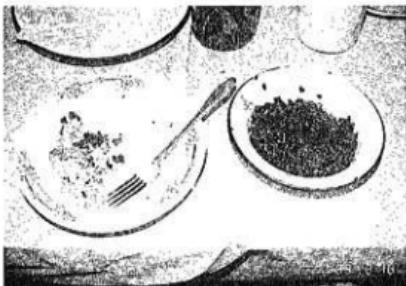


第6図 ウスリンスク少年考古学クラブの石器洗い
は遺物は半紙でくるまれた。もちろん荷札ラベルもない、半紙をちぎってその代用とした。焼島のクシやコンベックスなどは日本から持ち込まれた。

調査区の隣には、小さな木が人の胸の高さ程に切ってあり、その上に四角い木の板が打ちつけてあった。僕は野鳥にエサでもあげる台かとおもい、その板に手をつくと、「さわってはだめ」という。なんとそれはレベルの台であった。日本からレベルは持ち込んだのだが、かきばる脚は持ってゆけず、そんな手段がとられたのだった。

最近ではトータルステーションによる測量・遺構の記録、他の機械化・冷感房完備の調査事務所、個単位の発掘経費……、それはそれで仕方ないのだが、なにか日本の発掘がばかりに贅沢に感じられ、じつは考古学の本質とは無縁のところで浪費がなされているような気がして、さみしい気持ちになった。おそらくロシアの考古学者が日本の発掘現場を見学したなら、その設備投資ぶりに驚愕するにちがいない。

遺跡の脇の小川では日本の小中学生ぐらいの子供たちが、原産地という関係上大量に出る石器の水洗いをしていた。といっても彼らは、水着になって水浴びをしたり、読書をしたり、じつのんびりとしながらしかも楽しそうにやっている。彼らは遺跡の横に数週間テントを張り、キャンプしながら調査を手伝っている



第6図 ソバのおじやとワカメのまます煮



第7図 右からニーナ・タバレフ・カチューシャ

のだという。

僕は最初は、彼らがアルバイトかなにかかと思いつ、通航のナースシャさんに聞いてみると「チョコレートをたくさんあげるから、といって調査につれできました」という。一瞬「えっ、ギブ・ミー・チョコ」と思ったのだが、もちろんそれは冗談。実は彼らはウラジオストックの隣りのウスリススク市の少年考古学クラブの生徒たちだった。

僕は彼らに持参した折紙で紙ヒヨーキを折ってやった。実は鶴を折ろうとしたのだが、大人になって完全に折り方を忘れていた。彼らはテントに僕を招き入れ、ビロシキをごちそうしてくれた。それをほおばると、なんか信州の野沢茶わやきを思い出させるような、そんな懐かしい味がした。

◆キャンプの食事

ヒグマや鹿へじ、まれにはトラも出ると横山裕平に書かれていたので、キャンプがいったいどんなところか不安だった。しかし行ってみるとじつは快適なテント中の生活だった。ただ、大量にいた蚊だけにはほんとうに悩まされた。手足や顔じゅう蚊にさされるはめになり、日本に帰ってもしばらくかゆかった。

キャンプでの食事でよく出たおかずは、「ワラビのホットサラダ」である。酸っぱめの味付けで、これがけっこうまい。また、マルスカヤ・カブルースタもよく出たが、これを僕たちは「ワカメのまます煮」と呼んだ。主食はパンか、「ブシェノー」、蕎麦の実を煮込んだおじやにコンビーフを混ぜた奇妙な食いものである。もちろん僕はそれを食べた後、彼らに感謝し「フクヌー（おいしい）」と声をかけたのだが。

元来、わがままに育てられた僕は、好き嫌いが激しかった。「ラーメン食べたい！」と、キャンプの間じゅう考えていた。もっとも非常用にマグカップヌードルは持参したのだが、これがロシアの女の娘たちに評判で、自分で食べることなくあげてしまった。

アフリカのムブティ・ビグミーの調査に出た京都大学の市川光雄さんは、調査中はずっとビグミーと食事をともにした、と話されたことを思い出す。特にかれらは腐りかけの肉が好物で、50m先から鼻をつくような肉を好んで食べるという。もちろんそれは野蛮という意味ではなく、食習慣の違いなのだ。最後には市川さんもこれにつきあつたといっていたが……。僕はそれとは比較にならないほど、いやかなりまともといえる食事になじめない「付け焼き刃のフィールドワーカー？」であり、その話を思い出しながらも情けない気持ちになった。

毎夜、毎夜、酒だけはよく飲んだ。新潟空港の免税店で買ったサントリーリザーブ3本が空になるのは、時間の問題だった。

◆キャンプのタペ

練度のため、日没が遅い沿海州地方では9時ぐらいまでうすらと明るかった。夕食前、僕たちは目の前の川でヤマメを釣ったり、卓球やバーレーボールに興じた。原稿や調査に追いまくられている日本での生活をしばし忘れ、こんなにゆったりとした気分になれたのは久しぶりだった。

もちろんキャンプに風呂などないので、目の前の川で水浴びをし、体を洗った。8月とはいえ、日本に比べるとひんやりと涼しい夏の夕間暮れだった。キャンプの周囲にはところどころにハシバミの群落があり、僕はこの涼い空の下で同じような風景の野辺山のことを思い出してみた。

夕食の後焚き火を囲んでみんなでよく歌を唄った。ノボシビルスクの若い山石器考古学者アンドレイ・タバレフが唄ってくれた「モスクワ郊外のタベ」がなぜかもの悲しげにいまでも心に響くことがある。

ふとみると満天の星、野辺山で見る以上に近い星空が天にはあった。

◆3月のクリスマスカード

発掘が終って日本に帰国してから、僕はしばらくボートしていた。日本との生活のギャップからもある。しばらくしてから、ロシア語の辞書をくびりきで何人かに御礼の手紙を書いた。

ロシアの郵便事情はきわめて悪い。手紙以外の小包だと捨てられてしまうことも往々にしてあるのだという。ノボシビルスクのアンドレイ・タバレフからクリスマスカードが届いたのは今年の3月のことだ。また、僕は届くかどうかという試みに、三通の同じ手紙を、発掘で一緒だった11才の女の子カチューシャに出してみた。幸い三通とも届いたらしいが、その返事がきたのは手紙を書いてから二ヶ月後のことだった。半年たって手紙が着くのもザラだというから、まだましなほうかもしれない。

今回の調査は、僕にとっては初めての海外調査であり、沿海州の旧石器文化についてさまざまなことが勉強になった。そしてロシアの研究者たちとの心の輪も生れたようにおもう。しかし、特に僕の心に強く刻まれたのは、ロシアの考古学研究者たちのたくましさと高い志だった。これまでにない経済混乱のなかで、

物がなく、給与もままならずとも研究をつづけようという彼らの姿勢である。僕を含め、ぬるま湯に浸っている日本の研究者が、もういちど高い學問の理想を求める身にする時は、いったいいつやってくるのだろうか。

引用参考文献

N.A.Kononenko 1993 Ancient cultures of the Primorye in the late Pleistocene and early Holocene.

Н. А. Кононенко 1993 ИССЛЕДОВАНИЕ ДОКЕРАМИЧЕСКОЙ СТОЯНКИ УСТИНОВКА ЗАВ ПРИМОРЬЕ.

A. A. Krupnik 1991 Микроплатиничатый комплекс и изделия с резцовым сколом из коллекции Устиновка IV: МАТЕРИАЛЬНАЯ КУЛЬТУРА И ПРОБЛЕМЫ АРХЕОЛОГИЧЕСКОЙ РЕКОНСТРУКЦИИ.



森川宗治さんが私の勤務する御代田町文化財資料室を訪ねてきたのは、亡くなる20日ほど前の昨年暮れ12月27日のことである。森川さんは「もうどれくらい生きられるかわからないから」といって、自ら車を運転しあいさつにきた、という。そして静かに泣いた。

ご本人はもちろん自分がガンに冒されていることも承知であり、すでに30キロも体躯が落ちているらしくかなりかぶくのいい身体も瘦せ細っていた。私はなんとも言葉をかけるすべをもたず、ただうつむいてしまうばかりだった。ちょうどその頃、キャスターの逸見政孝さんのガンによる逝去がさかんにマスコミに取り上げられていたので、たぶん本人をさらに心細い気持ちにさせていたのだとおもう。

雪がうっすらと積もったその翌日も、森川さんは車を運転し資料室に来た。そして私に、自分がここでの

整理のときいつも座っていたイスが欲しいのだという。そのイスというのは役場で廃棄処分になったもので、整理室では石膏でかなり汚れるからこれでもいいか、ということで使っていたオランダのものだった。森川さんは自らこのイスの壊かけた部分を修繕し、油を与え、いつもこのイスで復元作業をしていた。だからこのイスは森川さんにとってかなり愛着のあるものだったに違いない。森川さんが一人で車で家までたどり着けるかどうか心配だったので、私はそのイスをもって森川さんを家まで送り届けた。そして、とともに顔も見れずに、帰ってきた。

森川さんは昭和2年1月1日日本曾那村に生まれ、公務員生活を送った後、御代田町に住み、佐久考古学会員として、佐久市金井城や御代田町の発掘に参加した。子供の頃の森川での開拓裏ばたの暮しに、考古学の体験を織りませた「かまとといりり」という美しい考古学エッセイが佐久考古通報50号に掲載されている。現在までは佐久考古学会の地区役員も務めていただいた。

年明けの94年1月14日朝8時34分、森川さんは自宅で帰らぬ人となった。67才の早い旅立ちであった。

自らの死と向き合ったとき、人はどんな気持ちにおそれ、そしてどのような時を過ごすのか。その悲しみは私には理解しきれない。いまはただ安らかにお眠りいただくことを祈るばかりである。

(堤 隆)

「野辺山の二万年前を知るつどい」

開催される

矢出川遺跡の保存活用とその国史跡化に向けてのビーアルを兼ね、「野辺山の二万年前を知るつどい」が2月13日野辺山駅前の野辺山基幹集落センターで開催された。

メインとなる講演会は「日本人の起源をさぐる」と題し、文化庁文化財保護部記念物課主任文化財調査官岡村道雄さんにお話いただいた。当日は地元野辺山の方々を中心に80名の参加者が熱心に耳を傾けた。

岡村さんは文化庁主任文化財調査官という立場上きわめて多忙であり、また前日は東京が20年ぶりという大雪にみまわれ、列車のダイヤが乱れ、講演の実施が危ぶまれたが、当目までにはなんとかダイヤが正常化し、無事実施のはこびとなった。

岡村さんは、スライドでシベリア・韓国・中国の旧石器文化を紹介された後、日本の前期旧石器について

矢出川国史跡指定申請へ

2月15日、朝日・信毎・毎日・読売の各紙は、2月14日付けで南牧村が、遺跡の中心部分にあたる村有地4181m²の国史跡指定申請を赤松文部大臣あてに提出した、と報じた。問題なく申請が通ると、本年の秋頃には矢出川の国史跡指定が実現する。

村有地周辺の指定や自然環境保護の問題をとりあげておくと、10年におよぶ保存運動がひとまず実を結ぶことになる。

当考古学会でも、昨年より、細石刃シンポジウムや岡村道雄氏の講演会、石器作り教室、署名運動をおこなってきた。また会員と村民との会談の場も設けられ、ようやくここまでこぎつけた感がある。

♪ 編集後記 ♪

「オマエふとったね～」・「なんかふけたね～」

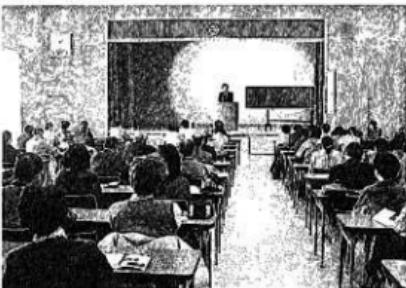
久し振りに会った友人の最初の言葉である。久し振りなのに、はからちらちょっと不愉快な気分にさせられる。「30過ぎればたびがれてくるのはあたりまえじゃねえか……」心のなかでこうつぶやいてみる。

それにしても、と思う。「オレは今まで何をしてきたんだろう」・「まったく地に足がついていない」そんな気がして妙に落ち込んでしまう。となると当然酒である。二口酔の朝、自己嫌悪は加速度的に増し、仕事をさぼりたくなる。……されど原稿の山。

ああ、なんと悲しき考古学徒よ…… (つつみ)

とりあげられ、日本人の起源をめぐって、いくつかの角度から問題点を指摘された。

岡村さんの講演のあと、矢出川保存運動の中軸となつて尽力された明治大学戸沢充則先生の、矢出川調査にまつわるエピソードが、スライドをまじえて紹介され、写し出された野辺山での懐かしい調査風景は、参加者の感激を呼んだ。



岡村さんの講演会風景

今後は、村有地周辺の指定や自然環境保護、史跡整備とその活用について、多くの議論がなされなければならないだろう。



指定申請地と発見者の由井茂也・片沢長介

佐久考古通信 No.60

発行所 佐久考古学会

〒384-01 長野県佐久市桜井879
曰田 武正 方
郵便振替 長野 7 2842
☎0267 (62) 8133

発行者 山井 茂也

編集者 植 隆

印刷所 はおづき書籍舗



佐久考古学会
シンボルマーク